狙うて候（ねろうてそうろう）

下

銃豪 村田経芳の生涯

東郷 隆



実業之日本社 文庫

東郷 隆

狙うて候（下）

銃豪 村田経芳の生涯

東郷 隆

狙うて候（下）

銃豪 村田経芳の生涯

実業之日本社

実業之日本社文庫

下巻　目次

イギリス式伝習　7
鳥羽と伏見　38
戊辰戦争　99
北越の戦雲　163
新政府分裂す　213
欧州で射撃王となる　255
田原坂の雨　337
村田式小銃の完成　388
あとがき　419
解説　縄田一男　422

狙うて候（下）

銃豪　村田経芳の生涯

イギリス式伝習

1

村田勇右衛門経芳の人生は、まさに塞翁が馬という諺が当てはまる。
それからしばらく経った慶応三年（一八六七）二月一日。
西郷が京より戻った直後、彼のもとにまたまた衝撃的な通知が入った。
「村田勇右衛門、非常の秋につき集成館出仕を当分の間止むべし」
というものであった。
「何ごて、左様な呆けたことを言うとか！」
怒った彼は、ただちに鶴丸城に出向いた。
「おいが、ようやくに機械類の整備を終え、洋式銃の生産にこぎつけんとせし大事なこの時期に、集成館出入り禁止とは、何のお恨みあってのことかあ」
応対に出た太守忠義の近習平田平六へ談判に及んだ。

「いや、村田どん、待ってくれ。これは軍役奉行の伊地知どんから出た御下知ごわす」
平田は勇右衛門の剣幕に恐れをなして、ただちに伊地知正治へ話を通した。
伊地知は裃姿のまま彼の前に出た。
「人払い、おじゃったもんせ」
お茶坊主を遠ざけて、語り出した。
「京摂（京や大坂）の間、容易ならざる形勢に立ち至りしにより、急ぎ我が藩はエゲレス国より小銃を買い入れることとした」
という内容である。
「来月、藩兵七百を先陣として京へ送り出す。越前、土佐、宇和島との協議は終り、また我が藩と長州藩の結束はより強うなった」
伊地知は低く、時にうめくような口調で語った。
「おはんには悪かじゃが、時局の急変は如何ともしがたい。集成館で新銃のでき上がるをのんびりと待つ余裕は無か。ここに藩公の御下知もあって、我らは長崎のグラバー商会より小銃三千挺買い入れる算段を成した」
「恐れながら軍役奉行」
勇右衛門は、うわずった声をあげた。
「そン銃の形式は、何ごわすか？」

伊地知はすこし考え、
「あ、何と言うたかの。……うむ、エンピール銃とか申したかの」
村田は、あんぐりと口を開けたまま言葉を失った。
（そいは、旧式。前装式小銃ではなかかい）
正しくはエンフィールド型という。一八五一年型ミニエー式小銃をその二年後に改良し、長くイギリス軍の標準装備となっていた。ミニエーという特殊な弾丸を使用して、それ以前の小銃に比べ、距離三百歩で四十四パーセントという高い命中率（以前の銃では八パーセント）を誇っていたが、いかんせん前装銃だ。発砲速度の遅さはどうしようもない。イギリス陸軍も日本暦元治元年（一八六四）に後装弾込め式の新型、「エンフィールド・スナイダー」小銃を採用。前装式エンフィールドは二線級兵器として各国に払い下げを始めている。
「軍役奉行、それにしてもこの御時勢に、なにも前装式小銃を買わずとも。おいが示したあの天保山の試射会の評価、あれは無駄ということでごあんそか？」
「これには、さる高名な洋学者の説が動いておるとじゃ」
伊地知は扇を取り、畳の目を数えるように膝元を叩いた。
「ひとつ、後装銃は前装式に比べ、構造複雑にして破損しやすい。ふたつ、弾丸の込めが早いため、仇弾（無駄な発砲）多く、結果弾丸の補充に支障をきたす恐れあること」

「愚かな説でごわす。弾込め遅ければ敵に後れを取り申す。また、仇弾云々は戦場を知らぬ者が唱える説じゃ。左様な物の損失ばかり数える算盤勘定は、ひっきょう畳水練の説ごわす」

「我慢してくいやい、村田どん。これは早や決定がなされておる」

伊地知は嘆息した。

「もはや倒幕の戦機は充実しておるとじゃ。銃器の事はこれにて沙汰止みにしたい」

「じゃどん……」

「村田、議を言うか！」

伊地知は薩摩武士の常套句を口にした。

長々と議論する者を、この国の男は女々しいと見る。勇右衛門はついに口を閉じた。

藩庁はエンピール前装銃の購入を進言した「学者」が何者かを、最後まで秘密にしていた。

村田経芳自伝にも、

『これはまったく或る有力なる西洋砲術家の説にして、（中略）積年苦心の末ようやく着手したる後装銃の製造は、ここに全く無効のものとなった』

とだけ記されている。学者にして西洋砲術を心得ている者といえば、薩摩では西洋流

師範家の成田正右衛門しかいない。

成田は伊豆の代官で洋学者の江川太郎左衛門の門人。先代藩主斉彬存命中は信頼が厚く、御流儀砲術家としても鳴らしていた。勇右衛門もかつて、彼のもとで砲術書籍掛りに任じられていたことがある。

勇右衛門の計画は、その「旧師」に足元をすくわれた形になった。

数日、彼は何もせずに、自宅の縁側でぼんやり過ごした。

妻のくに子は、内心ほっとしている。ここ数年、夫は集成館の機械整備と鍛冶師たちの指導で休む間も無かった。他の藩士たちが次々に出兵上洛していく中、一人角場（試射場）に出て元込銃の実験を行ない、数度の暴発事故さえ起こしている。

（お前んさぁにも、ようやく休め、と鉄砲の神さぁがお命じになったとじゃなあ）

村田家では炉端を囲み、久しぶりに家族団欒の光景が見受けられた。

勇右衛門は一日、甲突川へ釣りに出た。川沿いの小道では近所の子供たちが屯し、盛んに笹を刈り集めている。

「何をしておる？」

と問うと、

「蟹イごわす」

褌一丁になった一人の子が答えた。笹の葉を縄で束ね、淀みに投げ入れておく。す

ると夜中、その中に川海老や蟹が潜り込む。それを次の朝引き上げる。

「良か捕れ方でございもす」

下級藩士の子らしく、丁寧な口をきいた。

（甲突川では珍しか）

勇右衛門が幼少の頃は、こんな仕掛けを用いたことはない。試しに誰から教わったか問うてみると、

「京より戻った兄さぁから」

と言う。洛中や伏見の薩摩屋敷に駐屯していた兵が、現在多数、帰国している。彼らがこうした畿内の漁法を子供らに教えたものらしい。

（軍兵の大入れ替えが始まっているのか）

大門口の製造所で小耳に挟んだ。京、大坂の屋敷詰め常備兵を一度薩摩に戻し、洋式調練をほどこして帰す。例のエンフィールド前装銃操作を教育しているのだろう。

（大久保どんも、やがては戻ってくるな）

勇右衛門は、前日仕掛けてあった笹束を開き、一喜一憂する子供らを眺めつつ思った。

大久保一蔵は彼の予想通り藩の汽船三邦丸で、秘密の内に帰国していた。反幕の公卿岩倉具視と連携し、中央で各種の謀略を画策。その成果を島津久光に伝えるべく、鶴丸

城に入っている。

（おいも行ってみるか）

薩摩での仕事を失った勇右衛門は、この時初めて、国外に出ることを考えた。

（おいとて薩摩人じゃ。外の煌びやかな世界が見たい）

日本の南端にあるこの国の侍たちは、辺境の育ちだけに妙に華やかな土地を嗜好することがある。

（示現流の東郷どんも、そいじゃて聞いた）

薩摩独特の刀法、示現流の開祖東郷重位も若き日に細工物を学ぶため京に出、一人の禅僧から兵法の極意を得た。

（洋式銃砲術を知るには、やはり洋人のもとに行かねばならん）

勇右衛門は、甲突川の水草が茂る一角で足を川の水に浸け、のんびりと空を仰いだ。

雲が流れて行く。

「また、大久保どんの顔を見するかい」

勇右衛門はついに思い切った。

次の日から彼は大久保一蔵の居所を求めて、鹿児島の町を歩いた。

大久保の所在は、同じ薩摩藩士の間でも極秘となっている。彼は京、大坂における華やかな軍事面の指導を西郷一人にまかせ、自分は陰の軍師として走りまわっていた。

大久保と行動をともにしていた後の右大臣岩倉具視も、この時期の事を振り返って、

「幕末に大久保と計って行なった事は、とても人に語れぬ事が多かった」

と語っている。

（なあに、目当てはある）

大久保は京にいる時、常に藩の家老小松帯刀の指令で動いていた。帰国の際は必ず小松の私信を私邸に運ぶ役も担っている、と勇右衛門は見た。

（人目を忍んで来るとなると、夕刻じゃろうか）

三日ばかり小松屋敷の前に忍んでいると、読みの通り黄昏刻、一挺の駕籠が屋敷に入った。

藪蚊に刺されながら立ち尽して待つうち、月明りの中にその駕籠が出てくる。

「そつじながら、大久保氏と御見受けいたす」

勇右衛門は、道に片膝をついて声をかけた。膝をついたのは、刺客と間違われぬようにするためだ。果して、

「誰じゃい」

駕籠脇で刀の鍔鳴りが聞こえた。護衛の者がいるらしい。

「怪しい者ではござい申はん。砲術家村田勇右衛門ごわす」

勇右衛門は砲術家、とあえて名乗った。

「村田どんか。提灯の下に参られよ」
駕籠の戸が開いた。
「ようここを見つけられたの」
大久保が姿を現わす。
「良か、出て歩こう」
駕籠を後ろに従え、勇右衛門と二人並んで歩き始めた。
「いずれ、おはんにも会わにゃいけんと思うちょったが、おいも忙しくてのう。このたびの事、実におはんに悪か。一度じっくりと詫びねばと今も駕籠の中で考えておったとじゃが、以心伝心とはこの事かの」
大久保は俯いたまま語る。
「銃器の製造、積年の苦労実り、今や集成館にて一層盛んに造り始めたと見えたるに、相撲で申さば向う脛を引き掛けられたがごとき有様。おはんには合わせる顔が無か。昼間ならば笠の内にて語るしかない」
「大久保どん。おいが、今、砲術家と申した訳はひとつ」
勇右衛門は答えた。
「前装銃採用は藩の方針でごわす。これに反対いたすは不忠ゆえ、我が意ならずとも従い申す。今後、銃器の製造も人にまかせて一切手を引く覚悟でごわす」

「なんと、あれだけの事業を放擲するとか？」
「いや、将来は再び製造所に戻るつもりなれど、風雲急を告げる昨今、工具ばかり手にいたすもこれ不忠」
「では、いかがする？」
と問われ、勇右衛門は足を止めた。
「さればこそ、砲術家と申した。大久保どん、ここ当分は射撃術によっておいはお国に尽し申す。兵として、おいを国外にやってくいやい」
国外とは、京であり江戸である。
「数年前、おいは欧羅巴に巡遣されることになっておい申した。今は、せめて長崎、横浜を見たか。彼の地の洋人より本物の洋式砲術を学びたか」
「うーむ」
大久保は首をひねり、
「それについては当方にも腹案がある。二、三日、刻を貰いたい」
そこで大久保は駕籠に戻り、勇右衛門は一人道の中央に残された。

2

鹿児島の港に、異様な臭いのする木箱が陸揚げされ始めたのは、それからしばらくしてのことであった。

臭いの元は、木箱の内側に塗られたタールとガン・オイルだった。人足たちが港の運上所の奥にこれを運び、荷車が深夜それを別の場所に移し替えていく。木箱の多くが、数日のうちに藩御用の胡蝶丸と三邦丸へ載せられ、何処かへ消えて行った。

勇右衛門のいる元込銃製造所にも、木箱のひとつが届けられた。

「村田どんも御覧あれ」

と永井八左衛門が誘ったが、勇右衛門は乗り気がしない。中味は、あのイギリス製エンフィールド前装銃であることはわかっている。

（今さら見るのも腹立たしい）

ことさら無関心を装って詰め所の畳に転がり、兵学書を読んでいた。

しかし、銃職人や足軽どもが中庭で騒ぎ始めると、好奇心がむくむくと湧きあがって、

（我慢できぬ）

裸足のまま庭に飛び降りた。
大勢の男たちが箱の蓋をこじ開けている。一箱の中に六挺の長い小銃が、西洋油紙に包まれ収まっていた。
「おお、油がひどか」
一人が手拭いで銃身を拭う。
「ずいぶん、使い込まれておるのう」
「仕方ンなか。古手（中古品）じゃ」
別に小型の箱もあり、開けてみると針型銃剣が入っている。
「貸してみィ」
勇右衛門は一挺手に取り、銃身を覗いてみる。銃腔にはしっかりとグリスが詰まっていた。
「欧羅巴から長の船旅じゃ。これほどにせねば海風で錆びてしまう」
次に銃床を握り、機関部を確かめる。指先で撃鉄を持ち上げてみると、油のせいかネットリと重い動きをした。
「悪くはなか。グラバー商会は、良品を出荷することで知られちょる」
最後に銃剣を取って、銃口に装着した。
「やって見るがよか」

他の者にも装着させてみる。銃剣の付け根にある溝へ銃口の照星を合わせ、半回転してもう一度押し込めるのだ。

「これを一動作でせねばならぬ」

「どうも、うまく行き申はんな」

皆、銃に剣を付けるという観念が無いため、簡単な操作でも四苦八苦した。

「あとは槍術の要領じゃ。なぽれおーんという大将は、この槍銃兵十万をもって欧州を席巻した」

「槍術と砲術でごわすか？」

「左様」

と勇右衛門は答えたものの、その実態は本で読んだものでしかない。

「この、エンピール、またはエンフィールドと申す銃は、イギリスのエンフィールド町にある国営の製造所で造られたゆえ、左様名付けられておる」

「はあ、本朝の国友や堺のごときものでごあんそな」

「いや、その構え（規模）は」

さらに巨大だ。生産設備を据えつけた建物は城のようであり、敷地は薩摩の鶴丸城本丸よりも広い。

「西洋暦で一八五三年にイギリス国軍兵が用いたゆえ、M五三式ミニエーとも言う。文

久年間、佐賀や水戸でも少数輸入されていたが、同じミニエー弾を用いるメリケンやベルギウム（ベルギー）の銃と混同され、さほどに知られなんだ時期もある」

「ミニエー弾とは」

勇右衛門は、指先が油だらけであるのを幸い、木箱の横に図を描いた。

「こういう型をしちょる。おはんらが椎実弾と呼ぶもの、即ちミニエー弾じゃ」

フランス人エチエンヌ・ミニエーという陸軍大尉が二十年ほど前に考案した。従来の丸い鉛弾を廃し、椎実型とする。底部に小さな窪みを作り、そこに木詮をはめる。これを銃口から詰めて発砲すると、銃身内のガス圧が木詮を鉛の底に押しつけ、弾丸底部が開く。銃身内の腔綫（ライフリング）に弾が食い込み、高圧かつ直線で飛行する。

ミニエー大尉によって、銃器の命中精度は格段に向上した。

「エンフィールドのミニエー弾は、フランスの弾よりさらに進んじょる。椎実弾の底に木詮が無く、ただ気（ガス圧）によって自然と広がる。これをぶりちえっと弾と言う」

時ならぬ勇右衛門の座学に、手の空いた者は全て集まって来た。

次の日、藩庁では新たな人事が発表された。

中で最も人目をひいたのは、江戸留学者の名簿である。

「当藩すでに英式小銃を用うることを決したるにより、英式練兵術練習せしむるの必要を生ず。よって練習生を選抜す」

とあり、

「選抜者、左のごとし。野津七次（道貫）、草道甚右衛門、末川主税、三原平吉、成田正右衛門、肝付半平、村田勇右衛門」

と張り紙の末尾には勇右衛門の名も出ていた。

（大久保どんの腹案とは、これであったか）

勇右衛門は己れの望みが達せられて、新たな勇気が湧き上がってくるのを感じた。

「江戸へ行くど」

踊るような足取りで家に戻り、皆に報告した。

「旅の仕度など、おじゃい申そう。いかがいたしまっしょう」

妻のくに子はおろおろした。

「江戸ち申せば、数百里も向うではごあはんか？」

「何の、汽船じゃ。十日ほどで行き来できる。ウドさぁとて、あの大きな身体で月々いっぺこっぺ（あちこち行く）しとるではなかかい」

勇右衛門の用意はたいしたものではない。衣服の量を人より減らし、代りに工具と愛用の銃器を増やした。

「書物類は、江戸の藩邸に揃うておる。軍兵たるもの、常に戦場を考えて身軽にするが良か」

勇右衛門は古ぼけた行李と銃器箱を従者に担わせ、数日のうちに船上の人となった。

3

薩摩の留学生七人は、江戸の南、三田の藩邸に荷を解くと、次の日に早くも赤坂へ出た。

平元某という洋学兵術の師匠が、彼らの講義をするという。

初日にしてすでに勇右衛門は、平元に失望した。洋式兵法を謳っていたが、彼の見るところ小隊や中隊の行進散開、一列に広がっての段階射撃などを図によって教えるのみで、本格的な射的術――兵士個人の精密射撃術などまるで無知であった。

（いかんな）

勇右衛門は、成田正右衛門らが毎日喜々として赤坂の平元塾へ通うのを横目に見ながら、三田の藩邸を動かなくなった。

表向きは、江戸の水に合わず「病い」と称した。屋敷内には多くの洋式練兵書が揃っている。彼はその翻訳書を幾つも並べて、読み比べた。

二十種類以上の書籍を、十日以上かけて研究した結果、その原書は僅か四種にしか過ぎぬことを知った。

「なんと、洋書の水増しかい」

呆れる思いでページをめくる。

「江戸の洋式兵学は、薩摩のそれに比べて格が低か」

ただ、その中に注目すべき書籍が無くもない。それはイギリスの原書を独自に訳した『雷銃操法』という本である。訳者は福沢諭吉。

「これぱかりは役に立つ」

以後、勇右衛門は藩邸内の射撃において、「この書によって大いに便利を得た」という。

さらに彼は、江戸における薩摩藩お抱え絵師数人の紹介を受けた。練兵書の調査をもとに絵解きで兵員の散開戦闘や、集団行進を教える小型本まで作っている。

この絵解き兵学書を、勇右衛門は「悉皆図引き」と称した。

「福沢なる洋学者と会ってみたい」

と勇右衛門は思ったが、どうやらこれは実現しなかったようである。同じ江戸の芝に住みながら双方都合がつかぬほど忙しく過ごしていた。

勇右衛門の次の目標は、イギリス軍人に直接面談し、正式な射撃法を学ぶことであっ

た。

「いかに練兵が巧みであっても、個々の兵が射撃巧みならざれば正面の戦闘において必ず敗れる。欧州型の射的術を導入せずば、我ら日ノ本の軍事に明日は無い」

勇右衛門は藩邸の人々に説き続けた。

「村田どんの申すこと、もっともなり」

とうなずく者も日を追って増え、彼にいろいろと知恵を貸す者も現われ始めた。

「村田どん、芝の泉岳寺を存じており申そうか？」

吉井幸輔という藩の渉外役が話しかけて来たのは、それから十日ばかり経ってのことだ。

「泉岳寺と申さば、あれでごわすな。赤穂義士四十七人の墓があるという……」

「左様、ここにイギリスの仮公使館がごわす」

江戸の御朱引き近くには諸外国の施設が増えている。特に芝や高輪の大きな寺院は、軒並み公使館と化している。

「ぱーくす」という公使が、一小隊の護衛兵を率いてここに住まうてごわす。小隊は横浜の外国人居留地より日を定めて交代いたすと申す」

兵員はイギリス陸軍の赤い制服を着用しているため、近隣の人々は「赤隊」と呼んでいる。

「この赤隊より射的術を教授されては如何」
という知恵を与えてくれた。
勇右衛門はしばらく考え、
「ただ教授されるのも、日ノ本射手として口惜しかこつ。互いに競い合い、射的射撃の技量を試みては如何」
と言った。途端に吉井は顔をしかめる。
「それはどうかな」
「いかんと申されるか？」
「おはんの思いはまことに壮快じゃ。じゃっどん、敗れればいかがすっとじゃ」
吉井は、口を尖らせた。
「我ら勝てば良し。敗ければ薩摩一国の恥にあらず。本朝の国辱ではごあはんか？」
「左様なあ（そうですねえ）」
勇右衛門は、ゆるゆると答えた。
「そいはごもっともな御意言ごわす。しかれども、向うは世界万国に名高いイギリスの赤隊、そいに引きかえおいは薩摩の一書生ごわす。当方がもし敗れても少しも口惜しくはごわはん。それよりも、この試合がきっかけとなって赤隊の正しき射的術が我が国に導入されれば、どれほどの利を得るかわかり申はん。この事、ぜひに御実行願いたい」

吉井は悩んだが、すぐに勇右衛門の言葉に従った。

許可を得た勇右衛門は、芝泉岳寺のイギリス公使館に向った。藩邸から道は海沿いに一本で、小半刻もあれば行きつける。

応対に出た通弁シーボルトは、あの有名な医師フォン・シーボルトの縁者であり、薩英戦争の際にも鹿児島へ来航した人物であった。

そのうえ、日本語にも堪能。勇右衛門の薩摩訛(なまり)も理解する。

「おもしろい。公使にはすぐに上申いたしましょう。恐らくすぐに承諾なります」

という返事だった。

勇右衛門は、吉井にこれを伝えた。

イギリス公使館の正式な許可が下り、話は大きくなった。

「村田一人を赤隊と戦わせるわけにはいかぬ。射手は藩邸自慢の者を選ぶべし」

と指示も出て、十一名の選手が新たに指名された。

江戸留学組の七人に加えて、鈴木竹五郎、渋谷泰蔵、白浜仲右衛門、そして吉井幸輔までが参加者に決まった。

「競射の場所は田町藩邸といたす」

田町一丁目から二丁目にかけて、薩摩の蔵屋敷がある。裏は江戸前の海で、ここなら

流れ弾の心配も少ない。

日を定めて待つうちに、英国の赤隊は、隊列を組み、ラッパを吹き鳴らして東海道をやって来た。この日に備え、横浜北方の英軍駐屯地から熟練の射手を選りぬいての繰り込みである。

「射程は百ヤード（約九十一・四メートル）。射ち始めと射ち終りは太鼓の音。また、命中の合図も太鼓にて候うべし」

と宣言され、互いに丁寧な挨拶の後、小太鼓が鳴った。

射撃法は立ち射ちと膝射ち、各二十発である。これを三回に分けて放つ。

第一回は薩摩方十一名の総合得点が優り、第二回目は、英国赤隊が勝った。

「おかしい。的に何か仕掛けがあるのではないか」

とイギリス人兵士の中には、不平をもらす者もある。極東の、つい先年まで国を閉ざしていた野蛮人が、日の没すること無きイギリスの陸軍に勝つなどということが有るだろうか、と言うのである。

「されば第三回にて、勝負を決せん」

両者、本気になって競い合った。ところが、これも薩摩側の勝ちとなった。

赤隊の指揮官は、さらなる勝負を申し出る。

「我らより一名、そちらよりも一名射撃手を選び出し、個人戦はどうでしょう」

「良か」

吉井幸輔は、すぐに勇右衛門を指名。イギリス側も一人を選んだ。

同じ百ヤードで、兵器はM一八五三型エンフィールド前装銃。距離は同じ百ヤードだが、標的は五寸角。互いに二回の競射である。サッカーのPK戦にほぼ近い。

双方、黒色火薬の煙に包まれて立ち射ちし、その煙が晴れるまで微動だにしない。

(どちらが勝ったか?)

皆が見守るうちに、標的の下で二度赤い旗が振られた。

「村田どんが、勝ちじゃど」

吉井は躍り上がって喜んだ。

「見たか、薩摩ン兵児の実力を」

薩英戦争以来の雪辱(せつじょく)が成った、と藩邸の見物者も涙を流さんばかりだった。

だが、勇右衛門の行動は違った。

呆然とするイギリスの射撃指揮官に近付いて行ってこう語りかけた。

「今日、赤隊の射撃法を見るに、まこと勉強になった。規律正しく、射ち方にはひとつとして無駄が無い。感服つかまつった」

通訳のシーボルトがゆっくりと伝えると、指揮官は、目を丸くした。勝ち手がそれほどまで謙(へりくだ)ってくるなどと考えてもいなかったのだ。

「汝はまことのスポーツマン・シップを持っている」
指揮官は右手を差し出した。
「小生はA・ブラッドショー大尉である。今後ともお付き合いを願いたい」
という意味の言葉を勇右衛門に伝えた。ブラッドショーという名を、彼は「ブラッチョ」と聞いた。
「士官ブラッチョ殿。申し上げたき事あり」
勇右衛門は、頭を下げた。
「今日、競射会を成すは余の義にあらず。優れたるイギリス式陸軍型射撃術を会得せんがためなり。なにとぞ貴君のお力をもって教授させたまえ」
シーボルトの訳を聞いて、ブラッドショーは小難しい表情となる。
「射撃法など教えるはいと易きことなれど、小生はイギリス陸軍士官である。上司にして代表者パークス公使の承諾なければ許されぬことである」
と言う。
「されば、我が薩摩より正式の申し入れをもって公使に許可を受くれば如何？」
「それなれば可なり。汝がごとき良質なる射撃手に当国の射撃法を教えるは、我が名誉にもなるであろう」
ブラッドショーは、口髭をひねりながら笑いかけた。

これによって勇右衛門は、藩邸の江戸留守居役、篠崎彦十郎へ上申した。

「ははあ、流石は薩摩一の鉄砲名人じゃ。他の者が翻訳兵学家のもとにある時、率先して本物の洋人と交わるか。それこそ進取の精神、薩摩隼人じゃな。良か。パークスとの談判には、わしも一緒に行こう」

「ありがとうございます」

「村田どんはパークスとは初対面じゃ。藩より費用を出すによって、何ぞ贈り物をしたが良かろう」

篠崎の発案で、勇右衛門には会計方より五両という大金が出た。洋人は陶磁器を土産にすると聞いて芝の古物商をまわり、さし渡し一尺五寸もある中国製の染めつけ大皿を買い求めて、行列を組み公使館に向った。

パークスは難しそうな人物だった。

「自分はイギリスの代表であり、ビクトリア女王陛下の代理である。個人的に贈り物を受けることは許されておらぬ。その大皿は貴君のもとに戻されたい」

と固い事を言う。さらには、

「護衛兵は陸軍大臣の指揮下にあり、自分はそれを借りているに過ぎない。許可はそちらに問うべし」

篠崎と勇右衛門に、木で鼻をくくるような答えを返した。

（これは、脈が無か）

二人が立ち上がって帰りかけると、

「ミスター・ムラタ」

苦虫を嚙みつぶしたような顔で呼び止めた。

「……」

小声で通訳に何か言う。これを聞けば、

「貴君はブラッドショー大尉と友人なる由。それは真実なりや？」

と言う。

「左様でござる」

「されば、友人として一個人として射撃の技を語り合うにおいては、残念ながらイギリス公使は何も止め立てする権限は持ち合わせておらぬ」

口をへの字に結び、しかし、片目を閉じてみせた。

（こ奴め、話がわかる）

勇右衛門は小さく頭を下げて、パークスのもとを辞した。

「その後、しばし泉岳寺へ通い、ブラッチョ君より正式なブリティッシュ・アーミー・シューテングを学んだ。また贈り物の大皿は、高輪の料理茶屋『万清』にて休みし折り、持ち運びに不便なれば、亭主を呼びてこれを下げ渡したり」

勇右衛門は後年、気持ち良さ気に語っている。

4

江戸藩邸でのイギリス式操銃伝習は、滞(とどこお)りなく終了した。

勇右衛門は、習い覚えた技を国元の者に伝えるべく、帰国を開始する。

彼が鹿児島に戻り着いた日は、梅雨の終りであった。西の空は雲が切れて青々としていたが、桜島の上端はどんよりとした黒雲に覆われ、島の西側赤水(あかみず)のあたりには、雨がしきりに降り注いでいた。

御用船三邦丸(みくにまる)を降りた勇右衛門は数日、自宅で休養し、藩庁に出仕した。江戸留学の者にはそれぞれ新しい役職が待っている。勇右衛門に与えられたそれは、

「砲術師範役」

であった。

かつて少年の頃、荻野流砲術師範野村家に入門し、その流儀を改良せんと思い立ってより十数年。三十路(みそじ)前にして、彼は「村田流」という独自の流派を藩より認められたのである。

「追い追い京摂(きょうせつ)の形勢切迫せしにより」

と例の決り文句の付いた命令書が発布されて、彼のもとには百名余りの兵が配備された。これらは「外城伝習兵」と呼ばれた。

外城制というのは、薩摩藩独特の軍事制度であり、また地方行政の基礎単位である。戦国時代末期、全九州制覇の夢破れ、薩摩・大隅の辺に押し込められた島津家は、膨れあがった家臣団の維持に苦慮した。そこで彼らを半農半士にして、領内の開墾に従事させた。これは、米沢上杉氏、萩の毛利氏など関ヶ原の役以後、身上が縮小した外様大名家にも往々見られるやり方だったが、薩摩の場合は彼らが合戦の際、効率的に活用できるよう強力に管理していた。

外城とは一口に言って内城に対応する呼び方である。主君島津氏の居住した中心の城（鶴丸城）を御内城とし、これを守る外側の防御組織をそう称した。

外城の責任者は組頭によって統率され、これがいざ合戦となると、各外城三つから五つほどがひとつの戦闘単位になる。外城の数は時代によって加減があるが、およそ百十三と言われていた。

彼らは陣触れと聞くと、鎧をまとい武器を携えて、内城に集結する。それを一日以内に出来る組が、重富や加治木、垂水、谷山、伊集院、国分、といった鹿児島湾に近い外城であった。これは当時、「仮一番隊」と呼ばれた。

勇右衛門は「仮一番隊」士の中から特に選抜された若者たちを受け持たされた。伝習

を受けた外城士は農地に戻り、他の外城士に教育された技術を伝える役を負っている。つまり、それぞれが教導兵なのだ。

彼らは初め、勇右衛門と打ち解けることが無かった。外城士は郷士であり、勇右衛門の属する内城の城下士には常にコンプレックスと対抗心を抱いている。

砲術に未熟であってもそれを恥とせず、城下士から命令を受ける事のみを恥と考える者までいる始末だ。

（こいでは、伝習にならん）

才人の勇右衛門は、強制的に技術を教え込むことを止め、彼らが自ら進んで学ぶ方法を考案した。

まず、射場で一列に並び洋式銃の照準ばかり教える事を中止して、野外に出た。

案山子のような人形を多く作り、これを山道のあちこちに立てた。

「おはんら、いつも角場で板ばかり的当てするのも、疲れるじゃろ。そこで、実戦のごとく、人形を射ってくいやい」

銃砲の練習では珍しいが、薩摩の刀技「示現流」には時折りこういうやり方がある。

「『平首』ごわすな」

外城士の一人が笑った。

示現流の太刀打ち練習では、広場へ等間隔に杭を打つ。そこに陣笠や壊れた面頬、古

具足などを吊るし、猛烈な速度でこれを打ち割って行く。「半首」と称し、ずいぶん実戦的な練習法とされていた。

「これは、おもしろか」

一人が、ずかずかと歩いて行ってエンフィールド小銃を構えた。

「ああ、それはいかん」

勇右衛門は叫ぶ。

「相手を生身の敵と思うて、な。放ち返されんよう、腰をかがめよ。折れつ曲りつして近付き、程良いところで構えるが良か」

教えられた外城士は存外素直な性格らしく、すぐに腰を低くして人形に接近した。彼の持つエンフィールドは、前装銃である。適当なあたりまで来ると銃口の棚杖を抜き、直立して弾を込めた。再び中腰になって引金を引くと、銃床の肩付けが不充分だったのか、屁っぴり腰が悪かったのか、発砲と同時に後ろへ引っくり返った。もちろん弾は大きく外れて、人形にかすりもしない。

見ていた兵士たちは、どっと笑った。

「こらこら、そう笑うもんではなか」

勇右衛門もつられて笑いそうになった。

「初発は、誰でもこげんこつになり申す。洋式銃は、火縄銃に比べて重心の取り方が初

心者には、いっちょんわかり申はん。何発も放って、身体で慣れるしか無いち思い申す」

と言った。

勇右衛門は、早くもエンフィールド前装銃の欠点を見つけていた。

（やはり、この銃はいかん）

銃剣まで装着するとエンフィールドの全長は短軀（たんく）の薩摩人よりもかなり高くなる。前装銃の弾込めは銃身を立て、直立して行なうから敵の目標になりやすいだろう。その対処法としては、

「弾込めは、なるべく左膝を地に付けて、斜めにした銃身へ込めるが良か」

と教えるしかなかった。

そうこうするうち、慶応三年九月となった。

西郷は大坂にあり、薩摩から新たに増援された外城士三百名の受け入れを行なっている。勇右衛門が兵を訓練しているところへも、西郷の同志が入れ代り立ち代り出入りしていたが、とうとう勤王連判状までまわって来た。

（大仰な）

とは勇右衛門も思わない。

連判状を携えて来たのは、その昔、彼に撃剣を教えてくれた大山格之助（綱良）である。

「このたびの討幕挙兵」

露骨に幕府打倒を口にする。それもこれまでには無かったことであった。

「我ら勤王の志厚き輩は、連判のうえで死すとも天朝に尽すことと相なった。村田どんの決意は如何に」

「我が家の祖は、南北朝の時代、全九州に威を振るった勤王の将菊池肥後守武重でごわす」

勇右衛門も連判状を前にして、柄にもなく興奮し、長々と語った。

「父（村田経徳）もまた勤王家にして、我が幼少の頃、膝下に招き『やよ聞け、息子よ。汝は長じて後、王室の式微を払拭するを誓え』と誓書に血判させられてごわす」

「ほう、左様なことがごわしたか」

「はい、こん形勢切迫の折り、王室のため尽さざれば、いずれの日か父の言葉に応ずる時あらん。いざ、血判いたし申そう」

腰の脇差を僅かに抜き、左の親指へ刃を当てて傷をつけた。

大山は勇右衛門が赤々と付けた印に満足し、帰って行った。

鳥羽と伏見

1

慶応三年（一八六七）十月三日。勇右衛門へ率兵上洛の命令が下った。

大山はその数日前、再び彼のもとへ訪ね来て、

「ついに、もの（挙兵）成りそうじゃ。おいはひと足先に国を出る。長州の三田尻にて待ち申すで、村田どんも追い追い長州に来てくいやい」

と言った。

前の月の九日、大坂にあった西郷は土佐の重鎮後藤象二郎と密談し、薩摩の討幕挙兵策を告げている。

勇右衛門らは武器を満載した数隻の御用船に分乗し、長州に向う。何事もなく同地に着船したのは十月六日。長州藩の山田市之丞が、同じく長州の兵を率いて三田尻に着到。藩主毛利侯までが陣所に入っている。

勇右衛門らは港に降りるなり大歓迎を受けた。巨大な料亭に招かれ、待ち構えていた三田尻芸者に手をとられて席に着けば、山海の珍味が膝元に溢れかえっている。普段、雑穀や唐芋ばかり口にしている外城の者にとって、それは夢のような光景であった。

「おいは、もういつ死んでも良かぞ」

「できることなら、こン膳部をひとまとめにして、国元の妻子に送りたかあ」

「ほんに、独り占めはバチが当り申す」

外城士たちの中には涙を流す者さえあった。

「充分に鋭気を養うて下され。来たるべき一戦では、薩摩隼人の実力に期待いたしております」

諸隊駆け引き役の山田市之丞が、勇右衛門に語った。

（不思議な事じゃの）

と勇右衛門は苦笑いする。

（ついこの間まで、長州藩は薩摩嫌いで鳴らしていた。下駄に薩奸会賊と書いて踏み歩く武士も多かったと聞く。そいがこの歓待振り）

盃を重ねていると、金屏風の前に数人の芸妓が並んだ。三味線を逆さにして左肩に担い、

へのーげのやまから、のーえ……

と唄い出した。

一列になり、端に立つ芸妓の命令で部屋の隅から隅を行き来する。

「こいは、一体何の真似ごわンそ？」

「いや、近年より相州横浜で流行る『ノーエ節』であります。節が同じものなれど、歌の文句が違う歩兵節やら農兵節というものもありましてな。その型は、横浜配備イギリス人銃隊の調練を真似ておるものと聞き及びます」

山田はおもしろ気に説明する。

「こいも、時節柄でござい申すのう」

勇右衛門が江戸薩摩藩邸で、イギリスの兵士たちと射撃交流をしたのは、ついこの前のことであった。

唄い終えて頭立つ芸妓が「お流れ頂戴」にやって来る。

「いや、名にしおう三田尻芸者。新しもん好きで、がっついおもしろか」

勇右衛門は、盃を渡しながら言った。

「じゃどん、少し気にかかるところがある。おはんら芸者の三味線の担い方に難があるとじゃ」

「はあ？」

芸妓はどこが悪いのか、問うた。
「おはんらが真似ておるのは、洋式の銃隊調練じゃろう。さすれば、銃は右肩でのうてはいかんち」
勇右衛門は真面目くさって説明した。
「日本の鉄砲足軽は、戦国の昔より左肩に担うと定まっちょる。そいは火縄銃だからじゃ。火をつけたまま銃を担うてみい。右頬のすぐ近くに火種が掛かって危ない。そのうえ、昔の軍法では左側に沿って歩く。右に担うと他の軍馬に火縄が当ってこれも危ういからよ。じゃどん、洋銃は火種が無く、しかもイギリス式歩行は右側歩き。さすれば、おはんらも『ノーエ節』では右肩担いにするが良か」
「はい、心得ました」
芸妓は洗盃して去った。山田市之丞は感心して、
「村田殿は、まことに観察眼が鋭い」
「いや、事、鉄砲に関しては間違いが許せぬのでごわす」
勇右衛門は、そこでやっと恥かしそうに頬を赤らめた。
かくして二日後十月八日。西郷ら薩摩方の重要人物は長州の広沢真臣、品川弥二郎、芸州の辻将曹らと会議し、倒幕の挙兵同盟を結んだ。
十月十二日、西郷の指示で大久保一蔵、小松帯刀は、朝廷に「討幕の宣旨」降下を願

い出る。

この密勅は二日後に下った。勇右衛門ら薩摩の増援兵は、三田尻を出て兵庫に至り、山崎から京に入った。宿舎は相国寺と定められたが、国元の兵が新たに入京するため、東寺に宿所替えとなった。

宿の前は伏見街道である。勇右衛門は連日、二本松の本営で命令を受領し、兵を率いては街道筋の警備に出た。

すでに洛中では、幕府方と倒幕諸藩の兵が暗闘を繰り広げている。小人数で歩きまわる薩摩藩士が、夕暮れ刻に取り囲まれ、めった斬りにされるという事件も起きていた。

「都が物珍しかち申して、いっぺこっぺ歩くのは危うか」

勇右衛門は、配下の兵を集めて戒告した。

「外出の際は隊伍を組め。敵は新撰組じゃ。おはんらの示現流刀術に敵意を抱いちょるど。喧嘩を売られても、必ず刀は抜くな。町の辻ごとに味方の屯所ができておるから、そこへ逃げ込め」

洛中で勝手に斬り合いをした者は、理由の如何を問わず厳罰に処す、という西郷の命令が出ている。

「ウドさぁ（西郷）は、刀の鯉口を切るなち申された。じゃと申して、そのまま斬られるも隼人の面目が立たん。屯所にある銃を用いて戦え。ただし放ってはならんど。剣付

銃で刺すにおいては、おいが許す」

勇右衛門の配下も例によって鞘と鍔の穴に紙縒りを通し、刀が抜けぬよう封印している。

「せいぜい銃剣の扱いに慣れることだ」

兵士たちは、我が身を守るため率先して、洋式銃剣術の稽古に励んだ。

十一月十五日。坂本龍馬・中岡慎太郎以下が三条河原町の近江屋方で暗殺され、五日後、薩摩兵の新たな増援が相国寺に入る。

そして、とうとう十二月九日。勇右衛門らの隊も御所へ出動が命じられた。

他に芸州浅野家、尾張徳川家、越前松平家、土佐山内家の兵も動き出す。京都守護職の会津兵と京都所司代の桑名兵は御所から追い払われて、王政復古の大号令が発布された。

小御所会議では十五代将軍徳川慶喜の辞官と所領の納地が定まり、年も押し迫った二十九日。御所旭御門前において新しく守備兵となった薩摩や長州の洋式兵は、天覧仰せつけられた。

隊列を組み、整然と玉砂利の上を行進する黒衣の兵士たちを見て、天皇はしごく御満悦の体であったという。

しかし、天覧が終り一同直立するところで、ちょっとした騒ぎがあった。

「天子様の詔勅がおわす際、顔を上げるとは無礼の極みであろう。皆、平伏せよ」
と側近の公卿らが怒り始めたのである。天覧の兵たちは仕方無く、銃を伏せ、地面に頭をつけた。長州の名高い軍事参謀大村益次郎は、物に動じない不遜な男と噂されていたが、その彼が洋式兵の土下座を見て、
「これでは敗兵が降伏する姿ではないか」
泣きそうになったという後日談も付いている。
ともあれ、天覧練兵は名誉なものであり、勇右衛門らにも酒肴料が下賜された。

この前後、討幕指導者の西郷は一人苦悩していた。
当初、武力による徳川氏の打倒を目論んだものの、知恵の立つ徳川慶喜がタイミング良く大政奉還、即ち朝廷に政権を戻す旨、宣言してしまったのである。
これでは喧嘩にならず、開戦に至らない。
「向うから喧嘩に手ェ出すことを、計らねばなり申はん」
西郷の狡猾さは際立っていた。幕府のお膝元で混乱を起こすべく、在府の薩摩藩邸に悪質な連中を集め、商家への押し込みや放火暴行を働かせたのであった。
この作戦は半ば当った。江戸の町民は治安の悪化に動揺し、幕府の強硬論者小栗上野介らは薩摩藩邸の攻撃を主張した。

だが慎重な幕府要人らは、耐え続けた。

「徳川の家臣にも漢はごわすな」

西郷は敵の我慢強さに呆れ、そして焦った。これが十二月二十三日のことである。その翌日、薩摩藩邸を「出撃」した一団が、三田の屋敷近くにある市中取締りの本営庄内藩邸に銃撃を加えた。

これが、ついに幕府を動かした。庄内藩十四万石の酒井左衛門尉、支藩の酒井紀伊守、これに前橋、西尾、上山といった諸藩の兵が加わり、三田の薩摩藩邸を攻撃した。

薩摩人らはその頃、多くが江戸を引き払い、押し込みの「御用盗」以外は小人数の藩士が残っているに過ぎない。二千余の兵に包囲された彼らは、四十九人が討死し、残りは品川に停泊する御用船へ逃げ込んで辛くも江戸を脱出した。

「薩摩藩邸焼かれる」

の報は二十八日、大坂にあった徳川慶喜のもとに伝えられた。勇右衛門らが天覧練兵を行なった前日の事である。

前後して、西郷のもとにも焼き打ちの報告が入る。

「やり申したな！」

西郷は大きな両の掌を打ち合わせて喜んだ。

「討幕の開戦、一日遅れなば、一日の不利なり」

と常々周囲の者に漏らしていた彼は、これで開戦の口実ができ上がったと感じたのである。

それは徳川方も同じだった。大坂城内に駐屯する会津や桑名、将軍を守って江戸より下っていた旗本諸家も激昂(げっこう)し、

「これを好機と見て、ただちに在京の薩兵を討つべし。兵を都に進めて、幕府の権威を回復せよ」

と騒いだ。

徳川慶喜も、それを抑えつけることは、もはや不可能である。

慶応四年（一八六八）元旦、慶喜は打倒薩摩を朝廷に奉(たてまつ)るべく、

「討薩表(とうさつのひょう)」

を作成した。幕府の京摂に保有する兵数は一万五千。これに対抗する薩摩方は、長州や土佐の兵を合わせても三千から四千。幕府方は圧倒的な兵力によって勝ちを収めるものと見ていた。

2

正月二日、在京の薩摩兵指揮官は二本松の本営に出頭を命じられた。

勇右衛門も早朝駆けつけると、伊地知正治から、
「探索方より重大な知らせが入ったど」
と聞かされた。
「会津兵八百名ばかり、大坂より陸路伏見に乱入との知らせが入ったち」
「はあ、八百でごわすか」
勇右衛門はうなずいた。
「いずれ繰り込んで参るとは、思うちょりました。じゃどん、八百では」
「会津が出ると桑名も出る。あ奴らは御神酒徳利じゃっど」
伊地知は、にこりともせずに言った。会津二十三万石松平肥後守容保と、「焼き蛤」と渾名される桑名藩主松平定敬は実の兄弟なのだ。
「その桑名藩兵、水路にて数千人が繰り込むという知らせも入っておる。じゃが、そいはまだ確認ができており申はん」
「我らは、如何にいたせば良うごわんそか？」
「村田どんの隊は東寺にあって、動き易か。京の事情を知る者を探索方として、鳥羽や伏見、山崎の方面に放ってよりくわしく偵察してくんなはい」
「心得申した」
勇右衛門は東寺に戻ると人数を選び、命じられた方面に放った。

次の日、再び本営に出頭すると、伊地知は軍行李に荷物を詰めている。
「村田どん、徳川の輩は、ついに大兵で攻め寄せてくっど」
「はい、鳥羽街道、伏見街道の二道は未明より騒がしく、彼我の物見が暗中の斬り合いまで起こしてごわす」
「さればじゃ、幕軍の軍奉行竹中丹後守、六千の歩兵砲兵を率いて鳥羽街道を進む気配じゃ。よって、おいも東寺を本営とする。伏見方面は別に一隊を出し、土佐兵百、長州兵も百余を配する」
伊地知は軍行李を軍夫に運ばせると、立ったまま茶を一服飲んだ。
「村田どんの隊は強力じゃ。鳥羽の街道筋に陣を築き、如何ようの事ありとも竹中の軍を都に入れては成り申はん。き奴らが強いて押し通るとあらば、一戦してこれを打ち破るべし」
「心得申した。で、おいたちの他に、どの隊が付き申すか？」
「野津どん（野津七左衛門・鎮雄）の隊。市来勘十郎どんの隊。そいに砲兵一個小隊が付く」
伊地知はそう言うと、佩刀の目釘を確かめて慌しく出て行った。
勇右衛門は馬に鞭打って東寺に帰り、喇叭手と太鼓手を呼んだ。
「鼓吹手、出撃の合図を為せ」

「心得て候」

彼らの鳴らすイギリス調練の曲に合わせて村田隊は整列し、東寺の門を出た。最初の目的地は鳥羽街道、城南宮の辺である。

街道の土手が鴨川と交わるあたりで道は大きく左に曲り、橋が架かっている。その先は下鳥羽村で、土手は田の中をほぼ一直線であった。

橋の袂には石の道しるべが立ち、

「小枝橋、右塔ノ森、左城南宮」

と出ている。そこへ布陣した薩摩軍は僅か五百足らず。そのうち百余を小枝橋に残し、城南宮の森に至る畔道へ点々と兵を配置したから、警戒線はますますか細くひ弱に見えた。流石の勇右衛門も、

「これで六千の幕軍を押し止めることができようか」

と不安になった。

田の間に歩哨が立てられ、砲は隠蔽された。畔のまわりは冬のことで涸れ田になっている、一面に稲の切り株が広がっていた。

「腹拵えせよ」

兵たちは冷えた握り飯を頬張り、土手の下で焚火をして湯を沸かした。

勇右衛門が、二個目の握り飯を口にした時である。

「来申したど。徳川の軍ごわす」
下鳥羽のあたりから探索の兵が走り戻ってくる。
「大変な人数でごわす」
「わかっちょる。本軍、会津、桑名、合わせて六千程じゃろう」
「ち、違い申す。淀から進み来る軍勢、二手に分かれており申すが、その最後尾は未だ淀城下にあり。二方面の兵を合わせると一万四、五千にもなり申そうか」
探索の唇は恐怖で土気色に変っていた。
「全軍出陣か。そいは豪気じゃのう」
勇右衛門は被っているトンキョ帽（薩摩兵用の三角笠）の端を持ち上げた。
「放ち殺す敵の人数が増えた。良かこつ。日頃鍛えた洋式銃調練の、腕ン見せどころじゃな」
さらに待つうち、第二の偵察報告も入る。
「東軍、さらにこちらへ接近」
偵察兵は幕府兵と言わず、東軍と言った。
「されば、おいどんらは西軍か。まるで関ヶ原の昔に戻ったごつ」
「まさしく、関ヶ原に戦こうた祖先の仇を討つはこン時でごわす」
偵察の兵は、そう言って走り去った。

勇右衛門が土手に上がると、鳥羽街道に白地に赤丸の日章旗と、添え旗や吹き流しが見えた。その数は、報告の通り大変なものだ。

「ああ、まずか戦ぶりじゃのう」

小手をかざして、寄せ来る幕府の兵を観察した。

まるでそれは元亀・天正の時代を思わせた。華麗な武者姿の侍たち、その後に黒い戎服姿の幕軍洋式兵が見え隠れしている。

「狭か道を一列に連なってやって来るとはのう。兵力の多さで圧倒しようという腹じゃろうが、頭の悪かこつ」

街道の側面に警戒の軍も出していない。これでは脇腹から襲ってくれと言っているようなものだ。

「先頭の旗印は、竹中丹後守の先鋒でごあんそな」

「おっ、当方からも使者が出た。あれは軍監の椎原どんじゃごわせんか」

兵たちは口々にわめく。

「せからしか。私語は禁止じゃ」

勇右衛門は怒鳴った。

ここで幕軍側の最先頭に立っていたのは、幕府大目付滝川具挙である。彼は鳥羽街道の情況を一応把握している。見廻組の隊士に京方面の偵察を行なわせ、淀と薩摩側の

警戒線を何度か行き来して、敵の配置も心得ていた。

しかも彼はこの時、慶喜の「討薩表」を保持している。

『村田銃発明談』の中で、勇右衛門の語る部分を見れば、この滝川が竹中丹後守となっているが、他の描写はなかなか正確である。軍監椎原と滝川の対話、

「兵杖を携えての上京、不審である。如何なる所用あってのことか？」

「拙者儀、今般徳川公の命により、朝廷に伺い立つること有りてかくは参った」

「朝廷へ参内いたすに、何ぞ兵を多く率いたるや？　益々不審なり。通行相成らぬ」

双方路上で、丁々発止のやり取りが続き、時間ばかりがいたずらに過ぎていく。

彼方からこれを眺めていた勇右衛門に、伝令が近付いて来たのは日が西に傾いた頃である。

「砲の照準を、敵の隊列に合わせてたもっせ」

すでに合わせ終えている旨、勇右衛門が答えると伝令は言った。

「東軍の旗本どもは我ら小勢と見て侮り、戦の用意も怠っており申す。しかし、大目付配下の見廻組は油断なり申はん。あれが吶喊して来たならば、難儀なこつ」

「我らが対抗しよう」

「ありがたかこつ。されば見廻組が張り出して来る時は、大筒組を後方に残して銃陣のみ前進し、狙撃によって殲滅してたもっせ」

「心得た」
勇右衛門が、土手に伏せた隊士を並べ替えた時、ついに路上の談判が決裂した。
「夕刻近くまで多くの軍勢を路上に置くは、無能の沙汰なり」
滝川具挙は我慢の限界に達した。
「かくなるうえは、押して通る」
捨て台詞を残して、後方の隊列に戻って行った。
「わかった。この方にては押し通られよ。薩摩隼人の面目にかけて、相応の相手をなさん」
軍監椎原小弥太は自軍の陣地に戻りながら味方の射手に合図する。
この瞬間、砲声が轟いた。
「放て」
土手から畔道に散開した銃兵も一斉に発砲する。
街道上にあった幕軍の縦隊は、突然の攻撃で大混乱に陥った。
「見敵即倒、先手をもって討つは砲術の基本なり。それ、次弾を放て」
勇右衛門らは照準を変えながら砲撃を続けた。砲弾の一発は幕軍砲兵の砲車に命中。
そこに大目付滝川が居たからたまらない。彼の乗馬は驚いて滝川具挙を振り落とし、後方の淀に向って駆け出した。

これが路上を逃げまどう将兵の混乱に拍車をかける。
「放ち返せ。何をぐずぐずしている⁉」
幕軍の将が叱咤するが、戦闘を予想だにしていなかった兵士たちは、銃に弾丸を込める間もなく、また射手と弾薬方が離れ離れになって対応の仕様もない。
「抜刀して前に出よ」
「敵は小勢ぞ」
「一気に斬り崩すべし」
側面に待機していた見廻組の面々が、味方の腑甲斐無さに激怒して前進を開始する。
彼らは旗本、御家人の次三男の中から選抜された剣技の達人であり、その組頭佐々木只三郎は、清河八郎や坂本龍馬さえ殺したと噂される手練れであった。
「進め、進め」
と抜刀した一団は涸れ田の中に降り立ち、畔に広がる薩摩兵に肉迫した。
「あれを近付けてはならぬ。銃隊は整列し、もっと前へ」
勇右衛門は命じた。
「前列、膝放ち。後列立ち放ち」
ここが伝習の腕の見せどころである。黒衣の薩摩兵は畔を下って田の中に降りた。
見廻組を中心とする抜刀隊は、鯨波の声をあげ、刀槍をかざして駆け寄ってくる。

「まだ、まだ。放つな」
二列に並んだ薩摩兵は、筒口を揃えた。
敵の前衛は半町近くである。絶叫するその赤々とした口の中まで、はっきりと確認できる。
「まだじゃ」
勇右衛門は、洋式の帯刀ベルトに差した突兵拵の鞘を払った。身近に衝撃が来て、傍らに立つ射手が敵弾に倒れる。
「撃鉄上げい。前列放ちやれ」
佩刀の先で敵を差し示し、命令を下した。
刹那、白煙が立ち、轟音があがる。
敵の影が折り重なるようにして倒れた。
「後列、放ちやれ」
再び轟音。前列銃陣の発砲を見て、その隙を突こうとした敵は、またしても倒れた。
「畔の裏に戻るべし」
射撃を終えた二列横隊は急いで半町後方に引き揚げ、次弾を装填する。
田の中には派手な陣羽織や甲冑姿の死骸が足の踏み場も無い程に転がっていた。
「隊長、も一度敵の吶喊ごわす」

槍の穂先を揃えた敵が押し寄せて来た。
「弾込め。良う候(そろ)か」
「良う候」
配下の兵は声を合わせた。
「銃陣を密(みつ)にする。左右、間隔を詰めよ」
銃隊は黒々と固まった。
「三段銃陣を取る。前列伏せ放ち、中列膝放ち。後列は備えとせよ」
敵は二十間まで迫る。これは前よりも数が多い。
「前列放て」
白煙の中にばたばたと人影が倒れ伏し、悲鳴があがった。

3

あたりは少しずつ藍色(あいいろ)に染まり、視界が閉ざされ始めた。
薩軍から放たれる大砲や小銃の銃火ばかりが、時折り鳥羽の田畑を橙色(だいだい)に輝かせている。そのうち、伏見方向でも砲声と砲火の光があがり、あちらも激戦の気配である。
「点呼をば、取るどお」

田のあちこちで声がする。
「我ら手負い、死人は幾程か」
勇右衛門は、それだけが気がかりだった。
「小頭は、集え」
たちまち銃隊の小頭が畔の高みに上って来た。
「ひどか戦でごわす。我らの隊は十二名討死ごわす」
「我らは五人」
「我らは死人無かりせども、手負い八名ごわす」
口々に被害を報告する。
「相手の銃火もなかなか正確になって来ちょり申す」
手や頭に血の滲んだ晒しを巻いた者も多い。
「敵の仏式伝習兵が出て来ぬは、なぜじゃろうか」
「未だ戦は半ばでごわす。切所（ターニング・ポイント）に至って投入する腹でごわそう」
ひとりの小頭が言った。
勇右衛門たちが恐れていたのは、徳川家が誇るフランス式伝習兵だった。これは慶喜直属五千の内に含まれ、一般からの徴募兵である。二個大隊の兵全てがフランスから供

与されたシャスポー式の後装銃を持ち、射程は薩摩軍のそれよりも僅かに長い。
「仏式伝習兵は夜間に弱いと言う。あと少しで夜に入る。少しの我慢じゃ。銃火が収まったならば、哨兵線を張るど」
勇右衛門は命じた。
なるほど闇が来ると、自然に休戦の体となった。彼我に攻め寄せる気配は無く、幕府方は兵をまとめて下鳥羽方面へ後退したようである。
「半刻置きに偵察兵を出す。残りは腹を養え」
だが、炊飯器材は敵の砲火で吹き飛んでいた。仕方無く一同は僅かに配られた干飯と、昼間食べ残していた泥だらけで固い握り飯を口にした。
「伏見の戦は激しそうじゃなあ」
「あれは、伏見奉行所へ当方の砲兵隊が焼き玉を放っておるのじゃろう。町の燃え方がひと通りでンなか」
勇右衛門は、兵の一人が分けてくれた干飯と冷えた茶を啜り、しばし戦況を分析した。
「徳川にも士はいる。最前これだけの恥辱を受けたとなれば、夜討ちを企んで恥を雪ぐがこれ武門の心得じゃ」
一人の小頭が、勇右衛門の言葉にうなずいた。

「それは、おいも考え申した。我らは鳥羽街道の南方と東方にのみ向うてごわす。じゃどん、敵が闇に紛れて我らの哨兵線を大きく迂回し京方面を窺えば、形勢は一気に不利ごわす」

「よし、さればこういたそう」

勇右衛門は、配下の兵を半分に分ける策を皆に示した。

「半分の兵は全て歩哨に立ち、残りは後退して京の油小路口に向う。これは大砲を置き捨てにし、小銃のみとする。夜が明け、何事も無ければ危険は去ったと見て、再びこの哨兵線に戻ってくる。おいは、この策を今より軍監椎原どんに具申して来る」

彼は城南宮の指揮所に走り、許可を得た。

京七口のひとつ油小路口に着いた時は、深夜であった。

すぐに警戒の兵を四方に出し、無人の家屋から畳を運び出した。

「家具、畳は路肩に重ねよ。煙草は厳禁する。煙管の火は、およそ一里遠方からも見えると知れ」

勇右衛門は暗闇の中で、あれこれ指図した。路上に守備の兵を配し終え、ほっと一息ついた時、京の方向から異様な音が聞こえて来る。

「何な？」

「荷車の軋む音のごたる」
兵士たちは緊張した。
「こいは大筒の車輪が鳴っておるとでごわすな」
小頭の報告に、勇右衛門は首をひねる。
「敵とは思えぬ。京方向から音は長々と聞こえてくる。じゃどん、油断はならん。銃の筒口は向けておくように」
息を殺して路上を窺っていると、音は数町先で止まった。
「やあ、そこに居るは何者か」
言葉に薩摩訛がある。もしやと思い黙っていると、誰何する声は二度続いた。
「答えぬとあらば、大筒を放ちやっど！」
「まあ、待ちやい。これは御所警護より出張の村田勇右衛門じゃ」
「おう、村田どんな。おいは、弥助じゃ」
西郷の従弟、後の陸軍大将大山巌である。この男は小型洋式砲の達人で、彼の用いた薩摩式四斤山砲は、後に「弥助砲」などと称された。
「路上に出て来やい」
灯火を持たぬため、双方手さぐりで近付いた。
「おいは、ここが一番の難所と思うて」

兵の半数を割き、急行したと勇右衛門が述べると、弥助は、
「それは良か料簡じゃ。されども、村田どんな、危ういところじゃったど。こげんところに味方の居ること無きに、馳せまわって指図する者が居る。こいは全く敵に相違無い。闇をすかして狙撃してしまおうかち、部下の者と語り合うていたところじゃ」
「ほんなこつ（そうでしたか）」
勇右衛門は闇の中で苦笑する。
「我ら、本営より伏見方面の援護を申しつかり、これより進軍いたす」
弥助は路上の防御物を開けるよう命じた。
「心得申した。今、開けまっしょう。ところで、本営では新たな合い言葉を出してごあんそか？」
勇右衛門は問うた。
「うむ。山と申せば山、川と申せば川じゃ」
「簡単に過ぎるではごあはんか」
「合い言葉は昔より、覚え易きが良か。どうせ明日になれば、別の合い言葉が決められるじゃろう」
大山弥助の一隊は、砲車を押して伏見方面へ南下して行った。
勇右衛門らは畳を重ねた堡塁に寄り付き、再び警戒の姿勢となった。

小半刻後、今度は鳥羽の方より京に向って、ひたひたという足音が聞こえてくる。
「これも、味方でごあんそか」
京の方面が危ういと見て、他の薩摩勢が勇右衛門たちの加勢に来たようにも見えた。
「いや、足音が多か。百は超えておっど」
総勢五百足らずの鳥羽防衛線から、百近い兵数を引き抜いて京に戻すなど考えられない。
「敵と見るが良かじゃろうが、念のため声をかけてみよ」
命じられた大音(だいおん)の者が、
「山じゃ」
と叫んだ。進軍して来た隊列のうちから、先頭に立つ者が歩み出て、
「川」
と叫んだ。
(引っかかった。こいは敵じゃ!)
山と言えば川と反射的に答えてしまうのが人の常である。
「放ちやっど」
配下の兵が銃を取り直す前に、早くも正体不明の兵はこちらに向けて発砲した。
闇の中に銃火が輝き、甲冑をまとった敵兵の姿が浮び上がった。

「まさに、敵に相違なか」
「村田隊長、御下知を」
勇右衛門は刀を抜き、刃を上にして右肩に担った。
「まだ放つな。闇夜に鉄砲という言葉があるが、なかなかに当らぬものじゃ。ほれ、敵弾は頭の上のかなり高いところを飛んで行くじゃろう」
配下の兵が銃を構えるあたりをまわって、静かに命令した。
「射手の心は、かくのごとし。狙いは定かならざれども、筒先は下げるべし。敵の足のあたりを狙うて攻めれば、程良く胸のあたりに当るものじゃ。夜間の照準は左様心得よ」
畳の間を渡り歩く勇右衛門は、夜目にも目立つと見え、
「バスッ」
と嫌な音がした。彼の被っているトンキョ帽の端に当って鉛の破片が散った。
(敵にもうまい奴はいる)
ひやりとした彼は、一斉射を命じた。
勇右衛門の配下は、昼間の射撃と同じように射線を交互させて弾を放つ。
「山」
と叫んで一斉発。

「川」
と叫んで、また一斉発。
敵も合い言葉を真似て接近を試みるが、それがさらなる混乱を生んだ。後から迫る別隊が、
「山と申す者は敵ぞ」
とわめいたために同士討ちを開始したのである。
たちまち寄せ手は総崩れとなり、鳥羽方向に逃げ始めた。勇右衛門らは堡塁を乗り越えて二町程追跡したが、深追いは危険と見てその場に止まった。

4

勇右衛門たちの部隊は、敵の再攻撃に備えて、その晩は一睡もせずに過ごした。
「茶ァ目を醒ます妙薬じゃっど。誰でン良か。そこらで買うて来よ」
明け方、彼は左右の者に命じた。
「そいなら、おいが」
と答えたのは、村田隊の戦目付、森剛兵衛であった。
「本営への連絡がてら、兵糧とともに持って来申っそ」

森が後方に走り去ると、油小路の陣には静寂が訪れた。
「鳥羽方面の物音は絶えたな」
伏見のあたりでは、未だ散発的な砲声が聞こえている。
「伝令の報告では、伏見奉行所は焼け落ち、幕軍は高瀬川の西岸に逃げ散ったと聞いております申す」
勇右衛門の脇に控えた兵が言った。
「いや、あの声は味方の臼砲ではなか。四斤の野砲じゃ。されば、敵の砲兵ンごつ」
伏見では御香宮の前に展開した薩摩軍砲兵隊が、会津兵や新撰組の籠る奉行所を、間断無く射撃し続けていた。これに対し、会津藩中の大砲奉行林権助も、野砲をもって新撰組の抜刀突撃を支援した。
「臼砲は仰角を大きく上げて放つ。対するに野砲は筒口を低くして放つ。そいじゃち、野砲の発射音は建物の間からくぐもって聞こえるもんじゃ」
だから敵は未だ後退していない、と勇右衛門は断定した。
「それにしても、腹が減り申した」
兵士は苦笑いした。
「森どんの持ち帰る屯食が待ち遠しか」
「左様なあ（そうだなあ）」

勇右衛門は少し考え、
「一分隊、前方へ出よ」
と命じた。
「あそこに倒れちょる敵の所持品を探れ。銃器弾薬とともに、腰兵糧を取れ。ただし、金品は奪うな。戦場での分捕りにも礼儀があると知って行動せよ」
哨戒線を越えて兵たちは走り出た。前夜倒した夜討ち勢の死骸から、干飯の袋や握り飯の包みを引き剝がし、持ち帰った。
「兵、士官の区別無く、平等に分けよ。干飯は充分にふやかせ。梅干は空腹の胃に毒じゃ。手に取ってグッと眺めての。口の中に唾を溜めるのみにせい。わかったかの」
兵たちは、遮蔽物の陰でむさぼるように捕獲品を口にした。
しばらくすると、北のあたりから夜明けを告げる鐘の音が聞こえて来た。
「冷えるのう」
「霧が出て来申した」
藍を流したような路上が、少しずつ乳白色に変っていく。
突然、一町程先で銃声が一発聞こえた。勇右衛門らはあわてて遮蔽物に取りつく。
「敵か」
続いて発射音が連続して轟いた。銃声は三方で聞こえ、流れ弾が頭上高く飛びすさっ

ていく。
「敵は探り射ちをしておっど。放ち返すな」
濃霧の中で、勇右衛門らの位置を確かめているらしい。
「四町も離れておろう。これは強敵じゃ」
皆が緊張するところへ、森剛兵衛が戻って来た。
「飯じゃ、温い茶じゃ。みんな、早よ食うてくいやい」
京で徴発して来た軍夫だろうか。尻っ端折りした町人たちが、木箱に入った薦包みを運び込んで来る。包みを開けば、湯気とともに炊きたての白飯が現われた。兵士たちは我れ勝ちに、藁だらけのそれを手に取った。
「菜は塩とすぐきの漬物しか無か。じゃどん、皆我慢してくいやい」
と笑う森剛兵衛の姿は、先程と異なり古風な甲冑姿であった。
「わざわざ都まで伝家の南蛮胴具足を持ち運んでおきながら、一度も身に着けんでは関ヶ原で戦こうた御先祖さぁに申し訳も無か」
黒い洋式銃隊の制服に甲冑をまとった森の姿は、異様というより滑稽であった。
「村田どん、おいは昨日、不幸にして充分の働きをせんじゃった。そいじゃて、今朝は薩摩隼人の名に恥じんよう陣頭に立つ覚悟ごわす」
「そいは、勇ましか」

と勇右衛門は答えたが、内心、

（大丈夫か？）

と不安を覚えた。幕軍から捕獲した小銃には自分たちと同じミニエー弾を用いるオランダのインハンテリ・ゲベール（制式歩兵銃）が多く含まれていた。

（剛兵衛どんが自慢の甲冑とて、椎実弾の前では紙のごとし。重うて下手に動けんでは、逆に鎧姿は不利じゃなかかい）

しかし、勇右衛門には、戦国時代の一枚打ち出し鎧が近代兵器の前でどれほど有効か、目の前で見てみたいという素朴な興味もあった。

「剛兵衛どん、おはんは軍監じゃで、できるだけ銃隊の後方に居てくいやい、なあ」

とは言ったが、鼻息の荒い彼をあえて止めることもなかった。

兵たちの朝食が済んだ頃、

「山じゃ、山じゃ」

と合い言葉を叫んで、味方の伝令が走って来た。

「東軍は、二手に分かれて進みしもののごとく見え申す。主力は中書島に有り。前衛は洋式兵ごわす」

と報告した。

「ちっ、まずか」

勇右衛門は舌打ちした。幕軍の洋式兵というからには、最新鋭のフランス式伝習兵だろう。火力の点からも兵力から見ても、まともにぶつかればひとたまりもない。
「本営は、我らに何の増援も無かか？」
「そのような伝えは有り申はん」
勇右衛門は絶望的な気分になった。伝令は、くるりと背を向け二、三歩行きかけたが、
「ああ、ひとつお伝えせねばならんこつ、ごわした」
「何な？」
「お耳を」
勇右衛門の硝煙で汚れた耳たぶを引っぱるようにして、何かささやく。
「左様か」
勇右衛門は、肩をすくめた。
「そがいなもンで切所（せっしょ）が変るとも思われぬが、無いよりは、ましじゃの」
伝令も苦笑いし、後方に走って行った。

霧は少しずつ晴れ始めたが、味方の最前線城南宮のあたりは真っ白である。
「起きよ、起きンか」

温い食事を急に腹へ入れ、睡魔に襲われた兵士たちは、銃を構えたまま朦朧(もうろう)とし始めた。勇右衛門は少しでも横になる者があると、立って行ってその頬(ほお)を張った。

そのうち、

「あいは、何でごわすか？」

一人の兵士が霧の中で小手をかざした。

「聞き慣れん音曲(おんきょく)でごあんそな」

勇右衛門も、積み重ねられた畳の間から耳を傾ける。

「軍楽じゃな」

行進曲らしい。薩摩軍のそれは喇叭(ラッパ)と太鼓が多いが、この時聞こえてきたのは主に洋式の横笛であった。

「フレンチーの曲じゃ。東軍が寄せてくるど」

イギリス式で訓練を受けた彼らにとって、フランス式の行進曲は幾分軽々しく、そして薄気味悪く思えた。

「遮蔽物を捨てよ。我らも前進し迎え討つ」

勇右衛門は、立ち上がった。

「鼓吹手(こすいしゅ)、合図をなせい。速足進め、じゃ」

「心得て候」

タラタラと小太鼓が油小路に轟いた。喇叭手が高らかにイギリス式の進軍歌を奏で始める。

小銃に着剣し二列縦隊となった一同は、歩幅を揃えて進み出した。

城南宮の手前まで来ると、韮山笠に筒袖姿の長州兵が手を振って彼らを出迎えた。が、その数は百に満たない。

「陣代りで、長州勢の主力は伏見方面へ向うたち申す。その代り、諸藩の勤皇隊が増援に参ると聞いちょる」

薩摩軍の指揮官市来勘十郎が説明した。増援などと言っても数百程度だろう。焼け石に水、である。

敵の行進曲は、さらに近付いて来た。そこに旧式な法螺貝の音が重なり、前面の騒音は地をうねるように響き始めた。

「霧が晴れんのう」

市来は眉をひそめたが、勇右衛門はその方が良いと思った。

敵も愚かではない。前日のように一本道を一列の縦隊で攻め寄せては来ないだろう。涸れ田の中を幾つかの梯形に分かれて、数を頼み押して来るに違いない。

（味方は少数。視界が悪いに越したことはなか）

田の中央に立てておいた哨戒の兵が、次々に土手の中へ駆け戻って来る。

「来おった。恐ろしか人数じゃ」
突然、行進曲が止んだ。戦場に不気味な静けさが戻って来る。
勇右衛門は天に顔を上げ、それから手を左右に振った。
「伏しぇい」
薩摩弁は「せ」を「しぇ」と発音する。兵たちが土手に腹這うと、最初の一弾が頭上を通過し、後方の小川に落ちた。
泥と炎が噴き上がった。
「試射じゃ。次は身近に来るど」
敵の四斤炸裂弾である。これを皮切りに砲弾は次々に土手の側面へ落下し始めた。
「大事なか。前面に有るのは、三門ばかりと見た。すぐに止む」
砲腔にライフリングを刻んだフランス式の近代砲ではない。和式砲を洋式の架台に載せた旧式改造砲らしい。もちろん球弾で信管も幼稚なものだ。泥の中にめり込んで不発となる弾もあった。
「霧が晴れて来た！」
砲火が止み、またしてもあの横笛が鳴り始めた。
「わっ」
と鯨波の声があがる。

「敵ン吶喊じゃど。皆、弾込めは良う候か」
「皆々、狙うて候」
小頭たちが答える。
「撃鉄上げい。初弾揃え放ちの後は、各々、前面の敵を狙うて各個に放て」
「心得て候」
霧が吹き払われ、下鳥羽方面には色とりどりの旗の列が見えた。その最先頭は幕軍を表わす巨大な日章旗である。

5

フランス式の喇叭と鯨波の声、そして法螺貝の音が交差する中、幕府の兵はジグザグに走り寄って来た。一列に並んで被害を受けぬように企んでいる。
勇右衛門が一斉射せず、各個に放てと命じたのは、こうした動きを読んでいたからだろう。
中には弾雨をかい潜り、巧妙に走り寄って、土手の内側まで飛び込む者もいる。
そのたびに小頭が拳銃を放ち、予備の兵が銃剣で対抗した。
第一波が後退すると、時を移さず第二波の抜刀隊が突入して来る。

「鼓吹手、指揮官のもとへ集え、と合図せい」
勇右衛門は火力を集中させるため、密集銃陣に組み替えようとした。
「どうした、早よう喇叭を吹け」
振り返ると、傍らの喇叭手が倒れている。そればかりか、彼と並んで軍監役の森剛兵衛も、朱に染まって転がっていた。
「剛兵衛どん」
勇右衛門は、あわてて抱き起した。剛兵衛自慢の具足には、胴脇の二ヶ所にすっぽりと射ち抜かれた穴が開いている。
「御先祖様の鎧に申し訳無かぁ」
剛兵衛は痛みを堪えながら、泣き笑いの表情となる。
(一枚鍛えの南蛮胴も、洋銃は易々と射ち通すのじゃなあ)
勇右衛門は腰の薬袋から晒しを取って、それぞれの傷口に当てた。
「金瘡役(衛生兵)、来やい。二人を後方に運べ」
と命じた。金瘡役の軍夫は駆け寄って来たが、
「隊長どんも肩に」
と言った。見ると、勇右衛門の肩先にも血が滲んでいる。
「こいは、かすり傷じゃ。かまうな」

勇右衛門は自伝の中でこの時の事を、

「その日は非常の激戦にて（中略）、肩を撃たれしが、衣服をかすりしのみにて、その弾丸は後に立ちたる喇叭手に当った。それより味方は喇叭手なきため戦争中は大いに不便を感じた」

と書いている。この喇叭手は幸い命を保ったが、森剛兵衛はついに帰らぬ人となった。

勇右衛門の守る陣は、敵の攻撃を何度も撃退した。

手強いと見た幕軍は、彼の守る土手を避けて、右の側面にまわり込もうとする。させじと勇右衛門は別隊を率いてやはり右翼にまわり射撃を続けた。

「押され気味じゃな」

流石の勇右衛門も疲労と空腹で、昼頃には立つこともやっとという有様である。そこへ、

「勇君、勇君」

と声をかける者があった。

「休息も無うて、寝ずの腹ぺこりでは、まっこてだれ申すのう」

これは軍監の山口忠吾である。

「勇君は、敵に嫌われちょるの。最前から見ておれば、貴殿の隊が進めば敵は必ず横に逃げる」
「腹ン立つことでごわす」
「何か欲しいものは無かか？」
「弾薬、握り飯、新しか下帯に刃こぼれのない刀。なによりも増援の兵が欲しか」
「良い事を教え申そう」
山口は煤だらけの顔をほころばせた。
「今朝、仁和寺宮嘉彰親王、征討大将軍に任ぜられ、ただ今、御所を進発なされた」
「左様ごわすか」
勇右衛門は興味無さそうに返事をする。それはそうだろう。今さら宮様が何の役に補任されようとも、この難局を打開する手だてになろうとは思えない。
「勇君、おはん、喜ばんとか」
「兵はすでに半数が戦死し、傷を負わぬ者は数える程でごわす。そのようなところに恐れながら幾人の宮様が参られようとも、何の有難味も有り申はん」
山口は露骨に舌打ちした。
「勇右衛門どん、おはん存外頭の悪か」
「何ンごて、そげえな事を言い申すか」

疲れているから、勇右衛門も気が立っている。
「軍監じゃとて、許し申はんど」
「もそっと頭を働かさんか」
山口はささやいた。
「征討大将軍が、帝から何を賜わるか考えて見ィ」
勇右衛門は首をひねる。山口は、これ以上何を言っても無駄と悟り、薄笑いを浮べて後方に去った。
（前に伝令も同じ事を申しておったが、何程の事かい）
勇右衛門は、むかっ腹を立てたが、これこそが後に来る衝撃的な勝利の予言であった。

嘉彰親王は、記録によるとこの四日午後、東寺の陣に入っている。
同じ頃、薩摩、長州、そして新たに加わった勤皇諸隊と土佐の兵は、圧倒的な兵力で迫る幕軍と死闘を繰り広げていたが、戦局は双方互角。ところによっては、幕軍優勢のうちに推移していた。
勇右衛門の隊も連射に次ぐ連射で銃器の故障が続発し、一部は前夜の敵から捕獲した小銃を持ち出して放った。

兵の中には銃身の過熱を、自分の小便で冷しながら射撃する者もいる。
「殺しても殺しても、（敵は）地から湧き出すようじゃ」
薩摩隼人も、ついに泣き出し、
「いっそ刀を抜き放って敵中に押し入り、斬り死にしてくっ」
と叫ぶ。
「和郎が。どゝ口を開けて左様なせからしか事を言うか」
勇右衛門も、心中では絶望している。
（まずか戦さじゃ。敵の単純な消耗戦に釣り込まれた）
実際、幕府大目付滝川具挙は早くも、
「我れ勝てり」
と後方の陣へ使番を送っていた。前日、勇右衛門らの砲撃で落馬した恥を雪ぐため、滝川は自ら槍を取って最先頭を進む。
「大目付殿に遅れるな。薩摩芋を串刺しにせよ」
銃隊に槍を混ぜた旗本の混成部隊は、密集陣形のまま押してくる。彼らの旗持ちや弾運びの軍夫は江戸の育ちらしく、木遣りを唄いながらそれに従う。
「隊長どん、煙硝が残り僅かでごわす」
弾薬方が悲痛な声をあげた。

「必中を期すため敵二十間に入るまで放つな。弾薬が無うなれば銃剣を使え。銃剣折れたれば、刀を用いよ。刀折れたならば拳を使え。たとえ身は砕くとも、魂魄をこの地に止めて敵を討滅せよ！」

勇右衛門は、凄まじい命令を発した。

へめでた、めでたーのう、若松さまよー……

木遣り唄が田の畔に轟く。

と、その長々とした唄が、勇右衛門らの陣から半町のところで、ぴたりと止まった。

6

「ど、どげんしたと？」

兵の一人が立ち上がった。

「こいは、どがいな事じゃ。敵が退いて行き申す」

皆は信じられぬものを目にした。滝川勢の前衛と左翼にあった佐久間近江守の槍隊が突然、足並を乱し退いて行く。

「わ、わけがわかり申はん」

幕軍の後衛は、前衛がなぜ後退し始めたのかわからず、それを止めようとする。各所

で揉み合いが始まり、敵の混乱はさらに広がっていった。
「好機じゃっど。放ち殺せ」
小頭たちが命令を発する。
「待てィ」
勇右衛門が両手を上げて制した。
「あれじゃ」
硝煙の間から、軽やかな曲が聞こえてくる。洋風でも和風でもない、しごく優雅な音である。
「敵が怯んだは、あれが原因よ」
鳥羽街道を新手の味方が進んで来る。その先頭には、きらきらと午後の日差しに輝く二流の旗があった。
「『錦旗』じゃな」
征討大将軍仁和寺宮に渡された、錦の御旗が出現したのは、まさにこの時であった。古来、この旗のもとに従う者は「官軍」、刃向かう者は「賊徒」であるとされている。
「皆々、錦旗に従って敵を追う。腰を上げい」
勇右衛門は命じた。
「手負いの者はその場に置き捨てにせよ。銃器破損したる者は、敵の遺棄した銃を拾

え。弾薬も右に同じ。それ前進じゃ」

喇叭手も鼓手も無い進軍であったが、全員憑かれたように歩み出した。

錦旗の出現は、下鳥羽一帯の幕軍にパニックを引き起こした。勇右衛門は初めその効果を疑問視していたが、これこそ知人の大久保一蔵と長州の品川弥二郎、そして鬼謀の公家岩倉具視と側近玉松操らが企画した「奥の手」であった。

四人の企みは図に当った。

錦旗を遠望した幕軍の指揮官たちは浮き足立ち、勇右衛門の前面にあった軍は下鳥羽から富ノ森に、伏見の会津勢を主力とする別隊も横大路を越えて淀まで後退したのである。

淀川に面し、巨大な水車を持つことで知られた淀城は、幕府老中職稲葉正邦の居城であった。幕軍の多くは、ここを拠点として再度の出撃を図った。ところが、淀城兵の言葉は意外なものである。

「藩主不在にて、留守居役の一存では城門を開くことは叶い申さず。城下より急ぎ退去されたい」

城方の態度に、幕府方の指揮官は青ざめた。たしかに藩主は老中として江戸城内に詰めている。が、稲葉家は、三代将軍家光の乳母春日局にも縁ある徳川恩顧の家として知

られていた。

「なんと冷たい事を申されるか」

多くの負傷兵を抱えた幕兵たちは、うらめし気に城を見上げた。

そこへ、新たな報告があった。

「淀城内に、薩長兵の一部が入った様子でござる」

「攻め込まれたか？」

「いえ、城方は御所からの先兵と聞いて、唯々諾々と城門を開いたげにござる」

この情報を持ち込んだのは、淀城兵の内で幕府方に同情的な一派であるという。

「き奴らは、そこまで……」

幕兵たちは気落ちして、一斉に河原へ座り込んだ。淀藩は賊軍になることを恐れ、幕府方を裏切ったのだ。恐るべき錦旗の威力であった。

この逸話は、四日の夜とも翌五日の事であるとも書かれ、古記録によってばらばらだが、その時点では幕軍の大部分も、未だ戦意を保っていた。

勇右衛門の隊は夜間の前進を中止し、半数ずつ仮眠をとった。

「敵は、ついに賊軍となったのじゃ」

「我らは錦旗のもと、天朝の軍となって進む。明朝は淀を抜き、木津川さえも取れよう」

「めでたかのう」

どこからか寒さ避けの酒も出て、野営の兵たちは早くも浮かれた。

勇右衛門は前夜、夜襲を受けたことを忘れていない。哨戒の兵を多く立て、自分は提灯の火を頼りに戦時日記をつけた。

（錦旗の御力もさることながら）

今日の勝利は、味方の用兵の巧みさにも見るものがあった、と彼は思っている。

（我らや長州勢の中には、所持した洋式の兵器火力の優秀さを吹聴する者もおる。じゃが、そいは違うとる）

幕軍は夜明けと同時に、密集隊形で押し出して来た。効果的な支援砲撃や組織的な制圧射撃もせず、白刃を振るっての接近戦を企み、次々に倒れていった。

（我らを側面攻撃もせん）

淀から鳥羽街道沿いに兵力を膨らませ、脇の奈良街道や西国街道から別働隊を進軍させるという考えすら無い。

（兵力は余る程あるというのに）

しかもその兵たちと言ったら、フランス式の行進兵あり、法螺貝で進退する古式の鎧武者あり。果ては、木遣りを唄う江戸の雇い町人まで混っていた。

（旗本勢はさて置き、雇いの軍夫などが将軍家のため必死に戦うじゃろうか？）

部隊編成の多様さは、相互の連絡の不完全さを生じ、協同作戦を不可能にする。

（錦旗が現われた時の様を見よ）

前衛の指揮官は恐れて逃げたが、後衛の部隊は何が起こったかわからず、味方同士衝突して混乱に拍車をかけたではないか。

（要は、徳川の軍に強力な指導者が居らなんだということじゃな）

たとえ雑多な軍隊でも、戦局を正確に把握し多方面の戦線を同時に指揮する有能な現場指導者が存在すれば……、

「幕軍は勝つことができたのだ」

と勇右衛門は日記の中で断定している。

慶応四年一月五日。錦旗のもとに再び結集した薩摩軍は、鳥羽街道をゆっくり南下し始めた。

一方、長州軍主力は伏見の高瀬川西岸を完全制圧し、淀に向った。

錦旗が富ノ森に近付くと、付近に陣を構えた幕府方は動揺した。

前日の「錦旗出現」をただの噂と笑い飛ばしていた後方の兵たちも、今やこの最終兵器を目の当りにして、自分たちが「賊軍」と化したことをはっきりと思い知らされたのである。

日月二流の流れ旗が進むところ、銃声は次第に静まり、幕府の兵は再び淀を指して退却し始めた。

「潮の引くごたる」

追撃戦に移った勇右衛門らも、敵方の遺棄した槍や小旗の散乱する街道を南に進む。

そこへ伝令が来た。

「市来どんが……」

「おう、聞いておっ」

勇右衛門は顔をしかめる。指揮官の一人、市来勘十郎が狙撃によって討死したことは、別の伝令によってすでに知らされていた。

「その事ではごあはん。この先に桑名藩の手固い台場がごわす。そン台場こそ、市来どんな敵の陣所ごわんど」

「何な？」

勇右衛門は額に筋を立てた。

「伝令どん、よう教えてくいやった。ここは市来どんの仇を討たねばならんの。ようし、小隊我に続け」

勇右衛門の命令で、兵たちは街道の脇道に入った。

自ら斥候に立って台場に近付くと、なるほど堅固な造りになっている。

「俵台場じゃな」

道の中央に大杭を隙間無く打ち、米俵に土を詰めて身の丈ほども積み上げた、手固い陣地である。

「焼き蛤（桑名兵）は、錦旗を見ても動じる者の少ない、心丈夫が多か藩じゃ。これは用心してかかる必要があっど」

さらにあたりを探ると、台場の側面は深い竹藪になっているのが見てとれた。

「虚兵（囮の兵）を藪の中に置いて射撃させよう。その間に、主力は正面より極力突進する」

台場の築かれた位置が絶妙な場所にあり、下手な小細工は通じそうもない。

「火力を集中させて、力押しに攻めかけるより方法は無か」

射撃のきっかけを作るために、勇右衛門自らが虚兵を率いて竹藪に忍び寄った。

竹の葉を透かして、敵兵の姿がはっきり確認できるところまで近付く。

（見事な武者振りじゃ）

元京都所司代の桑名松平家には洋式兵と和装兵の二種がある。今、勇右衛門の前面に屯する兵士は後者だ。全員が双籠手に撃剣の革胴をつけ、義経袴を着用している。

「銃器は、こちらと同じインハンテリ・ゲベールか」

勇右衛門は腰の大刀を抜いて指揮しようとした。ところが、狭い藪の中ではうまく抜

刀することができない。もがくうちに、
「そこに敵がおるぞ」
桑名兵の一人が物音に気付いた。
「ちっ、小隊、放て」
得たり、と味方は発砲する。敵方もこれに応じて射ち返して来たから、大変な事になった。
竹に当った弾丸は左右に跳ねまわり、銃声は耳を圧するばかりである。
「跳ね弾に用心せよ。同じ位置に止まって放てば狙われるど。まわり込め」
勇右衛門は怒鳴るが、騒音のために命令がまるで伝わらない。
そのうち、台場の正面でも射撃合戦が開始された。
「押せ、押せ」
「頭を低うせよ」
「筒口は下げて放てィ」
銃声とともに、敵味方の声が交差する。手が届くほどの近距離で行なわれる射撃戦は、次第に乱戦の様相を見せ始め、彼我の被弾者が続出した。
小半刻の間、切れ目の無い銃撃が続いたが、状況は一向に変化しない。
小康状態に入った頃、

「伝令！」
勇右衛門のもとへ、例の伝令兵が走って来た。
「おいの居る位置がようわかったの」
「そいが、それがしの役割ごわす」
伝令は背後に顎をしゃくった。
「お客どんな、お連れし申した」
二人の男が背をかがめてやってくる。一人は戎服の上に黒い羽織を着けている。勇右衛門と同じ薩摩軍の高級将校だろう。もう一人は彼の従卒らしいが、やけに銃床のきれいな小銃を抱えている。
「村田！　こん和郎がァ」
羽織の士官は、勇右衛門の顔を見るなり、罵声を浴びせた。

7

「あっ、中村どんな」
勇右衛門は、その馬面と頑丈そうな顎に見覚えがあった。京の薩摩屋敷では「人斬り半次郎」の異名で知られた中村半次郎、後の桐野利秋である。

「貴さん、こげな細ンまか台場ひとつ、なぜに手間取るかァ」
出合いがしら、頭ごなしに怒鳴られて、勇右衛門も憮然として答えた。
「中村どん、物には言い様がある」
勇右衛門は、身を伏せるよう、まず命じた。
「ここは我ら到着以前より激戦の場所でごわす。すでに市来どんも討死にを遂げしところにて、街道上では一番の難所じゃが、我らも外城一番隊の意地がごわす。ただ今、抜いて御覧に入れ申すで、しばし見物してたもっせ」
「何とな、市来勘十郎どんな弾に当ったは、この台場かい」
中村半次郎は聞いて驚き、
「そいは雑言を申した。悪かこつ」
素直に詫びた。その時、小具足姿に義経袴姿の敵が台場の上に、ゆるりと現われた。
「おっ、あ奴」
敵兵は実に大胆な行動を取った。弾丸の飛び交う中、俵の上に膝をつき、ゲベール銃を構えると静かに発砲したのである。
弾は中村の頭上をかすり、竹に当って大きな音を立てた。洛中で人斬りと恐れられたこの男も、思わず地に手をつき、
「いや、何という豪胆な奴じゃ。おいを狙いおったど」

「あ奴が、この台場一番の手練れごわす」

勇右衛門は、ささやいた。

「彼の狙撃者には、我らも手を焼いてごわす。兵どもも、あいが市来どんを狙うた敵に違いなかち申しとりもす」

傍らの兵を手招きした勇右衛門は、所持した銃の照準器を確かめ、腹這いになったまま弾込めした。

「まあ見ていてくいやい。彼の桑名兵は、台場の陰に入ってごわすが、すぐに弾込めを終えて出て来申す。ただいま、き奴めを討ち果し、市来どんの仇を報じて御覧に入れ申すで」

「おう、頼む。おいどんをおどかすなンど、あ奴め、許せるものでなか」

中村も答えた。

借り物の小銃を構えた勇右衛門は、息を殺して台場に照準を合わせた。すると、彼の読み通り、敵を嘗めきっている桑名兵は、最前とまったく同じ場所に現われた。

そこを薩摩一の鉄砲名人に狙われたからたまらない。

どん、と放てば即座に当って、敵は俵台場の向うに崩れ落ちた。

「見たか、焼き蛤め」

中村は子供のように、はしゃいで手足を振った。

「危ない」
この姿が目立ったと見えて、敵の弾丸が彼の頭上に集中する。
「中村どん。おいは敵弾より、貴公のはしゃぎ振りン方が胆の冷えるごつ」
勇右衛門は苦笑いした。
「これ程とは知らんかったど」
中村も苦笑して、腹這いのまま寄って来た。
「おいは、ウドさぁ（西郷）に命じられて、錦旗の周囲を偵察し、併せて督戦すべくここに至ったがの。銃撃戦と、おいが都で経験した斬り合いとは、同じ命のやり取りでもこうも違うものかい。目ン醒めるこつなあ」
さらに、
「ここに、貴公にひとつ相談がごわす」
中村は従卒を手招きした。
「大久保どんがの」
なぜか大久保一蔵の名が出た。
「おいが京の本営を出る時、『おはんは刀を恃む心が大きく、戦場では心配極まりない。これを先棒代りに持って行きやい』と言うて、貰い受けし銃なれど、何よのう。いくら弾を込めようとしても、いっちょん込められ申はん。教えてくんなはい」

「はあ？」
中村は従卒が背負っていた銃を勇右衛門に押しつけてくる。
「こいは、後装銃じゃな。良かもンを貰いンなさったの」
イギリスのウェストリー・リチャーズという、勇右衛門憬（あこが）れのひとつであった。
「異人は、リシャール、レカルツなどと申す。この指掛けを引き上げると、薬室が開放され申す」
「そこまでは、洟（はな）たれ小僧でンわかる」
問題はその後だと言う。
「弾も一緒に渡されたとじゃが、これが込めることもでき申はん。力一杯詰めると、薬室を閉じることもできン。なんちゅうクソ洋銃じゃち、むかっ腹を立ててごわす」
「されば、中村どん。詰めて下され」
「うむ、こうして、な」
中村は胴乱（どうらん）から厚紙の薬包を取り出し、包み紙も外さず、一気に押し込めようとした。
「あ、そいは初めから間違うとる」
「どこが違うとるとか」
「このウェストリー・リチャーズは、刀剣で申さば正宗、貞宗のごとき大名持ちの小銃

ごわす。弾薬も上等ゆえ、一発ずつ奉書包みにしてごわす。これを外さんで込めても込められるもんではなか」

「ははあ」

中村は感心し、勇右衛門は呆れた。

（こんな人物に、かような高級銃を与えるとは、大久保どんもようわからんことをする）

猫に小判であろうか、と思ったがとりあえず正しい手順を丁寧に教えると、中村はさらに問うてきた。

「おいもこの銃で敵陣を射ち払うてみたか。そいは如何にせば良かろうかい」

「教え申そう。ここに狙いのツボがごわす」

銃身上にある照尺と照星の間に、敵影の現われた時、引金を引けと教えるや、中村は教えられた通りに弾を込め、勇右衛門が言うように銃を構えた。

「俵台場の端に頭が覗いちょる。あいを放ち殺してくれよう」

中腰になって発砲したが、初めは当るものではない。

「ええい、クソが。いっちょん当り申はんど」

「引金の引きにもツボがごわす」

勇右衛門は静かに説明した。

「古来、筒の引金は物静かに落とすと決まっており申す。古人曰く『月夜に霜の降るごとく』と」

「『月夜に霜』とな？」

「狙いが定まれば、そろりそろりと引かねばなり申はん。中村どんの引き方はガク引きと言うて、いっちょんまずかこつ」

「ふうむ、難しか、な」

二人がのんびり語り合っている間も、敵弾は激しく頭上を飛び去っていく。

「敵前で鉄砲の稽古とは、泥棒捕えて縄を綯うに似たり、でごわすの」

「ほんに、なあ」

わははと笑い合い、中村は銃を構えた。

「霜の降るごとく、そろりそろりと……」

この時、台場に、すっと人影が立った。黒塗りの陣笠に陣羽織の男。左の袖口には九曜紋の袖印がひらめいている。

中村は引金を引いた。轟音一発、陣羽織の男は台場からずるりと滑り落ちて、そのまま動かなくなる。

「や、やったどう」

中村も剣豪だけあって、運動神経は悪くない。

「どうじゃな、村田どん」
「申す事は、ござい申はん」
中村はまたしても小躍りして手足を振り、そして叫んだ。この時の彼の言葉も村田勇右衛門の伝記には残っている。
「自分は今日まで常に長剣を帯せしが、このウェストリー・リチャーズある以上は長剣を要せぬ。もはやこの場所は君がおれば安心なり」
戦い半ばにして人斬り半次郎は、喜び勇んで去って行った。以後、彼は各地の戦線で自慢の人斬り刀を従卒に持たせ、自身は元込め小銃を用いて敵を狙撃したという。
「やれやれ、剣豪の稚気愛すべし、じゃの」
勇右衛門は、その後も台場の占領に苦労し、最後は銃剣の切っ先を揃えた突撃により当初の目的を達した。

次の日、一月六日。幕兵は淀の町と淀小橋・大橋を焼き、木津川を渡った。八幡と橋本の戦線に退いて態勢を立て直そうとする。
彼らが結集した場所は、淀川を挟み対岸に山崎の関がある。山崎は大坂と京を結ぶ古来よりの要衝であり、幕府はそこが重要と見て準譜代の津藤堂藩三十三万石の精兵を置いていた。

ここまで退いたからには、幕府側も、もう後には退けない。

「最後の決戦は、この地で行なう。我らは未だに敵を撃破する戦力を保ち、大坂よりの増援さえも期待できる。錦旗が何ぞ」

錦の布きれが恐くて芸妓が抱けるか、とわめく旗本もいた。

しかし、朝廷も錦旗ばかりに戦さをさせていたわけではない。

五日、密かに山崎の津藩本営へ派遣された勅使によって、藤堂家は寝返りを誓っていた。

幕軍はこれを知らない。

再び始まった合戦では、千余の藤堂兵は沈黙し続けた。幕府方は何度も支援砲撃を彼らに依頼したが、藤堂家の指揮官は、

「心得た」

と答えるばかりである。そして昼近く、津藩の砲兵は動いた。味方であるはずの幕兵に側面から砲撃を浴びせ始めたのだ。

「裏切り者」

「恥を知れ」

宙に拳を突き上げても間に合わない。淀藩に続く津藩の背信行為は、幕兵たちに最後の一撃を与えた。

戦闘正面だけで数千余の威容を誇った幕府側は、ついに潰走を開始する。

「勝ったな」

勇右衛門の隊も、追撃はここまでであった。新手の投入も無く、さして休息もとらずに戦い続けたために、鳥羽街道の真ん中で全員が過労と空腹で倒れたのである。

「橋本の宿まで退陣し、休息を許す」

と伝令が来て、一同は負傷者を荷車に載せ、静々と撤退した。まるで、敗兵の群れであった。

「祝い酒も、肴もいり申はん。どこか廃屋の片隅で、ゆっくりと寝かせて欲しか」

外城一番隊の兵士らは、橋本の農家を見つけるや、寝藁を土間に積んでその中に潜り込んだ。彼らは翌日になっても目覚めず、正月八日に至ってやっと起き上がり、伏見に帰陣した。

「いやあ、御苦労じゃったのう」

西郷隆盛が、一同を労うために現われたのは、直後のことであった。

「村田どんの活躍は、半次郎どんより聞いており申すぞ」

「恥かしか」

「村田どんな、こたびの一戦では、大いに得ることがお有りと思い申すが」

並の士官と同じ黒羽織姿の西郷は、やさしく尋ねた。

勇右衛門はしばし考え、そして答えた。

「銃器大砲の扱いは、普段の訓練と何ら変りは有り申はん。ただし」

傍らの佩刀を取り上げた。

「おいの太刀は、ウドさぁも知っての通り、武蔵国住人吉武。長さ二尺五寸強、重さは三百五十匁もござい申す。重さを云々いたすは薩摩ン男に似合わぬものなれば申しませぬが、この長さ、桑名藩兵の台場を攻めし時、竹藪ン中でかなたこなたに引っかかって、大いに不便を感じてござわす。これより戦場に持ち出す刀は腰間二尺三寸を超えぬにかぎると、思い申した」

とほがらかに答えたものである。

戊辰戦争

1

西郷が軍事責任者として初めて戦場に立ったのは、慶応四年（一八六八）一月三日と同五日、六日であった。

津藩藤堂家の裏切りで、潰走を開始した幕兵の様子を遠望した六日夜。帰京した彼は、藩主島津忠義に叱責された。

「大将たる者が勝手に陣を離れ、前衛（前線）に参るとは何事であるか。もし流れ弾にでも当れば、我が官軍は逆に総崩れとなるぞ」

と言われて、西郷は恥かしそうに下を向いたという。

この男としては、四千弱の味方が一万五千以上の大軍を打ち破る己れの作戦の、その成果を直に見てみたいという気持ちが抑えきれなかったのだろう。

鳥羽伏見の戦いは、後世の史書が語るように官軍の圧勝ではなく、奇略を縦横に駆使

し、肉を切らせて骨を断つ、相討ちぎりぎりのところでの勝利だった。

だから西郷は、この段階では依然として味方の「勝ち」を確信していない。

「大坂城には、徳川慶喜が居っ。金扇の馬標は無傷じゃっど。仏式歩兵と砲、騎兵も多くが健在じゃ」

西郷は東寺の本営で語った。

「さらに恐るべきは、兵庫の津に停泊中の徳川海軍の軍艦六隻じゃ。これが海上に出て、我ら本国からの荷駄、兵員の増援を脅かせば、京の官軍はたちまち疲弊する」

しかし、この点は西郷も前々から僅かながら手を打っていた。

松木弘庵（後の寺島宗則）をして、兵庫にいた英国公使パークスに面談させ、幕府の軍艦がもし活動を開始すれば、イギリスも黙ってはいない、と圧力をかけさせている。

それでも西郷は安心できなかった。

万が一、京が幕軍の逆襲によって包囲された時に備え、公卿西園寺公望に山陰地方の鎮撫を行なわせていた。いざとなれば、帝を奉じて丹波、丹後、但馬地方から日本海側に逃げる作戦である。

幸い、山陰の諸藩は素直に帰順しつつあり、鳥羽伏見の戦い以後、佐幕と見られていた藩までが次々に城を開き始めた。

さて、その心配性の西郷が、藩主に叱責されている六日の夜。

大坂城中では、敗兵をまとめて再挙せよ、という意言が喧しかった。彼ら強硬派は、将軍慶喜に迫って、

「東照大権現以来の金扇馬標を、ぜひとも陣頭にお立て下さいますよう」

と、出馬を強く願った。

慶喜は城内の大広間で一同を見まわして、

「汝らの心は、余にもようわかった」

力強く答えた。

「なれば良し、これよりただちに出馬せん。早朝の出陣に備え、皆々用意をいたせ」

この「御言葉」に、強硬派は喜び勇んで準備を開始した。

ところが、慶喜自身の行動は奇怪であった。

その夜、西洋時計で十字（十時）頃、彼は突如、自らの小姓に変装して大坂城を抜け出してしまうのである。

従う者は姫路城主で老中の酒井忠惇、備中松山城主板倉勝静、大目付戸川安愛、目付榎本道章、外国総奉行の山口直毅。そして元京都守護職であった松平容保、実弟の元京都所司代松平定敬といった強硬派の筆頭までが含まれていた。

彼らは一度小船で大坂湾に出たが、幕府軍艦を発見することができず、近くに停泊していた米艦イロコイス号に乗り込んだ。

突然、徳川十五代将軍の訪問を受けたアメリカ人水兵たちは、大いに驚いたであろう。慶喜一同は翌日の明け方、やっと幕府艦開陽丸を発見し、そこに移った。

その後、嵐の中を数日かけて東に走り、一月十一日、品川にたどり着いたのである。

「慶喜脱走」

と知って、大坂城中の将士はパニックを起こした。総大将に見捨てられた兵ほど情け無いものは無い。絶望した一万近い兵は、我れ勝ちに逃亡し、大坂城はたちまち無人の城となった。名誉ある金扇の馬標も広間に打ち捨てられ、慶喜の伴をして来た江戸の仕事師新門辰五郎が、

「こいつを置き忘れた、と敵に知られちゃあ徳川様の恥じゃねえか」

とその馬標を担い、東海道を走り下ったという。恐らく彼らはお伊勢参りにでも化けたのだろう。この点、町人傭いである辰五郎らは気楽であった。

一月十日、京では「朝敵処分」が発表された。

敵対した者を罪五等程に分け、その第一等は言うまでもなく徳川慶喜である。次に佐幕派の急先鋒、会津の松平容保と桑名の松平定敬。第三等が姫路の酒井忠惇と備中松山の板倉勝静、そして伊予松山松平定昭。彼らは慶喜の下で官兵に発砲し、将軍逃亡の際はこれに従った罪である。

「罪三等に至る朝敵は、これを速やかに追討し、所領、城ともに没収すべし」と出て、指名された者の官位と在京の藩邸がまず没収された。

この間、勇右衛門率いる薩摩外城一番隊は、伏見に駐まり、淀や山崎辺に連日偵察の兵を派遣していた。

自暴自棄になった幕軍の敗兵が、再び攻撃して来る事を予想しての行動であった。その後二月十五日になって、勇右衛門らは新しい任務を与えられた。

「兵庫警衛を命ず」

というものであった。

江戸では慶喜恭順。自身は江戸城を出て上野寛永寺に謹慎し、御家人らは月代剃を停止して表向きは静まり返っている。

「こげな大事な時に、港町の警備とは情けン無か」

と皆は言ったが、隊が受けた戦いの疵は意外に深く、これは休息と再編成のためでもあった。

伏見を発った一同は、十六日に大坂の讃岐高松藩邸に入る。高松藩主松平頼聰は、第五等の「朝敵」とされていたが一月二十日、家老二名が責任を負って自害し、開城謝罪の処分となっていた。

勇右衛門らは、ここを本陣として兵装を整え神戸に向った。

朝廷は初め攘夷を唱えていたが、いつの間にかその方針を転換し、外国と協調する姿勢を示していた。しかし、諸藩の兵士には往々にしてそれが伝わらず、神戸でも外国人とのトラブルが起きている。

「さらなる異人殺傷があるやもしれぬ。一同気をつけるように」

と勇右衛門が隊士に訓令を与えた頃、大変な事件が伝わってきた。同月十五日、泉州の堺港で土佐藩兵がフランス人に発砲し、十一名も殺害したというのである。

「何でも、フランス水兵の一人が土州人をからかって装備を奪ったそうだ。土州人が追うと、フランス人たちは小船で沖に逃げようとした。その際、一人が陸に拳銃を発砲した。土州の兵は銃陣を作って一斉射し、小船に乗った水兵をことごとく射ち殺したそうだ」

神戸で勇右衛門の同役となった福井藩士が教えてくれた。

しばらくすると、この件の処分が発表された。フランス公使ロッシュの強い抗議により、射撃を行なった土佐藩兵十数名の切腹が決まったのである。

勇右衛門に、その席の立ち会いが命じられた。

「損な役まわりじゃ。悪いのは仏人じゃなかかい」

そのフランスは、鳥羽伏見の戦い以後も幕府の支持を表明していた。

「土佐人も、まっこて間の悪かことをし申すのう」

彼は嫌々ながら堺の処刑場に出張した。
数日後、帰陣した彼を隊士が取り囲んだ。
「処刑の様子はいかがでごわした?」
「うむ、妙な始末じゃった」
勇右衛門の語るところによると、堺の土佐人は切腹の用意を終え、死骸を納める座棺まで並べていた。
日本とフランスの刑死見分役は、陣幕の下に座ってその時を待つ。やがて刻限となり、土佐の堺警備隊員が次々に首の座へ座った。
「見事な切腹じゃ。日本人は、礼儀として身じろぎもせんじゃったが、仏人の見分役は床机を引き倒す騒ぎでの」
土佐人は腹を十文字に切り、内臓を露出させ日本刀で首を断たれた。一度などは刑死者の血潮を浴びたフランス人見分役が、あまりの凄惨さに途中で逃げ出し、嘔吐したという。
「仏人もこれを見るに忍びずとて、刑半ばにして中止よ。残余の者は助命と相い成った」
おかげで用意した座棺は半分程余った。
「泉州というところは利に聡いところでの。余った棺桶を引き取る者がある。何に用い

るのかと見れば、助命された者の棺ゆえ、命が永らえる。縁起ものじゃち申して中に人を入れ、それぞれに銭を取った。我も我もと棺桶の前は長蛇の列であったわい」

と勇右衛門は皆に話した。

この後、神戸の警備は数日で交代となり、大坂の警備、二月二十六日に京の警備、と勇右衛門の隊はたらいまわしにされた。

2

外城一番隊は、六月まで御所の警護役として無為に過ごした。

この間も世間は鳴動し続けている。三月十四日、官軍の江戸城総攻撃中止。閏四月四日、西郷は勅使とともに江戸城へ入った。さらに五月十五日、上野の彰義隊と交戦。前後して東北でも奥羽の同盟諸藩と、官軍の合戦が始まっている。

「おいどんらは、このままで良いものか」

「チェストー！　血が騒ぐのう」

隊士は不平を唱えた。そんな六月の初め、

「村田勇右衛門、越後北陸地方鎮定のため出張を命ず」

と発表された。

「ようやく、仰せ付けられたか」

勇右衛門も、ひと息ついた。これ以上京に足止めされていては、士気の低下が避けられぬところであった。出発は六月五日。同行は新納軍八率いる薩摩十一番隊と定められた。

その日の朝、外城一番隊士は、西郷の視察を受けた。

江戸城受け取りと彰義隊討伐に成功した西郷は、五月二十八日江戸を引き揚げ、この日、京に入っていた。

「おいも、いずれは北陸道へ向うつもりでごわす。村田どん、彼の地で再び会い申そ」

と、勇右衛門に語る西郷の表情はすぐれなかった。

（ウドさぁは、どこか悪いのではなかか？）

まさしく西郷は病んでいた。藩主とともに鹿児島に戻った後は、八月まで温泉治療をするつもりでいたのである。

「そいなら、この勇右衛門が、露払いをして置き申すで、ウドさぁは、やんわりと来てくンなはい」

勇右衛門は新たに制定された士官の被り物「熊毛頭」を気恥かし気に傾けて言った。

それよりただちに隊は北陸道を通り、加賀百万石の城下、金沢に向った。

前田家の十四代当主慶寧は、徳川家と近親の関係にありながら、以前より尊攘の志が

あり、禁門の変に際しても長州に同情して兵を退いた、と噂の大名である。

勇右衛門と新納軍八は、加賀藩の軍事役に面談し、越後方面の状況を問うた。すると、

「敵兵はいずれも要害の地に拠り、南方より北へ攻め上る御味方に砲口を向けて候」

と言う。さらに、

「この要害堅固の地は、常に御味方より高地に候。御味方進軍の道筋低きところに候えば、目の下にて討たるる者はなはだ多し。かかる場合には、必ずモルチールの必要を生ずるならん。御承知でござろうや」

加賀藩の軍事役は、勇右衛門が極東一の砲術家であることを知らない。釈迦に説法のような口をきいた。

「モルチールなれば、当方僅かながら心得もござる」

勇右衛門は苦笑して言った。モルチールとは高角度に砲口を上げて発砲する筒の太短い臼砲のことだ。

僅か、どころの話ではない。鹿児島の集成館で砲術習練を続けていた頃から、イギリス式の臼砲射撃術とその効果も充分に知っている勇右衛門であった。

「されば、モルチールと、その付属具をお借りしたい。幾程の砲がござろうや」

「当藩にては、二十九ドイム砲一門、二十ドイム砲二門、十一半ドイム砲六門の用意が

ござる」

「二十九ドイム⁉」

一ドイムは、ほぼ一センチに当る。これはかなりの巨砲であろう。流石は百万石の家だと勇右衛門は舌を巻いた。が、陸路、山道を進むのにそれほどの砲は持ち運びに苦労する。

「まず、十一半ドイムを四門も御貸し下されよ」

比較的小型のものを、勇右衛門は指定した。この選別が、後に彼を悔ませるのである。

加賀から長岡へ向っての行軍は、悪路に次ぐ悪路の連続だったが、軍夫の手配が良かったことと、先陣の残敵掃討が徹底していたために、兵を損することなく済んだ。激戦地長岡からあと数里というあたりまで進むと、近辺の農家から盛んに炊煙が昇っている。白と赤の官軍旗も見え隠れしているところは、味方と見えたが油断はできない。

「斥候を出せ」

心得たりと数人の兵が走り出て、常のごとくすぐに戻って来た。

「あれらは皆、味方の刀瘡治療所（野戦病院）ごわす。負傷者は許多にして見るに耐え

ん光景じゃ」

と報告する。勇右衛門は兵一人を連れて、一軒の家を訪ねた。

「こいは、京よりの救援。薩摩外城一番隊、村田でごわす」

と呼ばわると、士官らしい者が、土間の包帯所で身を起こした。見れば同じ薩摩の外城三番隊、加世田次郎八である。

「おう、村田どんでなかか。懐かしか」

加世田は、裸体で、頭と右半身に汚れた包帯をぐるぐる巻きにしていた。

時は旧暦の六月であった。温気の中に膿の臭いが満ち、室内は蠅が真っ黒な渦になって飛び交っている。

「月の初めに、今町ちゅうところで激戦になり申しての。長岡の家老河井は、まっこて手強か賊将ごわす」

長岡城を巡る戦いは一進一退。両軍の戦力は拮抗し、少しも油断がならない。

「十四日に、賊軍（長岡・会津連合軍）は、大黒の高田・富山藩兵を打ち崩し申した。我らと長州勢が救けに出て、ようやく失地を取り戻したれど、おいは敵弾に当ってこのざまじゃ」

加世田は己れの姿を笑った。

「長岡藩兵も己れの領内での戦ゆえ、必死でごわす。このあたりにもたびたび奇襲夜討

ちを加えて来申す。偉か連中じゃ」

強敵であれば、素直にこれを誉めるのが薩摩の美風である。

「村田どんも充分気をつけて行きなされ。ここから先は、長岡ばかりか会津、桑名の残兵、幕軍歩兵の衝鋒隊まで居り申すぞ。あ奴らは、西洋式の狙撃がうまか」

「心得ており申す。次郎八どんも、堅固での。早よう身体を治してくいやいなあ」

加世田に別れを告げた勇右衛門は、それより昼夜兼行で長岡に急行した。

すると、

「長岡の城中に味方の旗が高々と見え申す！」

と城の前面で配下の兵が叫ぶ。

「しもうたァ。間に合わなんだか」

勇右衛門たちが到着する直前、味方は城の北方福島村から敵を駆逐し終えていた。外城一番隊士が息せききって、長岡城大手門から西曲輪に入ると、疲れきった兵士たちが、今さら何しに来たという顔で、彼らを睨みつける。

とりあえず、本営に出頭して持ち口を聞けば、

「加賀より遠路の進軍、苦労である。さりながら、その方には定めし長途の疲れも有らん。焼け残った家屋を宛行うゆえ、とにかく今宵は休息せよ」

と命じられた。長岡城下の旅籠と商家を兼ねた家を与えられ、隊士一同仮眠をとる。

勇右衛門は、戦いに間に合わなかった自分の悠長さに腹が立ち、なかなか眠ることができなかった。

（薩摩の者が、こんな北国に大勢で参るとは、日本開闢以来初めてのことじゃろうのう）

久しぶりの布団へ横になり、たわいもないことを考える。

越後は、本来ならばここまで混乱しなかったかもしれない。

慶応四年五月二日、長岡藩の家老であった河井継之助は、越後小千谷の新政府軍本営で首脳と会談した。

河井はこの時、

「我、徳川にも付かず、京の政権にも付かず。長岡は藩論未だ定まらぬゆえに、双方が領内に入ることを許さぬつもりである。もし侵入いたさば、我が兵力をもっていずれをも討ち平げる所存」

と言い切った。要するに武装中立である。

河井に対応したのは、右も左もわからぬ土佐人で、故中岡慎太郎の下、陸援隊に加わっていた、という経歴しか持たぬ北陸道鎮撫軍監の岩村精一郎。この時、弱冠二十四歳の青二才であった。

岩村は成り上がりなだけに、河井の我慢に我慢を重ねた心がわからない。

「汝らは、詭弁の徒なり。我らと争うまでの刻を稼ぐために左様な妄言を吐くのであろう。もはや、汝の面を見るも不愉快である」

早々に帰って開戦せよ、と河井を放り出した。この一言が、新政府軍をこの地で数ヶ月にわたり釘付けにする。

後年、長州の品川弥二郎が、同じ長州の官軍参謀山県有朋に、

「どうして岩村のごとき小僧を、大事な席に出したか。おかげで自軍は壊滅に近い被害を受けたではないか！」

詰め寄ったという。

初期の会談がスムーズに進めば、両者は、ここまで出血を強いられることは無かったのである。

「長岡は強過ぎる」

と勇右衛門は思った。その情報は、京にある時、すでに各方面から入って来ている。

河井継之助は、ペリーの来航以来富国強兵策を藩中に説き、自身は各地の学問所を訪ねて勉学に励んだ。

長岡藩主牧野忠恭に献策して藩政改革を行なった後、外国から近代兵器を大量に購入し、藩を封鎖した。

鳥羽伏見の戦いの約四ヶ月後、河井継之助はこう語っている。

「戦い、ついに止むを得ざるところ。我が藩領を侵し、我が領民を駆り、我が領民の農事を妨げしは、これ全て奸賊なり」

勇右衛門には、この河井の心が幾分わかる。

（あれは一個の軍人なのだ）

他藩より数段優れた装備を持ち、外国より特別なルートで補給も受けている。「中立」などという夢のような言葉を吐けるのも、その独特な洋式装備の成せる業であろう。

（メリケンの最新式機関砲も保有しておるそうな）

名高い連射砲ガットリング・ゴンさえも隠し持っているらしい。よほどの洋式銃器マニアでなくては、こんなものを戦闘に持ち出すものではない。

「おおい、おいどんにも酒をたもっせえ」

寝つかれぬ勇右衛門は、寝床の外に向って叫んだ。

すると、すぐに人のやって来る気配がある。

（流石は本営じゃな。物わかりが良か）

だが、それは接待の者ではなく伝令だった。

「隊長、起きて下され。本営参謀部からの出頭命令ごわす」

何事ならん、と身仕度を整えて出頭してみれば、出陣の下知であった。

「村田隊長。おはん、出雲崎を知っておっとか？」

「存じちょり申す。当地の西方、海に面した港でごわす」
佐渡の金銀陸揚げ港として、また北国街道の要地として栄えた所だ。
「天領ゆえ、敵兵多く陣を構えておる。我らは一隊を割いて攻撃しておったとじゃが、先程、隊長の野本助八どん、遂に戦死なしたりと伝令が入った」
「何と」
勇右衛門は眼を剝いた。隊長討死にというのは、よほどの激戦であろう。
「おはんの一番隊は、手練れ揃いじゃ。長途の疲労もあろう。心苦しかところじゃが、ひとつ出雲崎の救援に向こうてくれぬか」
参謀部の長はそう言った。
「心得申した。これより非常呼集し、出陣いたし申す」
勇右衛門は答えると、ただちに兵たちの宿所前で喇叭を吹き鳴らした。時刻を見ると、西洋時計で午後三時。
信濃川を渡り、気比ノ宮、上条の山道に入ると、存外にも難所である。しかも、勇右衛門の隊は加賀で借り受けた臼砲四門を、分解運搬している。
山の尾根に出て、小木というあたりまで下り、休息の命令を出そうとした時、
パァン、
と一発の銃声が轟いた。

「誰か？」
「敵ごわす！」
山腹の山小屋から数人の男たちが現われて、散発的に発砲してくる。
「遠射じゃが、なかなかに腕が良か」
勇右衛門は、荷車に分解してあった十一半ドイム臼砲を一門、組み立てさせた。
「北越で我が外城一番隊が放つ、最初の一弾じゃ」
勇右衛門自ら立って照準し、炸裂弾の信管を切った。配下の兵に実射教育をしようというのである。
「良かか、この砲は山の裏や遮蔽物に隠れた敵を討つ。弾道は大きく弧を描いて落つるど。弾の速さは野砲のそれよりも遅か。おはんらの目にもよう見えるはずじゃ」
発射の索縄を引くと、フリクション式の点火口に火が噴き上がり、大きな発射音が轟いた。
彼の言う通り、巨大な球弾はゆっくりと宙を飛んで行く。
山腹に命中すると、それは白煙を上げて爆発した。
「初弾は外した。次で仕止める」
砲座に梃子を差し入れ、角度を修整した後、再度発砲する。
次弾は敵の潜む山小屋を吹き飛ばし、敵は斜面をほうほうの態で逃げまどう。

「これで、もう襲っては来んじゃろう。前進」
勇右衛門は夕闇迫る中、砲の片付けを命じた。

3

だが、その後、さらにもう一度、敵は勇右衛門の隊に狙撃を仕掛けて来た。
「執拗な奴らじゃ」
外城一番隊士の中で狙撃の名人を数名選び出し、こちらの方は同じ遠射で仕止めると、急いで平地に出た。
出雲崎は波打ち際まで町屋の黒い家並が続き、背後はすぐに山である。そこには神社や寺がおびただしく建てられ、北と南の出口には「枡型」と称する防衛用の木戸が備えられている。北へ向えば寺泊、南は柏崎。その柏崎には宿敵桑名藩の飛地領があり、一時期、江戸から逃れて来た藩主松平定敬率いる部隊が蟠踞していたが、閏四月に新政府軍が高田に結集し始めると、同じ桑名分領のある北方の加茂へ退去した。
「越後というのは、まっこて不可解なところじゃの」
「ほんに」
勇右衛門は「枡型」前で小休止の時、地図を広げて士官たちと語り合った。このあた

りだけで幕府の天領三ヶ所、会津・桑名の飛地領四ヶ所、出羽上山藩飛地領と越後新発田藩飛地領各一ヶ所。そこに与板井伊家二万石、堀右京亮一万石といった小藩の所領が入り組んでいる。

「越後は大国というが、これはなかなかに統治は難しか。幕府も罪なことをしよるのう」

敵味方の占領地が交差し、どこに伏兵が隠れているのか、予想もつかない。

「行くど」

用心深く町の中に入ると、そこここに官軍野本隊の残兵が座り込んでいる。

「野本助八どんの遺骸はどこか？」

「はっ、この上の妙福寺という寺に安置しております」

「敵の様子は？」

「御案内いたします」

高田藩士というその若い男は、先に立って歩き出した。

進むうちに、家屋の破損や砲弾着弾跡の目立つ場所に出た。

片側はすぐ手前まで波が打ち寄せ、小道を隔てて反対側は、目もくらむほどに切り立った崖である。

「敵の台場は、この上に」

「まるで鳥の巣ンごたる」
「まさに。あの位置に臼砲数門を持ち上げ、手前には小銃台場もあります。味方は常に低所より攻め上る形となるため、実に不利。よって多数の死傷を出しております」
　嚮導役の高田藩士は、口惜しそうに説明した。
「おや、尾根伝いの小山に、味方ッ旗がひるがえっておっど」
　勇右衛門は、小手をかざした。
「我らも馬鹿ではございません。かなわぬながら敵と同じ高位置にて射撃を試みんとて、あそこに台場を築きました」
　彼我の距離は大方五町ほどであろう。
「しかし、今は少しも銃声は聞こえンな」
　勇右衛門の配下のひとりが、不思議そうに耳を傾けた。
　山頂の敵台場から、勇右衛門らの偵察する姿は完全に見えているはずだが、一発の狙撃弾も飛び来たらぬのは面妖であった。
「常に敵は、ああいう行動なのです。昼は居留守を使い、夜間になると猛烈なる砲撃を加えて参ります。まこと面倒なる奴らにて」
　高田藩士は、歯がみした。
「よし、おいどんらは、あの味方台場に籠ろう」

臼砲を運ぶには不自由な場所だからと、装具とともに麓へ残し、まず銃隊だけを上げた。

味方の台場は連日の砲撃で破壊され、目も当てられぬ状態になっている。

「なるほど夜間に弾を送って来るというのは、本当らしいな。じゃどん、これでは籠るにも苦労する」

勇右衛門は隊士たちに、台場内の清掃と、土塁の強化を命じた。そこは、あまり心得の無い者が築いたらしく、味方の射撃点が確保できぬ程に雑木が生い茂っていた。

「台場の土台が隠れる程度に切り払え。切った枝も捨ててはならん。先を尖らせて、逆茂木にすっとじゃ」

自らも立って行き、木々を払っていたが、

「うむ、これを試してみるか」

真っ直ぐな一間前後の木を数本集めた。

「何をなされます？」

高田藩士が尋ねる。

「闇夜に鉄砲を当てる技じゃち」

一番隊士が、いたずらっぽく笑う。

木には白い布が吊るされた。これを台場下の溝や小藪に立てる。

「次に、同じものを射手の前面に立てる。両者の接点は真っ直ぐでなければならん」
さらに勇右衛門は、小石に紐を付けて垂らし、垂直の線を測った。
「皆、小銃の用心鉄に小石を吊るし、銃床尾の角度を取れ。銃の照準を第一の棒と第二の棒に合わせて、塁上に固定せよ」
隊士は全員その通りにした。
「二本の棒が結ぶ線の延長戦上に敵来たらば、ただちに放て。ただし、銃の固定に難あれば外れる。そこで、これより命中試験をする」
一人の兵の銃座に座り、勇右衛門は一発放った。
弾は木々を貫き、茂みの中に消えていく。
「これで良か。他の者も、試し放ちしてそれぞれの弾がどこへ飛ぶか見極めておけ」
皆が揃って発砲すると、時ならぬ轟音が出雲崎の山々に響き渡った。
五町向うの敵台場は、その間も沈黙を続けている。
(見て見ぬ振りとは、己れの戦力によほどの自信があるのだろうな)
そのうち雨が降り始めた。隊士らは固定した銃器に薦を被せて、仮小屋に入った。
食事を終えた夜八時頃、雨が止んだ。月は相変らず雲の中にあり、あたりは鼻をつまれてもわからぬ闇だ。
突然、ドン、という発射音と、トンビの鳴くようなヒュルルルという気味の悪い飛行

音がした。
「敵の臼砲弾じゃ。伏せい」
一発が味方台場の縁に命中した。
「もう一発来っど」
これは外れて台場奥の無人地帯に落ちた。
(ふん、敵の奴めら。手慣れておるな)
向うも昼間にこちらの位置を測り、照準を固定しているのだろう。
臼砲の攻撃はその二発で終り、敵兵の銃撃が始まった。
「暗がりで良う見え申はんが、尾根伝いに夜討ちの人数がやって来る気配でごわす」
報告があった。勇右衛門は拳銃を抜いて、
「まだ放つな。おいの合図で、昼間設けおきたる狙撃点目がけ、間断無く放て」
と命じた。
やがて、台場の一方に人の気配が満ちた。
「放て」
味方の兵は白い布の夜間目標目がけて発砲した。一発放ち、弾を込めては銃の台座を固定。垂直を確かめては再び放つ。
敵も初めのうちは組織的に集中射撃を行なっていた。が、すぐに散発的となり、小半

刻もせぬうち発砲を停止した。
「うむ、退いて行くど」
勇右衛門は耳を澄まし、拳銃弾を空に放って味方の射撃中止を命じた。
「たいしたものでありますなあ」
嚮導役の高田藩士が舌を巻く。
「なあに。夜間標点射撃などと申すものは、古来から伝わっちょる。あの武田信玄も、三州野田で、夜間に笛の音を聞いておるところ、この三点射撃で出現予想地点に弾を当てられたと古書にもある。それより、おはんは嚮導役なれば、さだめし土地の者にも手づるはあろう」
今夜の敵被害の様子を知りたい、と勇右衛門は言った。
「それなれば、敵台場近くに畑を持つ百姓数人を手なずけております。明朝、探らせましょう。まかせて下さい」
高田藩士は、胸を叩いた。

4

「かくて翌日」

と勇右衛門の自伝は語る。

「……土地の百姓を敵地につかわし、様子を探らせたるに、その者帰りて報ずるに……」

敵兵は前夜の戦いで多くの被害を受け、死傷者の運搬や手当てに忙殺されている、という。

「出雲崎陣屋なる我が本営でも、やはり村田君の手並は違う。まるで春秋戦国の軍師が技を見るがごとし、と評判でありました」

「そげん持ち上げることもなか」

勇右衛門は、苦笑した。目の上のタンコブであった敵台場に痛撃を与えたことで、味方の溜飲は一気に下がったらしい。

「じゃが、これで喜んでおってはいかん。攻撃は反復せねばならんのじゃ」

勇右衛門は、次の手を考えた。今度は、こちらから攻める。

「加賀より運び来たる臼砲の出番よ」

だが、ここでひとつ問題が起きた。十一半ドイム砲は、射程が極端に短い。強装薬を込め、仰角を目一杯上げても、弾は五町ぎりぎりしか届かない。

「こうなれば、敵台場の前面に、砲座を進めるより手は無い」

勇右衛門は、士官らに自分の作戦を説明した。

「敵は夜討ちの失敗に懲りて、今夜は仕掛けてこんじゃろう。我ら、夜のうちに臼砲を前進せしめ、未明までに砲の据え付けと射手の隠れ場所を設営する」

砲から敵台場までの距離は大体三町（三百メートル強）に定める。

「そいならば、必中は期せましょう。じゃが、今宵も暗夜ごわす。闇の中でいかにして左様な作業ができまっしょうか」

「それなれば別に、用意がある」

勇右衛門は、京の細工師に造らせた「秘密兵器」を取り出した。

「こいがあっど」

「何でごわす？」

木箱であった。中には西洋ブリキの缶が一個入っている。

「こいは、おいどんな工夫の燈籠よ。各所に蓋のあるじゃろが」

「ござい申すな」

「火を入れて、蓋をいたさばいずれにも灯光は漏れず。蓋を開けば光が出る。しかも、窓にはギヤマン（ガラス）が張ってある。明暗自在。西洋軍艦の灯火図をもとに、おいが注文したもんじゃ」

「ほう。これでは敵に見とがめられ申はんのう」

夜になると、外城一番隊士の臼砲術隊員は、この灯を目当てに山の道を進んだ。作業

は思ったより順調に進んで、未明までに十一半ドイム砲四門の陣地と、射手の隠れ場所を掘った。これを草や木で隠蔽した後、引き揚げる。

「攻撃は、次の晩に行なう」

兵たちは夜戦に備えて、眠りについた。

午後、早目の夕食が済むと作戦を説明した。勇右衛門の戦法は巧妙なものだ。

「まず、前夜仕掛けた砲の位置まで隊員は忍び行き、弾を込める。主力小銃兵は右側面。第三分隊は左側面にまわり、敵の注意を引きつける。夜間の発砲は前夜と異なり標点射撃ではないが、これは仕方ン無か。なによりも、臼砲兵の発射に便ならしむため、射つべし」

日暮れを期して、隊は動き出した。

臼砲の操作兵は茂みの中を這い、隠蔽した砲座に近付いて砲の無事を確かめてから穴の中に潜った。

敵の斥候は連日、このあたりに出没していたが、幸い隠し方が巧妙であったために見過ごされていた。

「幸先の良かこつ」

戌ノ刻（午後八時頃）に臼砲が一発、敵陣へ放たれると、側面の銃兵が一斉射した。

真正面から砲撃を受け、両側面から射ち上げられて敵兵は混乱した。前々夜の痛手か

ら立ち直っていない彼らは、一斉射に反撃するばかりで、臼砲を放ち返す力もない。味方の十一半ドイム砲戦は、計十三発が放たれ、多くが台場の中心部に届いた。

明け方、敵の退却する気配があった。こういう時に備えて、勇右衛門は敵の退路を開けていた。窮鼠猫を嚙むの譬えも有る。「完璧」な戦闘を試みて失敗した例は多い。

「伝令、左側面の第三分隊は敵台場へ偵察の兵を出せ、と伝えよ」

「心得て候」

小半刻もせぬうちに伝令は戻って来た。

「『我ら敵台場へ突入せしところ、すでに残兵は無く、ただ敵の死骸と遺棄兵器散乱するのみ。隊長の来訪を請う』との言葉でござる」

「ふむ、全員逃げたかの」

勇右衛門は、朝の陽を浴びて敵台場への道をたどった。

砲撃の爪跡は、大きかった。着弾点を探れば十三発のうち六発が、確かに台場内で爆発している。

「必中の距離で放ったのが、成功の理由じゃなあ。臼砲を持って来たは大当りじゃった」

千切れ飛んだ敵の死骸に片手拝みし、その身元を探る。黒い洋装の兵士と、裁っつけ袴に小具足の兵士が混り合い、いかにも胡乱な部隊だったが、

「懐に名札を持った者がごわした」

一人の隊士が、血にまみれた木の名札を見つけて来た。

「『神風隊、町田老之丞配下』……」

しばし考え、あっと声をあげた。町田というのは桑名藩士、立見鑑三郎の実兄であろう。立見は柏崎西方鯨波の狭隘地で、薩長、加賀、高田の連合軍千名以上を、三百の小勢で打ち破った。敵ながらあっぱれな武将と聞いている。

「どうりで、強かはずじゃ。遺棄死体は、丁寧に寺へ運び、弔いさせよ。皆、勇者じゃからのう」

桑名兵は執拗である。このままでは済まぬ。逃げた兵も、近くに台場を築き、再び同じ戦いを仕掛けてくるに違いない、と勇右衛門は思った。

「疲れたじゃろう。半数はこの台場にて眠り、半数は歩哨に立て」

次の日、歩哨の兵を眠らせ、半数の起き出して来た者を偵察兵として四方に放った。

収穫はあった。

「こン先に、木ノ目峠なるところがごわす」

偵察隊の士官は地図を示した。

「逃げた敵兵は、ここへ入ったと思われ申す。尾根の一部を切り崩し、俵で土塁を築き、こちらの台場よりも、ずいぶん堅固に見え申した」

「うーむ。一度、おいが自分の眼で確かめてみる必要がありそうじゃ」
勇右衛門は、一個小隊を率いて出発した。
途中、牛飼いの老人に出会う。木ノ目峠の様子を尋ねると、
「ありゃあ、昔、そのあたりの偉えお侍が城を築きなされた跡だっちゃよお」
と言う。古城跡では即製の台場より手堅かろうと峠下から望めば、なるほどそこは小振りながら城の体を成している。
「敵兵も許多おるようじゃ。とても出雲崎の台場ンごと攻め方では落ちンど」
勇右衛門の隊を発見した敵は、砲弾を放って来る。
「おう、こりゃいかん。小隊でかかっても、勝てんち。ひとまず引き場げじゃァ」
匹夫の勇を最も嫌う彼は、山道を大あわてで逃げ出した。
出雲崎に戻った一同は、数日作戦会議を重ねた。ある者は、夜間の奇襲を進言し、ある者は尾根伝いに時間をかけて接近。山中の包囲により、水攻めや兵糧攻めにする策を申し立てた。
勇右衛門は砲術家である。それに前回の臼砲攻撃、その効果の味が忘れられない。
「加賀より出陣の時、遠慮して受けなんだが、あゝ二十九ドイムの大型臼砲。あいを借り受けておけば、こんな苦労もせんじゃったのう」
「左様なあ（そうですねえ）」

皆が相槌を打つところ、ひとりの士官が、
「いっそ、加賀藩に掛け合い、今から巨砲を借り受けたらどうでごわんそか」
幸運にも現在、出雲崎には汽船が入って来ている。敵の台場を落としたおかげで、味方は安心して物資の陸揚げを開始していた。
「わいらは、陸路を参ったゆえ砲の運びにも刻がかかり申した。越後から加賀へ行きつ戻りつしても汽船なら数日。大型火砲も楽々運べ申そう」
「それじゃ！」
勇右衛門は本営に掛け合い、巨砲の取り寄せを求めた。
汽船はただちに加賀へ向けて出発した。が、名にし負う化物臼砲だ。金沢の港に運ぶだけで時間がかかると見え、なかなか到着しない。
この間は、外城一番隊も、時折り木ノ目峠の周辺を偵察するだけで、我慢した。
十日後、二十九ドイム砲は分解された状態で陸揚げされた。
加賀藩の技術兵と協力して、勇右衛門は日のあるうちに台座を据え付け、早々に発砲した。
五発放ったうち、二発が峠の敵陣へ届いた。望遠鏡で覗くと、敵兵は巨弾の威力に狼狽し、次々に逃亡していく。
数刻後、一兵も損することなく、木ノ目峠の台場は味方のものとなった。

5

「木ノ目峠の敵台場陥つ」
の報告は、出雲崎の味方本営へ伝わった。
勇右衛門らが、敵の敗走路に偵察員を送って追撃の準備をしていると、
「急使でござる」
と伝令が峠に上って来た。見ると、筍皮の笠を被った百姓風の男である。
「征討総督仁和寺宮殿下よりの、御出頭命令でござる」
口頭ではなく、桐の油紙に包んだ奉書紙を差し出した。
「宮様は、この台場を落としたことを、よほど喜ばれてござわす」
兵たちは燥ぐが、勇右衛門は首をひねった。奉書紙の命令など、あまりにも仰々しい。
「おいは、引っ飛んで本営に行く」
占領地の警備をしかるべき者にまかせ、単騎海岸に向った。
「御前では、早や皆々様お集まりでござる」
本営には諸将の警備役がかたまっていた。

（参謀どんも、来ちょるのか）

階を上り陣幕の内に入ると、総督の宮の御前には、洋服に陣羽織姿の将官が居並んでいる。皆、沈痛な面持ちで佩刀の柄を握りしめ、とても木ノ目峠の戦勝を賀するなどという雰囲気ではない。

勇右衛門が一礼して末席に腰を下ろすと、仁和寺宮が口を開いた。

「奥州の入口、白河口より進みたる味方は、早や会津に入りたる由。しかるに我が方面（越後口）は、戦況一進一退。いかにも緩慢なる動きにて、戦果少なくはなはだ遺憾なりと思う」

勇右衛門は、総督の宮の強い口調に驚いた。

（これは、宮さぁ御本人の御言葉ではあるまい。誰かに……）

そっと席の内に眼をやると、上座の参謀山田市之丞（顕義）が宮の言葉にいちいちうなずき、向いに座った黒田了介（清隆）と吉井幸輔らは、口をへの字に結んで宙を睨みつけている。山田は長州藩、黒田らは薩摩藩。この二派は、というより山田の上司格、山県有朋と黒田の不和が越後口攻撃軍の足を引っ張る状態であるという。

（実際、目も当てられぬ戦よ）

だだっ広い越後平野の中央部約六十キロの戦線に、薄く均等に兵を配置してしまったため敵に有効な打撃を与えることができないのだ。しかも参謀らの仲の悪さは配下にも

そのまま伝わり、
「長州の弱兵が」
「薩摩芋の我儘者が」
と各所で衝突していた。
「ついては……」
と仁和寺宮は言葉を継いだ。
「……このたびは方略（作戦）を一転し、海上より敵の後方新潟の津及び新城を攻める。もしこのふたつを取るならば、前面にある敵は瞬時にして衰え、連なる奥州の賊徒も自ずと衰退するであろう」
総督の宮は、陣楯の上に巨大な地図を広げさせた。南は糸魚川藩一万石松平家から北の村上藩五万九十石内藤家所領まで日本海を背に細長く描かれている。
「我が軍は少数の兵を残して海上に出る。二手に分かれて、一方は松ヶ崎の浜より新発田を討ち、新潟に至る。もう一方は直接新城を突くの方略なり。この方面の敵は、屈強の者多く、その守る地は要害である。四方が左様なる場所へ上陸いたすは、これ死地につくが如し。一同には……」
と席上の将官らを見まわした。
「その覚悟があろうか」

勇右衛門は、むかっ腹が立ってきた。総督仁和寺宮は、連日の苦戦と味方の弱体振りに怒りを感じてこう語るのだろうが、後からこの出雲崎に派遣された勇右衛門には不当な物言いであった。彼が登場してよりこの方、難敵の要害を二ヶ所も手早く屠っているのである。

「宮様に申し上げ申す」

勇右衛門は刀の柄頭を叩いて発言した。

「我らもとより死を期して戦場に参ってござわす。敵の強弱、要害の難を、毫も問い申はん。死地を与えらるるは、この上もなき名誉の御沙汰ござわす。不肖なれど進んでこの方略を御受けいたし、宮様の御趣意をいただき、必ずその功を奏し奉らん」

「その方」

仁和寺宮は、風折れ烏帽子に錦の鎧直垂というまことに古風な装束であったが、その袖を大きく払って、勇右衛門を見据えた。

「村田と申す者であったな」

「はっ」

「その方が、敵の鳥ノ巣台場を臼砲にて討ち払うところ、麿も当本営より遠眼鏡にてたしかに観戦した。見事なる手並であった」

「恐れ入り申す」

「しかも、ただ今の言上、まことに勇ましい。必ずその功を、麿に申してくれよ」

総督仁和寺宮は、ことのほか満足の体でそう言った。

勇右衛門の外城一番隊は、長州の岡部隊、薩摩の支藩佐土原の隊とともに新発田、新潟方面の攻撃軍に配備された。

彼は木ノ目峠にあった部隊を全て退去させて出雲崎の港に集め、こう訓辞した。

「このたびの方略は、味方同士の競い合いである。我ら上陸後の戦がはかばかしくなくば、新城口に進みたる別隊が新潟を取る。これは武人としてこの上もなき恥辱であろう。いかなる苦戦となろうとも、我らが新潟に一番乗りせんといかんち」

「隊長どん、一同水盃して誓おうではごあはんか」

一人がそう言うと、配下の兵は刀の柄を叩いて和した。彼らの士気はいやがうえにも高まった。

新潟は当時、諸外国との開港問題に揺れている。幕府は慶応三年（一八六七）十二月七日をもって開港と諸外国に告げていたが、戦争勃発によってそれが延期となった。

「新潟開くべし」

と積極的に動いたのは意外にもイタリアとフランスだった。ヨーロッパのこの二国は、その頃、伝染性の蚕病によってシルクの生産が大打撃を受けていた。イタリアの生

糸商人は、病いの及んでいない極東で蚕種紙（蚕の卵を付けた紙）の買い付けを行なう方針であり、彼らが目をつけたのが優秀な北陸の蚕だったのである。

しかし、新潟は戦乱の中心になろうとしていた。新政府側と諸外国の交渉が遅々として進まぬことに苛立ったイタリアは、蚕種紙買い入れの商人を英国の貨物商船アルビオンに乗せて新潟に送った。

アルビオン号到着の直前、新潟港は奥羽越列藩同盟や旧幕府諸隊の兵士によって制圧された。

五月三十日、旧幕臣ながら新政府によって港湾の管理者「新潟奉行勤向」となった田中廉太郎は、その持ち場を米沢藩上杉家の兵二百に明け渡した。

これにより東北の諸藩は、新政府の影響下にある横浜以外の港から、自由に洋式の兵器を購入することが可能となったのである。

「新潟港は稼ぎ放題だぞ」

と、すぐに各国の武器商人らが集まって来た。中でもオランダ人のヘンリー・スネルと弟エドワルドは長岡藩を顧客にしている。合計十一万六千六百ドル相当の兵器が、この兄弟の手を経て、長岡・米沢・会津・庄内といった反官軍側の武器庫に収まった。

「新潟の早期占領こそ戦さの鍵である」

と薩長の将官が血を吐くように語るのも、当然であった。

七月二十一日から二十三日にかけて、官軍の諸藩は乗船を開始する。軍艦二隻、輸送用商船四隻。これに軍需物資を満載した和船三十隻が同行。先導役は、長岡藩の河井継之助と言い争って評判を落した土佐人岩村精一郎である。

船団は途中、嵐のために佐渡の小木に碇泊し、七月二十五日、新潟の北へ進んだ。

勇右衛門の自伝では「松ヶ崎上陸」とあるが、史書には多くが「太夫浜」と出ている場所で投錨。陸上の様子を窺うと、浜辺には敵らしき者がこちらを見てしきりに騒いでいる。

「はあ、あれはまさしく米沢の兵ならん。しばし艦より陸上に砲撃し、しかる後に端艇（ボート）を出さん」

敵前上陸など経験したことのない諸隊の者は、すぐに艦載砲の砲口を向けた。

「外城一番隊整列」

勇右衛門は命じた。

「総督の宮より、直々に御言葉を賜わった我らである。このたびは何が何でも一番乗りして、実功を奏すべし。端艇に乗れい」

船の操作員を半ば脅すようにしてボートを降ろし、乗り組んだ。

「あっ、薩摩の者が先駆けするぞ。止めよ」

と味方がわめくが、勇右衛門はかまわず漕ぎ出した。

浜辺に上がって点呼をとり、六、七百メートルも進んだ時、やっと敵兵が気付いてこちらに弾を放ち始めた。

「かまわず、進め」

勇右衛門が浜の街道筋に出ると、バラバラと人々の逃げる姿が見えた。敵兵や近在の漁民が畑の中を走って行く。

「深追いするな。まず味方を受け入れるための陣を築け」

勇右衛門は程良いところで兵を止め、後続の上陸を待った。

6

戦場では、時に奇妙な事が起きる。

この日、偶然にも敵の重要人物二人が、同じ太夫浜で殺害された。

一人は、前年の十二月二十五日に江戸薩摩屋敷を焼き打ちし、鳥羽伏見戦のきっかけを作った庄内藩の討手大将石原倉右衛門である。この男は海路を伝い、会津若松で奥羽越列藩の会議に参加しようとした。敵兵がいるとも知らず浜から上がったところで、先に上陸した長州兵に行き合わせ惨殺された。所持品の中には、新潟を押さえた列藩同盟の重要人物名簿があった。

二人目は勇右衛門の隊の目前を、早駕籠で通って行った。
「怪しか奴じゃ」
隊士が一斉に道へ出てその駕籠を包囲した。
「早まるな、早まるな」
と勇右衛門は駆けたが間に合わない。上陸戦で気負い立つ隊士は、即座に銃剣で駕籠をめった刺しにしてしまったのである。駕籠脇に従っていた者も同じ目に遭うところだったが、こちらは勇右衛門の制止がきいて辛くも助かった。
「この者は誰じゃ」
死体の姓名を従者に問うと、
「某藩の御家老様で」
と答えが返ってくる。
「某藩とはどこか？　何用の早駕籠か？」
重ねて問うが、従者は土地の者らしく「言語甚だ不明瞭」であった。
「隊長どん。こ奴、見るも不快じゃ。刺し殺してしまい申そ」
隊士はいきり立つ。勇右衛門はそれも制し、
「駕籠ン中を改めて見よ」
と命じた。すると、列藩同盟の書類と神社の御札が多数出てきた。

「書状の類はわかるが、御札は何か？」
従者はひどい訛で、これが越後弥彦山の守札で、戦場の弾避けに用いるものと答えた。
「なるほど、当地ではそういう風習があると見ゆる。では、この者に縄を打て。浜へ連れて行き、敵の動静を尋ねてみよう」
従者を連行して上陸地点に戻ると、ちょうど隊長集合の合図があった。
主将山田市之丞は、長州人として上陸一番乗りが果せなかったことを、ひどく恨んでいる風であった。
「薩摩人は、何事にも抜け駆けをいたすがまことに遺憾である。戦闘は味方協調が第一。以後、当方の命令が聞けぬとあれば、即刻この浜より退去を願う」
評議の席で勇右衛門に言った。薩摩人は一様に腹を立て、それからは無用な言い争いとなった。
そこに伝令が現われ、
「我が陣に、怪し気な百姓らが迷い込み、隊長方へしきりに面会を求めております」
「どのような百姓か？」
「言葉は土地のものならず。江戸弁であります」
「会おう」

山田と勇右衛門は言い合いを一時止めた。二人が念のため懐に拳銃を忍ばせて外に出てみると、汗臭い刺子を着た男が二人、立っている。

「我ら新発田藩の者でござる」

と頭を下げた。

「我が藩主溝口主膳正以下藩士ことごとく勤王でござったが、なにぶん四方賊軍の土地ゆえ、その圧力に屈し、長岡の攻防戦にて御味方に弓引く次第でござる。しかれども、こうして錦旗が領内に御上陸あそばされたからには、少しも手向いいたすものではござらぬ」

と語った。

「いや、それは解せぬ」

山田市之丞は怒鳴った。

「上陸に際して、我ら若干ながら射撃を受けておる」

「いえ、先刻より新発田藩の銃隊が放つは、空砲でござる。それがし、左様に命じてござれば」

百姓姿の男は大きくかぶりを振った。

「うむ、そう言えば街道筋へ突撃したる時も発砲音はしきりなれど、弾丸の飛翔音は一個も耳にしなかった。不思議な事じゃ、と思うておったが」

勇右衛門は、それが敵の出現に泡を食った新発田藩兵が、弾を込めるのも忘れ放っているものと考えていた。

「これ、いずれも錦旗に弾を当てぬ志でござる」

新発田藩士の口調には、淀みが無い。そこで山田は誓紙の差し出しと、兵の出頭を命じた。

「では、当方の御願いも御聞き下され」

新発田藩士は袖の中から汚れた絵地図を出した。

「当所に米沢藩兵の多数屯集したるところがござる。我が藩が錦旗に内応と知れば、同地に集う味方は、たちまちこれに攻められましょう。新発田の者だけを救出し、米沢兵を分離攻撃されんことを望みまする」

「それなれば、わけもない」

勇右衛門は矢立を取り出し、絵地図の上にY字型の線を引いた。

「あらかじめ御味方に使いを放って下され。我らが前進いたさば、新発田の兵は右翼へ一列に並び空砲を放つ。米沢の兵を左翼に陣するよう仕向ければ、我らそちら側ばかりを狙います」

「心得ました」

二人は自軍に立ち戻り、すぐに二個小隊の新発田藩兵を海岸に送って来た。勇右衛門

の部隊はこれを先導役として、米沢の陣を攻めた。
「頭上の弾音に耳を傾けよ。弾の風切りが鋭い方を敵方と知れ」
と命じて進めば米沢の兵は敗走し、空砲を放つ新発田兵は味方に合流する。
次の日、沼垂という地点まで追撃したが、米沢兵は素早く船で信濃川を渡って逃走し、勇右衛門らはそこで停止した。
「こいが、信濃川じゃど」
「名にしおう大河じゃな。川幅は十余町もあろうかい」
「渡った先が新潟ン津じゃ。おお、岸辺に敵影らしきものが見ゆる」
兵の内、遠眼のきく者らが歯噛みした。
「船があればのう」
と、土手の上で地団駄を踏みくやしがる者もいる。米沢兵は逃げるにあたり、近隣の残船は全て船底に穴を開けて去った。
「上陸戦と異なり、渡河戦は難しか。まずは向うの動静を知らねばならん」
勇右衛門は、沼垂の辺に仮本陣を作り周辺の協力者を募った。
新潟は人口三万余、戸数五千七百を超える幕府直轄領であったが、官軍に情報提供をしようという者は意外に多かった。
「これは、どういう風の吹きまわしか」

と出頭して来た者に問うと、

「正月に会津方面より、兵が繰り込んで参りました。その連中というのが……」

幕府陸軍方の四百人、歩兵頭古屋佐久左衛門率いる四百八十人、水戸藩の佐幕派五百余人といった江戸からの脱走部隊であった。彼らの狂暴さは並外れていて、白昼民家に押し入り、掠奪強姦を事とする。

「新潟の町民は、餓虎千匹が放たれた思い。日夜恐れをなして、早や御公儀も終いかと呆れ果て、皆、川を渡ってこの地に逃げ来たっております」

と、即答する者は、天領で屏風絵など描く絵師であった。名を問うと、

「山崎石州」

と伏し目がちに答える。どうやら逃亡の身を恥じて偽名を名乗っているようである。

試しに、簡単な近辺の地理解説を頼めば、すらすらと村や川の流れを描いてみせた。

勇右衛門は、いつもの通り半数の兵を川辺の哨兵に立て、残りを眠らせた。

「将士偵察に出る。絵師を道案内に立てよう」

少数の狙撃自慢を選抜し、山崎が少しでも怪し気な素振りを見せたら射殺せよと密かに命じ、馬上の人となった。

沼垂から二里あまり上流に進むと、流石の大河にも川幅の狭い所が幾つか見つかった。

「このあたり、対岸の敵陣を存じおるか？」
山崎に問えば彼は、川沿いにある村の位置を描いた。実際の地形と照らし合わせても、間違いは見当らない。
（この男、まことに幕府の兵を嫌って逃れて来た絵師だな）
用心深い彼も、ようやく山崎を信用した。
「では、沼垂に戻ろう。この敵陣図を畳二枚ばかりの大きさにできるか？」
「少々の刻をいただけますなら」
「刻は少ない。急ぎ仕事を申しつける」
仮本陣に戻ると山崎に一室を与えて、方略図の作成に取りかからせた。
次に勇右衛門は、村役人に川船の修理状況を問うた。
「上流下流の村々にも人を走らせましたところ、およそ二百艘は集まりましょうとのこと。しかし、中には修理がとうてい覚束無い程に壊されている船もあり、用いられる量はいかほどか今調べております」
村役人は実直そうな人物であった。また、新発田藩の連絡士官に対し、沼垂周辺の砲や小銃が捕獲品も合わせてどれくらい揃えられるか、至急調査するように命じた。これだけの手配を終えて、勇右衛門はようやく休息の床についた。

7

勇右衛門の頭脳は眠っている間もせわしなく働いている。いや、寝ている時の方がより働くようであった。後年、隠居となった時もこの男は深夜突然跳ね起き、家人に夜食の用意を命じて研究室に籠ることがたびたびであった。人が理由を問うと、

「なあに、夢の中で案がひらめくのじゃ」

と笑った。

この沼垂の陣でも同じであった。翌朝、村役人が使用可能な船の数を報告に来ると、

「夜中、思いついたことがある。船の他に手配したい。必要な資金は出す」

と言った。

「何の御用がございましょう」

「されば、じゃ」

黒の着物、黒い袴や股引、黒の鉢巻を三百人分。たとえ古物にしても苦しからず急ぎ用意せよ。また、百姓町人、新潟よりの避難民で小銃の操作ができそうな者も同数集めよ、と命じたのである。

「方々には擬兵を申しつける。対岸の敵兵に我ら少しも油断無きところを見せるンじ

や」

そのうち新発田藩の連絡士官も現われ、余剰兵器の数量を報告した。

「米沢兵の残したる二十ドイムの洋式砲一門。車輪の付きたる五百匁弾使用の和製大筒、七百匁弾使用の大筒各一門。いずれも弾薬、装具を付属いたしてござる」

「小銃の方は何挺ござった？」

「洋銃は二百挺ばかり。火縄銃も合わせれば二百七、八十挺にもなりましょうか。ただ、煙硝はござれども鉛弾の方は不足してござる」

北陸の戦線では、彼我ともに鉛が不足がちであった。貧しい百姓らの中には、危険を冒して戦場で弾拾いし、売り歩く者もいる。当時の鉛弾は鋳直して再使用されるので、これも大事な現金収入の道であった。

「いやいや、発砲薬さえあれば苦しゅうござらん。村へ申しつけた擬兵に急ぎ配置して下され」

勇右衛門の言葉で、たちまち三百余の古着をまとい、古銃を抱えた部隊が出現した。

「隊長どん、こいな百姓らを集めても仕方ゝ無かではごあはんか」

と言う部下に、彼は擬兵の有効性を説いた。

「報告によれば、対岸の敵兵力は、およそ二千五百という。我らは正面で五百に満たぬ。川幅広いためにまず恐れることは無かじゃが、油断を見せれば渡河反撃されっど。

そこで、川端の哨兵にこの者らを充(あ)て、時折り空砲にても放たせる。敵兵は、こちらに充分の備えありと思い、みだりに攻め寄せては来んじゃろう。その間に、全員ゆっくり休息できるというわけじゃ」

「へえ、隊長どん。やはり名軍師ごわす」

隊士らは喜び、残り半数の者もただちに眠りについた。

勇右衛門は親切な男だ。銃の操作を自ら行なって百姓らに教えた。

洋銃の弾込めはこう、火縄銃の照準はこのように、と手ずからやって見せて土手に立たせた。

「なるべく空砲を放つように。じゃどん、五発のうち一発。場所においては三発に一発を実弾にせねば、敵に読まれてしまう。向うの土手までは六町程あるから、このように膝(ひざ)を折って火縄銃の尻を地に付ける。銃口を斜めに持ち上げ、強薬(つよくすり)を込め」

だあん、と放てば対岸に届いたと見え、敵の哨兵の逃げまどう姿が遠望された。

「強薬は、慣れぬ者がやれば銃が破損して大怪我する。かならず薬量を計り、相談の上で放つように。洋銃は十町以上届くから、薬量そのままでよろしい」

百姓らの中には、僅(わず)かだが洋式調練を受けた者も混っていた。天領の新潟では奉行所の役人が少数いるばかりで、今年に入るまで常備兵がいなかった。幕府新潟奉行白石下(しもつけ)総守(うさのかみ)は、一時、このあたりから農兵を徴発していたという。

「では、調練経験者をこの隊の長に据えよう」
三人の若者を選び、隊旗と捕獲した大砲を与えた。

「村田は何を考えているのだ？」
同じ沼垂に駐屯した長州藩兵らは、勇右衛門の軍略が理解できない。占領地で勝手気ままに振る舞っているように見えたのだろう。各隊会議の席で見当違いの難詰をした。
「貴君は、敵地の百姓町人らに武装をさせ、あるいは、敵の間者とおぼしき絵師に一室を宛行って何やらこそこそとやらせている。怪しからん事だ」
「何じゃとう」
勇右衛門は、長州の隊長に怒った。
「おいは、確固たる方針あって左様にいたしておる。擬兵あればこそ、おはんらもゆっくり休めおるではなかか。あの絵師には敵地の図を描かせ、よって新潟攻めの便ならしめんと考えておる。だいたいが、おはんらはさしたる偵察もいたさず、いたずらに自陣を固め、後方に援軍を請うてばかりいる。恥かしくはなかかい」
「貴君は左様に申すが、敵の米沢・会津・庄内の新潟守備兵力は我らの数倍。古来、寄せ手は守り手の数倍の兵を要すという。勝機無きに突進するは猪武者、匹夫の勇と言うを知らぬか」

長州人も言い返す。この男は、上陸戦で勇右衛門が抜け駆けしたことを未だ根に持っているのだった。

「おはんは頭の悪か。敵兵多しと言うが、それを恐れて日延べいたさば、敵はますます本領より味方を呼び寄せて守備を増強いたすじゃろう。兵は何よりも迅速を尊ぶ。新潟が混乱に陥っておる今こそ寡兵をもってしても進むべきじゃ。そのための絵師であり、農民の擬兵じゃぞ」

語るうちに、勇右衛門の怒りは止め様が無くなってきた。

「松ヶ崎上陸の前、おいは総督の宮様から特別に御言葉を賜わった。死地につく覚悟があろうかと申されたゆえ、必ず功を奏し奉るべしと答えた。御約束のためには、我が隊は死地に至る。一日遅れなば、一日の損失なり。諸君らは援軍の到着を待ってのんべんと来られよ」

席を蹴って出て行った。

勇右衛門は、これで自隊だけの新潟攻めを覚悟した。幸い絵師山崎石州の敵地図はでき上がり、その詳細さは彼を満足させた。また新発田藩の投降部隊も外城一番隊と行動を同じくする旨、申し出た。

「問題は、渡河の船じゃが」

二百艘のうち、使用できるものは半数以下の六十三艘であるとわかった。

「さればこうしよう。先に偵察した二里上流の川幅狭き所を渡河点とする。六十三艘はその前に隠し置き、廃船百三十七艘はこの沼垂の前面に舫い置く。さすれば対岸の敵は、ここより渡河と思い兵力を集中させよう」

稚拙な作戦だが、これでも当時としては良くできた方略である。

勇右衛門が着々と準備を整えていると、初めは我関せずと傍観していた諸隊の中にも、渡河に参加しようという者が現われた。

「敵兵暫時増強の説、よくよく考えてみればまことに適論と存ずる」

芸州浅野隊、佐土原隊が協力を申し出、長州隊も一人置き去りにされる不安を感じて、やがては同調した。

「されば諸隊の兵は日のある内に休息させるべし。夜半を期して行動開始。このたびは、おいも先駆けはいたし申はん」

外城一番隊の半数、長州の半数、佐土原の半数を先鋒となし、残りを中軍、後陣とする。勇右衛門自身は指揮を執る必要上、中軍に立つ、と計画を語った。

そして、その夜半。兵たちは陣を密かに抜け出した。二里先の渡河点に進ませると勇右衛門ひとり残り、協力者の農兵隊長三人を手元に招いた。

「我ら、未明をもって新潟に斬り込む。おはんらは我らの移動を隠蔽するよう、未明より有りったけの弾薬を敵方に向け消費すべし。敵の注意をおはんらの方に向けて欲し

か」

「心得ました。精一杯敵陣に放ちまする」

「敵が逆襲に出て、こちらに渡河して来たならば配下の兵を退き、新城口攻撃の我が軍に逃げ込め。わかったか」

「それも心得ました」

命じ終えると予定の渡河点に走り、作戦を開始した。官軍の兵は岸辺の竹を切って口に食わえ、枚とする。先陣はうまく対岸に達し、中軍の渡河となった時、ついに敵兵に発見された。

たちまち川の中に弾が降って来た。しかし、先鋒の佐土原兵が応戦し、主力の渡河船団は辛うじて陸に着いた。

「良いぞ。敵主力は沼垂に釘付けじゃ」

河の下流から、銃の連射音が聞こえてくる。

「新発田藩兵は我らの先導を成せ。かねて絵地図に示したるごとく、一直線に敵米沢兵の本陣を突け」

前面の敵が敗走するのに合わせて進み、彼らの本陣に乗り込んだ。

勇右衛門が米沢の旗が立つ豪農の屋敷に駆け入ると、敵は一列に並んで箱の中から銃を取り出し、各自受領しているところだった。

「それ、好機じゃ。敵は弾も込めておらんど」
わっ、と鯨波の声をあげて発砲すると、敵は受け取ったばかりの銃も弾薬も放り出して逃げ散った。
勇右衛門は抜刀して突進する。村の曲り角まで来ると、向うから剣付き鉄砲を構えた洋装の兵士十名ばかりがやって来た。
（先に突入した味方が戻って来おったか）
と思ったが、どうも様子がおかしい。すると前方の一人が、
「月か！」
と合い言葉を叫んだ。
「谷！」
と勇右衛門は心得て答える。相手が銃口を下げたのでほっとすると、後ろにいた新発田藩兵が近寄って来た。
「御味方に似た洋装なれど、あれは米沢の兵でござる」
「どうしてわかる？」
「右上膊部に白線を付したるは、米沢藩の合い印でござる」
本当か、と見れば向うも不審そうに目を見開き、問うた。
「陣中不審なれば問う。貴殿はどなた様の隊か」

「薩摩藩外城一番村田隊」
勇右衛門が叫ぶと、敵は左右に列を開いた。
「敵だ、放て」
一斉射撃をした。が、よほどあわてていたのか、誰にも当らない。
米沢兵は、その場で急ぎ次弾を込めようとする。味方との距離は十間。
「吶喊！」
勇右衛門は敵の隊列に斬り込んだ。隊長らしき者が傍らの竹藪へ逃げる。
「待て」
一歩踏み入ったそこは藪ではなかった。足元に何もない。谷になっていた。
わあっ、と叫んで落ちると柔らかい所に止まった。それが敵の身体だと知った時は、勇右衛門も仰天した。敵の隊長は丈夫なもので、すぐに斬りつけてくる。
勇右衛門は示現流の太刀筋でこれに抗し、やっとのことで斬り伏せた。戦果の証として腕に付けた合い印を奪い、木々に取りついて谷を登れば、味方ははるか彼方を進んで行く。
後に勇右衛門は、この時の戦いを思い返し、
「いやしくも身は隊長にありながら匹夫の勇を発揮して、一個の敵を追ったこと。または銃士でありながら拳銃を放って相手を倒さざりしは甚だ不覚」

心中慚愧の念に耐えず、と語っている。

8

やっと味方に追いつくと、ここも激戦である。
猛烈な弾幕が張られ、敵は後退を停止した気配だ。
「急に反撃するとは、面妖な」
「原因は、あれでござわす」
兵のひとりが遮蔽物の陰から、百メートル程前方を指差した。
馬上の者が見える。金の家紋を打った陣笠を被り陣羽織姿の男が、采配を振るって、敗走する兵たちを引き戻している。
敵の部隊はこれに勇気付けられたものか、路上に膝を組み、座禅放ちの形で次々に発砲していた。
「敵ながら見事な武者振りじゃな」
「勇者には軍神が味方いたすものか、狙撃してもなかなかに当り申はん」
「どれ、おいが久方ぶりに狙うてみよう」
傍の兵からエンフィールド小銃を受け取ると勇右衛門は照尺を調整した。陣笠の家紋

の僅かに上へ狙いをつけるや、ゆっくりと引金を引いた。

轟音とともに、敵の指揮官は落馬する。と、同時に敵兵は再び算を乱して逃げ始めた。

「何という奴らか。己れらの指揮者であろう。逃げるにあたっては運び行くべきであるに、捨てて顧みることもせぬとは。兵の風上にも置けぬ」

勇右衛門は前進し、指揮官の倒れている位置まで進んだ。陣笠が割れ、後頭部が吹き飛ばされて即死の状態であった。

「かなり高齢の武士と見え申す」

白髪の付着した肉片を差して、部下が言った。

「我ながらむごいこつ、したもンじゃ」

勇右衛門は部下に命じて死骸を近隣の寺に運ばせた。

「隊長、敵砲の台場でごわす」

伝令が走り寄り、坂道の頂上へ顎をしゃくった。

「野砲か、臼砲台場か？」

「野砲ごわす。砲兵は全て逃亡」

「よし、見よう」

そこは村の墓地だった。墓石を積み重ねて防壁とし、十二斤、十八斤、二十四斤、と

いう比較的口径の大きな野砲が定石通りに設置されている。

勇右衛門が最初に急ぎ確認したのは、砲尾の点火口と砲口の詰め物だった。

通常、撤退に際して欧米の砲兵は、点火口に楔を打って発砲不能にするか、砲口に粘土など詰めて暴発を企む。

幸い、砲はいずれも細工をされていなかった。勇右衛門は命じた。

「よし、この敵砲をもって、敗走する敵に砲弾を浴びせるど」

「隊長どん、おいどんらぁ銃兵じゃ。こげな大きなものは射て申はん」

「この村田勇右衛門が手ずから教えるのだ。できぬ事など、なか」

散乱する砲の装具類を集めさせ、火薬量を計った。砲弾を込め、発砲手順を教えると、そこはやはり勇右衛門の部下である。あとは教えなくとも次々に砲撃を開始した。

新潟役人松長長三郎の死を描いた長谷川伸の『佐幕派史談』に、

「(七月)二十七日、まだ暗きころから西軍の新潟攻撃が進捗し、大砲の音がびりびり市中の建物をふるわせ、男女の叫喚が諸所で起った」

とあるのは、この捕獲砲による砲撃の描写である。実際に市中へ砲撃が開始されたのは、二十八日から二十九日にかけての事だろう。

新潟の陥落は二十九日の午前中であった。

米沢藩家老色部長門久長は、奉行所前の橋に生き残った米沢兵を集合させ、兵糧と路

銀四朱ずつを配った。彼の訣別の辞は兵たちを感涙させたという。色部は死地を求めて少数の兵と前進し、関屋というあたりで包囲された。もはやこれまで、と色部は愛用のアメリカ製スペンサー式七連発銃を射ちまくった。さらに弾倉が空になると太刀を引き抜き、立ち上がったが被弾した。

「是非もなし」

と、そこで自害し、首級は介錯した者が取って隠した。

勇右衛門は直後に、その話を聞いた。

「世に剣士という言葉があるが、色部長門どんは銃士である。敵米沢兵の捕虜は少なからざるように見受けれども、色部どんに敬意を表し、決して疎略に扱わぬよう」

と命じた。彼が注目したのは、色部がスペンサー銃を用いていた、という点である。

「スペンサーと申すは、用心鉄で薬室を開閉させる最新式の小銃じゃ。四年前、佐賀藩が輸入し、諸国に知られた。一挺が三十七ドル八十セントもする高価なものじゃ。家老とは申せ、東北の小藩が軽々と手に入れるもんではなか。これは何かあっど」

この新潟には他にも何挺かあるに違いない。探せ、ということになり、捕獲兵器の探索隊が隊士の中に組織された。

調べてみると、輸入品の古軍服、軍靴、新品の弾薬。そして、沼垂前面の敵陣よりスペンサー、スタール等、最新式小銃入りの箱多数が発見された。勇右衛門は、改めて捕

虜を尋問し、これが米沢・会津・庄内三藩が長岡藩の周旋により、直接アメリカから買いつけたものであることを知った。

「メリケン国は数年間、国内に同胞南北に分かれて争乱有り。近頃、この戦さ終ったために銃器が余ってござる」

米沢藩外国掛り方の捕虜は語った。

「当藩ではメリケンの新式銃を待ちこがれてござったが、この七月二十五日に到着。我らは旧式銃と交換し、明朝に沼垂の貴君らを襲う手はずでござった」

「何と」

渡河戦の初めに、敵兵整列して銃器を受け取るように見えたのは、この事であった。

「うーむ。危ういところじゃ。連発銃をもって攻め込まれればひとたまりも無かった」

勇右衛門は、スペンサー銃とスタール銃を手元に集め、外城一番隊の者へ優先的に配付した。スタール銃もスペンサー式と同じ用心鉄によって薬室開放する。金属薬莢を用い外観は酷似しているが、こちらは単発式である。

「皆々、長らく先込め式のエンフィールド銃で苦労の連続じゃったろう。以後は後装式なれば、弾丸を込める時もいちいち腰を上げて、棚杖（カルカ）を用いんでも良い。楽に射撃できっど」

「おお」

と一同、大いに喜んだ。

占領行政も勇右衛門の仕事となった。敵の遺棄した台場には外城一番隊の占領標札を立て、各町内には高札を出す。

「官軍当地を収めたる以上は、庶人ことごとく安堵すべし。また、官軍中において粗暴の事あらば、将官宿陣所まで申し出る事」

と乱暴停止の文句を自ら筆をとって書いた。

この間も、捕獲兵器の探索隊は活動している。新潟奉行所敷地内に町民が入り込み、何やら盗み出そうとしている、との報に彼らが急行すると、柄の悪そうな連中が逃げていく。「備荒倉」という名の倉庫が五棟もあり、扉が開いていた。

「文字から察するに、飢饉凶作の時に備えて物を入れておくところじゃろかい」

一番目の倉を改めると、和紙に包んだ蚕種が山のようにあった。これこそ、イタリア人商人が横浜から買い求めに来た品であろう。兵たちは資産を保護する目的から、固く封印した。

次の倉は奉行所が外国船と独自に交易するため集めた品らしく、漆器、馬具、羅紗、鳶合羽という雨具も大量に見つかった。

報告を聞いた勇右衛門は、備荒倉に衛兵を立て、鳶合羽は野陣の防寒に便利であろうと、それのみ捕獲品とした。この雨具は、その後、転戦する隊士たちから大いに重宝さ

れたという。

だが、探索隊の見つけ出したものは、役に立つものばかりではなかった。市中の遊里をまわった時、隊士が五人の外国人を発見している。彼らは戦争から避難するため、ここに潜んでいると身振り手振りで説明し、それぞれがイタリア、ベルギー、プロシア人などと名乗った。

探索の一人が怪しみ、彼らの鞄を改めると、オランダ、アメリカの旅券が見つかった。その裏に平松武兵衛の名がある。

「平松じゃと」

報告を受けた勇右衛門は眉をひそめた。それは長岡藩河井継之助と親しいオランダ人武器商人ヘンリー・スネルの日本名である。

「そ奴らじゃ。敵方にこれほどの新型兵器を与えたのは」

「ちょうど良か。和郎の売ったスペンサー銃がどれほどン威力があるか、その身体で試してもらおうじゃなかか」

いちいち杭にしばりつけ、銃殺せよと部下たちは憤激した。

「止めんか！」

勇右衛門は、一同を落ち着かせて言う。

「おいも、奴らは憎か。他国民の血で荒く稼ぐは人間にあらず。じゃどん」

くやし気に下を向いた。

「ただ今は我が国も危うい立場にある。外国人を殺して外国軍隊の介入を受ければ、国内の混乱は目を当てられんことになろう。おはんらは、神戸での備前岡山藩兵と諸外国陸戦隊の衝突を覚えておろうが。また、堺で土佐藩兵がフランスに責めを負わされ十一名が切腹した。あン時は、おいが見分役として出張したんじゃぞ。仕方ンなか。後日の面倒を思い、ここは奴らを放つしかあるまい」

「口惜しか」

部下たちは地を叩いて怒りを収めた。

ヘンリーとエドワルド兄弟を含む五人は兵たちが銃剣を構える中、新潟の沖に碇泊する外国船へ、その日のうちに送られて行った。

北越の戦雲

1

新潟での捕獲兵器は総量数百トン、銃器だけで二十数種にのぼった。

「奥羽越の同盟は、これだけ種類口径の異なるものを輸入し、万一故障続出の折りは、一体どのように修理するつもりであったのだろうか」

官軍参謀付きの新井陸之介は、兵器の山を前に嘆息した。

この新井は、新潟攻めの直前に勇右衛門の隊へ付属し、市内突入の際は指揮の一翼を担うはずであった。ところが、泥道に足を取られて転倒し、ひどい捻挫を負って後方に下がっていたのである。

「早い話、隣に居る味方に弾を分けてもらうことも難しくなる。これだけ口径が違っておればなあ」

「左様」

勇右衛門も、敵方の名札が付いた捕獲銃を一挺抜き取って、その機関部を撫でた。

「東北の諸藩は、長岡・米沢を除き諸外国の事情に全く疎か。異人の商人どもは、これ幸いと、古鉄（屑鉄）に近いものを摑ませると聞いており申す。その支払いで、大事な国内の金や生糸が多く流出いたしおるとか。まっこて、口惜しか」

勇右衛門が偶然、銃の山から抜いたのは後装銃であった。機関部の遊底に大きな指掛けが付いている。口径は他の小銃より少し大きく十四・七ミリ。イギリスのウィルソン・ライフルと呼ばれるものだ。

「長岡藩の河井に軍装類を販売していたスネル兄弟など、まだ良心ある商人ごわす。こうした新型を売っておったのでごわすからのう」

勇右衛門は刻み目の付いた指掛けを引き、遊底を露出させた。

「このウィルソン式小銃は、メリケンの庶人戦乱（南北戦争）を当て込み、イギリスが南方（南軍）に送ったものと聞いちょり申す。指掛けの形が海老に似ちょるので『海老尻銃』。あるいは、遊底を引き出す時、横に付いた栓を引くゆえ『横栓銃』などと横浜の洋銃商いでは申しておるそうな」

「珍しいものだな。通常の後装銃と違い、遊底部は真後ろに引き出すのか」

多少洋銃の知識がある新井は、目を輝かせた。

「銃尾へ一直線に引いて遊底開閉する形式を、『直動鎖閂式』と申す。肩に構えて次弾

を装塡する際、遊底を上方に引き上げるウェストリー・リチャーズや横に開くスナイドルに比べ、狙撃戦には有利でごわす。その理由は」

上下運動が少ないため、一発放つごとの射撃動作に乱れが少ない、と勇右衛門は説明した。

「ただ、このウィルソン式は、そこまで造っておきながら、未だ雷管外装式。装薬と発火装置が別々でごわす。そのあたりが、おいは好み申はん」

「村田君」

新井は、その銃を手にして二度三度と機関部を操作し、

「この銃を一挺、分与願いたい」

「参謀付き自らが、兵に混って銃隊に入るつもりごわすか」

「いや、怪我した足の杖代りにいたす」

「ほう、豪気なことじゃ」

「官軍多しといえど、後装式のイギリス杖を持つ者は、この新井陸之介ただ一人だ。あはは」

新井は弾薬若干を合わせて受け取り、出雲崎の本営へ帰って行った。

新潟を駆逐された敵の一部は、執拗にその奪回を企んでいた。

「新潟の三里彼方、大野なる宿駅に敵残党数百が分宿の由。急ぎ追撃を願う」
と勇右衛門の隊に使いが駆け込んで来たのは、二日後。
「良か。これでまた戦よ」
彼はほっとして、戦闘の準備を再開した。大都市である新潟は一面、兵たちを堕落させる魔性の地であった。天領として長く富裕の地であったため遊里があり、女も酒も上質である。ここに長く兵を止めておけば、多くの失策を招くかもしれない。
「夏の初め、この地に流れ込んで来た先達たちもそうであった」
先達とは、江戸を脱走した幕府陸軍歩兵隊や水戸藩の佐幕派の事である。新潟の誘惑に負けた彼らは掠奪暴行を市内各所で行ない、結局は市民の支持を失って官軍に敗れた。
他の隊の指揮官も同じ考えであったのだろう。続々と諸隊が大野に進んだ。薩摩の支藩佐土原兵二隊、長州兵一隊、岩国兵一隊、佐賀兵一隊、福岡兵一隊、そして村田隊一隊。残りは新発田の降参兵や草莽の志願兵である。
この思わぬ勢力の集合に、敵は装備を捨てて四方に遁走した。
官軍は大野の八里先、中条に進む。ここからさらに八里ばかり山道を行けば、関である。関を越えると敵米沢藩の本領に至る。
勇右衛門は新潟戦の勝利により、味方の推戴するところとなっていた。

「村田殿、どうであろう。米沢境いの進攻策として、率先、関を取っては」
各隊の隊長らは言う。勇右衛門にも否やは無い。村田隊の他にも福岡や佐土原の一隊が加わって、一日で越後国境い関の村を占領した。四方に偵察の兵を放つと、米沢兵は関の近く榎峠に巨大な台場を築いている、と報告が来た。
「山中の台場攻めは、木ノ目峠その他で体験済みじゃ。恐れることは無か」
臼砲の位置はここ、奇襲の際は兵をこの位置に配することと地図で決めていると、その夜、陣中が騒がしくなった。
「何事か」
「米沢口参謀、着陣ごわす」
「米沢口の参謀じゃと？」
何かの間違いではないか、と薩摩人も福岡人も首をひねった。この方面に専従の官軍参謀は居らず、勇右衛門が成り行きで司令官と臨時参謀を兼任していたのである。
「誰か居らんか。これなるは土州藩深尾三九郎である。一小隊を率い、ただいま着到。従兵を立て、諸隊整列せよ」
横柄に命令する。
その声に薩摩や佐土原の士官は、佩刀を一斉に反らせた。
「何という物言いか。こちらには、村田どんという指揮者がおるというに。新参者が」

斬ィ殺してくれっど、と鯉口を切る者もいた。皆、米沢の進攻を前に気が立っている。

（これは、まずか）

勇右衛門は皆を抑え、自ら先に立って玄関に出てみた。

黒のゴロ服に赤熊の被り物を身につけた、やけに派手な若い男である。

「貴官が村田勇右衛門殿であるか。わしゃあ、深尾じゃ。以後、貴官に成り代り当部隊の指揮を執る。これは総督仁和寺宮殿下の御命令書である」

まるで罪人へ下知するように奉書を突きつけた。勇右衛門は片膝をついて頭を下げ、ただちに指揮所の床机に彼を導いた。

官軍の陣営は直後、蜂の巣を突ついたような状態になった。

「本営は何を考えておるのか。この決戦の秋に当り、地理・人情に疎き新参者を参謀に任ずるとは」

「思うに、長（長州）の山田市之丞は、薩摩がこの方面で活躍いたすをおもしろからず。薩の黒田参謀との確執によって、土佐の者を村田殿の上へ置いたに違いない」

土佐人が両藩の不和の材料に利用されることは、当時往々にしてあった。

「土佐の者は常に戦に厄介をもたらすのじゃ。おはんら覚えておろう。若僧の岩村精一郎が小千谷の談判で長岡藩の河井継之助を罵倒し、談判決裂。以来、我らはこうした北

越の混乱に巻き込まれた。き奴のため、我ら官軍がこの地で支払った代償はあまりにも大きい」

一人の薩摩兵が憎々し気に叫んだ。

「またしても夜郎自大の地五郎（田舎者）を参謀に戴き、せっかくの戦を苦戦といたすか。チェイストー」

福岡や芸州兵の一部にもこの人事に不平を唱える者がいた。

「今まで村田勇右衛門あったればこそ、百戦百勝であったのだ。断固新参謀着任に反対すべし」

勇右衛門は、この事態に焦った。

（米沢口への大事な進撃が停止する）

そればかりか、士気までが日々低下していく。

（本営の有様はいつもこうじゃのう）

彼はついに自ら馬を走らせて、新発田に前進していた官軍本営へ意言具申をする策に出た。

「おいが居らん間は、無用に戦端を開いてはならんど」

と命じて新発田への道を急いだ。

2

勇右衛門は以後、数回も山道を往復することになる。本営の人事命令はまた混乱し、彼を追い返すかと見れば次の日に再び出頭指令を出す。

（朝令暮改とは、このことじゃのう）

本営は、一度参謀に任じた深尾三九郎を戻すよりは、勇右衛門も参謀に任じて両立させる策を示す。

「命令二途に出ずるの嫌いありて、これは甚だよろしからず」

勇右衛門は、それにも強く反対した。

「深尾参謀は初めから人徳が無か。解任せいとは申さぬが、せめて実質指揮権の無い『お飾り武者』にせいでは、兵たちも働きもはんど」

食い下がっていると、遠くこの混乱を耳にした総督の宮が最終妥協策を示した。

「村田勇右衛門、仁和寺宮様の御旨意である」

奉書の前に彼が平伏すると、使いの者は声をあげて、

「『出先に於て参謀申談じ、諸事心配致候様申付候事。総督府』」

と読んだ。

「これは、どのような御旨意で？」
「わからぬか」
総督府の使者は、渋い顔で説明した。
「宮は、村田勇右衛門の武功を御耳になされ、『彼の者は、麿が沙汰を受けて新潟上陸の先陣を切り、麿との約定を違わぬ者なり』と申された。その村田が人事に悩むは不幸であると、今般『参謀申談じ』なる臨時の役職を御考案なされ、村田を任ずべしとの御旨意である。有難く思うように」
「されば、この御役を受けたる時は、これまで通りに外城一番隊の銃隊隊長兼任でもよろしゅうごわすか？」
「苦しゅうない」
勇右衛門は、安堵した。未熟な新参謀の「申談じ」すなわち同格の相談役だが、実質的に米沢口攻撃隊の指揮官は村田なりと総督自らが認めたのである。このあたりで勇右衛門も妥協し、帰隊しようとした。
すでに夜である。本営の馬丁が心配した。
「山道を伴も無く、しかも闇夜に馬を走らせるは無謀というものです。今宵は泊りになされませ」
と止めた。が、米沢口の戦機は熟しつつあり、一刻の猶予もならない。勇右衛門は忠

告を無視し、腰に馬乗り提灯の柄を差して馬上の人となった。
笞を当てて山道を進むうち、数里行ったところで、乗馬が一度つまずいた。
（やはり無理な帰り道じゃったか）
と思った時、馬がもう一度つまずく。今度は大きく横倒しになったため、勇右衛門は鞍上から落下した。暗がりの中で何とか体勢を立て直そうとしたが、どこを打ったのか激痛が走り、そのまま気絶してしまった。
二刻も山道で転がっていたらしい。鳥の声を耳にして、ようやく目を覚ませば東の空が白み始めている。
幸い馬は近くで草を食んでいた。勇右衛門は痛みをこらえ肘で馬の近くまで這い寄り、苦労の末に鞍へ身体を押し上げた。そのまま自分の陣営に駆け入って、
「見よ、総督の宮殿下が、おいにかようなる御役を下さったど」
奉書紙の命令書を示し、直後再び彼は気絶した。

金瘡医に勇右衛門の打身傷を確かめさせたところ、骨折ではないがかなりひどい捻挫であろうとの見立てであった。
「不思議なことじゃ。新井どんが捻挫して訪ねて参ったと思うたら、直後においどんも捻挫し申した。災厄はうつるものかもしれん」

勇右衛門は言ったが、満足に歩行できぬことには閉口した。新井陸之介の行動に倣ってウィルソン式後装銃を杖代りにして指揮所に籠る。総督からの奉書を見てから深尾三九郎は急に大人しくなり、何事も勇右衛門の言葉に従う風であった。

勇右衛門の軍は松ヶ崎・沼垂の戦い以来、近在の絵地図をもって攻撃の指揮を執るのが通例となっていた。しかし、進撃があまりにも早かったために米沢口の作戦図が無い。

「ここはやはり、おいが行かずばなるまい」

勇右衛門の言葉に、諸隊の隊長は驚く。

「五体満足な者でも難渋する山道に、杖無しでは歩けぬ隊長が、どうやって偵察いたすのでごわすか」

外城一番隊士などは、必死になって止めた。

「おいたちが数日、杣人に化けて山籠りいたしますゆえ、隊長は本陣で傷の治療をしてたもっせ」

「そうはいかん。指揮官自ら地勢を心得てこそ、百戦百勝いたすものじゃっど。なに、おいにも考えがある」

近在の百姓らが山に入る時、畚と称するものを用いる。老人などを太い棒の下に吊るした網に入れ、大の男二人で担って行く。

「それに乗って行くわい」
「そいは、もっこ乗りではごあはんか」
皆呆れた。
「せめて、山駕籠になされよ。官軍の威厳というものがござろう」
と止め立てする者もいる。この時代、畚に乗る行為は大変不名誉な事とされていた。江戸では罪人が病いや怪我で溜に運ばれる時、これに乗せられて行く。幕末に来日し、イギリス公使館一の日本通と呼ばれたアーネスト・サトウなどは、その言葉の流暢さを日本人に褒められると、まんざらでもない顔で、
「おだてともっこには乗りたくねえ」
と江戸っ子の真似をして見せた。もっこ、というものは、さほどに忌み嫌われていたのである。だが、勇右衛門は、
「畚は山駕籠に比べ軽く場所を取らん。乗らぬ時はからげて一人で担うても行ける。良い事づくめじゃ」
と気にも留めなかった。
勇右衛門は天候を読み、近在の百姓四人を傭って峠道を上った。官軍の従卒はたった一人で、これにウィルソン銃を持たせている。数時間、山のあちこちを見てまわったが、米沢兵の防備はいかにも厳重で、尾根から尾根へ哨戒線を引いている。勇右衛門は

手控えを出して簡単な距離計測をし、山越しの敵射線を描いたりしたが、ふと、妙なことに気付いた。

たった一ヶ所、敵が哨戒の兵を置いていないところがある。小銃の射線の延長線を引いていくと、線の交差しない所が見つかったのである。

「あの山の尾根には、道が無いのか」

と尋ねると、畚を担いだ初老の百姓が、

「いえ、あるにはありますが、人は通りましねえだ。それだから、米沢の侍も陣所を造りましねえので」

という答えである。不審に思いさらに尋ねると、

「隊長様は、にわかに御信じにならぬでしょうが、あの山にはでっけえ老猿が棲んでおります。人を見ると襲いかかり、喉笛を掻き切って食い殺します。その子分という山猿がまた数百匹ござえまして、はあ。こ奴らに出合って生きて帰った者はござえませぬ。まことに恐い所でござえますので、関の者も米沢の者も近付きませんので」

「なんと情け無か話じゃ」

勇右衛門は苦笑した。

「世に猿侯などと申し獣が人を襲うは、女子供の読む絵草子中の噺なり。鎌倉の時代は知らず、今の世には鉄砲という利器があるではないか。なぜ山狩りをして害獣を取り除

かぬか」

「相手は数十年も生きた化け猿でござえます。頭が良い事、そこらのガキより上で。数町先の火縄の臭いを嗅げばすぐに逃げ出し、猟師が帰れば意趣返しとて罪も無き杣人を殺します」

百姓らは震えながら語った。勇右衛門は小手をかざして、老猿の棲むという山の頂上を見上げた。

（あそこに監視所を造れば、敵の小銃台場ことごとく眼の下に見下ろすべし。しごく便利ならん）

「よかろう、畚をあの山の尾根に向けて行け」

「御冗談を」

「おいどんは、ここに新型の小銃を持っちょるど。こいは火縄を用いぬゆえ臭いもせぬ。また、現在はこちらが風下じゃで向うには気付かれぬ。進め」

「こればかりは、隊長様の御命令とて、お受けいたしかねます。お許しを」

百姓らは大いに嫌がり、手を合わせた。

「仕方無か。それではその方らは、ここで隠れておるのが良かろう」

勇右衛門は従兵に耳打ちし、四人の百姓を逃げぬよう見張っておれ、と命じた。

「隊長は、いかがなさる」

「ここからあの山までは、二町ばかりじゃ。這ってでも行く」

勇右衛門は畚を降り、ウィルソン銃を負い革で背にくくりつけて、本当に藪の中を這い出した。

（なるほど、猿が群を成しておるのう）

一町程近寄ったところで確認してみると、あちらの木々、こちらの下草の茂みに五匹、十匹と猿が遊んでいる。

（さて、親玉はいずれか）

何気なく山頂近くへ眼をやって、勇右衛門は仰天した。並の人間ほどもある影が、松の枝元で動いているではないか。

（こ奴が化け猿か）

さらに半町足を引きずって進み、枯れ木の端に据え銃をした。遊底を引いて一発を塡め、雷管を被せた。こういう時、直動鎖閂式の銃は狙いを定めたまま楽に操作できるから便利である。他の猿が襲いかかってくる時に備え、予備の弾を脇に置いて静かに引金を引いた。

手応えあって、松の枝から巨大なかたまりが落下する。

「わっ、大猿様が弾かれたあ」

後方から二人の百姓が駆け上がって来た。

「これは大変なことをなされましたな。子分の猿ども、親方の仇とて襲って参りますぞ」

勇右衛門の両腕を取って引き戻そうとする。

「阿呆を申すわい。すでに大猿とやらは死んでおっど。おいの腕を信ぜよ。その証拠に、子猿どもは、ほれあのように逃げ散っていくでンなかか」

笑いながら勇右衛門は松の木のまわりを指差した。並の大きさの猿は初め遠巻きに眺めていたが、彼が立ち上がって姿を見せると一斉に腰を浮かせ、奇声を発して木々に飛び移った。

しばらくすると、四方の山々で銃声が鳴り出した。猿の群が米沢の小銃台場に移動し、驚いた敵兵が発砲したものと見える。

「どれ、大猿様とやらの御尊顔を拝するとするか」

勇右衛門は足を引きずって松の根方に進んだ。

「果して命中し、弾丸は猿の胸部より肩にかけて射貫きあり。これを熟視すればすこぶる巨大の猿にして、その丈四尺八寸（約百四十五センチ）あった」

と彼は後に語る。

「さあて、邪魔者は無うなった。山上より周辺の敵情を偵察すると」

松の根方よりさらに上へ行けば、猿の移動で敵陣に発砲煙多く立ち、狙撃兵の隠蔽位

置までが丸見えだった。

「これは良か」

勇右衛門は矢立を出して偵察図を描き、

「大猿も持ち帰るど」

二人の百姓に自分の畚を担わせた。予備の畚に大猿の死骸をくくりつけて、ただちに帰陣する。

「またその大猿は持ち帰り、猿汁にして各隊に分かち、皮は今日もなお村田氏の家に存ぜりと言えり」（『村田銃発明談』）

勇右衛門としては、洋式銃による猿退治をしてみせることにより、「頑迷固陋」なる百姓たちに文明の力を見せたかったのであろう。だが、猿汁というのはやり過ぎで、同じ官軍諸隊の兵たちも気味悪がって箸をつけず、

「薩摩人は、やはり化外の民である」

長州兵などは大いに騒ぎ立てたという。

3

米沢藩兵に対する攻撃は、二日後の未明と決定した。官軍二十一小隊のうち、因州、

長州、薩摩村田隊の半数が正面の難所を受け持つ。右翼側面は佐土原、土佐に芸州の二小隊。左翼は長州、岩国の連合隊に佐土原の各一小隊。これらは全て装備の完全なる部隊である。残りは関の本営で予備と成し、近隣の敵奇襲に備えた。

「前の沼垂の例に倣って、この地の百姓らにも黒い筒袖と股引(ももひき)を着けさせよう」

狭い村の中のことで、男子は三十人程しか集まらなかったが、これに火縄銃や棒を持たせ、万一の時は大いに騒げと命じた。

「これも案山子(かかし)ンごとごわすの」

配下の者が自嘲(じちょう)気味に言うが、兵力の少ない官軍側としては他に有効な手だても無い。

そのように手配し、翌々日の夜半に出撃した。

勇右衛門は、ブリキ製の「薩摩提灯」を下げ、相変らず畚に揺られて行く。

山道に至り、正面の銃声を合図に両側面も合わせて兵を繰り出せば、米沢兵もこれに応戦する。

相手は射ち下ろし、味方は上方に向けての射撃で、こちらはまったく不利と見えた。

苦戦するうち、新発田の本営から参謀の薩摩人黒田了介がやって来た。

「村田どんな、だれもしたかァ（疲れたのか）。新潟攻めの勇夫(ますらお)が、手ぬるいことじゃっど」

横柄な口をきく。勇右衛門がむっとしていると、黒田は小馬鹿にするように唇を曲げた。

「今日の戦を見るに、先刻来大筒の響きばかり耳にいたす。元来、大筒なるものは堡塁の破壊のみに用いる。中の兵を損せざるは甚だ手ぬるい。すみやかに小銃の兵を前進させるべし。人が不足なら、おいどんの一小隊を貸与してもよろしい」

勇右衛門は、カッとした。温和なこの男も、苦戦で気が立っている。

「未明よりの戦いでは当方、大砲は用いておらず。むろん、敵米沢兵にも大砲の備え無し。初めから我ら小銃兵のみで交戦してごわす。山中の小台場など、数刻で落として見せ申すで、おはんの手兵ン手は借りぬ。脇で見ておるが良か」

と言って畚の台に上がった。

（後方勤務のド素人めが）

と、彼は怒鳴りつけたかったであろう。明治になって黒田は、この時の「大筒の音」が何であったかを知った。米沢藩には上杉景勝以来の伝統を持つ一人持ちの三十匁筒三百人の狙撃隊がいる。彼らが一斉に放つ銃声を、黒田は大筒と聞き間違えたのである。この三百人に、官軍の諸隊は釘付けとなった。

勇右衛門は興奮している。かくては、突貫の他なしと思い、

「村田隊、銃に剣を付けよ」

敵の堡塁十間ばかりになると叫んだ。米沢の兵も勇士揃いと見えて、この声を聞き身を乗り出して来る。

「行け」

後は銃剣と刀と槍の混戦である。米沢の兵は皆、軍服や鎧小袖の上に藁縄で編んだ陣羽織とも雨具ともつかぬ防具をまとっていた。これは斬りつけても通さず、叩いても固い。実に堅牢で味方は閉口した。

勇右衛門は、ウィルソン銃の代りに新潟で捕獲したスペンサー式の七連発騎銃を片手に構え、これを方々に放って敵を追った。一度などは白兵戦の最中、至近距離から狙撃を受けた。ちょうど銃を下ろして抜刀し、

「進め、進め」

と叫んだ刹那である。堡塁の真横から銃声が聞こえた。彼の持ち上げた刀の柄頭に命中し、柄を射抜いた弾は、脇を進む因州小隊の小頭に当った。

勇右衛門の白兵戦談話には、こうした危機一髪噺が多いが、この時もその因州兵は即死であったという。彼には戦地における強運のようなものが憑いていたのであろう。

数刻の戦いで榎峠の敵は台場を放棄して逃亡し、官軍諸隊は射撃を中止した。死傷者の勘定をしてみると、意外にも最大の負傷者は左翼で待機したままの岩国隊である。

「我ら、前進の途中に巨大なる蜂の巣を誤って叩いた。隊士一同、数万の蜂に襲われ、

これこの通り」

岩石のように腫れあがった面を見せて、岩国隊の指揮官井上某は泣き笑いする。諸隊の士官も、これには同情の体であった。

また、この戦いでは米沢藩士五人を捕虜にした。勇右衛門は、諸隊の中で占領した堡塁の警備兵を選抜し、自身はこの捕虜を連れて関の前線指揮所に戻った。

「武士が捕虜になるなど、恥の極みじゃ。斬っ捨つるが良か」

「そうじゃ。おいどんの太刀の、その斬れ味を試してみようかい」

勇右衛門の隊にも狂暴な者がいる。彼らは捕えた者を庇うという心が無く、現に松ヶ崎の上陸戦では、某藩の家老を駕籠の中で刺殺。沼垂では協力を申し出た絵師の山崎石州さえも殺そうとした。

「おいが生虜を得たは、後々の考えあってのことじゃ。以後、無抵抗な者を試し斬りするなンど吐かす奴は、おいの佩刀の味を教えてくるっぞ」

勇右衛門は、兵たちに西洋の軍隊では捕虜をどのように扱うか、人道とは何か、を一から説明した。

この声が五人の捕虜にも聞こえたらしい。翌日、彼が訊問を開始すると、皆意外にも素直に答える。

「米沢上杉家は奥羽越の同盟では重鎮と聞く。この方面には幾程の兵を派遣しておる

か？」

「およそ二千五百」

「装備は如何（いかん）」

「半数が洋式兵、古式の甲冑（かっちゅう）兵もその中核は米沢三十匁の抱え筒隊でござる」

榎峠で官軍を苦しめた三百人の鉄砲隊は、早々に後退して八里彼方の大里（おおり）峠に集合する手はずであった、と答えた。

「大里峠とはいかなる地形か」

と問えば、米沢の捕虜は自慢気に、

「榎峠のごとく嶮岨（けんそ）の地にあらざれど、道は大人一人行き交うばかり。その両側は崖（がけ）にしてゆるゆると長く、一人の狙撃者を置けば千人の兵を阻止するに難無し。その昔、上杉家藩主、この地を選定して、これぞ米沢を守る第一の要地なり。万が一の時は兵を精選し、力を尽して最後の一兵まで戦えと申された。かような峠でござる」

と答えた。

「左様なるか」

勇右衛門は、その晩、自分と同じ考えを持つ佐土原や芸州の隊長たちを陣中に招いた。

「新潟占領より、すでに二十日以上。別働の官軍は白河口より会津に攻め入り、今頃は

会津若松城下へ進んでいることじゃろう。榎峠はうまく落とせたが、大里の峠は左様参らぬ情勢じゃ。ここで攻撃に刻を費やせば、何のための白河口援護を名目とする我らであろう。ひとつ、我が思案にて米沢へ使者を立てる。諸君もし我が考えに反対の心あらば、各々の信ずるところで行動せよ」

と語った。

「されば、村田副参謀としてはどのような？」

「まあ、明日を見ておれ」

翌朝、勇右衛門は五人の米沢兵捕虜を引き出した。いよいよ、斬られるのかと覚悟した一同に、彼は文箱を一個手渡した。開けてみると短冊が一枚入っている。

敵だとてなにしに人のにくからん
　おなじ皇国のおなじ身なれば

という文字が書かれている。さしてうまい歌とも言えないが、これは勇右衛門の自作であろう。

「この歌と一書を持って、自陣に立ち戻り、米沢の参謀か指揮官に示せ。朝廷の御考えは朝敵の殺戮にあらず。その恭順を待つにあり。今日、内戦によって本朝は混乱。その

混乱につけ込み、諸外国は我らの国土を虎視眈々と狙えり。いたずらに同じ国民同士戦うは、彼らの利となるのみ。我らそれを憂うるによって、かくは一書を送るなり」

「村田殿」

捕虜の一人が問うてきた。

「我らを信ずる心はありがたい。されど、この書面に我ら米沢が応ぜぬ時は、いかがいたすおつもりか」

「知れたことである。我ら官軍は全力をもって大里峠を貫き、米沢本領を焼き尽すのみ。その時は、汝らも我らに銃を放て。今日のように物柔らかく接さず、即座に殺すであろう」

勇右衛門は五人に、それぞれ新しい衣服と金五両を与えて送り出した。

4

米沢藩は、もともと奥羽越三十一藩大同盟の呼びかけ役であった。しかも一時は会津と協力し、江戸から白石に動座した上野輪王寺宮を立て、「太政天皇」として新政権を奥羽に作ることまで考えていた。

しかし、隣国新発田藩の勤皇寝返り以後、藩内は諸説沸騰し、さらに官軍の越後占

領、白河口の別働官軍が会津の関門母成峠に迫ると掌を返したように動きを止めた。

母成峠で敗走した幕府脱走隊の大鳥圭介は、米沢の国境いへ走り、銃器や食料の援助を請うたが冷たくあしらわれた。米沢兵は、まるで彼を敵のごとく取り扱い、

「嗚呼、人心の翻覆頼むべからざる事、浮雲草露の如し」（『南柯紀行』）

と、大いに嘆かせている。

一体、米沢は四方を山に囲まれ、いざとなれば峠を閉ざし、それにて安泰である、という考えが濃厚であった。

その峠道は五つある。福島へ向う福島街道、会津若松を結ぶ会津街道、仙台へ向う仙台街道、山形へ向う最上街道、越後へ抜ける越後街道（これに杣人の歩む間道を二本加えて「七街道」と呼ぶ者もいる）。それらの道は、山国米沢に貴重な塩や海産物を運ぶ路線にもなっていた。

中でも越後街道は、最も重要と考えられている。米沢領松原、手ノ木、小国、玉川から越後に抜ければ、同国岩船郡にも米沢の飛地領七十七ヶ村、約一万三千石の預り地が存在する。戦国の英雄上杉謙信から発し、一時は百二十万石の主となった後、米沢で十八万石にまで衰退したこの藩は、いつの日にか謙信の故郷越後平野に舞い戻ることを夢見ていた。

その大事な道を自らの手で閉ざしたことに、一部の藩士たちは落胆する。そこへ飛地

領の御用商人渡辺三左衛門が、芸州広島の密書を携えて米沢に到着した。また、福島街道の小坂村へ陣を敷く米沢軍中に、二本松へ前進した土佐の参謀谷守部（干城）から恭順を勧める書状が届いた。

米沢へ揺すぶりをかける手紙は、勇右衛門のそれを合わせ、同じ時期幾つも発せられていたのである。

八月二十四日から深夜にかけて、会津から米沢に駆け戻った米沢の偵察兵は、次のように藩庁へ報告した。

「昨日、二十三日早朝より上方軍（新政府軍）会津若松城下へ乱入。八方へ火を放ち、城下焼亡。最早落城の体。見届け来て候」

「城は燃えているのか、いないのか。それを先に申せ」

「城下の煙はなはだしく。若松鶴ヶ城は紅蓮の炎に包まれておるやに見えました」

この時、城はまだ燃えていなかった。しかし、城の周辺で戦う会津藩士ですら天守閣炎上と誤認した。有名な白虎隊士の飯盛山集団割腹は、そうした見誤りから生まれた悲劇であった。

米沢藩の首脳陣は、あわてて会議を開く。

「右に付ては、一刻も早く悔悟謝罪これ無くしては御国（米沢藩）も危亡旦夕との廟議決し」

急いで使者を官軍に送る事とした。

勇右衛門は五人の捕虜を放った後、事態を静観していた。毎日、占領地の巡察をし、村々の百姓らを呼んで土地の様子など聞き、時には彼らを農兵にして洋式銃の操作を教えるなどして暇をつぶした。

数日後、戦闘で破れた軍服を自らの手で繕っていると、

「おや、いけません。官軍の隊長様ともあろう御方が、針仕事など。私におまかせ下さい」

と初老の上品な婦人が、突然縁側に現われて手伝い始めた。

「これは済まんこつごわす。おまんさぁは、どこの方でごわすか？」

「はい、この村の差配方の」

妻である、という。男の声であった。驚いて振り返ると、縁側の端に庭から片手を置いて頭を下げるこれも初老の者の姿があった。

「見かけぬ御仁じゃの」

「はい、今まで隠れておりました」

「おいは、当地進出軍の参謀申談じ役、村田である」

「私めは、関の下村に住まいいたします、渡辺直左衛門で」

名高い米沢藩御用商人の一族であろう。

「おはんは、米沢よりの密使じゃな」

「左様でござります。まずは一書御披見願わしゅう存じます」

差し出し人の名を見ると、米沢軍参謀斎藤主計とある。これは、家老千坂太郎左衛門の下で軍を統轄する甘糟継成、宮島誠一郎、雲井龍雄らと並び立つ斎藤篤信のことであろうと思われた。

勇右衛門が黙って読み終えた頃、彼の軍服の修繕は終った。

「これは、また、ありがとさんでなあ」

「斎藤参謀への御返事はいかがなさいましょう」

渡辺直左衛門とその老妻に、勇右衛門は口頭で答えた。

「されば、こう伝えられよ。『講和申し出たきにつき拝謁得たしとの趣意、承諾いたし候。場所は榎峠の先、大里峠との中間なり。期日、時刻等は、貴下の都合にまかせる。さらに文書にて申し送られよ』とな」

渡辺夫婦は庭先から音も無く出て行った。

（岩船郡の渡辺家は、米沢上杉氏の忍び御用も務めておるやに見ゆるの）

勇右衛門がさらに待っていると、次の日、米沢の飛脚が斎藤の手紙を持って来た。まず、捕虜に対する心遣いを感謝し、期日を定め、面談の折りは、目標として上杉家連代

の旗を持参するとあった。

主参謀深尾三九郎へ文書を示すと、彼は大いに怒った。

「米沢の凶徒は、どこまで官軍を愚弄いたすか。講和の席に謙信以来の旗印を押し立てて参るは、これ戦国以来の権威を我らに見せて威すつもりと見えた」

無礼千万。こうなれば、講和は初めから無きものとして銃火で迎えるばかり、とわめき立てた。

（小僧、とうとう本性を暴露したか）

勇右衛門は、物静かに手を上げて制し、

「参謀、何を言うちょるか。連代の旗印進め来たるは、米沢の藩公が直接降伏の席に参るということではなかか」

と言った。

「講和の席に祖先の旗を持ち来たるは、我らを正統な対戦相手と認め、敬意を払っておる証じゃ。かまわぬ、承諾したと返答せよ」

飛脚に文を持たせて帰した。

戊辰年表によれば、八月十九日に旧幕府海軍は江戸湾を脱走。嵐の中を進んで同二十六日、仙台領に到着。二日後、米沢藩降伏の意を示すとある。

勇右衛門と深尾、諸隊の隊長らが待ち受ける場所に、その日正午近く、静々と米沢の

兵団が現われた。

先頭に問題の旗印がある。謙信以来知られた「毘」の指物ではなく、紺地に日ノ丸の軍旗であった。これは後で聞けば、謙信の父為景が朝廷に御下賜を願った旗で、当主出陣の際は組立て式の御旗堂を建て、守護するものであるという。

「朝廷を常に思う祖先以来の心を表わした御旗でござる」

斎藤主計は山道で頭を下げた。説明を聞いて深尾は赤面し、勇右衛門はそれ見たことかと腹の中でつぶやいた。斎藤はさらに続けて、

「弊藩（自分の藩）は、僻陬の山中にあり。朝廷の御趣意も存ぜざりしところ、貴下の歌にて目が醒め、大いに悟って今日の講和に至って候」

と言う。勇右衛門は答えた。

「いや、御旗を望み、貴藩の十二代藩公わざわざの御出馬と知って大いに喜んでおります」

こうした口上は、互いに言葉の訛がひどいため謡曲の心得ある者が双方立って通訳した。知らぬ者が見れば、山中の小道で何を唄い合っているのだ、と腹を抱えたことだろう。

やがて斎藤は後方の米沢軍中に戻り、勇右衛門らは関の陣営に待機する。

上杉家十二代藩主斉憲が、僅か七人の伴まわりでやって来たのは、小半刻もせぬうち

のことであった。勇右衛門はかねて用意の宿所へ主従を案内し、諸隊の隊長同席の上で講和の文書に署名させた。

後は、本営のある新発田へ一同を送るのみである。山道ゆえ、出発は翌朝となった。

この夜、斉憲主従は一泊する。

「おい、口径の細か銃でゝ良か。一挺貸してたもっせ」

「はあ、どれでゝ持って行きなはい」

勇右衛門は、部下から借りた長銃身のエンフィールドを手にして村の外れに出かけていたが、夕刻そっと戻って来た。

手には数羽の山鳥を携えている。

「こいを、な。薩摩式の鳥汁にすっとじゃ」

「なんとのう。隊長どんな、故郷忘じがたく、急に汁ば食いとうなったとでござい申すか」

「いゝや。おいが食うのじゃなか」

台所に入り、湯を沸かして鳥の毛をむしった。器用な人だから、一刻ほどで自慢の鳥汁ができ上がった。

これを持って斉憲の宿所に行き、

「今夕、官軍の隊長にて参らず。おいは一個の鹿児島ゝ島津藩士、村田勇右衛門とし

て、米沢藩御当主に拝謁賜わるべく、参上いたし申した」

と口上した。

上杉斉憲は、上座から降りて辞を低くする。勇右衛門は、いや当方下座よりの御挨拶(あいさつ)なり、御気遣い無くと言い、互いに譲(ゆず)り合ってついに二人とも対座となった。

斉憲は鳥汁を賞味してひどく喜び、それより談話して打ち解けた。席上、

「村田氏は、榎峠に年来跋扈(ばっこ)する老猿を討ち取ったそうじゃな」

と尋ねたあたり、この殿様はかなりの情報通であった。

「米沢藩領の百姓杣人が長く悩まされて来た悪猿と聞く。討った後は、どうなされた」

「はい、食うてしまい申した」

「食ろうてしまわれたか？」

斉憲は、仰天した。

「なあに、鳥獣の手料理は、おいの最も得手(えて)といたすところでござい申す」

「エテ公（猿の俗称）の料理が得手とは、村田氏もおもしろいお方じゃ」

十二代藩主は、鳥汁の椀(わん)を啜(すす)りながら大笑いした。

5

新発田の官軍本営に向う上杉斉憲と別れた勇右衛門は、米沢城下へ進軍を開始した。

「弊藩（米沢藩）の者には、恥かしながら頑迷固陋の者多く、停戦を知らずして粗忽のことあらば一大事でござる。なにとぞ、御進発には僅かな御猶予を願わしゅう存ずる」

と、斎藤主計が必死に願い出たが、勇右衛門は聞き入れない。

「もし、我らの進軍を妨害する輩有らば、瞬時に打ち破って進むより他なし」

頭から怒鳴りつけて、進軍の部所を定めた。本道に本隊を配し、側面からの攻撃に備えて両脇に遊軍を進ませるという常道通りの進軍である。

実は、この時、彼は焦っていた。会津若松城の包囲は始まっている。自軍の到着前に城が陥落すれば、別働隊としての立場が無くなるのだ。情報によれば、土佐の板垣退助に率いられた官軍白河口攻撃隊は、若松城の外郭に陣を築き、勢至堂口・日光口の支軍も続々と到着の状況を示しつつあるという。

（これに遅れなば、おいの武門の意地は廃れる）

という気持ちが勇右衛門にはあった。

彼の焦る気分は、今日記録文書に残っている。常は西欧式の博愛主義を標榜し、捕虜

の殺害を禁止し続けて来た彼も、こと会津相手では必要以上に猛り狂い、米沢到着後に発した彼の指令には、

「檜原大塩に而会（集合）の（会津兵）人数の内、手負人始め召捕り置き候分は、皆斬れ」

とある。これは米沢藩の倉崎清蔵が、同藩家老木滑要人に宛てた文書（『米沢藩戊辰文書収録』）に見える言葉である。

「皆切れとの差図、村田勇右衛門薩摩より有之候」との厳命に、米沢の関係者は戦慄した。ついひと月前まで同盟の誼を通じていた隣藩の者を殺害せよ、というのはあまりにも酷い。

官軍の内では比較的温情の人とされていた勇右衛門も、皆殺しを口にする。戦争とは、元来そういう狂暴の血をもって行なうものなのだろう。また、このような官軍の強圧的な態度に唯々諾々として従った米沢藩は、

「士道に照らし、米藩（米沢藩）はまことに卑怯未練に御座候」

と戦後、官軍側の将兵からもひどく評判が悪かったのである。

ただ、米沢兵の中にも上杉謙信以来の誇りを忘れぬ者がいた。

勇右衛門が米沢城下に達し、薩摩の参謀黒田了介も合流して陣所を構えた時の事であ

る。

外城一番村田隊の軍監松山某の宿所に、夜中騒ぎがあった。

勇右衛門が風呂から上がり、拳銃の手入れをしていると、外で何やら人々の争う声がする。

「せからしかあ。陣中不審じゃっど」

「曲者ごわす」

「曲者とは何か？」

「米沢の二才（若者）でごわす。幸い、立哨の者が手獲りにしてごわんで」

と、報告の兵は言う。勇右衛門が軍服の上から丹前を引っ掛けて出てみると、少年が一人、門前に取り押さえられていた。

「こ奴は、おいを仇と狙うて来申した」

松山が苦笑して指差す。

「さる榎峠の合戦で、おいは敵の米沢人を槍で突き申したが、こン二才はそン時の者の子と申しちょり申す」

「ふーむ」

勇右衛門は、困ったように首筋を掻きむしり、

「ともかく、おいの宿所で引き取る。縄をつけて庭先に牽いて来い」

兵一人を付けて陣営に入れた。焚火の横に筵を敷いて少年を座らせ、静かに説いた。

「おはんは歳若なれど、父の仇を報ぜんと単身松山の陣所に斬りこんだ。まっこて、良か志じゃ。士道に照らしても立派と申す他、無い」

されど、と勇右衛門は言葉を継いだ。

「じゃっどん、それは平時の事であり、ただ今は戦時である。肉親が私怨にて殺されたる時、仇を報ずるは正しき事なれど、合戦は公の道にして、討つも討たれるもこれ主君のためである。即ち、私事にあらず。左様なるに、父の仇を言い立てるは、これ私事に有らざるや」

少年は微かに動揺した。さらに勇右衛門は言う。

「おはん、これほどの覚悟あるに、なぜ会津へ走り、戦場で討死にせんじゃったか。ことに米沢藩は、おはんの主君上杉弾正様、官軍に御講和なされ、すでに矛を収めておる。おはん一人これに抗するは、御主君の御趣意に背くことになる。その道理がわからずに我らへ敵対いたすについては、官軍米沢両者の賊じゃ」

米沢人は淳朴なものである。この言葉に少年は恐れ入り、勇右衛門に平伏した。

こうした多少のトラブルがあったが、米沢進駐軍は会津攻めの準備を早々に終え、勇右衛門の隊は強化された。その内訳は、外城一番隊の他に、長州一小隊、芸州浅野隊一小隊、佐土原一小隊、これに米沢の選抜部隊一大隊が付くという大部隊になった。また

米沢進攻前に配備されていた因州や岩国の隊は、黒田了介や深尾三九郎の指揮下に入って庄内方面に向った。

勇右衛門は、出撃に当り米沢の斎藤主計へ、仇討ちに乱入した少年を託し、

「彼の者は立派じゃ。我ら会津出陣の後に、解き放って下されよ」

と頼んだ。

進撃路は例によって山道のうえに、会津の遊撃兵たちが路肩の木々を散々に切り倒したために満足な隊列を組むこともできない。

ことに勇右衛門の隊は、新潟近辺で捕獲した大小の砲を牽いているため、大変な難行軍となった。その上、新たに加わった恭順米沢兵の動きが目に見えて不活発である。

やがて、その理由がわかった。会津側の一ノ瀬要人率いる千四百余の兵が、この近辺まで浸透し、米沢兵はその兇猛さに恐れをなしている、というのである。

「一ノ瀬隊接近とは、まことでござるか」

と米沢軍の倉崎孫右衛門（清蔵）を呼んで密かに問い質すと、彼は小さく首を振った。

「一ノ瀬の率いる兵は、これ会津藩中でも精強の聞こえあり。その上、若松鶴ヶ城は重包囲の中にあって、これを助けんものと一同死に物狂いでござる。しかも、道はこの先人家も乏しく、草鞋一足買う所とてござらぬ。性急過ぎる進撃は自滅の道でござろう」

と答えるではないか。

（ははあ、こ奴ら、会津と戦いたくない一心で詭弁を用いるか）

勇右衛門は腹に据えかねたが、できるだけ落ち着いた口調で命じた。

「一ノ瀬隊相手に合戦とは、武人としてこれ以上の名誉は無い。かくなれば、我ら少しも遅れず有利な戦場を先に占めるべし。草鞋の用意無くば、裸足にて進軍いたすべし」

「それは無謀でござる」

倉崎はあわてた。勇右衛門は、わざと彼の前に長州や芸州の兵士を集めて訓示した。

「強敵目前にあり。しかれども小荷駄、草鞋の用意に乏し。各々は奮発し、裸足にて進まれんことを望む」

官軍の士気は高い。我ら裸足にても少しも苦しからざれば、隊長殿よろしく指揮なされよ、と異口同音に兵士らは答えた。

このやりとりが、会津側と内通している米沢兵の口から伝わったものか、数日して敵の軍使がやって来た。

崖沿いの小道を一同注意しながら進んでいると、山間に一発の銃声が鳴り響き、白旗が振られた。

「あいは何か？」

「旗に日章（日ノ丸）と九曜紋が見え申す。恐らく敵一ノ瀬の使者でごわそう」

これを聞いた勇右衛門は、用心深く狙撃の兵を配して使者に会った。

軍服も薄汚れ、手足に晒しを巻いた会津兵は、

「主君の城は落城も近く、外に戦う我ら遊撃の者も兵糧弾薬尽きたれば、これ以上の戦いは無益と思い、貴下の軍門に降らん。願わくば、年少の者、地元の農兵らの命ばかりは助けられんことを」

と言う。その哀れな様子に、一時は捕虜の皆殺しまで指令した勇右衛門も、一ノ瀬との会見に合意した。

「ついては、明朝五ツ刻。西洋時計の八点時（午前八時）に場所を定め、両者出会うべし」

「心得申した」

使者は、何度も礼を言って山の中に去って行った。

6

ところが、指定された場所に出向いてみても会津兵は一人として姿を現わさなかった。

（和郎どもに騙されたか）

違約とあらば、これただちに攻撃せん。皆続け、と勇右衛門は怒りを爆発させた。
「いや、御待ち下さい」
米沢の倉崎孫右衛門は必死になってこれを止めた。
「一ノ瀬要人は、性善にして人を欺くことをせぬ人物でござる。これは、配下の者が降伏を拒み、問答が長引いているものと思われまする。拙者、一ノ瀬とは見知り置く仲にてござれば、敵の陣に出向きこの間の事情を問い申さん」
その間、攻撃は手控えて下されと哀願した。
「貴公がそこまで申されるなら、一日攻撃を猶予いたさん」
勇右衛門は待つことにした。倉崎孫右衛門は敵陣へ軍使に立ち、すぐに戻って来た。
「案の定でござる。一ノ瀬要人は味方の論をまとめるに手間取り、明日には必ず出頭いたす心積りと申す。また、過日の違約、村田勇右衛門殿には、まことに申し訳無し。充分に御詫び下されとの事でござる」
「左様でごわすか。されば、もう一日、待ち申そう」
次の日に再度会合の場所に出たが、やはり一ノ瀬要人は出て来なかった。
「もはや、仕方無し。おいどんも我慢の限度を越えた。ただちに攻撃を加えん」
入念な砲撃を敵の集結地に行ない、一ノ瀬隊も応戦した。敵はここを最期の地と定めて突撃を繰り返す。弾薬の欠乏は本当らしく、ほとんどの兵が刀槍を構えての白兵戦に

持ち込もうと企んでいた。

勇右衛門が指揮する所にも、手槍を振りまわして敵が押し寄せてくる。拳銃でこれを射つが、何発か命中させても、すぐに起き上がって槍を突き出す。ついに勇右衛門は拳銃を捨て、刀を抜いて斬り伏せた。

「人間の気概とは恐ろしか。急所に弾を当ててもまるで動ぜん」

勇右衛門は、この時初めて戦闘時の人の気力が、銃撃の力に勝る事を知ったのである。これより後、十九世紀最後半に、アメリカ軍がフィリピンで地元のモロ族と衝突した。この時、ある米兵は突撃して来るモロの戦士へ三十八口径の拳銃弾六発を浴びせたが阻止できず、ついにこの兵士はモロ戦士に殺害された。以来、アメリカは口径の大きな四十五口径を採用し、肉体破壊力によって敵をくい止める事を考慮した。勇右衛門はそれより二十余年も前に、この原理を身をもって知ったのである。

一体、一ノ瀬要人という人物は、初め一ノ瀬伝五郎と名乗り、慶応四年要人隆知と改名。会津藩家老に昇格した。同年三月に同藩の朱雀、青竜、砲兵、江戸脱走の衝鋒隊以下千二百余名を受け取り、会津越後口守備の総督に就任。これが九月の官軍鶴ヶ城包囲によって城外に締め出され、一部が遊撃兵と化したのであった。

補給も無く、負傷者の多い彼らは死に物狂いの戦闘を展開したが、勝敗はすでに見えている。九月十五日、一ノ瀬は壮烈な戦死を遂げた。

「彼が味方の議論まとまらず、おのれの身を犠牲に供して、かくも憐れなる最期を遂げしかと思えば、うたた感慨の情に堪えざりき」

と後年、勇右衛門はその死を惜しんでいる。

ようやくにして会津盆地に入り、包囲された若松鶴ヶ城を彼はその目にした。寄手の砲撃はすさまじく、天守閣は辛うじてその形を保っているが、城壁のあたりは硝煙で覆われ、上空には絶えず榴散弾が炸裂している。これでは城内に、一人として五体満足な者は残っていないのではないか、と米沢隊の中には同情の声をあげる者もいた。

勇右衛門の部隊は会津塩川から一里半後方に陣を敷いた。

と、その晩、会津の軍使と称する者が三名密かに彼の陣営に入って来た。案内者はあの米沢の倉崎孫右衛門である。

「これなるは会津藩公用方秋月悌次郎殿でござる。夜を待って城の抜け穴より、講和の交渉いたすべく参られたもの」

勇右衛門は、やはり米沢め、通じておったなと合点した。

「和議の一件、まことに喜ばしい。しかし、当方はこの地に着いたばかりでござわす。長期城を囲んでいた先着の部隊と話し合われるが道でござわそう。護衛の兵を付け申す。白

河口の板垣参謀にお会いなされよ」
と彼は答える。
翌日、土佐藩参謀板垣退助は、米沢藩の周旋で彼らと停戦の交渉に入り、やがて会津藩主松平容保の存命を条件に、開城と決定した。これが九月十八日以後のことである。
城に対する砲撃が中止されたのは、同二十一日。次の日が降伏謝罪の式と発布された。
「村田勇右衛門に別命あり」
と、その日、薩摩の参謀伊地知正治が彼を呼び出した。
「村田どん、よう働いてくれた。おはんらの尽力によって城も降伏と定まり、我らも江戸に凱旋できっとじゃろう。ただ、ここに棘がひとつ残っちょる」
「何でごわそう」
「敵の残兵掃討じゃ」
伊地知は顔をしかめた。
「掃討とは、穏やかではごわはんな」
勇右衛門も嫌な顔をした。停戦と決まった後に戦闘というのは、貧乏籤を引くに等しい。
「ここより数里彼方、塩川の陣に会津兵二千四百余りが集結し、その向背定かならずじ

や。村田どん、配下の一小隊を率いて進み、早々に残兵の武装を解いてくれんか」
「心得申した」
薩摩人には命令に「否」と答える術はない。会津兵の中で強硬派は降伏に抗命し、独自の戦いを企む者も多かった。「鬼佐川」と謳われた家老佐川官兵衛清直も、
「列藩同盟して戦う所以のものは、（帝の）君側の姦（奸）を除かんとするにあり」
と唱え続けていた。
「今、官軍と称する者のすることを、よく見よ。会津領内の財産を略奪し、無辜の民を殺害し、婦女子を姦し、残虐極まりない。こ奴らのどこが王師の兵であろうか」
と獅子吼して、城外での遊撃戦を停止しようとはしなかった。
「敵二千四百に一小隊では不充分でごわす。せめて、あと一小隊お足し下され」
と言う勇右衛門に、伊地知は追って後詰の兵と小荷駄を送ると約束する。
「ともかく、軽装にて急ぎ進軍すべし。相手がためろうておる間に、素早く武装解除してしまうが上策じゃ」
「心得申した。ただちに」
勇右衛門は休息中の一小隊を非常点呼し、塩川に向って急いだ。運悪くその日は吹雪である。この年、閏月があって、しかも旧暦の事。九月末といっても寒気が甚だしかった。

日暮れ過ぎ、やっと塩川に着くと、周辺の人家に人の気配が無い。昼食抜きで早駆けした一同は飢えと寒さで動けなくなった。

「これは、たまらん」

密偵を村に放ち、とりあえず無人の家々に分宿した。兵の中で機転のきく者は、雪を掻いた。畑を探り、百姓らの掘り残した大根を取って生のまま齧った。伊地知が約束した小荷駄隊は吹雪で道に迷ったのか、一向に姿を見せない。

勇右衛門の密偵はいつもながら優秀だった。

「一里ばかり向うに、目差す会津兵の屯集所がございます。事情を知る土地の者、引きつれて参りました」

と一人の百姓を連行した。勇右衛門はこの者に手紙を託した。

折り返し、会津の片山某なる者から答えが返ってくる。至急会見いたしたい、とあった。

（伊地知参謀の申す通り、相手に考える隙を与えてはならん）

勇右衛門は雪の中を馳せて片山と会う。

「我ら主君の命には抗しがたし。ただちに貴下の軍門へ降らん」

「貴官の兵、その数は？」

「死傷、逃亡にて現在は千二百ばかりでござる」

片山は憔悴し切っていた。その晩は、会津の将を集め、ようやく追いついて来た小荷駄の貴重な酒や食料を配って降伏式を行なった。

次の日、塩川で敵の兵を点呼し、武装解除を行なった。雪の中にたちまち槍、銃、刀剣の山ができ上がる。

勇右衛門は、会津兵にこう訓辞した。

「御主君容保公、御降伏の折り、諸君らの帰順はまことに神妙の至りである。これより諸君らは会津若松の城下を通り、降人の収容所に向う。されば、降人は無腰の習いなれども、いやしくも長年武士たる面目を保ちたる者が、帯刀せず城下を通行するは諸君らにおいても忍ばざるところ。我が軍、武士の情をもって刀剣大小は返却いたすゆえ、これを帯びて快く通行なされ」

降伏の兵は、この言葉に涙を流して喜んだ。

「おいたちの隊長どんは、やさしか」

勇右衛門の配下も感激するが、彼は冷静に計算していた。

「味方は極めて少数じゃ。反抗させず多くの兵を素直に護送いたすには、多少の恩を売るが一番よ」

待つうちに芸州浅野の兵一小隊もやって来た。勇右衛門は、この隊を行列の先頭に据え、中軍に会津の降伏兵千二百。自分たちの小隊は後方を進むことにした。また、隊と

隊の間は二町の距離を取り、突然の反乱に備えた。
こうして無事捕虜を送り終えた薩摩外城一番隊は、降参と書かれた白旗の出る若松城追手門を横目に見て、帰国の準備にかかる。
彼らが江戸の土を踏んだ時は十月になっていた。同じ頃、会津旧藩主松平容保・喜徳（よしのり）父子も、鳥取藩御預けとして江戸に送還。会津は滅藩となった。

7

勇右衛門の隊は、銀座に本営を置き、兵らは品川に分宿して慰労させた。
待つまでもなく他方面出張の戦友らも、次々に江戸へ来着し、周辺は賑（にぎ）やかになった。長く戦場にあった勇右衛門の目には、江戸は気味悪いほどに浮かれて見えた。
七月、まだ彼らが北越で戦っていた頃、江戸は東京（とうけい）と改められ、年号も七月八日をもって明治に変っている。

上方（かみがた）のぜいろくどもが江戸に来て
とうけいなどと馬鹿（ばか）な名で呼ぶ

と旧幕贔屓の江戸っ子は、川柳などで敵意を剝き出しにし、新政府側は彼らの懐柔策として、天皇東幸を祝う祝儀の酒肴を下賜した。

十月十三日、江戸城に入った新帝（明治天皇）は、すぐに京へ還御したが、十月末より十一月初めにかけて、新政府は江戸の町内千五百九十二町に二千九百六十三樽の酒を配ったという。

十一月六日と七日の両日は、江戸も時ならぬ祭り騒ぎとなった。「天盃頂戴」「御酒頂戴」と書かれた幡（長旗）を出し、屋台や山車を引き出すやら、踊りまわるやら。町々の賑わいは、十二日の御酉様の祭日まで続いたという。

「江戸の者は軽はずみじゃ」

勇右衛門は腹立たしかった。四月に官軍の江戸入城、次の月には上野で彰義隊戦争があった。以来半年である。幕府のお膝元を自任していた町民たちが酒樽ひとつで易々と「天朝様万歳」を叫ぶというのは、官軍の身ながら見ていて不愉快であった。

「早く国に帰りたか」

勇右衛門は何度も官軍総督府に申告するが、許してはもらえない。彼の自伝中にも、この時の帰国交渉が長々と語られている。どうやら新政府は勇右衛門を有能と見て東京に在府させ、天皇の御親兵に取り立てる心積りらしかった。その証拠に、官軍の中でもさして手柄をあげていない諸隊の指揮官は、早々と国元へ引き揚げて行く。

「働かぬ者が良い思いをして、骨身を削った者が損をするか」

彼も、彼の配下外城一番隊士も腹を立てた。能力のある人間に無闇と責任を押し被せ、無能者が平然としている日本の官僚社会は、早くもこの当時から始まっていた。

ついに一計を案じ、勇右衛門は総督府に上申した。

「新帝御用の節は、間近に控えおる事こそ大事でござわす。我らこれより京に上り、御用を務めようと愚考いたしましたが、これ如何」

御親兵に任ずる者なら、なるほど京に還御なされた明治帝の近くに置いた方が良い。

「然らば、京へ参れ」

これで総督府はやっと彼の部隊を西国に向わせた。一度江戸を出てしまえばこっちのものだ。東海道を下って大坂に着き、京の情勢を窺えばさしたる事も無い。

「戦場に長くあった兵たちを、大坂のごとき繁華な土地に置くと、いかなる騒ぎを引き起こすかもしれ申はん。ここは官軍の権威と申すこともござわす。疾く、帰国の御命令を」

と京都の責任者に申し述べると、こちらは新政府の体制造りが盛んで、兵の帰国などという瑣末な問題に関わり合っている暇がない。

「どうなと、勝手にせよ」

御苦労であった、と一言で許可が下りた。

外城一番隊士の喜び様は一通りではなかった。大坂天保山沖から薩摩の蒸気船に乗り、帰国も己れの足で山陽道を下らずに済んだ。懐かしい桜島の姿を望んだのは、それから六日後の事であった。

新政府分裂す

1

村田勇右衛門、戊辰戦役の働きは以上の通りだが、彼の自伝編者若林玭蔵は、この章を終るに当り、特別に一文を附している。そこを一部、現代語訳で書いておこう。

「編者曰く。村田（勇右衛門）経芳氏の名声は、もっぱら村田式軍用小銃の発明として世間に知れ渡っている。しかし、戊辰の役において鳥羽伏見、北越、会津の各地で前に述べた通りの勲功があった事を心得ている者は意外に少ない。私も、村田氏の（男爵）授爵という恩命を辱うしたのは銃器発明によるものと、この経歴談を聞くまでは考えていた一人であった。しかし、（明治二十九年に）村田氏と同じく爵位を授けられた人々の立場を見ると、いずれも維新の際に参謀官を務めている。村田氏の授爵は、まったくもって戊辰戦役の軍人としての勲功によるものであり、村田銃発明の功は、その後の事と考えなければなるまい。因って、ここにこれを附記しておく」

勇右衛門は、他の維新功労者と異なり、自分を一技術者と考えていた。いたずらに軍人としての功を誇って出世するより、好きな銃器を手近に集め、洋式兵学を人に教えている方が自分に合っていると常々家人にも語り、己れもそう思っている。

だから、若林甜蔵という速記者が現われるまでは、戊辰の話題はついぞしなかった。

「功を語れば」

と一夜、経芳（勇右衛門）は若林相手に珍しく痛飲して言った。

「多くの人々に思わぬ迷惑がかかることがある。戊辰の折りに敵味方であった者が官に勤め、今では同じ役所で机を並べる事も珍しくはない。無用な武功誇りは、かつて敵であった人の心の傷に塩をすり込むに等しき業であろう」

この時、彼の脳裏にあったものは、同じ薩摩出身の軍人らが西南で反乱を起こして賊軍となり、かつて賊軍と蔑まれた会津士族が警視庁の鎮圧隊となって九州に下る。彼我逆転、有為転変の世の姿ではなかったか。

ともあれ勇右衛門は明治元年の暮、郷里に戻った。再び銃器、射撃術の研究者となり、藩に出仕した。

「このたびの戦役参加によって、従来は不明であった銃の実技、戦場での応用などの経験を得、これにて当藩の常備兵をより新式となす自信を得たり」

勇右衛門は藩庁に申し述べた。約一年にわたった国内戦は、敵ばかりか味方をも消耗

させている。薩摩藩は熟練の兵を多く失い、兵器の損傷も激しかった。

藩は独自に陸軍庁を設け、藩士を集めて四個大隊の常備軍を置く方針を打ち出した。

勇右衛門はその指南役として、休む間もなく彼らの訓練に当った。

従来、藩士は藩の公務をこなし、それとは別に軍役を担っている。これを軍務専門の常備兵と、公務専門の役人に分けたのは、戦いがすでにして武士のアマチュアリズムでは遂行不可能な「近代戦」の世に突入していることを示していた。

「四個の大隊では足り申(もう)はん」

勇右衛門は、事あるごとに藩庁へ出頭し、こうわめき立てた。

「戦役終了といえども、世上未だ不隠でごわす。四大隊にのみ洋式の軍学を教え、他の兵は従来の甲冑刀槍に据え置かれるようでは、藩中結集しての戦略も立ち申はん」

勇右衛門は、例として鳥羽伏見の戦いで、旧幕軍がどのように愚かな作戦を立てていたかをあげた。

「欧州にも無い、最新式のフランス型歩兵団を保有しながら、これを古式の鎧(よろい)武者と連携させて、まことに鈍な戦(ゆっさ)ごわした。我ら薩摩ン者が勝てたは、一軍揃った銃器の技と、洋式の練兵術によるところ大でごわす。特に、洋式の射撃術。敵が遠方よりやみくもに放つ無駄弾をかい潜り、当方の兵は皆相手を一発で仕止めてごわす」

「しかし、我が藩には、現在四個大隊以上の兵を養う余裕は無か」

藩庁の役人は反論した。

「いや、常備は四個大隊で充分ごわす。その大隊員をそれぞれ軍事の師範代程度にいたし申すで、これらの者を各所に巡遣し、新式射撃術を教えてまわりたかごわす」

薩摩には、城下の藩士の他に外城、私領の武士がいる。外城は在方に土着する郷士で、一朝事ある時は島津本家に所属して采配を受ける。勇右衛門は彼らの一部を率いて出征した経験から、その気心はよく心得ていた。

私領の士というのは、島津の門閥や重臣の配下で、俗に言う陪臣である。

「外城士、私領士に洋式の狙撃法を学ばせるが良かごわす。もっとも、その方法は一朝一夕に熟練せざるものにてあれば、日頃何らかの手当てをなし、年に数回、馬揃えのようなことをいたしてその習熟度を調べるが良かごわす。その賞罰は、力の及ぶかぎりおいの自費にていたし申す」

つまりは、外城・私領の士を予備役の洋式銃士隊にするという計画である。これに藩庁の人斬り半次郎こと桐野利秋は大賛成したが、他の役人らは内々反対し、ついには勇右衛門の案そのものを握りつぶしてしまった。

「村田どん、まっこて役人は頭の悪かこつ」

桐野は、鳥羽伏見の戦場で新型元込銃の射撃法を教授されて以来、彼の贔屓筋の一人になっている。ある日、藩庁の一室に勇右衛門を招いて藩庁の内情を説明した。

「要するに、ここの役人原は、藩士より身分下の者、半農半士の者どもが無用な力をつける事はいかんと考えておるとじゃ」

西郷吉之助は維新の実働勢力として、積極的に外城士を戦場に投入した。おかげで城下の士より時に彼らの格は高くなり、藩士らの反感を買う事も多くなった。

「御維新とは、天朝の下に四民平等。民草をして全て同じ帝の赤子と定め、外国諸勢力に伍していくことではごあはんか。そのために先頭切った我が薩摩ン国の庁が、左様なる旧弊な者どもで占められてごわすとは情けン無か」

勇右衛門は気落ちして家に引き籠った。

2

が、世の中はまんざら捨てたものでもない。

勇右衛門が出仕もせず、家の庭で弾薬調合の実験などして鬱々と過ごしているところに、ある日、人が訪ねて来た。

「迫田助八ごわす」

短軀、胴は臼のように分厚い、いかにも薩摩人といった容姿の若者である。

「これは、川辺郷の外城士でござい申す。残念ながら、こたびの東国出征の軍には入れ

ず、予備として国に残った者ごわす。じゃどん、軍事に関する心得は朝夕忘れたことはござい申はん。よって、銃器の達人たる村田どんの謦咳に接し、いろいろの事を学ぼうと思い立ち今日は参り申した」

これは土産でごわす、と差し出したのは叭に入った唐芋の種イモと、巨大な島でえこん（桜島大根）だった。

「これは、ありがたか」

昔、桐野利秋も吉野郷の郷士であった頃、西郷と誼を通じようと、種イモを手土産にしたという。迫田はその故事を知っていて同じ物を持って来たものと思われた。

勇右衛門にとって、彼の来訪はまったく良い暇つぶしになった。

迫田は数日置きにやって来ては、洋式練兵術や射撃術について質問した。彼はどこで手に入れたものか、福沢諭吉翻訳の『雷銃操法』や『ナポレオン式砲兵操典』などを持ち来たり、勇右衛門にその記述と実戦の相違を尋ねる。

勇右衛門はもとより好きな道だから、懇切丁寧に教えてやっていたが、ある日、

「そうだ、こういう事をおはんら、やってみぬか」

と言い出した。

「何でごわすか、先生」

「これより、おいがおはんらに洋式射撃の何たるかを、実際に銃を用いて教授いたす。

技術熟達の後は川辺郷に立ち帰り、郷党の者らに同じ事を教えるが良か」
「それは、先生に言われんでもするつもりごわした」
「いや、教えるばかりではいかん。ここからが大事じゃ」
自分たちの腕が上がった事を大いに吹聴し、他郷との試合をしたらどうだろうか、と勇右衛門は提案した。
「射撃の競争ごわすか？」
「応、わざと慢心した風を装い、横柄に申し立てなば、皆怒って試合を受けるじゃろう。負ければこれ皆くやしがる。我劣らじと熱心に射撃の練習をする。こうして洋式射撃術を御領内に広めて行くとじゃ」
「名案……と申さば名案ごわすな」
迫田助八は腕組みをした。古来、薩摩には尚武の気分を尊ぶという習慣がある。村の辻には立木と木刀がぶら下げてあり、思い立てば誰でも打ち込みの訓練をして良いことになっている。また郷党仲間に試合の申し込みがあれば、若者頭はよほどの事が無いかぎり許して場を設けることにもなっている。
「ほれ、おいどんらが散歩先で示現流の立木打ちをするようなものじゃ。いっぺこっぺ射撃試合して試合の流行を作れば、自然と洋式銃を扱うもんの数が増えようが」
「やりまっしょう」

迫田はうなずいた。

「つまり、おいの属する川辺郷が悪役ンなる。村田先生が密かに後楯となって偉か技を教えて下さる。おいどま勝負（自主的）に射撃術を広めていくについては藩庁も外城士が私領の陪臣が、なんどと文句をつけることもでき申はん、ちゅうわけごわすな」

「そういう事じゃ」

迫田は数日して四、五人の同志を連れ、勇右衛門の家にやって来た。いずれも洋式銃の扱いに多少の知識があり、エンフィールド先込銃を所持している。

勇右衛門は藩の小銃研究施設から必要な工具一式を取り寄せ、まず弾薬製造法や、照準器を立てた見越し射撃法などを座学（室内教育）で伝えた。

さらに郊外に出、東国の戦いで実地に習得した特殊射撃術を実射によってこれら若者らに教え込んだ。全ては藩庁役人の目を盗み、表向きは狩猟踏破という名目である。

「良かか、狙撃と申すもんはのう」

勇右衛門は草原に若者らを集めて円陣を組ませた。その中央に紙を置き、自分の言う事をひとつひとつ迫田に書き取らせた。

「道場試合の小太刀術によう似ちょる。間違っても御家流（示現流）の立ち合いとは違うぞ」

射撃のコツは五つの手順に分かれる、と説明した。

「ひとつ、息継ぎ。次に気抜け。三に狙い。四に指掛け。五に引きじゃ」

迫田は、わけがわからないながら言われたままに書き留めていく。勇右衛門は、若者が手にしたエンフィールド小銃の機関部を撫でた。

「那翁（ナポレオン）の軍がエスパニヤへ攻め入ったのは、当方の年号で申さば文化五年（一八〇八）の事じゃった。敵のイギリス兵は海に向って退却中。中にあったトム・プランケットーなる一兵士はひとり引き返して、フランスの将軍コルベールをカカベロスなる橋の袂で仕止め、味方数千は無事海上に逃れた。また、文化九年、これも逃げるイギリス軍に対して優秀なフランス砲兵隊が発砲し、多大の死傷者を出した。この時、イギリスは四十名の狙撃者を側面から近付かせ、砲を操作する者ばかり軒並に討ち取らせた。おかげでその後三時間はフランス砲兵の補充がつかず、戦場は静かになったとじゃ。さて、その時に、イギリスの者どもは、いかなる射撃を為したか」

ブレス（呼吸）、リラックス（寛ぎ）、アイム（狙い）、スラック（緩み・のろのろしているとでも訳すべきか）、スクィーズ（絞り）の法をイギリス人狙撃兵は固く守ったという。

「この五つの心得は御維新直前、おいがイギリス公使パークスの護衛兵、俗に英国赤隊と申す兵士と射的合戦し、公使の士官ブラッチョより教わった技じゃ」

勇右衛門は、手近な若者にエンフィールドを肩付けするよう命じた。

「照門と照星の狙い様は、もう知っておろう」
「はっ」
「息継ぎは正しくせねばならん。息を吸って、吐き、も一度息を吸い、吐いて止める。五つ数える間、銃口はまったく止まったかに見ゆる。じゃどん、それを過ぎると、銃の重さも相まって、少しずつ銃口が動き出す」
「はい、左右に動き出し申した」
脇で見ていた迫田が声を出した。
「正しくは、左右ではごわはん。銃口は楕円を描いて揺れておるとじゃ。よう狙おうとして息ば止める。すると時間がかかり、こういう動きになる。射撃の素人も、この原理はすぐに気付く。気付いたもんは焦り、早々に射とうとする。引金を強く引くため、その動きが銃身に伝わり、銃口があらぬ方向を向いた時に発砲してしまう。これが当らぬ理由じゃ」
息継ぎを正確にした後は、気を一瞬抜く。「当てよう、当てようと思うからいかんのじゃ。そこで気を楽にする。目標は狙ったままじゃぞ。その後、引金に掛けた指は、あと少しで弾けるというところまで引いていく。指先の柔らかいところに金先を当てて、ゆっくりと絞る。戦国の頃、紀州の雑賀党という地侍どもは、種子島銃一挺を手にその技を日本中に売り歩いたが、その中の名人が薩摩ン兵児に良か言葉を残した。引金を引

く時は、『月夜に霜ン降るごとく』とな」

「はあ、霜が寒夜に降り注ぐごと、やんわりとでごあんそなあ」

迫田らは感心した。なるほど良くできた申し様である。ちなみに、この言葉は長く伝わり、旧日本軍の射撃操典にまで書かれている。

こうした動きが全員できるようになると、次に勇右衛門が教えたのは「遠目近目」という事だった。

「これからが実戦じゃど。日の光が狙撃者の背にある時、目標は実際より近くに感じるもんじゃ。反対に目標の向うに日がある時、遠くに見える。建物、たとえば白壁の倉や城壁は、雑木や草の原より周りがはっきりしている分、近く見ゆる。人が大きな建物や巨木、巨岩の前にいると遠く見ゆる。雪面や海面を隔てて目標を計ると、どうしても近く見てしまう。人間は、平たいものに弱い。また、高い場所にある目標は近く、山の下や手前に窪みを有する時は遠く感ずると知れ」

迫田は必死になって記録していった。

川辺郷の若者らは、元々狙撃の才があったものか、はたまた勇右衛門の教育法が合っていたものか、一ヶ月程で実戦経験を有する外城士とほぼ同じ能力を持つに至った。

「さあ、これで充分じゃ。おはんらは郷中に帰って人々に教授せよ。ただし、一時に全

員へ技を伝えてもうまく行くもんでなか。一列に学ぶと、どうしても技のまずか者に引きずられて全体の位（レベル）が下がるもんじゃ。まずは技比べして、上位二十名ほどに教え込み、技が上がった頃、それぞれが技の下がった者の師になっていく。この方法が良かち思う」

「いや、そこまで先生に気を使っていただくとは、恐れ多い事でござい申す」

迫田は頭を下げた。勇右衛門のこうした多人数教習法も、戊辰戦役のさ中、戦場で兵士たちを教えた経験によっている。

川辺郷の若者らは、師匠の言葉を良く守り、郷中の者によく近代射撃術を伝えた。

この辺でもう良かろうと思われた頃、勇右衛門は狩猟を口実に川辺郷へ行った。一週間ばかり泊って彼らに最後の教育を手ずから施した。

「もはや、おいどんの教えることは無うなった。おはんらは立派な銃士じゃ。いずれの戦場に出しても引けは取り申はん」

「では、いよいよ他流試合ばいたし申す」

「良か」

勇右衛門と迫田は相談し、最初の狙いを隣の加世田郷中に定めた。ここは郷としては大きく、鉄砲好きが揃っている。

「我ら近年射的の事を思い、腕を磨いてごわす。隣郷の誼をもって、的当て競争をぜひ

にいたしとうごわす」
と使いに口上を持たせると、折り返し何時にても試合すべしと返答があった。
川辺郷の若者六十名が加世田に出発する時、勇右衛門は見送りの言葉に添えて、
「加世田に着いたその日のうちに競争してはいかん。一日休んで疲れを癒す。前夜は酒も出ようが、決して過飲してはいかん。ともかく射撃とは、身体堅固にして初めて成せる技と知るべし」
「心得申した。決して深酒はいたし申はん」
迫田は約束した。
勇右衛門が自宅に戻って待っていると、三日程して川辺郷の若者らが駆け込んで来た。
「先生、勝ち申した。我ら御教えに従って射ちたるところ、ほぼ満点の結果ごわした」
「ようやった」
されど、と勇右衛門は努めて物静かに教え諭した。
「じゃどん、加世田の郷士らは、今日の敗れを遺憾に思い、発奮して練習を為すじゃろう。勝ちておはんらも油断せぬことじゃ。尚一層、おいの教えた事柄を反復し、習練いたすように」

3

勇右衛門と迫田助八らの射撃術向上運動は、日ならずして薩摩の外城、私領に拡大した。藩庁はこれを苦々しく見ていたが、もはやどうすることもできない。

勇右衛門としては、してやったりという気分だったろう。だが、

「然るに」

と村田経芳伝記にある。

「然るに村田氏の好意は却って仇となり、十年の役には、村田氏の教授したる射撃の熟達者、賊軍側に多くして、たくみに官軍を射撃せしという……」

この約九年後に起こった西南戦争では、西郷側についた鹿児島の若者らが、村田伝習式の実戦射撃術により多大の戦果をあげた。鎮圧側として参加した勇右衛門も、自分が教えた狙撃術の的となって、何度か胆を冷す事態に陥っている。

また、彼の銃器優先思想は、下層の農民らに自信をつける結果ともなった。従来の刀剣尊重主義を標榜する武士階級に、欧米型の銃器は必ず勝つ。それがわかった瞬間、彼らの内部で封建秩序は音を立てて崩壊し始めたのである。

「おいもテッポーさえうまく当てたれば、さむれーどんにゃ負けんち」

村々では洟水垂らした貧農の子供ですらそう叫び出した。

こうした現象は、ベトナム戦争に参加した黒人層が兵役を終えて多量に帰国した一九六〇年代後半のアメリカ南部の状況に酷似している。他国の戦場で銃器の威力を知った彼らは、ショット・ガンや拳銃で武装し、白人優越主義者、警察などに対抗した。

「黒人の権利は銃口から生まれる」

と叫ぶ一部の過激派黒人集団は、銃器そのものですら、

「イクオライザー（平等化するもの）」

と名付けて運動の象徴と捉えた。勇右衛門も、気付かずして君臣主従のイデオロギー打破の、手助けをしていたのである。

記録によれば、戊辰の戦役に出兵した薩摩の兵数は約六千。大部分が下級武士や郷士出身で、その一割が戦死している。後年、「凱旋兵団」と称された彼らは、帰国するや倒幕に反対していた島津家の門閥派を攻撃し、藩政からの退陣を要求した。その急先鋒は、後の日本海軍中興の祖川村純義と、西南の役で鎮圧側の司令官となった野津鎮雄であった。

二人は藩主島津忠義の前で門閥派の首領たる実弟島津久治を問いつめ、追い落とすことに成功。藩主忠義は、西郷隆盛を彼の代りに藩の参政へ据えた。西郷はこの時、藩内武村に七百坪ほどの屋敷を購入。戦役によって害した健康を、温泉治療している最中で

あった。

西郷の指導による薩摩の藩政は、明治二年（一八六九）二月末から同四年（一八七一）一月まで続くのである。

一方、中央の改革は遅々とではあるが整然と進行しつつあった。

明治四年の夏季の条を見るだけでも、

『七月十四日・廃藩置県の断行
同　十八日・文部省設置
八月　九日・断髪と廃刀の許可
同　十七日・士族の無礼切捨を禁止
同二十三日・士族と平民間の通婚許可
同二十八日・身分平等化による職業の自由』

と、ある。中で注目すべきは、明治の第二革命とも言うべき廃藩置県であろう。内には明治政府に対する各地の大一揆を抱え、外にロシアのカラフト占領を経験した維新のリーダーたちは、早急に中央集権的な統一国家を設置する必要に迫られていた。

西郷が薩摩一国の国政を動かしていた明治三年（一八七〇）十二月、友人大久保一蔵（すでに利通と名乗る）と、岩倉具視が勅使として鹿児島を訪れた。「革命」の後楯とな

る政府軍事力の確保と、その指導者として西郷を中央に引き出す計画である。

初め西郷は、東京に出ることを固辞した。

「御維新によって顕官となった雑輩は、戦に勝ち、己れに驕り私を営んで（豪華な私生活をして）おり申す。おいは、その姿を見るのが嫌いでかごんま（鹿児島）に帰ィ申した。あン雑輩らの営みは、戦で死んだ数千の同志の死骸の上に築かれた贅沢ごわす。今さら東京に出て、ケッされん和郎どもと顔を合わすなど、嫌でごわす」

と吐き捨てるように言った。大久保は、

「さればこそ、今は天下の一大統制が必要じゃ。当薩摩と長州、土佐三藩の兵を中心に、一万余を朝廷へ差し出し、これを天皇御親政の兵力とする。同時に、巨眼さぁ（西郷）が嫌うちょる維新の顕官と称する輩を、官職から全て追い払うて政府を刷新する」

と答え、さらに声を励ました。

「これは宸断（天皇の正式命令）をもって天下を新たにするの策じゃ。おはんがこれを引き受けんでは、どうにもなり申はん。それとも、おはんは、恐れ多くも帝の御意志に背を向けるつもりか」

流石の西郷も、この言葉には大きな目を剝いた。

「場合によっては、も一度御維新の戦いとなる。東京に出て帝のために働かれよ」

と岩倉も強く語った。

「天朝の御ためごわすか……」

西郷の一番弱いところを二人は突いたのである。

ようやく説得を受けた西郷はその年の暮、上京の内命を藩庁に伝えた。一月、まだ松も取れぬうちに鹿児島を出発、長州を経て東京に至り、御親兵の動員計画について大久保らと協議した。

彼が兵の徴集のため帰藩したのは、二月半ばのことであった。

鹿児島にあった薩摩の常備四大隊は、この時御親兵と定まる。当然のこと、砲術師範たる村田勇右衛門もその内に含められて御親兵士となり、否も応もなく四月二十一日、東京に向った。

六月、西郷は正三位に叙せられ、約束通りに七月、廃藩置県断行。三条実美（さんじょうさねとみ）、岩倉具視を除く諸重役を官職から追い、太政官（だじょうかん）制の大改革を行なった。薩長閥の強い形ながらも、これで少しは欧州型の中央集権国家に近い体制ができ上がった。

上京した勇右衛門は、旧江戸神田橋内の大名屋敷に入り、かつて徳川の居城であった二重橋近くで練兵（ドリル）を行なうこととなった。

御親兵の中で彼は大尉に任ぜられ、その特技を認められて射的掛りとなった。

薩摩兵の大隊長として参加した篠原冬一郎（しのはらとういちろう）と二人、海辺の越中島と旧尾張藩戸山（とやま）屋敷の敷地に、兵士の訓練用射撃地を造成すべく日夜立ち働いた。

新暦の八月、彼らは馬で牛込の町を闊歩していた。途中、新坂のあたりで手綱を止めて茶店に入る。白玉を頼んでしばらく談笑したが、その時、篠原は急に真面目になって嘆息した。

「勇右衛門どん、近頃の軍の改編は目まぐるしか。中に居るおいどんらにも、ようわからぬ仕組になりつつある。おいも、時々は追いて行けんこつ」

「左様でごわすのう」

勇右衛門も同じ思いである。

「今月、東京・大阪・熊本・東北に各鎮台を設置し申したが、徴兵制未だ成らざるゆえをもって、その補充の兵は元諸藩の兵八千をこれに宛て申した。来年にはその徴兵制の詔も発布されると思い申すが、さて、百姓らは働き手を取られると反対し、士族は百姓らに戦する特権を奪われるとこれまた反対することでごわそう。冬っどん、おはんはこの新制陸軍の中核になる御人ごわす。気張ってくんなはい」

「左様なあ」

篠原はしばらく洋式の馬上鞭を弄んでいたが、再びうずうずと笑い、

「おう、そうじゃった。勇右衛門どん。おいは近頃、名が変った」

諱を用いるようになった、と言った。

「左様ごわすか」

太政官政府は、士族の廃刀を勧めると同時に、それまで諱、字、志士名などといった個人が多く持つ煩雑な呼び方をひとつに統一するよう命じていた。これにより多くの人々が名を変えたが、篠原の新しい名は、

「国幹じゃ。もう冬一郎と呼んでくれぬようお頼み申す」

「左様ごわすか。国幹どんな。おいは、勇右衛門改め、経芳ごわす」

諱は、その読み方のごとく実名の敬称であり、死後に呼ぶ生前の本名であり、文字通り古来は忌み名であった。そのため、よほど親しい間柄でも、それを知らぬという事も往々にしてあったのである。

「ウドさぁに、おもしろかこつごわした」

汗っかきの篠原は軍帽を脱ぎ、禿げ上がった後頭部に手拭いを当てた。

「あれはいつの事でごわしたか」

姓名を統一し政府に登録せよ、との命令が来た。その折り西郷は多忙で、役人は会うことができない。困った彼は、薩摩閥の役人で西郷をよく知るという男（一説に吉井某）に彼の諱を問うた。

「うむ、たしか西郷どんのそれは『隆盛』じゃったのう」

役人は喜んでその名を政府に申告した。が、当の西郷は苦笑し、

「そいは、おいの父親の諱じゃ」

自分の本名は隆永（たかなが）である、とこぼした。

「まあ、ウドさぁは若い頃、国事に奔走してごわした頃は、善兵衛・吉兵衛・三助・大嶋三右衛門などと言うておったから、名などどうでも良かち思うたのじゃろう。さらにおもしろかは、ウドさぁの弟どん、新吾（しんご）どんじゃ」

姓名登録の役人は、またしても間違えた。

「名をお教え下さい」

と言われて弟は、

「じゅうどう」

と投げやりに教えた。どういう文字を宛てるのかわからない。役人は「従道（じゅうどう）」と書いて提出した。西郷新（信）吾は、しかし、「隆（りゅう）」という字を薩摩訛（なまり）で「じゅう」と発音していたのである。正しくは「隆興（りゅうこう）」。後でこれを知った彼は、

「良か、兄上の道に従うて進む。まっこて結構な名ではなかか」

兄弟して大いに笑い、そのままに済ました。

「姓名の変更などまだ笑い噺（ばなし）で済み申す。軍制の変更は左様に行きまっせん」

勇右衛門（便宜上、この小説では最後までこの名を用いることにする）は、戸山における練兵の混乱を愚痴った。

薩摩の兵は幕末より英式の伝習を受け、何の支障もなかった。これが、東京に着くな

りフランス式に改編され、旧幕軍の兵器を与えられた。フランス人教官のもと、浅井道(どう)薄(はく)、黒田久孝(ひさたか)といった仏式士官教育を受けた者に混っての再教育である。

「ところが、でごわす」

昨年、欧州に軍事視察として出かけていた西郷従道(つぐみち)や山県有朋(やまがたありとも)が、驚くべき報告をもたらした。

「ヨーロッパ最強とされたフランス国が敗れた」

というのである。普仏戦争によってプロシアが勝利し、欧州の軍事勢力図は一変した。

「来たるべき日本国軍も、仏式を捨てて普式にせずんばならずと申す者多く、これは多かれ少なかれ混乱をもたらすことでごわそう」

「おいどんらの時代は、まっこて重荷の上に重荷じゃのう」

篠原「国幹」は白玉を啜(すす)りながら牛込の空を仰いだ。

4

明治五年（一八七二）二月二十八日、兵部省は廃され、陸軍省と海軍省が発足した。三月、御親兵は近衛兵とされた。年末には詔(みことのり)が発せられて翌年一月、ついに徴兵制が

施行されることに決まった。

だが、勇右衛門の銃士魂は変化することが無い。

「年来考えている我が国独自の銃器を開発し、新式歩兵全てに装備させる」

という思いを人にも語り、そのため陸軍内で事あるごとに訴えていた。近衛付属の射撃教官では、銃器研究の時間も取れぬということで、上層部に工作もした。明治六年（一八七三）、正式に太陽暦が採用された次の月の二月、勇右衛門は閑職である陸軍兵学寮付き第三舎次官というものに志願した。

時の兵学寮頭は少将鳥尾小弥太、次官は同じく少将曾我祐準である。勇右衛門は二人に力説して兵学寮内に研究室を設置し、各種の銃器を集めた。

彼の言葉によれば、これこそ、

「東京における我が国小銃研究の着手始めなり」

であるという。

同年四月、陸軍元帥兼参議であった西郷が、四ヶ月ぶりに鹿児島から東京に戻った。篠原国幹が提案した士官学校が集議塾に開校。西郷はこの席に出た。

その頃のことだろう。勇右衛門のもとに、

「かねて軍銃製造の事に付き承り候ことなれど、重ねて拝聴いたしたき儀これ有り。勤務の余暇をもって御来臨を乞う」

という文書が届けられた。届け主の名は、

「西郷隆永（隆盛）」

とある。何用ならん、と馬を駆けさせて夕刻、近衛都督府の本営に向った。

元帥――この時は徴兵制実施直前のため、西郷は大将ではなかった――は、都督の一室で篠原と二人茶を飲んでいた。

「おう、村田どんな。よう来てくいやった。本日は、銃器研究のいかなるところまで進みしや、その景況はいかにと、その見込みをうけたまわらん程に待っており申した」

「はあ」

勇右衛門は、西郷の前に座る。

西郷は初め話し辛そうにテーブルの端を指先で叩いていたが、

「おはんは、かつて薩摩ン小銃を一新するとて研究せしが、不幸にも戊辰の役起こりて出征し、その目的は中途にして断たれた。今日、東京に出て、新生日本国の銃器改良を志すと聞いたが、薩摩一藩の銃器改革と日本一国のそれとは月とスッポンじゃ。ことに小銃の巧拙は一国の成否をも左右する。またこの事業は国にとって巨額の経費を要するので、軽忽には成せぬ。さらには欧米各国の銃器に劣るものを装備いたさば世の不名誉じゃ。かつては、失敗いたさば己れの腹ひとつ切れば済むことでごわしたが、今はそうではない」

「西郷どん、何を申されたいのでごわんそか」
「実は、の。陸軍省の長州、土佐の者らが」
いつまでも開発のならぬ村田の研究を早々に切り上げさせ、欧州の新式小銃を暫時輸入するが良かろう。所詮、どうあがこうと日本人の技術をもってしては、欧州の銃器に擢ん出ることあたわず。
「と、申すのじゃ。おいとしても、村田どんを庇いたかところじゃが」
「そいで西郷どん。き奴らは、どの小銃を我が国に入れようと申してごわしたか」
「うむ。フランス国を打ち破ったプロシアの小銃こそ、良かるべしと申してな」
勇右衛門は、隣室に控えた従卒を呼んだ。
「ここは近衛の本営なれば、護衛の兵舎には新式銃が揃うちょるじゃろう。おいの名を言って、兵器係から至急二挺、これこれの銃を持って来るように」
と命じた。しばらくして二挺の小銃が運び込まれてくる。
「ウドさぁ、よう見てくいやい。こちらがフランスのシャスポー小銃、こちらはプロシアのドライゼー小銃。どちらも戊辰の頃に、外国の武器商人が日本へ持ち込んだものでごわす」
勇右衛門は、まず、プロシアのドライゼーを取り上げた。
「これは回転鎖門式と申すものでごわす。遊底を引いてまわしながら開いて弾を込め、

またまわして閉鎖。遊底の筒の中に撃針が入り、引金を引けば、即ち撃針前進して弾丸の後部装薬を打つ。日本では天保十二年（一八四一）の頃、ニコラス・フォン・ドライゼーなる軍人が考案し、我が国では初めツンナール銃と呼ばれてごわした」

勇右衛門は付属の弾丸も見せた。

「御覧下され。弾丸の薬莢（やっきょう）は厚紙ごわす。撃発時、遊底から長い針が突き出して薬莢の底部を貫通し、打撃発火させ申す。ドイツ語で針打『ツントナーデル』を行なうゆえ別名がツンナールごわす」

勇右衛門は、遊底の先に突き出した細く鋭い撃針を西郷らに示した。

「こン針が曲者（くせもの）ごわす。針は何十発か射撃いたせば弱くなり、簡単に折れ申す。また薬室の閉鎖が不完全で、発射の煤（すす）が射手の顔に吹きつけプロシア兵を大いに悩ませたと聞き申す。しかるに、こちらのフランス式シャスポー小銃。パリのルホーショー社中にて、ドライゼー銃の対抗策として考案されたものごわす」

勇右衛門は、もう一挺を取り上げた。こちらは銃床の形がよりスマートで握りやすい。

「これは文久元年（一八六一）の出来ごわす。時のフランス皇帝ナポレオン三世が、我が国の徳川十五代将軍に三千挺ばかり贈り、今は主として大阪の鎮台兵に装備されてごわす。操作の良さはもとより、速射に優れ、顔面に煤が吹くことも少ない。しかし、フ

ランスは、ドライゼー装備のプロシア兵に負け申した。これは小銃の力ではごわはん。プロシアの用兵術の巧みさ、重火力主義に敗れたのでごわす」

彼の言葉に応じて、西郷の太い眉が微かに持ち上がった。

「ウドさぁ、軍事とは左様に一筋縄にては考えられぬ事ごわす。プロシアが勝ったれば、プロシアの小銃までが優れていると簡単に考える輩は、勝ち馬の尻にただ乗ろうという阿呆でごわす。さらには」

勇右衛門は語気を強めた。

「歩兵の基幹小銃は、全てその国の工場にて造るべきじゃ。我が国、もし諸外国との合戦に立ち至り、輸入の道途絶えし時、一体どこで補給をいたすべきや。戊辰の折りも各藩ばらばらに外国銃を輸入し、おかげで現在当国は中古銃器の捨て場同然でごわす。政府が登録したものだけで百万挺近く。そのため我らの国庫は空同然。貴重な金銀は大量に流出し申した。この轍を二度と踏んではいかんち、おいは思い申す。ゆえに、おいはただ今も百折不撓の精神をもって、開発に力を注いでごわす」

と、それまで黙っていた篠原国幹も、彼の言葉を助けた。

「ウドさぁ。勇右衛門どんの考えは、おいも国元にあった時よりよう存じてござい申す。こゝ人は、必ず外国の小銃よりすこぶる利便なるものを考案いたし申そう。長州や土佐者が申すたわいない話などに少しも耳を傾けませんように」

西郷は、テーブルを引き倒さんばかりにして手をつき、頭を下げた。

「村田どん、数々失礼の言葉、許してくんなはい。おいも今のおはんな返事を聞いて大いに安心し申した。これにて陸軍省の口うるさき面々にも、申し渡しができ申そう。いや、うれしか」

後は、西郷秘蔵のウイスキーの杯がまわされ、勇右衛門は世間話などをして退出した。

別れ際に西郷は、

「これよりは、たびたびおいの家を訪ね来て、研究の模様を話してくんなはい」

と彼の肩に手を置いた。

「人は会って語り合えば、積年の誤解もかくのごとく氷解いたし申す」

「はあ、ありがたき御言葉ごわす。拙者、いかなる派閥にも属せず、ただ一人身を削っての研究ごわせば、容易に時間は取れませぬが、西郷閣下のもとには再びまかり出づべし」

勇右衛門はしっかりと答えた。

この時、西郷は大久保、岩倉らが遣米欧使節団を組み大挙して海外に出たその留守内閣の、実質的指導者であった。

幾分ナーバスになっており、他人の言葉に動かされることも多かったという。かつて

の国父（藩主の父）島津久光はこの時も西郷を敵と考えている。その久光の贔屓筋で技術畑を歩いて来た勇右衛門は、いかに戊辰戦役の功労者とはいえ、西郷にとって所詮「地五郎（田舎者・久光の蔑称）の仲間」であった。西郷が誤解を解き、勇右衛門を陸軍内で優遇し始めるのは、明治六年の五月以後のことである。彼と談笑してひと月後、西郷はとうとう病いに倒れ、明治帝の遣わされた医師に診察を受ける身となった。

5

いわゆる「征韓論」による西郷の辞職と帰国は、同年十月末。勇右衛門にとっても寝耳に水である。

参議と近衛都督の辞表を受理され、陸軍大将と正三位の位だけはそのままとなった彼は、十一月十日、鹿児島に戻った。

同じく官にあった薩摩人六百余名も、政府に辞表を叩きつけてその後を追う。陸軍少将桐野利秋、篠原国幹らの仲間も続々と帰郷し始めた。

「大変です。三舎次官殿」

その十月二十四日の朝、兵学寮で勇右衛門の従卒をしている飯島某という者が、彼の執務室へ駆け込んで来た。

「近衛の兵舎が大騒ぎです」
報告を聞いて、勇右衛門はただちに厩から愛馬を引き出し、近衛兵団の兵舎へ向った。
門前まで進むと、門は開け放たれ、剣付き銃を持った衛兵が一人、悄然と立ち尽していた。
馬上から正面の中庭を望むと、中央の池に赤いものが無数に散っている。
「あれは何か」
「鹿児島に帰国いたす、と叫ぶ士官下士官が」
次々に投げ捨てていった軍帽である、と衛兵は答えた。その言葉にも微かに薩摩訛がある。
「おはんは、感心にも軍務を放擲せんじゃったようじゃの」
「はあ、おかげで、同郷の下士官に頬ンげたを張られました」
衛兵は片頬の赤い腫れを指差した。
「良か」
勇右衛門は池の前に行き、水面一杯に浮んだ近衛兵の軍帽を眺めた。
(大変なことになった。新政府は崩れるやも知れぬ)
薩摩人の特徴は「芋づる」である。主だった者が進路を定めれば、下の者は潮の引く

ごとくこれに従う。不平を唱える者は、「議を申す者」即ち同郷の組織破壊者として断罪されるのである。

「おう、村田どんも来ちょったか」

その時、彼の背後から陽気な声があがった。

近衛の軍装をした若い男である。

「何ね、逸見どんじゃなかか」

同じ薩摩城下士出身の逸見十郎太だった。階級も勇右衛門と同じく陸軍大尉である。

「いや、たまたま他行しておってな。皆が退去した後、おいだけは残った私物を取りに戻って来たとじゃ。しっかし、こいは壮観じゃのう」

赤く染まった水面に目をやった。

「おいは……」

勇右衛門はしゃがみ込み、浮いている軍帽のひとつを拾いあげた。

「……今、鹿児島に戻りとうなか」

「何」

逸見十郎太は、じろり、と勇右衛門を見た。

「まあ、逸見どん、聞いてくいやい」

勇右衛門は、己れの立場を説明した。

「我、郷里に有りしときより軍用銃の開発を思い、戊辰の役にて一時その志を閉ざされたが現在やっと研究再開した。今またかかる障害に遭遇せしはいかなる不幸か。ここでまた研究の場を離れたれば、もはや我はこの事業に専念いたすことは有らじ。西郷どんの挙に同意して帰国するが国のためか、帰国せずして初志をつらぬくが国のためか。いずれと問われれば、おいは後者をとるものである」

逸見はしばし目を閉じ、

「おはん、東京に残れ」

と言った。

「そいが一番じゃ。おはんと我らはもともと働き方が違う」

彼は自分の軍帽を脱ぐと、庇を持ってひょう、と投げた。帽子はくるくるとまわりながら池に飛んだが、途中の木に引っかかって止まった。

「戻る者は行く。戻る理由ン無か者まで戻らんで良か。そいが明治の『自由』というもんではなかかい」

逸見は枝に止まった自分の帽子を笑って指差した。

「おいは、な。西郷どんに命を助けられちょる。あン人が行く所には、どこでん従わねばならん。恩義があっどじゃ」

勇右衛門は、知っている。今年の五月五日、皇居が炎上した。その夜、逸見は運悪く

新宿の遊里で遊び呆け、非常事態に気付かなかった。
遅れて近衛兵営に戻った彼を同僚らが難詰し、ついには、
「宮城に対する不敬である。腹を切って詫びよ」
とまで騒ぎ立てた。これを西郷が近衛都督の立場から宥め、
「妓楼へ登るは、これ青年男子の免れざるところ。逸見の罪は、おいの顔に免じて許してたもっせ」
と庇って一件落着させた。助命の恩義云々というのは、これであろう。
「村田どん、おはんの考えは篠原どんにもよう伝えちょく。とにかく、おはんは兵学寮を動かんことじゃ」
と言って逸見は無帽のまま、私物を載せた鞍付き馬を引いて、門の外に出て行った。
次の日、勇右衛門は篠原の住まう麹町の宿舎を訪ねた。篠原は引っ越しと奉公人の給与支払いに忙殺されていたが、彼の顔を見るなり人払いし、居間に案内した。
「逸見から聞いた。おはん、東京に残るとな」
「裏切り者と思い申すか？」
「いや、おはんの意見はしごくもっともじゃ。なにしろ、おはんは技術者じゃ。そこが他の軍人と違うちょる」
篠原は床ノ間に掛けた陸軍将官の外套をあおぎ見た。黒羅紗のフランス式で、裏地は

真紅という、まるで戦国武者の陣羽織を見るような形であった。

「我ら征韓の議、政府と合わずして国に帰る。これ国家の正義をつらぬくの道なり。勇右衛門どんが、初志をつらぬき東京へ残るもこれ国家のために他ならず」

篠原は懐から銀のスキットルを取り出して栓を開き、ひと口飲んで指で拭った。それから勇右衛門に手渡し、飲め、と目で合図した。アイリッシュ・ウイスキーである。西郷の好んだ味だった。

「我ら帰国の後、朝鮮の政情はいよいよ切迫し、兵員派遣に至るやもしれぬ。軍用銃の製造は急務と思う。おはんが今、鹿児島に帰るは、国家にとっては大いなる不忠である。残らぬとて悪口する者は、この篠原が頭を張るゆえ、安心して東京に残んなはい。ついては、同じ東京に残留する西郷従道どんのところに、おはん行かれたが良かろう」

「従道どんも、東京に残るとでごわすか？」

陸軍卿西郷従道は、征韓論について実兄隆盛と考え方に大きな相違点があった。そのことは前々から勇右衛門も知っていたが、まさかあれほど仲の良い兄弟が袂を分かつとは思いもよらない。

「おはん、今より陸軍省に行け。小西郷（従道）のもとには、東京残留組の薩摩人が大集合しちょるど」

篠原はスキットルを懐に収めて立ち上がった。

「おいも、これから東京中の知人に別れの挨拶まわりじゃ。半次郎どんなどは」
と陸軍少将桐野利秋の話をした。
「自宅から馬を引き出し、どこへ向うかと思えば、新橋じゃ。馴染みの新橋芸者に別れを告げんと、手綱さばきも鮮やかに店々をまわっておるそうな。流石、維新の前は、京の花街で男を磨いた半次郎どんじゃと大評判よ」
「左様ごわすか」
篠原は、勇右衛門を玄関先まで見送り、軽くイギリス式の敬礼をした。勇右衛門はフランス式の敬礼でこれに答える。
それが、二人にとって永の別れとなった。

西郷従道は、勇右衛門に会うなり、
「兄さぁが、村田どんのこと、くれぐれも粗相無きようにと言い残して帰郷し申した」
と言った。
西郷の帰国直前、従道は東京郊外小梅村の潜居先に兄を訪ねている。それは隆盛を引き止めるのではなく、一緒に帰り、ともに薩摩で百姓仕事をしよう、と申し出るためであった。
「新吾どん、おはんは残れ」

兄隆盛は短く命じたという。

「何と申される。我らは維新の前よりいつも一身同体ではごわはんか。情けん無かこつ」

兄の道に従うゆえ名も従道、と広言する彼ははらはらと涙を流した。が、隆盛は冷静なものである。

「新吾どんには、新吾どんの立場ちゅうもんがごあんそ。やみくもに薩摩へ帰っても、国の若者たちは、征韓論に反対し、ウドさぁを朝鮮に行かせなんだ悪どい弟、と後ろ指を差すばかりじゃぞ。憎さがつのって、闇夜に討たれるかもしれん」

「かまい申はん」

「おはん、おいどんが朝鮮へ使節として向わんとした時、『これを阻止するは、国家のために適当な策である』と閣議で申したげな」

隆盛は縁側に出て、小梅村の風景を眺めた。

「そいは肉親の情として、ありがたかこつ。されど、おいどんが朝鮮の地で討たれんとした企みを、おはん、水泡に帰させたとじゃ。その事、おいは決して許さん」

隆盛は、弟に巨大な背を向けたまま、片手を振り、

「さあ、もう行ってくいやい。おいどんも、これから荷をまとめにゃならぬ。ここに備忘録がある。持って帰って読んでくいやい。おはんが東京でやらねばならぬ改革諸案

を、おいどんなりに考えたものじゃ」

と一冊の西洋ノートを手渡した……。

「それが、これよ。ここに村田どんの名も出ておる。『軍装備品の発明・改革は、一層奮励して、外国銃に優るものを我が国軍にもたらしめよ』とある」

勇右衛門は、西郷従道の差し出すノートを見た。大西郷には珍しく、鉛筆を用いている。その一字一字を丹念に見返していると、

「いずれ、村田どんの処遇には変化があろう。それまで、今一歩、兵学寮付きで我慢してくんなはい」

西郷従道は、言った。

「今は東京残留の者、心をひとつにして、痛くもない腹を探られんようにせねばなり申はん。言わずもがなのことじゃが、行動はくれぐれも慎重に、な」

6

勇右衛門は一時、朝鮮出兵問題のために兵学寮を出て、外地派遣軍の大隊長となった。しかし、明治七年（一八七四）には再び元の兵学寮付きとなり、同年八月、戸山学校付きとなった。同校の射撃場を設計し、ここで銃器の開発も併せて行なうこととし

た。旧尾張藩下屋敷跡の広大な敷地は、以後昭和二十年まで陸軍の重要な教育施設となり、戦後は長く米軍の接収地となった。これが東京オリンピックの頃に選手村として知られた「戸山ハイツ」である。現在は団地だが、勇右衛門の設計した射撃場は、道路と公園になってほぼ完璧にその形を残している。

陸軍省は同年、さらにお傭い外国人教官としてフランス陸軍大尉エースマンを、射撃指導官として戸山に入れた。

勇右衛門は、エースマン大尉と二人して、欧州流の狙撃術を日本式に改める研究を開始する。

銃器の開発も忘れてはいない。陸軍に配備されている口径十四・五ミリのスナイドル銃は後装式だが命中精度が低く、また銃の造りにもバラつきがあった。

「やはり、フランスのシャスポー式にかなう銃は、今のところ他に存在せん」

と勇右衛門は思った。ただ、シャスポー銃にも欠点がある。銃身は白磨きであるために、日常磨き続けねばならない。多湿な我が国では、白磨きも油断するとたちまち錆を吹く。専用の薬莢も僅かながら遊底からのガス洩れの原因を作っていた。この弾薬は、弾丸重量二十四グラム（装薬量は五・五グラム）、厚紙製でまわりを糊で固めた布包み。底部に発火薬が挟まっている。フランス陸軍も普仏戦争時の体験から、遊底にゴムのパッキングを装着する改造を行なっていたが、これでも充分ではないと、その年（一八七

四年）金属薬莢専用のシャスポー七四年式小銃がフランス本国で生産開始となっている。

勇右衛門はエースマン大尉の助言を受け、まずシャスポーの銃身黒染付けと、ガス洩れ防止の部品を取りつけることから始めた。

シャスポー銃の本体は、旧幕軍の装備だけでは足りず、土佐藩が維新の際に輸入した一八六六年製を主として利用した。これは口径十一ミリ、銃身も幾分短い。

勇右衛門は改造掛りの主任として、正式に造兵司兼勤となり、ますます多忙となった。

数日間、風呂にも入らず眠ることもなく、研究室に閉じ籠って試作に熱中する。両眼は充血し、身体は衰弱した。偏頭痛と胃病を起こして医師にかかることもたびたびであったが、人々が止める手も振り切って造兵司の門を彼は潜り続けた。

その年の暮、勇右衛門は一挺の小銃を手に陸軍卿山県有朋のもとを訪れた。

「閣下、これを御覧下さい」

シャスポー式小銃に似ているが、手にしてみると銃床は細く日本人にも握りやすい形をしている。槓桿を引けば軽々と遊底が露出し、ダミーの金属薬莢が飛び出して来た。

「シャスポーは扱いやすい銃でありますが、それでも西欧に比べ体力の劣る我が国の兵士には、時に持て余すことがあります。よって、これを多少改良し、かような形にしよう

やく造ることが可能となりました」

勇右衛門の言葉に、山県は眼を細めて銃を撫でまわした。この長州人もシャスポー式を愛することひと通りではなく、自宅の庭に小さな射的場を造り、雷管だけで発射する弱装弾をこの銃に詰め、時折り婦人たちと楽しんでいるという。

「うむ、これは実に良いもんでありますのう。来たる海外戦には、陸海の兵に全てこの銃を装備したいものだ。それで、この銃の名称は何と？」

「明治七年型斜（シャスポー）式改造小銃、と仮に名付け申した」

「うむ」

山県は細長い顎鬚を撫で、机上の筆を取って何やら書きつけた。

「これでどうか？」

見れば、「試製村田式改造小銃」とある。

「村田君、これよりは堂々と自分の技術を誇りたまえ」

山県は言った。この事は、

「これ今日世におこなわるる単発村田小銃なるものなり」（『村田銃発明談』）

と伝記にも誇らかに記されている。が、この銃は、シャスポー式一八六六年型の機関部を完全転用したものであり、日本独自の製品とは言いがたかった。

同年十月、台湾問題が解決し、政府は賠償金五十万ドルを得た。同じ頃、鹿児島にあった西郷隆盛は、自分を含めた約三百名の軍人給与返還口上書を政府に提出した。

鹿児島に帰国した旧軍人官人たちは、その頃、城下旧厩跡に「私学校」を設立した。初代の監督は篠原国幹と村田新八が任ぜられ、前者は旧近衛歩兵二千六百を、後者は旧近衛砲兵約二百を統率した。これが、後に九州大反乱の一大拠点と化すのである。

その頃、勇右衛門に、陸軍省より内示があった。

「村田どん、欧州に行きとうはなかか？」

西郷従道は、笑いながら問うた。

（村田どんの処遇に変化がある、と申されたはこれであったか）

勇右衛門は、わっと手を打って飛び上がりそうになる己れを辛くも押さえつけた。

「山県卿も、おはんの働きには感心しきりであったど。彼の卿のお働きもあって今回は派遣の人数に名が連なったとじゃ」

「ありがたかこつ、ごわす」

出発は来年の一月。お傭い指導官エースマン大尉の帰国に合わせ、勇右衛門も欧州射撃技術の研究派遣。他に政府の山沢静吾が欧州の留学生取締りとして同行することになった。

「期間は約一年間。主な出張先は、フランス・イギリス・ドイツじゃが、他に希望先が

あらば申し述べよ」

「されば、瑞西国（スイス）をば希望いたし申す」

「その理由は？」

「彼の国は山間の小国なれど、四方を大国に囲まれ、その自立を保つはひとえに軍備の良ろしきと、国民男子ことごとく狙撃の達人なればなり、と仏人エースマン大尉より常々聞かされてござい申す。さればこの目で瑞西の射撃技術を見たいと思い申す」

「わかった」

西郷従道はその場で裁許し、勇右衛門は早速準備に取りかかった。思えば幕末、『御試（おんため）し元込銃製造所』の支配となった時、薩摩藩の秘密留学生の一人に選ばれながらも、大久保利通の懇願によって志を折り、以来十余年である。

留守中の研究室運営や、技術者の教育引き継ぎを造兵司の部下に頼み、留学先の事情など調べるうちに、早くも次の年一月となった。

欧州で射撃王となる

1

勇右衛門は正式な派遣出張令を拝命し、外国客船であわただしく出国した。

太平洋・インド洋を通り、地中海のマルセイユ。

エースマン大尉の案内で、手始めに南仏の各師団、銃器製造所を視察した。フランス陸軍も、この友好国軍人にはできうるかぎり自由に歩きまわらせるよう、行く先々で便宜を図ってくれた。

彼らは、勇右衛門の視察目的が射撃技術の研究と知ると、陸軍の精鋭を集めたカンドシャロン射撃学校に彼を入校させるという特別待遇まで与えた。

カンドシャロンには約一ヶ月ほど滞在し、校長某と各国軍用銃の良否について語り合う。

校長は極東の島国からやって来た射撃好きの男へ丁寧に接し、彼の疑問にも嚙(か)んで含

めるように技術上の秘密を披露した。

ある時、勇右衛門は校長と談話の席で、

「これが、我が国の造兵工場で自分が企画中の銃であります」

と図を見せた。

「略図にて大変失礼ではありますが、御覧下さい。機関部は回転鎖門式であります」

校長は眼鏡を取り出して、図を穴の開くほど眺めていたが、通訳のエースマン大尉に、

「まことに巧妙なる機関部である。されど、不思議にも、当校に保管している外国銃と形が酷似している」

と伝えた。

「それは不思議なことであります。よろしければ拝見願えませぬか」

「お見せしよう。それはオランダ国で四年前にでき上がった銃である」

すぐに勇右衛門の前へ持ち出して来た。

「おお、これはそっくりだ」

「ボルト・アクション式というものは、操作法さえ似ていれば、だいたい同じ構造となる。しかし、未だ一挺も極東に売られたことの無いこのボーモン小銃を、ここまで酷似した図で描き出した貴君の眼力には恐れ入る」

校長は、ボーモン式の密かな信奉者であった。

「今年、我が国のグラー砲兵大尉が設計したグラー小銃と、このボーモン式小銃を同数実験部隊に渡して競わせたところ、僅かな差でこのボーモンが勝ちを占めた。本来ならば勝者の銃を採用するのが道ながら、自国の銃は自国の設計によるべしとの方針があり、しかも一国の名誉に関わる事なれば、フランスはグラー銃を採用成したり」

校長はこう言うと、グラーとボーモンを持って射撃場に勇右衛門を誘い、数十発の試射を行なわせた。

「仏国射撃学校カンドシャロンは、まことにおもしろいところであった」

と勇右衛門は、帰国後、陸軍戸山学校の生徒たちに語っている。

「元来、フランス人は他国を称讃せず、下らぬことでも自国の誇りとする。偏狭著しい者多いところであるが、この学校の校長某は、良きところは良しと、かつての敵ドイツ帝国さえも褒めるあたり、まっこて公平無私の人であった」

グラー銃とボーモン銃の射ち比べをし、勇右衛門の技量に感心した校長は、

「別の射撃場で我ら二人、グラー銃の射的競争をいたそう」

と申し出た。正的（定点）射撃、動的（移動式目標物）射撃、限秒（時間制限）射撃の三つを、それぞれの射撃場で行なおうというのである。

「良かこつ」

勇右衛門は了解し、数回の試射をして銃の癖が最も自分に合ったグラー銃を手にした。

「その時の射撃場が、また良うできておった。動的場などは、土塁の向うにレールが敷いてあってな。人間の上半身を模した布製の的が小さなトロッコの上に差してある。これを脇に居る兵隊が綱で引いて行き来させる。背景には町や森の図が描いてあってのう。まるで芝居の書き割りじゃった」

実際の戦場を思わせるものであったという。その言葉から思うに、彼が体験したのはどうも室内訓練場のようである。

「おいは、一発も外し申はん。何事にも外国人に後れをとるは、日本男子の恥ち思う心がまだその当時のおいにもあったとじゃでなあ」

流石に校長もフランス屈指の射撃家だけあって、皆中し続けた。

だが、どの射的場でも最初の五発は楽々と中央に当て、それ以後は僅かに黒点の端に弾が寄る。

「校長殿、五発後に弾丸が急速下降いたすについては、はっきりとした原因がありますぞ」

通訳のエースマン大尉が、校長に勇右衛門のアドバイスを伝えた。

「否、原因は考えられない。強いてあげるとすれば、地球の重力に関係しているのではないか。我が国の弾道学研究家もそう言っている。この五発後の不命中は、名人素人問わず、誰にも必ずあることなのだから」

校長は言う。勇右衛門は、射撃の的を手元に引き寄せ、その弾痕を指差してなおも説明した。

「五発目より後に当った弾の痕を見て下さい。円形ではなく、僅かに細長い痕を作っております。これは弾丸が正確に回転して飛行せず、空気の圧力で弾先が斜めになったまま飛び当ったためであります。自分が思うに、その原因は、銃身のライフリングに鉛が付着するため、弾頭へ僅かにこれがからまり、不定形となるからでありましょう」

「そのような事は、聞いたこともない。確かにグラー銃の弾は柔らかいが、ライフリングに付く鉛はごく微量で、たとえ付着しても飛行にはまったく問題の無い量であろう」

カンドシャロンの校長に代って、射撃場の差配をする監的教官が血相を変え、詰め寄った。

勇右衛門はしばし考え、まず自分の銃で五発放った。その後に掃除道具を取り寄せ、銃身内へ軽く布を入れて拭った後、再び発砲した。全弾、何事もなく的に命中した。

「論より証拠とは、これであります」

監的教官にも同じ事をさせると、こちらも正しく丸い弾痕ができた。

「貴君は、この原理をどこで知ったのか」
傍らで見ていた校長が問う。
「我ら日本人は、僅か十余年前に尖頭弾を輸入し、それより数年の内に洋式戦闘を強いられ、同胞の血と肉によってこれを学んだのであります」
「日本人の戦いとは、主に刃物によるものとばかり思っていたが、さほどに近代戦を体験していたとは初耳である。大いに勉強となった」
校長は、弾丸の鉛による飛行変化をただちにデータとして記録するよう射場の者に命じた。

一ヶ月後、カンドシャロンに別れを告げた勇右衛門は、フランス中部の武器生産都市サンティチェンヌ（勇右衛門が語るところによれば「サンテツヤン」）に向った。この町はフランス最大の小銃及び軍装品の産地であった。老いも若きも、婦人老女に至るまで軍に関わり無い者はない。
全て分業制で、銃身は銃身の、引金は引金の専門部門に数百から数千の職工が立ち働いている。昼ともなると彼らの女房や娘たちが食事を運んで来て、巨大な食堂で和気あいあい、ともにテーブルを囲む。その彼女らも午後は軍服工場で縫製業務に勤しみ、夜八時頃、夫や子とともに家路につく。

「大変な働き振りでありますなあ」

と勇右衛門が例によってエースマン大尉の通訳で言うと、サンティチェンヌの案内将校は誇るように、

「サンティチェンヌの一日の生産量は軍用小銃だけをとってみると八百挺です。ここには三ヶ所の国営生産所がありますから、一日の高（生産数）は二千四百挺となります。フランスの常備軍は五十万人です。彼らが戦場で消耗する量を一人あたり五挺と見積もって、その総数は約二百五十万挺。常にそれだけの小銃を送り出す能力がこのサンティチェンヌにはあります」

と説明した。

「以て同国の小銃製造の盛況を想見すべし」

勇右衛門は、渡欧日記の中にこう書いている。

このサンティチェンヌ兵器工廠は国営の建物があと二ヶ所あり、彼はそこで小銃の耐久試験を見学した。無作為に選び出した小銃の銃身と機関部だけを一列に並べ、通常の数倍の装薬を込めて発火させる。機関部が破損すると、その生産工程にあった他の銃身も全て不合格にするという厳しさで、この方法は大いに参考になった。

サンティチェンヌの町には私営の銃器工場もあり、これも見学した後、汽車でパリに戻った。

パリではピュートの国営弾薬工場へ足を向ける。小銃の薬莢製造に必要な知識を得るため勇右衛門は三日間連続して工場に通い、これを報告書にまとめた。

フランス軍部は、パリでも軍用射撃の参観を勧めてくれたが、市内の各連隊の射撃教程は、さほど勇右衛門の関心をひくこともない。

数日ホテルでのんびりしていると、

「日本露国公使殿がパリに参られます」

と公使館から通知があった。

「公使殿は普仏戦争の戦跡視察をなさいます。ついで国境地帯の各連隊を巡る手はずでありますから、村田殿も一緒に参られては如何。当日本公使館の周旋で早々に巡視も済むでしょう」

「それは願ってもない。好都合ごわす」

二つ返事で勇右衛門はホテルを出た。当時の露国公使は、旧幕臣の榎本武揚である。幕府軍艦開陽丸以下を指揮し、明治二年五月まで箱館五稜郭で戦闘を続けた彼も、この時は新政府の要人として押しも押されもせぬ立場だった。

在フランス代理公使中野健明の案内で、一行は汽車と四頭立ての馬車を乗り継ぎ、まずモンバリヤンの砲台に到着した。

「見たまえ、中野君」

と馬車を降りるなり榎本は砲台をひとつひとつ指差し始めた。

「働いているのはフランス人の人夫だが、それを指揮しているのはドイツの将校である。しかも、台場に本来あるはずの最新鋭火砲は何処かに持ち去られ、旧式の大砲や模造の砲が据え付けられている」

榎本の声は暗かった。さらに、一同はセダンに向った。ここは普仏戦争でも屈指の激戦地である。

「ああ、ここも憐れだ」

セダンもドイツの占領下にあった。砲台はドイツの方向に付けられていたものを、昼夜二交代制の工事でフランス側に砲口を向ける作業が進んでいた。

「五稜郭を思い出す。戦さに負けるということは辛いものだ」

榎本の言葉に、「勝者」の側にいた勇右衛門は目を伏せ、聞かぬふりをするばかりだった。

その後、中野代理公使の案内で、独仏国境近くの軍用品工場や守備連隊の兵営を数十ヶ所も駆け足で視察した。一同から離れてパリに戻った勇右衛門は、次の目的地イギリスの視察計画を練った。

時のイギリス公使上野景範に連絡をとり、イギリス最大の銃器工場バーミンガム・スモール・アームズの見学を申し込む。が、イギリス政府の答えは、ノーであった。

「兵器の製造工程は一国の秘密事項につき、たとえ国の代表といえど、視察者の身分がはっきりと確認できるまでは許可証を与えることはできない」

と陸軍省の公式文書で答えてきた。それまで全てをオープンにしてきたフランス陸軍の持てなし振りに慣れきっていた勇右衛門は、この冷たい答えにショックを受ける。

「そう落胆することもない」

と中野健明は彼を勇気付けた。

「確認できるまで許可せぬということは、怪しからぬ者と定まれば即刻許可を与えるというのだろう。官営工場視察のOKが出るまで、私営の兵器会社を見てまわってはどうか。彼の地には、それこそありとあらゆる民間の発明品が軍用品に転用されていると聞く」

「わかりました。とりあえず荷を畳み、ドーバー海峡を渡ります」

勇右衛門は、種々周旋の労をとってくれた中野に礼を言い、パリを出発した。

カレー港からドーバーに渡り、英国の列車でロンドンに出る。

軍用品工場は何も小銃だけにかぎったことではない。防水用具に用いるゴム、ゴムを利用した軽気球の製造工場等を見学した。気球は、この当時一番の新式兵器である。砲兵の着弾観測用として、また緊急の連絡用として注目されていた。

「普仏戦争の際、時のフランス臨時代表某は、プロシアに包囲されたパリより後方の味

方へ援軍を求めるため、この気球をもって自ら操縦し、空に上ったと申します」

ロンドンで案内役となった陸軍留学生の吉田は説明した。

「許可は下りておらずとも、一度バーミンガムへ足を運ばれたらいかがでしょう。あそこにも民間兵器会社は一杯あります」

勇右衛門は一泊の予定で吉田と汽車に乗った。

「いやあ、これは盛況じゃあ」

ロンドンから北に百十三マイル。バーミンガムの駅から町を望むなり、声をあげた。

「その煙突の多きこと林の如くにして、黒烟天にみなぎり、少しにても歩行する時は、襟袖は墨の如くなりければ、健康上大いに有害なることを感じたり」

とはこの時の勇右衛門の感想であった。エヴォン川に沿って一部が小高い丘になっているこの土地は、曇の日になるとスモッグで一寸先も見えず、煤煙による喘息患者があふれて、その住民の平均寿命は三十数歳という悲惨さである。

「バーミンガム市の成立は、比較的新しいものです」

留学生吉田は説明する。

「百年ほど前、金属工業の勃興とともに栄えたのが始まりであります。イギリス中部の炭田より燃料の供給があり、また、西部のスミスウィックには、蒸気機関の発明者ジェームス・ワットの創設したワット社もあり、まさにこの地はイギリス人の申す『幸運の

地』であります」

バーミンガムを含むイギリス中部ブラック・カントリー地方は、地下に鉄と石炭の鉱脈を多く有している。

「たとえば、北部リーズの町では、家の下に穴蔵を造り家具を収めようとした町人が、石炭の層を掘り当てたという話があります。人里離れた土地にしか炭田が無いと思うのが間違いであります。ブラック・カントリー地方に近代工業が発達するのは、原料と燃料の産地が相接し、もって工業能率が強力に上がるゆえであります」

と吉田は言った。

「吉田君、おはんは、よう勉学しちょるの」

勇右衛門は褒めた。すると吉田はさも恥かしそうに俯き、

「小生は、日本国の体制が早く欧州に追いつくことのみ念じております。イギリスは島国なれども、全世界の数十パーセントを植民地にしており、日の没することなき国家として世に誇っております。小生の夢は、イギリスのような強国に日本国を仕立て上げることであります」

吉田は答えた。

「不幸にして吉田某は、イギリス留学中、私費にて各地の工業都市を巡視してまわり、その煤煙によって胸を病み、異国に没したりしとぞ。前途ある若者の勉学の中途にして

の死は、戦場で倒れたるに似たり。もってこの当時の若者の労苦を知るべし」

勇右衛門は明治三十年に、この吉田のことを思い出して語っている。

2

バーミンガムには小規模な銃器工場が乱立し、私営のものは名のあるところだけで二百五十余の多きにのぼっている。流石に全部まわることのできぬ勇右衛門は、主だったところばかり見学した。官営工場と違い、私営はどこも愛想が良かった。維新戦争の前後、膨大な量の銃器を買い入れた日本を、どこの経営者も上得意客と見ていたのである。

（それがどっこい、目論見違いじゃ）

この寡黙なアジア人が、バーミンガムの最新工業知識を導入し、独自の銃器産業を作り上げようと企んでいるとは、誰も気付かない。

「二百五十余箇所の（小銃）製造場は、（イギリス陸軍省及び海軍省と）契約を結び、万一国家有事の日には政府にてこれを借り上げ、政府の官吏を入れてこれを使用し、その休業中は日数に応じて相当の費用を製造場の持主に支払う手はずなり。この二百五十余軒の製造場と政府の設立にかかる製造場にて一斉に製造する時は、一日壱万挺の銃を

製造するを以て、いかなる非常の場合に遭遇するも決して銃器に欠乏を告ぐるの憂いなし」

と勇右衛門の報告書には、ある。

この私営工場群を見た時、彼は大いなるヒントを得た。

大型の工場は蒸気が基幹動力源だが、小規模のそれは未だに水力利用が多いのである。

「蒸気機関は常に一定の力を得られるが、燃料の消費による経済効率の問題を考えれば、水力の方が、我々のごとき小規模経営者にとってはありがたいのです」

と案内をしてくれた工場長は言う。

「我が国のごとき工業未発達の場所においては、いたずらに費用のかかる蒸気設備より、水力によって機関を用いる方が有効なり、と思えり」

勇右衛門は、ここで工業経済効率の観念を教えられ、目からウロコの落ちる心地だった。

その後、アームストロング大型砲工場へ行き、工場の製造順序の整理整頓に感心し、二日後の朝、さらに北部のマンチェスターへ向った。

この都市は世界第一の製綿業で知られたところだが、勇右衛門の目的は同市の郊外にあるウイットオース小銃製作所だった。

「ウイットール（彼はこう発音した）は、人の名じゃ。この人は今より二十年ほど昔、小量の装薬によって、通常の大砲より長射程を得る発明をものにした」

道々、勇右衛門は吉田に教えた。

「ウイットールは、その発明を小銃にも応用し、この地に工場を造ったとじゃ。この銃、外観は旧来のエンフィールド銃に似ちょるが、最も違う点はその銃身内部にある」

通常の小銃は内部にライフリングが切ってあるが、このウイットオース小銃は正六角形の特殊なねじれを有し、弾丸も六角形の専用弾を用いる。

「銃線（射程）は他の銃と異なり、弾丸の回転一層急速なるをもって、より遠距離に達し、且つ命中率も優れておる」

勇右衛門は手放しの褒め様であったが、このウイットオース製銃器は、その後しばらくして名声を落とした。種々の軍用実験において、銃身内の磨滅減損が他の銃より激しい事がわかったからである。

それでも勇右衛門はこの製作所で使用する諸設備に感服し、軍用銃一挺と自ら用いる射撃専用銃一挺を購入した。

ロンドンへ帰った勇右衛門のもとに、イギリス政府の官営銃器工場視察許可証がようやく届けられた。

「ようやく出やったかい」
ほっとした勇右衛門は、ただちにロンドン北部エンフィールドの国営工場に出向いた。
政府の案内人は、まず最新式ヘンリー・マルチニー銃の製造工程を彼に見せた。
「現在、我が国はスナイドルよりこのヘンリー・マルチニー式に交換が進んでいる」
と職人たちの働き振りを誇示した。
「この工場では一日に幾挺の銃器を生むや」
勇右衛門が尋ねると、
「今は一日に五百挺ばかり」
と答えが返ってくる。
「ここには一日千五百挺を生み出す設備があるが、銃器の交換は諸経費がかかるため、平素は三分の一の設備しか稼働させていない。もっとも、一朝事ある時には、急速に工程を組んでヘンリー・マルチニーを第一線の兵士に配備することが可能である」
政府の案内人はヘンリー・マルチニー銃を誇らし気に分解して見せた。
(これは、あまり良い銃ではなか。こんなものがイギリスの次期制式小銃かい)
「我一向に感服することなし」
勇右衛門は首をかしげた。彼の好みは機関部が回転鎖閂式――ボルト・アクションで

ある。しかし、ヘンリー・マルチニーは底碇式――レバー・アクションであった。引金後部のレバーを押し下げ、薬室を開放して弾丸を込める。口径は十二・五ミリ、照尺は千五百ヤードに切られており、ライフリングは三条。

「撃鉄内蔵式では、薬室に弾が込められているかいないか、不明ではないか」

と問うと、工場の職人が黙って銃の機関部右側にある細長い棒を指差した。これが横になっている時は装塡時、立っている時は薬室内が空という。

（構造が煩雑過ぎる）

もともとこのヘンリー・マルチニー銃は合作であるという。銃身のライフリング設計はイギリス人ヘンリー、複雑な機関部はスイス人マルチニーの設計による。

「実は現在、この銃は日本の海軍が購入を決定している。貴君の所属する陸軍も早くこの新鋭小銃を採用することを希望する」

と案内のイギリス人は小声で言った。

「何と、日本海軍が!?」

薩摩閥の多い海軍は、幕末以来イギリス贔屓である。

（無駄なことをしよる。おいの身内が制式小銃の統一策を乱すのか）

勇右衛門は内心腹が立った。ちなみに、日本海軍は、軍艦内の常備及び陸戦隊の装備としてこの銃を使用したが、重量四・五キロと従来のスナイドルに比べて五百グラムも

重く、使用弾薬の反動が大きい、と水兵たちの評判は極端に悪かった。

エンフィールドの工場見学で勇右衛門は、さほど学ぶこともなく、ロンドンに戻る。以後の予定は、公使館が組んでくれていた。彼は再び通訳の吉田を伴い、東の郊外ウールイッチの大型火砲工場へ出かけた。

ロンドンのウォータールー駅からテムズ川沿いに東へ向うと名高い天文台グリニッジに至る。そこから河蒸気に乗り換えて、テムズ川を僅かに下るとウールイッチの町に出る。

勇右衛門はここで目を見張るばかりの大口径砲身に出合った。

「こいは、いかなる口径か」

手持ちの巻尺をもって、工場の中央に据え付けられた砲身の口を計った。

「一ヤードもある」

日本の長さで言えば、ほぼ三尺（九十・九センチ）。

「これほどの砲を据え付ける砲台もまた巨大なものであろう。砲弾の装塡その他の設備も度を越した大きさが必要と思う。イギリスには一体、かほどの砲台設備が存在するものだろうか」

と問うと、ウールイッチの工場案内人は大笑いして、

「この砲身は、対露西亜（ロシア）用に考えられたものですが、試作に過ぎません」

当時のイギリスはロシアの南下策に反対し、チベットや中央アジアで小競り合いを繰り返していた。言わば最大の仮想敵である。

「クリミア戦争の頃から我らイギリスは、事ある時はロシアのセバストポール大要塞を攻める、と戦略が定まっています。ところが、近年ロシアは我が国の意図を察し、厚さ二十四インチ（約六十一センチ）の鉄で覆われた新砲台を築造し始めました。これを打ち崩すには、このサイズの巨砲しか無し、と設計したのですが、あまりにも現実離れしたものになってしまい、こうして箍まではめておきながら工場の端に晒しておくばかりです」

「そういうわけでしたか」

「しかし、我が国は、現在実用に堪えうる対セバストポール用長距離砲を開発しております。そのサイズは砲弾の重量だけで千五百ポンド。これが起工された時は、必ずミスター・ムラタにも見学会の招待状をお送りいたしましょう」

工場案内人は、さらにおもしろいものがある、と工場の応接室に勇右衛門を招いた。

「これが何かおわかりでしょうか」

テーブルに置かれた鷹の細工物を示した。

「アジア的な形をしていますな。清国の鉄細工か。いや、これは我が国の職人の手になるものでは」

「左様、ミョーチンのジザイカナモノです」

鎧鍛冶師の明珍家は、江戸期に入ると甲冑の注文が減ったことから、床ノ間飾りの鷹や竜の置物を盛んに作った。中でも鎧に用いる金属の蝶番技術を応用した可動式の作品は自在金物と称され、幕末期欧米人に好んで買われ海外に流出した。

「こうした巧妙な金属細工は、とても我が国の職人の手ではかなわぬところです」

ウールイッチの工場長も手放しの褒め方である。ためしに購入時の代価を聞くと五千円という。日本では二百円あれば屋敷がひとつ買えた頃の五千円だ。勇右衛門は驚いた。

「帰国後、こはいかなる事か、と彼の明珍造りなる鷹の置物の出所を調べしに、最初は東京山ノ手の旧旗本家より古道具屋が五円で買い取り、横浜の商人が五十円で買い取った。それをイギリスの商人が五百円で買い受け、本国ロンドンのオークションで五千円の価が付いた。日本人が日本の手技をいかに安く見ておるか、これでわかろうというものじゃ。もっと自国の物品に誇りを持つべき、とその時おいは思ったものよ」

後に勇右衛門は伝記作家に対し、腹立たし気にこう語っている。

3

ウールイッチの見学を終えた勇右衛門は、工場長の紹介状を得て、南部に足を伸ばした。

ドーバー海峡に面したハイスという町に着くと、海岸沿いに巨大な砲台が幾つも現われる。

「これをトーロン台場と言う」

勇右衛門は通訳の吉田に教えた。

「英仏の海峡が最も狭い場所が、フランス側のグリネズ岬に向って突き出すイギリス側のダンジネス岬じゃ。ナポレオン一世は、ここよりイギリスに上陸せんものと狙うておった。イギリス側もこれを知り、あたりに十数ヶ所のトーロン台場を築きしという。トーロンとは砲台の名ではない。即ち台場の砲がいずれの方向にも回転し、自在に射撃できる方式を左様に申すのじゃ。今日では、その台場も廃止され、跡地が多く小銃射撃場となっている。ハイスは中でも盛大という噂じゃど」

二人がそのハイス射撃場に入ると、フランスのカンドシャロンで勇右衛門が優秀な技量を見せた、という話は早くも伝わっていて、

「ようこそお越し下さった。当射撃学校でも貴君と競点射撃をいたしたく思い、すでに用意を終えております。射撃法は慣れた手順でよろしい。何ならフランス式でも当方は一向にかまいません」

と言うではないか。勇右衛門は驚き入った。

「小生は世界に名高いハイスで競点射撃をするほどの射的家ではありません。東洋から来た一介の軍人でしかないのであります。願わくば、イギリス最新射撃術の教えを請わんことを」

と答えると、

「それは隠さずお教えしましょう。しかし、代りに競射の方は必ず出場していただきたい。当方は射撃を全て立射にて行ない、二百ヤード、六百ヤード、千ヤードの三つのコースを用意しております」

と言う。勇右衛門は仕方無く付き合ったが、ハイス射撃学校の生徒数人との競射では、いずれも軽々と勝利した。

「貴君の手並には、まったく感服いたしました」

ハイスの射撃学校長は喜び、

「このような技量を持つ人は、ヨーロッパ各国を見まわしても、そう多くはない。これよりは遠慮せず、行く先々で競技に参加し、日本国の射撃術ここにあり、と広めてまわ

るのがよろしい。国威の高揚にはこれ以上の宣伝は無いでしょう」
と手放しで褒め千切った。
（これが、ジョンブルの平等競技心（フェアプレイ）という美点じゃな）
勇右衛門は褒められても内心は冷静である。
（英仏にも優劣がある）
と自分の体験をもって両国の違いを即座に見抜いた。
（的撃ちはイギリスの方進歩しおれど、戦場での軍用射撃術はフランスの方優れるがごとし。且つ、ジョンブルは立射より伏射の方に長所ありと見ゆ。これ国民性のゆえならん）
勇右衛門は遠く戊辰（ぼしん）戦争の頃を思い出した。
（あの頃、薩摩は立ち射ち、長州は寝射ちで攻め寄せる、などと敵は言い習わしておったが、射ち方にもお国振りが表われるものなんじゃのう）
戊辰と言えば、このハイス射撃学校の教官にも日本駐屯の経験を持つ士官が何人か居た。
「お懐かしい。自分は横浜村の元町近くにあるキタカタ（北方村）で暮していた、インド極東派遣軍上がりです」
中の一人がわざわざ赤い正装で勇右衛門を訪ねて来た。

「この格好を御覧あれ。実に欧州の軍服は窮屈です。日本のキモノは、すこぶるゆるやかにして人の身体をしめつけず、動きやすい。現在フランス軍の中に、中東のトルコ服を真似たベストとハーレム・パンツの装備軍あり。あれは、けだし卓見であります」

と、言うではないか。勇右衛門は苦笑し、

「では、実験的にイギリスも和装の軍隊を作られては如何。あれは袖口に物は入る、懐に物は入る。弾薬帯も、雑のうもいらぬ便利な衣服ですぞ」

と答えた。日本経験の長いその予備役将校は、肩をすくめる。

「それが、フランスとイギリスの考え方の差でありましてな。当国では、かたくなに衣服の伝統を守るのです。赤い軍服も敵の射撃目標になるというのに、どうしても改変しようとはしない。いずれイギリス陸軍は、榴散弾やガットリング砲の前で一列に並び、シャコ鳥や七面鳥のごとくなぎ倒されて行くでしょう。軍服はその土地の色に合わせなければ意味は無い」

予備役将校の言葉は、歯に衣着せぬ、まことに有益な言葉だった。

ハイスは、ことほど左様に勇右衛門にとっても居心地が良く、できれば帰国までここの学校で暮したかった。が、留学生身分である。心をドーバーに残し次の見学地に向った。

「オールダーショット」

勇右衛門は汽車の中でイングランド南部の地図を広げた。
「名高い軍都ですが、ここでは何を？」
見るのかと吉田が問うと、
「なあに、大砲の射的があるばかりじゃが、吉田君、耳栓は用意しておくが良か」
勇右衛門は自分の懐から脱脂綿のかたまりを出して、半分彼に渡した。
オールダーショットにはロンドン南部一帯の守りの要として、歩兵・砲兵・工兵・輜重兵四万余が駐屯している。
士官、下士官らは家族を呼び寄せてともに暮し、住民の大部分も何らかの形で軍に依存した生活をしている。この点は、フランスの造兵都市サンティチェンヌと同じだ。
オールダーショットの引き込み線に列車が入ると、ズシンズシンという腹に響く音が聞こえて来た。
「実弾の砲撃訓練は、早や始まっておる気配じゃのう」
列車は陸軍専用駅に停車し、二人は出迎えの人々に導かれて、その場から砲術訓練地へ向った。
「臼砲の砲撃を御覧に入れる」
勇右衛門が監視壕に入ると、砲兵指揮官が距離千五百ヤード、放射状に十ヶ所の的を置いて発砲した。

「二十ドイムの臼砲を以てこれを射撃せしに、百発百中着発せしには一驚を喫したり」

勇右衛門はイギリス砲兵の練度の高さに舌を巻く。

「臼砲とは、初速が他の砲に比べて遅く、弾道は大きく弧を描いて着弾する。よって、この砲は山の向う側や、都市の建物越しに敵を攻撃するのに適しているのである」

指揮官は、勇右衛門らを東洋の軍事未開国民と見て、わかりきったことを長々と述べたが、彼は無表情に聞き入る。

(そうであった。戊辰の頃は、加賀藩から借り受けたあの砲で……)

やがて、砲声に耳を傾けながら勇右衛門は、思い出に浸り始めた。

(臼砲は歩兵の友とは申せ、重かったのう。北越の道ならぬ道を集団で牽いていくあの苦しみ、死んで行った維新の同志たち。辛か戦じゃった)

勇右衛門は不意に大粒の涙をこぼした。

(これは不覚)

あわてて袖口で目頭を拭う彼を、臼砲指揮官は不思議そうに見返した。

砲撃見学の後、小銃射撃場に出ると、ここでも勇右衛門の評判は伝えられていて、

「我らもハイスと同じく、貴官との射撃競争を望むものである」

と教官らが口々に言った。

「三百ヤードと八百ヤードの伏せ射ち、立ち射ちを試したい」

「よろしい」
勇右衛門は上着を脱ぐと射撃の座に着き、たちまち全標的に当てた。
噂に違わぬ彼の腕前に、オールダーショットの教官らは息を飲み、
「貴国の軍隊中に、貴官のごとき妙手は幾人ほど有りや？」
と一人が問うてきた。
「吉田君、訳してくれたまえ」
勇右衛門は軍服の詰襟を正しながら、静かに命じた。
「我が国にては小生ごとき者は中以下の射撃手なり。当方は士官ゆえこの程度である。執銃を本分とする下士官兵卒の内には、百発百中の妙手多し、とな」
「心得ました」
吉田が流暢にこれを伝えると、イギリス人教官は大いに驚いた。
「オールダーショットは英国最大の陸軍の町なれど、我見るところ小銃の教育技量はハイスのそれに比べ数段劣れるが如く見えたり」
勇右衛門は欧州日記に書いている。

4

オールダーショットで歩兵、騎兵、砲兵の三兵操練を見学した後、勇右衛門はブリストルに出た。

「ここに、メッドフォード氏と申す銃器研究家がいる。射撃の名人にして、その発明たる新型銃身を用いた狙撃専用銃が製造されている。おいは、ここで一挺購入しておきたい」

と吉田に説明した。

ブリストルは古代より西部イングランドの主要港であった。石鹸やココア・チョコレートの生産地で、ガラスや綿糸、軍用品では靴や弾帯までがここで作られている。銃器以外の装備品も設計している勇右衛門としては、見落とすことのできぬ土地だ。

「当社は、メッドフォード式小銃が一挺五ポンド、狙撃専用銃は二十五ポンドです」

と会社の窓口で教えられ、勇右衛門は二挺を日本に送るよう注文した。

メッドフォード（日本人は当時、メソフォードと呼んでいる）は、この少し後、フランス人M・フィリーがニトロセルロースを基剤として画期的な無煙火薬を完成させると、早速小口径の連発銃を造り上げた。

しかし、この時期は、未だ初速の遅い黒色火薬の弾丸を使用している。
（銃身内の削り出し技術以外には、さして見るべきところもない）
注文を終えてロンドンに戻ろうと、駅への道を歩いていると、後ろから馬車が追って来た。
「日本陸軍のムラタ氏だろうか。少々お待ちいただきたい」
馬車から降りて来たのはメッドフォード小銃製造所の製造所長、ジェームス・メッドフォードである。この人は社長の実兄で、彼も世に知られた射撃家だった。
「著名な東洋の射撃家をこのままお帰ししたとあっては、当社の恥です。ぜひとも、これより我が社の射撃場で、お手合わせ願いたい」
と早口で述べる。仕方無く予定を変えて馬車に乗り、メッドフォード社の専用射撃場に二人は向った。
そこはブリストル・ウェストン間を結ぶ鉄道線路上にあり、射線は鉄路と交差していた。的は彼方の土手に据えられ距離千ヤード（約九一四・四メートル）。汽車が通行する時は射線上に旗を振って中止を合図し、通行し終ると射撃を再開するといった危ない射場だった。もっとも周囲は全て社有地で、汽車はかなり遠方から確認できる。
ジェームス・メッドフォードは、自分専用の狙撃銃を用いて、まず五発放った。
「その誇言（こげん）ほどになかりしも、なかなか巧みに見えたり」

勇右衛門は、苦笑いして軍用銃を取り、射座に入った。初めの一発を放つと、的から大きく外れて土手に当る。

（ひどく癖の悪か銃を渡しおったな）

量産型の軍用銃は銃そのものにいろいろな当り癖が付いている。これを弾着によって照準器を修正し、己れのものとするのが当時の命中法だった。

（左上に外れるか。されば右に照準をずらしてやろう）

勇右衛門は残り四発を、次々に的の黒点へ当てた。

「軍用銃をもって、さほどに当てるとは、なるほどムラタ氏は名人ですな。今度は自分と同じ狙撃専用銃を用いて十五発の正式競点をいたしましょう」

メッドフォードは、勇右衛門の実力を見てむきになった。

「いや、自分はもとより一介の軍事留学生であるからには、貴下と競点など思いもよらず。また、この競技に負ければ日本陸軍の恥ともなるので、ここで止めておくのが良策であろう」

と勇右衛門は吉田に通訳させたが、メッドフォードは聞き入れない。製造所へ人をやって、自分の狙撃専用銃を二挺取り寄せ、

「さあ、競点を」

と急かすばかりである。

「聞き分けの無い奴じゃのう。されば、吉田君、この男には左様申してくれ」
勇右衛門はこう訳させた。即ち、
「汝（なんじ）は狙撃専用銃を慣用しおれども、当方は軍用銃を慣用しおれば、双方手慣れた銃にて競点いたすべし」
「それでは、ムラタ氏が不利でありましょう。軍用銃は止めなさい。これではフェアではない」
最初、照準の狂った軍用銃で人を試しておきながらフェアも何もないものだ、と勇右衛門は思ったが、意地を張って軍用銃を用いるとメッドフォードに言いつのり、とうとう彼の主張が通った。
千ヤードで十五発が発射された。二人ともに一発も外さない。しかし、黒点命中がメッドフォード九発に対し、勇右衛門十二発。周辺の四点に勇右衛門三発命中。メッドフォードは四点部分に四発、二点部分に二発という成績となった。
標的が手元に届けられると、メッドフォードの表情は一変した。
「ムラタ氏は私を騙（だま）した。非常にずるい」
とわめき出した。
「これは聞き捨てならぬ」
吉田も血相を変えて反論した。

「この男は、何を怒っておるのか？」

「いや、初め、村田氏が『射撃を下手なりと答え、己れは自分の信ずるところに従って上手なりと答えたが、村田氏上手にして、これはまったく自分を欺きたり。実にアン・フェアなり』と詰るのであります」

あはは、と勇右衛門は笑い、次のように自分の考えを吉田に訳させた。

「なるほど、汝が申すことも一理あるが、小生は自分が未熟と信ずるゆえ左様答えたのである。また、これは双方のお国振りの違いにもよる。我が日本にては、いかなる上手名人と申せども、己れの技術を誇らず、人に会っては拙しと答える。これを謙遜の美徳と申す。自分は貴国の国風に合わさず自分の信ずるところを答えしにて、決して汝を欺きしにあらず。それより問題とすべきは、一番最初に小生へ貸し与えられた軍用銃の照準のひどさであろう。あれこそ、アン・フェアの極みなり」

メッドフォードは驚き、最前勇右衛門が操作していた銃を取って自分も射ってみた。

「これはひどい。誰だ、客人にこのような銃を出した者は？」

早速問い詰めてみると、イギリスの各射撃場で名声を高めている東洋人の技に嫉妬した一人の射撃監視員が、銃をすり替えたことがわかった。

「これは、まったく当方がフェアではなかった。恥じ入るばかりです」

メッドフォードは陳謝し、再度の競点を申し込む。今回は勇右衛門も前銃床が短い狙

撃用の小銃を用いる。発射数は前回と同じ十五回。
初め勇右衛門は黒点を外し、四点部分に当てた。メッドフォードは次々に黒点を射ち抜いていく。
（これは意気込みが前回と違うちょる。おいも、ここで負けるか）
と覚悟を決めた時、メッドフォードは六発目で僅かに外し、四点を射ち抜いた。勇右衛門も初めの一発以外は黒点を抜いている。ここで両者はまったくの同点となった。
メッドフォード社の従業員も、射場の監視員も、通訳の吉田、鉄道の旗振りまでが手に汗を握ってこの競射を見守り続けた。
残り一発となった時、メッドフォードは微かに焦ったらしく、外枠の二点に当てた。勇右衛門は最後まで黒点に命中させ、十四発必中という成績で終る。標的の土手に赤い旗が上がると、歓声と落胆の声が交差した。
「次は、二百ヤードの立ち射ちで十五発」
メッドフォードは、ジョンブル魂を剝き出しにしてなおも食い下がる。
「こうなれば最後まで付き合いましょう」
またしても十五発競技となったが、勇右衛門十二発に対し、メッドフォードは七発しか当らない。ここに勇右衛門の圧勝で競技は終了した。
「立射でこれほどの成績を上げる者は、イギリス広しといえども、私の知るところムラ

タ氏一人でしょう。当社で製造する狙撃専用銃の訓練を為せば、さらにその腕は上がり、十五発皆中も夢ではないと思われます。このブリストルに数日滞在なされては」

メッドフォードは勧めて止まず、勇右衛門もその熱意に折れてその地に泊った。

三日後、ようやく解放されて駅に向う彼をメッドフォード社の主だった者が見送った。中でもジェームス・メッドフォードは、同じ列車に乗り込み、温泉地バースまで見送った。

「次の視察予定地は？」

「再びフランス、そしてスイスに参ろうと思います」

勇右衛門が言うとメッドフォードは、名残り惜しそうに、

「スイスよりお帰りの後は、是非再びブリストルに来遊されたし。その時までに私も充分練習を積み、ムラタ氏と均等に競う力を付けておきます」

強く握手を求めてきた。

5

勇右衛門は、軍用銃の研究ばかりしていたわけではない。スイス出発の直前、彼はロンドン兵器博覧会（アームズ・エクシビジョン）を見学した。

会場には、近年発掘されたケルト人の手斧からローマ人の攻城兵器、中世、近世の甲冑などに混じって日本の具足や刀槍も展示され、とても一日で見てまわることができない。勇右衛門は通訳の吉田に数日の休暇を与え、一人でそこに通い詰めた。

野営炊事道具やテントといった周辺機材も多く出品されていた。近代戦はこうした軍備の充実によって兵に負担をかけず、効率的に行なわれるものであるという事が彼にも理解できて、これはかなりの収穫であった。

中でも彼の目をひいたのは、一個のブリキ製の筒だ。上部は蓋付きで、そこに水を流し込むパイプが通り、下部には漏斗状の噴出口がある。

「これは何か？」

と勇右衛門は、質問した。この頃になると彼も簡単な会話程度は、通訳を用いなくともこなすようになっている。

「軍用の水漉し器である」

係の者が、これは旧式なタイプ、参考出品であると答える。

「いつ頃の品なるや？」

「我がイギリスがアメリカと戦った時、用いたものと聞いている。一番新しい製品はこちらに並べてある」

こちらは薄茶色の塗装が施され、型も小さく、パイプはゴム製に変っている。

「基本的な構造は変らぬ。上から汚水を入れると下より浄水が出る。途中に幾重にもフィルターが入り、不純物を漉し取る。これは我が軍がエジプトより内陸アフリカに進撃する時、用いたものである」

開拓期のアメリカや、水に乏しい砂漠地帯で、兵士はやむを得ず汚れた飲料水を口にした。結果、罹病する者が続出し、戦闘能力も大幅に低下した。

「水無くして人は生きられぬ。よって我がイギリス帝国軍は多くの水漉し器を装備し、以来辺地の戦闘にも、非常なる好結果を得た」

係員は胸を張った。勇右衛門はこれなるかなと思い、販売会社を尋ねた。意外にも官営ではなくロンドン市中の民間会社であるという。

住所を聞き、その足で訪ねて買い求めた。

通訳の吉田が後でその話を聞き、何を物好きな、という意味の言葉を口にした。

「おはんも先の見えんこつ。この携帯濾過器は、我が国の兵備にまっこて有効じゃ」

勇右衛門は答える。

「思うてみよ。我が国の今日の仮想敵は何処じゃ？」

「清国であります」

「かねてより聞く。彼の国の水は、場所によりすこぶる不良なりと。一朝我が国と清国戦端を開かば、数万数十万の兵が彼の地に渡ることとなろう。そいじゃち、この器具は

小銃よりも大事の品となる」

勇右衛門は帰国後、吉田に言った事と同じ話を上司に語り、ウォーター・クリーナーを提出したが当時の軍部は、

「必要にあらず」

と採用を却下した。勇右衛門は諦めることなく、イギリスから持ち帰った濾過器に自らの工夫を加え続けた。また野外に出かける時は必ず携帯し、川の水を漉して飲んだ。こうした実験で彼は一度も腹をこわしたことがなかったという。

時移って明治二十七、八年（一八九四、九五）の日清戦争時、異国に渡った兵士らは罹病する者が多く、陸軍省はあわてて勇右衛門の濾過器を試験採用した。

閑話休題、勇右衛門のスイス行きに話を戻そう。

一八七五年、初夏。

スイス滞在に備えて彼は、ロンドン市内で衣服を購入した。

「彼の地は高地なれば、夏とはいえひどく冷えるに相違ない。おいは鹿児島者じゃで、寒さには弱か。厚か外套が無ければ生きていかれんとじゃ」

登山靴やステッキまで買い揃えてホテルに戻ると、フロントに大量の手紙が待っていた。

「全て軍用郵便ですね」

吉田がひとつひとつ開いて、説明した。
「これは驚きです。これらは射撃大会の招待状ではありませんか」
イギリス各地の連隊、射撃学校、フランスの兵器工場のそれもある。
「カンドシャロン、ハイス、バーミンガム……、全て村田さんの射的術を、兵士生徒らの前で見せてくれるよう頼んで来ております」
「大会で模範演技をせい、と言うとるのか」
勇右衛門が、国威発揚の気分で射撃をしてまわった事が、今や各地で噂の的になっていた。二、三の新聞にも画像入りで掲載され、ツネヨシ・ムラタの名は、その筋では知らぬ者の無い程に広まっている。
が、当の勇右衛門はそれを知らない。
「面倒じゃが、吉田君。『我、瑞西（スイス）に出発すべき時日（じき）に迫りたれば、遺憾ながらこれを辞す』と、招待状に返事を書いてくれぬか」
「承知しました」
吉田は答えた。
が、たったひとつ、勇右衛門が出席を快諾した書状があった。射撃大会ではない。かねてより約束のあったウールイッチの対セバストポール長距離砲起工式である。
その日、勇右衛門も吉田も、日本陸軍の第二種軍装で工場の式典に参加した。

イギリスの砲術関係者、技術者等数百人の列席者が居並ぶ前で、大型ハンマーの打ち上げ式があり、昼には場所を移してパーティがあった。

ここで製造責任者の演説を、勇右衛門は聞いた。

「御来賓の皆様、弾丸重量千五百ポンドの巨砲は、未だヨーロッパで製造を聞かず、このイギリスでも初めての事であります。そもそも、この砲を設計するに至ったもとは、ロシア帝国のセバストポールに鋼鉄板の、厚さ二十四インチ四方で覆われた砲台出現であります。両国が戦いを開始すれば、我がイギリスはさっそくこの巨砲を戦艦に備え、地中海へ押し出すでありましょう。さりながら」

ここで演説者は、気取って咳をした。

「ロシア帝国も、大型の防御装備においては定評のある国であります。必ずや、二十四インチの鋼鉄板に重ねて厚い装甲板を開発するでありましょう。されば、我がイギリスもさらに巨砲を用いざるを得ず、楯と槍の攻防ますます苛烈を極めるものと思われます。ところが」

イギリス側には不利な点がひとつある。陸上の要塞はいくら重量を増やしても大丈夫だが、軍艦はそうもいかない。射ち返される事を恐れて装甲を厚くすれば艦それ自体の重さが増す。巨砲を載せようとしてもそこにある程度の限界が生じるだろう。

「我輩は歴史の書を好んで読みますので、こんな事を考えました。中世、騎士たちは銀

磨きの分厚い甲冑をまとい、動きも鈍く戦いました。それでも当時の飛び道具は威力乏しいゆえに、甲冑は価値がありました。しかし銃や砲の発達は、甲冑を簡単に射ち抜き始めます。人々は重いばかりで役に立たぬ甲冑を脱ぎ捨て、素早く銃弾から伏せるため身軽な揃いの服をまといました。これが現在の軍服であります。この説より推し量りますに、巨砲を搭載する軍艦は重量ある装甲板を廃し、速力のあるものを用いるか、ネルソン提督以前の木造船時代に逆戻りするかもしれません」

一種イギリス式、穿ち過ぎのジョークだが、場内は爆笑と拍手の嵐となった。

「吉田君、おいは笑えんち」

勇右衛門は片頬をゆがめた。

「おいどんたちゃ、刀に鎧で戦っておった。そいが、まだ十年と経ちよらん。ついこの前の事じゃでのう」

「はい、私も幼少の頃は、正月に甲冑の着初めをいたしました。以前はあんなもので弾が防げると思っていたのですねえ」

ロンドンに戻った勇右衛門は吉田に厚く礼を述べ、次の日、一人フランス行きの列車に乗った。

6

パリに到着した彼を、在フランス日本公使館書記生の兼松某（なにがし）という者が面倒を見た。
「しかし残念ながら、我々は公使館の仕事が多忙で、村田さんと終始一緒にいることができないのです。その点をお許し下さい」
と兼松は言った。
「なに、心配はいらん。おいも一個の日本男子じゃ。言葉はわからぬでも、なんとかやっていける」
「でも、本当にお一人でスイスまで行かれるおつもりですか？　途中、鉄道は数ヶ国を通り、幾つもの駅で乗り換えねばなりません」
「おいには強い味方があっど」
勇右衛門はパリの書店で買った大判の地図を取り出した。
「鉄道線にあらかじめ行く先を書いておく。それより出発点と到着点を記し、途中たえず指先でそれを追って行けば、辺地は知らず、この先進ヨーロッパの鉄道にては何も恐いことはない」
イギリスでも通訳の付かぬ時は、こうして一人で各地を巡ったという。兼松は、この

鹿児島人の剛胆さに舌を巻いた。

それでも彼は、勇右衛門の一人旅行を危ぶみ、パリの駅で同じスイスに行く者を探してくれた。

「日本人の旅行者と同乗してくれる御仁は居られませんか」

と停車場を走りまわると、一人のアメリカ人が手を上げてくれた。

「私もスイスのローザンヌへ行きますから、御一緒に」

とアメリカ人特有の気やすさで言った。もっとも、兼松は下手な英語——この人はフランス語が堪能でも英語はかなりひどかったらしい。勇右衛門曰く、「もっとも不完全なる英語を用いる」——で、そのアメリカ人はフランス語がわからない。勇右衛門は両方の言葉があまりわからぬというひどい有様であった。

ともかく兼松と別れて列車に乗り込んだが、さて、それからが大変だった。同じコンパートメントで膝を突き合わせ、話しかけてもあちらは一向理解しない。勇右衛門は日本を発つ時に、日常会話を英仏独日に訳した便利帳のようなものを用意して来た。フランスでもイギリスでも、それひとつで何とか用を足していたのだが、アメリカ人は勘が鈍く、また彼の発する言葉そのものも訛がひどくてどうにもならない。

「ええい、これでどうじゃ」

困り抜いた末に、勇右衛門は便利帳をただ指差すだけにした。

「おはん、おいはこれより厠に行き申す」
と、その文章を見せれば、アメリカ人は大きくうなずく。
「ははは、初めからこうすれば良かったのう」
だが乏しい日常会話集では、それ以上の進展が無い。彼は、さらに一計を案じて白いノートを取り出した。
「これが、こうなっての。わかり申すか？」
勇右衛門は若い頃から銃器の設計書を描いていたため、図解という手技を持っていた。
「その談話すべきことを絵に描きて指示したるに、これは会話よりも却って能く了解し」
筆を走らせるたび、アメリカ人はほうほうと歓声をあげて首を縦に振る。
「まっこて、絵解きは便利じゃの。我が国でも寺の坊主が文字ひとつ知らぬ田舎の老人に、熊野や立山の絵巻を見せて説教し、感じ入らせ、涙まで流させるというが、もし、おいがもっとうまい絵ば描けるとすれば世界中楽に旅できる」
勇右衛門は、コミュニケーションの成立にほっとした。

ところが、危機はその後すぐにやって来た。列車が国境近くの山間部に入り、小さな

駅に停車した時である。

勇右衛門は前記のごとく自分の地図にコースを描き、駅の停車数を数えて万一に備えていた。

「ここが乗り換えの駅と思うが」

アメリカ人の方を見ると、首筋のボウ・タイをゆるめ、鞄の中から雑誌など取り出しては、リラックスした様子である。

「ここの駅、乗り換え。わかっておるか？」

勇右衛門は、下手な英語と地図を指差すことにより告げた。アメリカ人は愚鈍な表情で首をかしげ、

「ノウ、ノウ」

勇右衛門に向ってせせら笑いする。やけに自信有り気なその態度に、

（兼松君が必死で探し出してくれた奴じゃ。この者を信じるべきか）

一瞬、彼も椅子に座りかけた。だが、思い立って窓を開け、ホームを窺うと、荷運びが彼のものらしい荷物を隣のホームにある列車へ移していくではないか。

（間違いなか。こ奴の方が思い違いしちょる）

勇右衛門は、身振り手振りで窓の外を指差す。アメリカ人は迷惑そうにノウノウを繰り返すばかりだ。

駅員が向うのホームで何か叫び、鐘を打ち振る。
（これは発車の証ならん）
勇右衛門は網棚の手荷物を引っ摑み、ホームへ飛び降りた。
夜汽車である。アメリカ人を乗せた車輛と勇右衛門を乗せた列車は赤い灯火を交して、左右に分かれていく。一人になった勇右衛門はひどい不安に駆られた。
（もし彼の米人の説が真実ならば、おいはヨーロッパの見知らぬ土地へ連れて行かれる。また、おいの説正しか時は、米人は以後ずいぶんの苦労を成すに違いなか）
そのまま椅子へ横になり、ままよ、と目を閉じた。
早朝、朝霧の中でその列車は停止した。勇右衛門の荷物が貨物車輛から引き出されていく。降りてみると、目的地のスイス・ローザンヌ駅であった。
「ここが兄山（ローザンヌを彼は日記にこう記している）か。我、汽車を誤ること無し」
パリであらかじめ電報を打っておいたから、駅頭には陸軍留学生柏村某が待っていた。この時のうれしさを、勇右衛門は、生涯忘れることは無かったという。
「危ないところであった。いざという時、他人を当てにしてはいかんのう」
馬車でホテルに向う途中、彼は柏村に言った。若い陸軍士官は目を剝いて、
「先年、フランスより当地に参るべく、貴官と同じにパリ発の列車へ、研究生吉井幸輔

氏も乗りましたが、同乗の者の言葉に頼りて乗り換えせず、北方のオランダに着いてしまったようです。恐らくその米人もオランダに行ってしまったのでしょう」

と答えた。

「吉井君も、そげな目におうたとか？」

「フランス公使館員の目がくもっているので、留学生は皆左様な災難にあうのです。駅頭で見知らぬ同乗者に面倒を見させよう、などと姑息な考えで大事な人々を送り出す事はもう止めにした方が良いでしょう。それにしても流石は村田少佐です。臨機応変、危機を脱された」

「おいの心は、いつも常在戦場じゃからな。維新の時は、常に周囲の情況を観察し、即座に決断を下した。それによって明治元年の合戦を生き延びた。じゃっどん、こたびの行き違いだけは胆ン冷えるごつ。鳥羽伏見でもこれほど冷や汗は出んじゃった。欧州列車恐るべし」

二人は大笑いしたが、それは勇右衛門の本音であった。

柏村の周旋で数日後、彼はローザンヌの兵学校を見学した。

スイスはそれ以前より国民皆兵制で、日頃は常備軍も僅かな数しかいない。

「当国の兵役は男子十八歳より二十歳まで二年間でありますが、常に兵営にあるわけではありません」

柏村は説明した。スイス人は最初の一年間を、歩兵の者なら三週間、砲兵は六週間の基礎教育として職業軍人から受ける。教育訓練は多く実戦に即した野外演習であるという。

「教育期間が終れば、軍の採点将校が参り検閲し、一応の水準に達しおれば解隊して各々を家に帰します。その折りは、銃器衣服雑のう等、兵装一式を所持せしめ、家庭に保管させるのです。残り一年の兵役期間は、年に数度の訓練と日曜ごとの射撃練習が義務づけられており、故に村ごとの射的大会も盛んであります」

これを聞いた勇右衛門は維新の後、鹿児島で、川辺郷の迫田助八と行なった民兵訓練を思い出した。

（おいが一郷でやっておったことを、スイスは国全体でやっておっ。やはりあれは有効な方法であったのじゃなあ）

勇右衛門はローザンヌの兵学校に頼み込んで、新兵の野外演習に同行した。さらには、同校の教官ジャケー少佐に射撃教育の内容を質問する。

「ローザンヌの兵士は、民官共用の射撃場で訓練しています。その多くは二百メートル、三百メートルの遠射用で、軍用の移動標的は少なく、競技用に近い的当てですよ」

ジャケー少佐は、スイスの国技は射撃術であり、その原点は周辺からの独立を得た中世、ウィリアム・テルの時代まで遡ると話した。

「スイスは平地が少なく、二、三百メートルの射場でも遠射用なのです。この国が戦場になると仮定すれば、多くが山の尾根から尾根への狙撃戦となるでしょう。ここでは砲兵も大口径砲の地域制圧ではなく、小口径山砲の精密集中射撃を行ないます」

これも九年前、勇右衛門が新潟の戦場で体験したことと酷似している。

（あの時の山岳戦は、身を削る思いじゃったが、おいもスイス人と同じ戦をした。山中の陣地戦は、悉皆狙撃術の優劣が勝ち負けを決める）

ジャケー少佐は、勇右衛門と柏村をローザンヌ周辺の射撃練習場に案内した。

「これはまた……、村という村には必ず射場があるではなかかい」

農家の裏手、彼方の山の中腹へ尾根越しに射つところもある。その場所も無いところでは小銃の弾を改造し、狭い室内で「弱装弾射撃」を行なっている。

「我が国では、日曜日は必ず教会と射撃場に行く習慣があります」

ジャケー少佐は老人が孫の手を引いて、室内射撃場に入って行く姿を見せてくれた。

「スイスの産業は、農地少なきをもって牧畜と林業中心であります。牧童や杣人は職業柄視力が良く、狙撃者に向いております。いやしくもスイス人たれば、ウィリアム・テル以来の伝統を受け継がざる者ひとりもなく、銃器も彼らの好む型式であります」

勇右衛門は、それを聞いてスイス軍の銃器修理所へ足を運んだ。

ジャケー少佐は、彼のために小銃のライフリング洗浄装置まで披露してくれた。将校

の持つ拳銃はフランス式のシングルアクション・六連発。小銃については勇右衛門も見覚えがある。

「これはマンソー式とヴェッテルリー式でござるな」

マンソー式小銃は口径十二ミリの紙製弾薬筒を使うものと、口径十・五ミリの金属薬莢を用いるものがある。発火は雷管外装式のタイプだが、薬室への装填は銃身後部の把手を引き起こし、手前に引いて右に遊底を回転させ、しかる後に弾薬を込める。発砲すると遊底の頭部が弾薬筒の底部一杯に密着し、銃身内の圧力が増す。よく考えられた構造だが、所詮は回転鎖閂式に移行するまでの過渡的な型式に過ぎない。ヴェッテルリー式小銃は、さらに奇怪な構造である。可動式の遊底は存在せず、弾薬装填には銃身を回転させて薬室を開く。雷管は外装式で、照尺は九百メートルにまで切ってあるが、口径は十五ミリもあり、全長は一メートル二十五センチ。敵前でこの銃身をいちいち回して弾を込めるのはひと苦労だろう。

「我々もこの銃の扱いにくさには閉口しております。そこで一部の部隊にはフランス製のシャスポー式小銃を、また一部の兵にはドイツのドライゼー式小銃を配備しております。いずれ我が国も独自の近代小銃を開発するでありましょう」

ジャケー少佐の言葉通り、この十数年後、スイス陸軍はルドルフ・シュミットとルビンによりストレート・プルポット式と称する優秀な小銃を開発した。これは遊底を回転

させず、ただ後方に引くだけで装塡排莢を行なう直動式システムであった。しかも使用弾頭は鋼で覆われ、口径も七・五ミリという無煙火薬登場前としては画期的な小銃であった。

7

スイスは勇右衛門にとって、暮しやすい土地であったようだ。住民は質実剛健、奢侈を嫌い、ただ射撃術だけを主な娯楽としている。英仏の地で時折り見かけられるようなアジア人蔑視の風もなく、山道で行き合う牧童が彼に向って声をかけ、時には自家製チーズの一片を勧めたりした。

「水は良し、人は良し。これで食事がもう少しうまければ、言うことは無いのですが」

案内役の留学生柏村が、散歩の途中に牧場で水を飲む勇右衛門に言った。

「柏村君は、ここに来てどれほどになる？」

「まだ半年であります。その前はドイツに配されておりました。勉学の傍ら、青木公使の手伝いもいたしておりました」

柏村は苦笑した。

「小生は、どうもこの地の食が口に合いません。チーズに干肉、野菜は酢漬けの西洋白

菜（キャベツ）に馬鈴薯ばかり。白身魚の刺身と旬の筍が食べたい今日この頃です」

「そうか」

勇右衛門は自ら称して薩摩の芋侍と言うくらいだから、この地の芋の味もよくわかる。スイスのジャガイモは地域にもよるのだろうが、ローザンヌ近辺のそれは大型で、一粒が大人の握り拳ふたつほどもある。このあたりの主婦は、挽きつぶして小麦粉とバターを混ぜて団子状に作り、茹でて皿に盛る。温かいうちはまだしもだが、冷えてしまうとこれほどまずい食物もない。大味過ぎるのだ。

「パンも、ドイツやフランスのそれよりまずい。これには理由があります」

スイスは、その年に収穫した小麦を備蓄にまわす。山腹の冷暗所に積み上げ、古くなりかかったものから市場に出して消費する。

「備蓄は、常に戦争に備えてのことであります。当国は十六世紀、マリニャノの戦い以来、独立中立の立場を堅持せんとし、一朝事起こり国境を全て塞がれた時も、自給自足して戦うのであります」

「常備軍、予備役の仕組はようわかった。その一朝事ある時、スイス軍予備役の召集方法はどうなっちょるか？」

「主に電信によります。スイス政府、他国の侵入を受けたと察するや、陸軍省が各地の町村召集所に第一の電信を送ります。兵士らは自分の家庭で装備を調えて出頭し待機し

ます。続いて陸軍省第二の電信を発するや、出陣と定まり、敵を討つべく定められた方面へ進軍いたします。この方法でスイスは、一週間に二十五万の兵を前線に配備することが可能であります」

「二十五万か」

勇右衛門は、後に書いている。

「瑞西は我が国に比して半分ほどの小国なるに、兵の数は我が国より多きのみならず、その組織の完全なるは歎賞のほかなかりけり」（『回想録』）

さて、勇右衛門は、ローザンヌの町で一度だけ、市民の射撃大会に参加した。

町を歩いていて人が集まっている。散発的な銃声にひかれて覗き込むと、射的をしている。

「外国人よ、汝も試しに放ってみよ」

フランス式の黒い陸軍士官服を着用している勇右衛門に、一人が手招きする。どうせ素人の手なぐさみだろうと、適当に並べてある一挺を手にして射撃すると、一等になってしまった。

（これは、大人気ないことをした。女子供の遊びに近い競技で、つい本気を出してしもうたど）

恥かしそうに立ち去る彼へ、主催者の一人が、

「近日、ここで賞品の授与式がある。ぜひ出席されたし。おって通知する」と告げた。数日後、招待状が来たというので出かけてみると、見物人数千人。人々が群がるその中央に表彰台があり、賞品が高々と盛りつけられている。楽隊も出て、受賞者が上がるたびにファンファーレを鳴らし、帽子が宙に舞う大変なお祭り騒ぎであった。

勇右衛門が恥かし気に式台へ上がると、

「ヤーパン、ヤーパン（日本人よ、日本人よ）」

と声を合わせ、人々は一段と激しく帽子を振った。東洋の、つい最近国を開いたばかりの国民が、自分たちの国技で優れた腕前を見せた。その事をただただ素朴に言祝いでいるのである。勇右衛門は感動で口もきけなかった。

しかし、その直後に困った事も起きた。表彰台の傍らにスイスの民俗衣装で着飾っていた十数人の女性が、勇右衛門の前にやって来て口々に何か言う。

「柏村君、この女子らは何ば言うちょるのか？」

「少佐殿、これも賞のひとつです」

楽しそうに留学生は説明した。

「射撃で高得点を得たる者は、このスイスでは英雄なのです。英雄と舞踏を為すは、スイス女性にとってもこの上なき名誉と申します。少佐殿、召されるままに美姫と踊られ

るがよろしいでしょう。小生もここでゆっくり見物させていただきます」

「こ、こん和郎が。おいは薩摩男子ぞ。日本陸軍将校ぞ。かくも、大勢の面前で見も知らぬ女子と抱き合うて舞うなど、できることでなか」

叫ぶ勇右衛門の手を、ひときわ着飾った金髪の娘が婉然と微笑みつつ引っ張る。

「困った。許してたもっせえ。この通り、頭ば下げる。いや、負け申した」

『村田銃発明談』にも次のように出ている。

「村田氏は舞踏の心得なければ、大いに困却して固辞したれども（スイスの婦女子は）肯んぜざりしにより、日本は舞踏の風習なきゆえ、これより稽古して踊るべければ今回は宥るされたしとて、ようやくこれをのがれたり」

ほうほうの態で表彰式を逃れた勇右衛門は、柏村を連れて町に出た。他に一人伴がいる。ホテルの主人が、道に迷わぬよう付けてくれた、まだ年少のボーイである。

名を、ナポレオンと言うからにはフランス系であろう。ちなみにこのスイスは、フランス、ドイツ、イタリア、それに土着の古語を合わせた四つの言語圏が複雑に組み合わさっている。

このナポレオン少年が帰途、しきりに勇右衛門の袖を引いた。

「こゝ二才どんは、何ば言うちょっとか？」

「自分の知っている室内射場がある。そこで腕試ししてはどうか、と申しております」

柏村が訳した。さして気が乗らなかったが、あまりにも少年が熱心に言うので、彼はそこへ足を向けた。

「うむ、これは大きいところじゃな」

銃は数十挺も並び、客も盛んに出入りしていた。料金は弾丸二発で一スイス・フランと高価だが、二発とも当った時は一フランの二倍に値する品物が賞品として出る。

「どうやら、このボーイは、少佐殿の腕を用いて賞品を得たい心積りであります。まこと欲の強い奴」

柏村は鼻を鳴らした。勇右衛門は一挺の銃を取り上げて重心の位置を片手で計り、

「良か、良か。これも日本人の国威を発揚させる機会じゃ」

一フラン払って弾を込めた。弾丸は金属薬莢の弱装弾である。

一発目は簡単に当った。が、二発目は的にも当らず壁の弾避けに土煙を上げる。

「ん？」

勇右衛門は片眉を上げた。左右で射撃している客たちも、初めの一発は当っても次の一発は外れているようである。

「妙じゃな。柏村君」

「はい」

勇右衛門はわからぬように手を伸ばして、銃の照準器を確かめた。

（これは、ぐらついておる）

銃身の上にはめた照門、照星ともに僅かながら動く。発射の震動で狂いを生じるように細工してあった。

「憎い奴よ。これは詐欺騙りの類いではないか、柏村君」

「はい、抗議いたしましょう」

「まあ、待て。このような卑劣な店は、痛い目にあわせるが良か。五フランばかり弾を買うて来てくれ」

勇右衛門は、ナポレオン少年に身振りで何が欲しいか尋ねた。彼は一番高得点の毛皮帽と革のベルトを指差す。

「ふふっ、良かなあ。よっく見ておくが良か」

一発放っては指先で照準器の位置を戻し、途中からは勘だけで次々に当てていった。少年の喜び様といったら無い。他の客も射撃を止めて見物にまわる。あわてた射場の経営者が、景品を六個ほど抱えて現われ、

「どうかこれで御勘弁願いたい」

と頭を下げた。勇右衛門は柏村に向って、

「こう訳してくれ。この店の景品を数えるにまだ許多あり。今少し射ってみよう、とな」

店主は泣き出さんばかりになった。

勇右衛門は片端から的を射抜き、店の景品を全て取り尽した後、

「ナポレオン君、三つだけ好きな景品を選びなさい」

と命じて他は返してやった。居並ぶ人々は拍手し、店主も泣き笑いの表情を浮かべる。

「これに懲りたれば、二度と銃に細工いたすべからず」

と柏村に言葉を訳させ、勇右衛門は颯爽と店を出た。

8

勇右衛門は、またこの国の幼年教育に注目した。

スイスの初等教育は十一歳から十六歳までの義務教育で、就学せざる者は法律で罰せられる。学費は、国民の収入を三段階に分類し、一番高収入の者は同年代の生徒三人分の経費を負担する。二級の者は二人分の経費を、貧しい第三級の者は費用をまったく負担せず入学できる。

この初等教育にも、軍事知識普及科目は入っており、生兵体操（用具を用いた個人運動）、練兵（行進術）、射的が国語や算数と並んで教えられる。

後年、勇右衛門は文部省からの欧州学校教育事情の問い合わせに、当時のスイス見学記を披露している。それによると、

「瑞西国は、いやしくも男子にして射撃術を知らざる者一人としてなく、その状あたかも我が日本国の封建時代に、武士の男子剣術を知らざるを恥とするがごとし」

と前置きし、

「小学校には必ず、予備役の職業軍人が教官となっておる。生徒は歩兵、砲兵、軍楽隊の三種の教育いずれを選ぶこともできる。校内には歩兵教育のため子供用小銃を揃えた部屋があり、砲兵のためには我が国の砲で言えば五十匁ほどの小型砲を備えた部屋があり、軍楽隊用に各種楽器を置いた部屋もある。入学した子供たちは、初めの一週間、これらの部屋を巡って遊ぶ。教官は子供らを観察し、長く小銃を弄ぶ者を歩兵、砲に興味を持つ者を砲兵、楽器を喜ぶ者は軍楽教育を専門と指定する。その後、年が行くにつれ小隊運動、大隊運動、連隊運動と練兵を教育し、上級の者は野外の模擬戦闘を行なうのである」

この時、生徒らに学校備えつけの軍服、子供用の小銃、サーベルを持たせ、生徒同士の投票によって隊長、下士官を決める。

「余、その戦闘法を見るに大人と少しも変ることなし。ただ、上級将校も徒歩にて乗馬せざるところが妙なるばかりなり」

また、模擬戦闘の他に、行軍という授業もある。

「かねて学校へ通学の際、教材を入れておく背のうに兵糧を入れて背負い行けり。道路、野原を通過する時は、教官は行軍術を実地に教育し、目的地に達すればただ銃を組ませて練兵などせず、終日遊ばせておく。帰路は子供らの自由にまかせ、汽車、迎えに来た親の馬車、歩いて帰る者などいろいろである」

勇右衛門が最も注目したのは、この行軍に用いていた児童用の教材入れであった。

「形を見るにプロイセン軍の背のうに似て、頑丈便利なり。極貧の者は靴も履かず裸足にて通学するが、この背のうばかりは欠かすことなし」

勇右衛門は一人の貧しい少年が壊れかけた背のうを大事に使っているのを見て、その美風を褒め、新しい背のうを買って贈った。代りに彼の古い背のうを帰国の際持ち帰り、各方面にスイスの優れた教育法を語った。だが、初めは誰も耳を傾けようとはしない。

数年して森有礼が文部大臣となった時、勇右衛門を招いて実見談を聞いた。

「貴下の述べらるる如きことは、今日はじめて聞き及びしなり」

なぜ今までかくも利益ある意言が伝わらなかったか、と森有礼は文部省役人の迂闊さを怒り、勇右衛門が提出した古いスイスの背のうを喜んで受け取った。学習院初等科から全国に広まったと伝えられる我が国ランドセル文化の普及には諸説あるが今日、勇右

衛門の持ち帰った背のうから始まったという説が有力とされている。

「ともかく、瑞西国民ほど識字率の高い民を、他のヨーロッパ諸国、いずれを見ても発見する事かなわず。たとえば――」

と例をあげて説明した。

「おいは常に申す通り、ヨーロッパの言葉に疎ければ、一人にて歩きまわる時は、通訳より訪ぬる先の地名番地を紙に書いてもらい、これを辻馬車の馬丁に見せて乗車しておった。一体にスイスは貧困の子も学校に通わすゆえ、馬丁風情といえども地名を読み容易に目的地へ達す。フランスやイギリスは大国じゃが、駅頭の馬丁で、おいの示す住所を読まざる者往々にしてあり。これによって不便を感ずることすこぶる多かった」

勇右衛門は半月ほど暮したローザンヌより、同国のツーロンへ移動し、大人の兵士の操練を見学した。この地の兵士は、連発銃装備である。銃身の下にチューブと称する筒状の弾倉があり、ボルトを引くごとに一発ずつ上にせり上がり、薬室に装塡されていく。

「まだ試製ですが、最高十二発まで予備弾丸を入れておくことができます」

と勇右衛門に銃を手渡した。

(便利じゃが、どうにも銃が重いのう)

チューブ・マガジンの欠点は、これであった。勇右衛門も明治二十年(一八八七)、

各国の軍用銃連発化の動きに合わせて同じ型式の銃を試作した。装弾数は八発。装塡法はボルトを引いて遊底を開き、筒の中に一発ずつ込めていく。八発込め終る頃には中のスプリングは圧縮されて、非常に固くなっている。製造にも操作にも手間のかかる銃で、採用期間も短かった。

勇右衛門は、ここでも射撃競争を士官たちから挑まれた。

「イギリスの競技会で全勝した名士と、新聞で読んでおります」

と彼らは二人の代表を勇右衛門にぶつけてくる。初めは四百五十メートル、五回の標的射撃だったが、延長戦七回となり、夕暮をもって中止。勇右衛門の勝ち越しになった。

彼は競技の結果に相手が不満を抱かぬよう気を使い、ホテルに招いて士官らと食事をともにした。

席上、スイス人士官の一人が質問した。

「貴官は、すでにイギリス、フランス二国の軍を視察していらっしゃる。狙撃術はいずれの国が優れているとお考えですか?」

「それぞれに一長一短がある」

と勇右衛門は、柏村に通訳させた。

「おいは僅かな期間しか視察せんので、充分なる答えはできぬ。けれど、見知るところ

によって申すなら、イギリス人は遠距離を伏せて射つことを好み、スイスの国民は近距離の立射が得意である。フランス人はそのちょうど中間であろう」

敵前で弾雨の中、堂々と身をさらして発砲するのがスイス人、と聞いて二人の士官は褒められた、と大いに喜んだ。

が、これは勇右衛門にとって世辞でも、ましてや阿諛でもない。思ったままの意言だった。

食事が終り、去り際に二人は写真の交換を求めた。後で彼らの事をホテルの主人に聞くと、

「このスイスでも一、二を争う名射手ですよ。あの人たちと同等に戦うあなたは、ヨーロッパでも最高の射撃手ということになりましょう」

感動の面持ちで語った。

こうしてスイス視察を終えた勇右衛門は、最終見学地のドイツへと向った。

山岳鉄道を乗り換え、馬車と時には徒歩でドイツ領に入った彼は、ベルリンに到着すると、ただちにドイツ公使青木周蔵へ面会を求め、国営スパンドウ銃器工場と射撃学校の見学周旋を頼んだ。

ドイツ軍部は、その国民性だろう、ひどく形式主義で、

「スパンドウ工場は現在、最新型の軍用小銃を製造中である。同じ国の軍人であっても陸軍大臣より特別の許可を得ざる者は入場を得ず。いわんや他国民をや」

というイギリス陸軍に輪をかけた答えが返って来た。

「村田少佐、どうするかね？」

青木公使の問いに、勇右衛門はまるで意に介さずといった風に、

「直接スパンドウに行き、まず周辺の諸施設見学より申し込んでみましょう。イギリスでもこの手でうまくいっております」

彼は公使館の通訳一人を伴に、汽車に乗った。青木公使は勇右衛門の出発後、ドイツ陸軍大臣に宛てて電報を打ち、

「彼の者は、欧州の新聞にも載った我が国の誇る射撃名人である。なにとぞスパンドウ射撃学校の見学を許可されたい」

と依頼した。これが良かったのだろう。

勇右衛門が校長に面会すると、

「貴官到着前に、陸軍大臣閣下より申し伝えがあった。近々この学校に各地の連隊より、士官の射撃教育入校がある。その折りに貴官も体験入校されるが良かろう」

と意外にも親切であった。これもドイツの国風で、上から順序立てて申し立てていく分には、問題なく事が進んでいくのである。

スパンドウに宿をとった勇右衛門は、校長の紹介で一教官に引き合わされた。射撃においては有能のようであったが、どこか勇右衛門を見下すところが感じられた。

この時代、ドイツの皇太子はウィルヘルム二世である。後に皇帝となり、第一次大戦に敗れてオランダに亡命するこの人物はまた、「黄禍論」という東洋蔑視思想の持主であり、キリスト教主義によって、ヨーロッパ大陸の文化的防波堤にドイツを育てようという考えを抱いていた。

そんな気分が、多少この教官にも植えつけられていたのだろうか。

「ヤーパンも、近頃はヨーロッパの射撃を学ぼうと思うまでに進歩したようだが、貴官も少しは銃の操作を知っているのか？」

と問うてきた。

「然り、当方も少しは学んだことがある」

勇右衛門は腹の中で苦笑しつつ答えた。

「では、明日、特別に射撃場で腕前を見て進ぜよう」

その日、教官はドライゼー小銃では一番新しい型のM一八六九型を取り出し、百メートルの距離に的を設定した。

「銃の操作法は、かように行なう」

親切にもボルトの引き方まで教え、発砲させた。何事もなく命中すると、

「では三百メートルの的で」
と設定を変えた。が、これも勇右衛門は全弾命中させる。
教官は十点射を三回、六百メートル射撃競争を三回行なった。が、いずれも勇右衛門の弾は的を射る。教官の顔は蒼白となった。

9

スパンドウ射撃学校の射撃教官は、勇右衛門の腕前に舌を巻き、
「この上は、ドイツ陸軍流の動的、限秒の二種射撃を試みられるが良い」
と、隣の実戦式射場に誘った。二人の後を物見高い学校の士官らがぞろぞろとついて行く。
土塁の向うにレール仕掛けの人体標的が二列から四列に並び、それぞれ複雑な動きを見せるのがドイツ式である。動的は人体の立ち位置のサイズだが、限秒は遮蔽物を移動する敵の動きに合わせ、上半身、首、左右の側面だけの大きさに描かれている。
「動的は早足と駆け足の二速度である。限秒の的は二個以上の的が同時に三秒間出現する。この三秒間に全ての的を射ち抜かなければならぬ」
「了解した」

勇右衛門は射場の台に置かれたチューブ弾倉式連発銃を手にした。
（これはモーゼルの試作じゃな）
単発式のボルト・アクション小銃下部に金属の筒が付いている。これはスイスのツーロンで見た形式と同じだった。
「この銃の装弾数は遊底内装弾も含めて十発であるが、貴官は五発程込めるがよいだろう」
ドイツ人教官が初めの数発を込めてくれた。さらに、射的の動きを見せてくれる。
（フランスのカンドシャロンよりも、数段実戦的で近代的じゃのう）
まず五発の動的射撃から開始した。
勇右衛門は初めの一発を外したが、四発は命中。続く三秒の限秒射撃も初め一発を大きく外し、後の四発を当てた。
教官は口笛を吹いて感心し、
「とても我らの及ぶところではない。これでは教えるどころか、貴官から我々が教えを請うのが順序と言うものだろう」
と言って握手を求めてきた。その時、見物士官の中にいる一人が、手帳の間に挟んだ新聞の切り抜きを示して、
「これはイギリスの新聞に載っていた日本人射撃家の記事であるが、ムラタとあるのは

汝のことなりや？」

と問うてきた。

「然り。それはスイスに向う以前の話である」

勇右衛門は答えた。その士官は周囲の者に記事を読み聞かせる。

「イギリスのハイス等で一等を取る名人なれば、所詮我らがかなうはずがない」

射撃場は大騒ぎとなった。

「貴官も人が悪い。初めからこういう事を話しておれば、もっと違うあしらい方もしたであろうに」

と言う教官に勇右衛門は首を振った。

「射撃術とは常ならぬものにて、このような好い結果をいつも出すとはかぎらず。さらには小生、我が国の新兵教育に利するため貴国に参りたり。ドイツ式の優秀な射撃手順を学ぶことが本分なれば、皆と同じく小生にも規則通りの学校教程にて教えられんことを望むものである」

「了解した。貴官の望みにまかせよう」

教官の周旋により、勇右衛門は翌日、スパンドウ射撃学校長の許可を受け、ドイツ将校と同じ待遇をもって入校を許された。

次の日が仮入学日である。入学式前に生徒の技量を見てクラス分けが行なわれる。

これは百メートル射撃で、的のサイズは幅三尺（約九十一センチ）、長さ五尺（約百五十二センチ）。中心に五寸（約十五・二センチ）の幅で縦に筋が黒く描かれ、ここに当ったものだけを命中弾とする。

「初心者の技量調べならば、このくらいであろうか」

あまりの呆気なさに当惑しつつ、新型のモーゼル式M一八七一小銃を手にした。

「このM七一式は年号でもわかる通り、約四年前に開発されたものである。貴官も知っているだろうが、この銃を用いて、現在は連発銃を試作中である。ボルトを九十度回転させて遊底を開閉させる方式は、射手を最も安全に射撃させるものである」

射撃教官は、ひとしきり自慢した後、五発の実弾を勇右衛門に手渡した。二発は試射用であるという。

（妙じゃな）

勇右衛門はまず銃床の重心位置を計り、照門と照星の具合を検査した。

（ふむ。照星の位置が左に傾いちょるのう）

ドイツが誇る射撃学校に備えられた銃が、このように整備不良というのはおかしいことだ。

（ははあ、スイスの室内射撃場と同じ事じゃな）

ローザンヌにいた時の経験を思い出した。これこそ、試験なのだろう。

（照星をこのままにして射てば、弾丸はその通り的を外す。ここは初めから勘で行くしかない。心持ち五寸の黒筋より左側を狙うか、銃を左側にねじるよう保持して放つがよいだろう）

こうして初弾から次々に命中させた。勇右衛門とはこの時初対面の若い射撃教官が、射場のまわりをぐるぐるまわり、彼の手元をしきりに覗き込んでは首をひねった。やがて、

「貴官は、この銃のどこを用いて狙いをつけているのか？」

と問うてきた。勇右衛門は腹の中で大笑いしながら、表面は無表情に、

「何も変ったことは為しておらず。照門と照星を合わせ、ただ的の中心に狙いを定めるのみ」

と答えた。他の入学士官らの射撃を見ると、誰も初弾から当てる者はなく、時折り命中してもそれは偶然のことであった。

「三発命中の者は次の射場へ進め」

と号令がかかったが、歩み出たのは勇右衛門ただ一人である。

第二の射撃試験は、長さ三尺、幅五尺、横に五寸幅の黒い帯を描き、第一段階の的を横にしたタイプである。これも銃の癖を考えて三発とも命中させた。

たまらず勇右衛門付きの射撃教官は彼の銃を手にして射撃した。が、黒帯にはまるで

当らない。ここで、昼食となった。

ドイツ人の風俗として、ここでは必ずビールが出る。

「昼だけで一人二ダースも飲む士官もいるそうです」

公使館から来た通訳官が、勇右衛門に説明した。

「ただ、ドイツのビールはアルコホルが薄く、多量に飲んでも大丈夫であります。女子供といえどもビールを口にし、時に己れの顔が隠れるほどに巨大なジョッキを傾ける美少女さえ見受けられます」

「されば、おいどんも試みてみるか」

酒には強い薩摩男子だ。味の濃い黒ビールと色の薄い低アルコールのビールを交互に飲んでいると、例の射撃教官が近付いて来た。

「いやはや、実に日本人は不思議の技を見せる」

苦笑しながら言った。

「先に貴官へ手渡した小銃は、誰が射っても的の中心を外れるものである。それをうまうまと当てるとはおかしな事だ」

「すると、貴官はことさらに不良銃を小生に渡したのか」

勇右衛門は、わざと顔色を変えて詰め寄った。

「い、いや、許されよ。これも試験のひとつなのである」

若い教官は焦り気味に手を振った。勇右衛門は笑って、

「我が国には銃の癖を見て放つ、という事が往々にして行なわれるのである。日本では洋式銃の輸入が無い頃、火縄式の小銃を用いていた。これらの銃は照門、照星ともに固定式で調整がさほどにきかない。そこで射手は、『この銃は狙いが心持ち上に行く、左に弾が行く』などと言って、狙い方を変えていたのである。即ちこの方法で命中させていた、と心得られよ」

「日本人の射撃術は、そこまで進んでいたとは初耳である。良い勉強になった」

教官は感心しきりであった。

かくて、入学式となり、翌日八時、勇右衛門は日本陸軍式の黒い軍服を着用して出席した。

学生はドイツ陸軍の大尉・中尉クラスが最も多く、そこに海軍の下級将校が僅かに交じっている。

勇右衛門は国は違えど佐官級という扱いである。彼の名声は早くも学生の間に伝わっていて、上席に腰を下ろすや、ざわめきが起きた。

しばし後、スパンドウ射撃学校長が現われ、ドイツ皇帝ウィルヘルム一世の勅書を読み上げた。その内容を要約すると以下のごとく。

「およそ世界の軍事組織は、底辺を一兵卒の集団より成す。それは、この世の物質が全

て一つの分子の結合体によってでき上がっているのと同じである。最下級の兵卒が充分に訓練され、射撃術に上達していなくては、どれほど便利な兵器を採用しても無駄である。諸君は兵卒を教育する将校として重要な立場にある。この学校に諸君らは五週間在学する。五週間の内に学課をこなせぬ者は、さらに数週間これを延ばす。その間、歩兵一兵卒と同じ生活、同じ射撃術を教えるが、必ず名人となって卒業されたし」

続いて、校長は生徒らを演壇の下にある大テーブルに招いた。そこにはヨーロッパ各国の近代軍用銃をひと通り並べてある。

校長はそのひとつひとつを手にして、

「この国の銃は、ここが悪い。あそこが弱い」

と欠点をことさらに挙げていく。最後にモーゼルのM七一を持ち上げ、

「このモーゼル・オーベンドルフ・アム・ネッカー社製の小銃にはひとつの欠点も見い出せない。全ての国の銃に勝る銃であるからには、いかなる射撃戦でも敗れることはない。もし、負けることあらば、これは銃の罪にあらず。兵卒の教育悪しきゆえである。諸君は心して射撃を学ぶべし」

と演説して式を終えた。

10

（ドイツ人は偉かのう）

勇右衛門は思った。

（校長は自国製の小銃を絶対の物として称揚し、学校の卒業生は隊に帰って兵士にこれを伝える。全ドイツ兵が自国で生産した銃を最良の物として疑わず、戦場に携帯する。その自信、信頼こそが軍紀上最も必要なるものじゃろう）

その時、勇右衛門の脳裏に浮んだのは、去りし維新の戦場であった。鳥羽伏見、北越の野に敗走した兵士たちが捨てていった多くの小銃弾薬……。

（あれらは我が国で生産したものにあらず。外国より適当に買い入れた中古の兵器じゃった）

敵味方の兵士には、ただ人殺しの道具にしか過ぎぬ異国製の小銃である。敗色が濃くなるとそれらの重い装備を、下級の戦闘員は簡単に投げ出していく。軍紀に照らし、これ以上の違反は無いと思えるのだが、この風儀はなかなか改まることがなかった。

（その点、ドイツ人と軍用銃の関係は違う。モーゼル小銃の銃身にドイツ皇帝の紋様を彫りつけ、これを決して手放そうとはせん）

勇右衛門は、近い将来日本で国産の小銃が開発された時、真っ先にせねばならぬ事は、銃器一挺一挺に「国章」を刻印する作業ならん、と胆に銘じた。

これが我が国の小銃に付けられた「菊御紋」の出発点であり、後年の日本帝国軍における異常な小銃神聖視と、内務班の過激な私刑の一要因となる。が、もちろん設計者たる勇右衛門にその責任を求めるのは酷というものだろう。彼は国産式小銃を「大事に扱う」、という基本的観念を未だ国家意識の希薄な初期の日本人たちへ植えつけようと考えたに過ぎない。

スパンドウ射撃学校の授業は、午前の内に学科、午後は野外での実地訓練となる。勇右衛門は佐官であり、射撃の基礎技術はマスターしている。さらには日本で国内戦も経験し、実地教程も必要ない。

「貴官は他の生徒が五週間のところ、三週間もあれば充分だろう」

教官たちは、それぞれに試験を行ない、結果僅かに一週間で勇右衛門を卒業と認めた。

「それでは、あまりにも簡単過ぎる。おいどんは、まだこの学校に居着いておい申す」

彼は無理を言って、自ら三週間教程を組んだ。

学科は通訳付きでこなし、実技は射撃以外のものを積極的に学ぶ。小銃を用いた器械体操、遮蔽物の飛び越しや陣地戦術、銃剣を用いた試合などは大いに勉強になった。こ

とに洋式銃剣術は後年、戸山陸軍学校でテキストを組むまでに発展し、従来のフランス式と合わせて日本独自の白兵戦闘術にまで昇華するのである。

やがて三週間目が来て、勇右衛門は半ば強制的に卒業させられた。

「もはや、貴官には何も教えることはない」

「しかし、国営スパンドウ銃器工場の見学は許されておりません」

「そうであった。貴官の真の目的は、工場の見学だったな。我々が申すも何だが、まったく、我が国の役人は頭が固い」

スパンドウ射撃学校の校長は、勇右衛門に同情し、ひとつの提案をした。

「スパンドウ工場は無理でも、国営とほぼ同じ工程で同形式の小銃、機械を生産しているところはドイツ国内に多く存在する。方針を変えてそちらを見学してはどうか？」

壁に張ったドイツの地図を指し示す。

「ベルリンのブルネッキ社、エッセンのクルップ社、ネッカー河岸のモーゼル社などは、一国の官営工場をはるかに凌ぐサイズであることを、貴官は知るまい。いや、こういう話を外国人に教える事は、半ば違法なのだが」

校長はあらぬ方向を向いて空咳をした。

「貴官は、当校の優秀な卒業生であり、外国人ながらドイツ軍人の魂を授けられた者と認めるから、かくは申すのである」

「ありがとうございます」

勇右衛門は、校長に向って覚えたてのプロイセン式敬礼をした。

ベルリンに出向いた彼は民間の猟銃工場、弾薬工場、弾薬入れやブーツの製造工場等を見学した後、エッセンのクルップ社を訪れた。驚いたことに、「大砲王」と呼ばれたクルップ社長が、勇右衛門を自ら会社玄関まで出迎えてくれた。

「あなたの射撃名人としての名前は、各種新聞によって承知しております」

クルップは白い髭をなびかせ、感動の面持ちで勇右衛門に握手を求めてきた。

「あなたをお招きできたことは、このフォン・クルップのこの上なき名誉であります。なにとぞこのエッセンに長く御逗留あって、工場を隅々まで御覧下されんことを」

各部門の上部責任者を案内に立て、言葉通り次々に工場内部を見せていった。

「エッセンの本社工場は、昼夜二交替制にして、昼七千人、夜業七千人。このわけはおわかりでしょうか？」

巨大な溶鉱炉の前で案内人は言った。

「存じている。炉の汽罐を一度冷やしてしまい、翌日再び熱するは、これ石炭消費量が数倍と成る。そこで火をそのままにし、間断なく鋼を生産いたすのである」

勇右衛門は、炎と煙の中を行き来する大勢の工員に目をやった。案内人は人事担当の

責任者らしく、心配そうに人の列を観察していたが、数人の者が一人を肩に担って足早に行き過ぎるのを目ざとく見つけて言う。

「昼夜休み無しの作業は、交替制にしてもいろいろと支障が出るものです。近頃は軍の注文が重なり、労働手順が過密になっております。工員の負傷も頻繁で、まさしく戦場と変りありません」

「兵器産業とは、そのようなものと聞いている」

勇右衛門はイギリスのアームストロング社で目にした大型兵器の製造工程を思い出していた。

（クルップ社は世界最大と聞いているが、新興の工場ゆえ、建物など次々建て増しによってつなぎ合わせている。アームストロング社に比べ、雑然とした観がある）

工場の中庭に出ると、レンガと木造を組み合わせた古い家がポツンと建っていた。

「これは工員の休息所であろうか？」

と問うと、案内人は答えて、

「当社の、記念館のごときものであります」

クルップが初めて兵器産業に乗り出した時、ここで自ら試作品や大砲の雛形を造り、設計をした場所と言うではないか。

（ああ、フォン・クルップ氏も、元はおいと同じ茅屋で暮しおりしか）

彼は維新前、鹿児島の木造家屋にひっそりと看板を吊るし、洋式小銃の試作を行なっていた頃の事を思い出した。

さらに別の炉を見学すると、案内人は、煤で汚れた二人の初老の工員を指差し、

「当社一万四千余の社員のうちで、彼ら二人ほど重要な役割を担った者も他にありません」

と説明した。

「炉中の溶解した鉄を外部に引き出す時間を見極めるには、よほどの熟達した勘が必要とされます。二人は長年の経験によってこれを会得し、火の色と流れ具合で温度を決めるのです」

「では、我らが日本においてクルップ砲を自国生産いたす時は、彼の工員二人も連れ帰らねばならぬ」

半ば冗談で勇右衛門が発言すると、案内人は本気で顔色を変え、

「そんな事をすれば、クルップ社は明日より一切の兵器製造が中止になります。ドイツ帝国は怒って日本と戦端を開くやもしれません」

と答えた。勇右衛門は工場を出て付属の施設――病院、工員たちの住宅、各種職業学校、公園、兵器博物館――などを三日間かけてまわり、オーベンドルフへ向った。

この町には、これも後世名を成したドイツ最大の小火器メーカー、モーゼル社があ

る。勇右衛門は、ここでも創業者パウル・モーゼルの手厚い歓迎を受けた。

「貴社のモーゼルM七一をスパンドウ射撃学校で操作したが、学校長が申す通り、これぞ世界最良の軍用銃であると思います」

パウル・モーゼル社長は、世界一の銃豪「メイジャー・ムラタ」に誉められて、まんざらでもない表情となった。

「M七一、口径十一ミリ、ライフリングは四条右回り、初速四百四十メートル、ボルト・アクション式。この銃の最大の利点は、イギリスのボクサー大佐発明による新型薬莢式弾薬の採用にあります」

社長室の壁に掛かった金属プレート付きの小銃を取って解説した。そのM七一は、ドイツ皇太子自らが射撃した記念の品であるという。

「御存知の通り、普仏戦争時の主力兵器ドライゼー小銃は、機関部より後方に発射ガスが噴き出す、という欠点がありました。この私も当時は軍人として戦場にあり、この逆噴射するガスに悩まされながら戦った一人であります。そこで、私は丈夫な金属式薬莢と、ボクサー式雷管の導入により、M七一を試作したのでありますよ」

初速が二百九十五メートルのドライゼー式に比べ、モーゼルは格段の進歩をとげた。

「しかしながら、ドイツ陸軍部は頭が固く、これほどの高圧に耐えられる機関部を有する銃など世に存在するはずが無い。いずれ大きな事故が起きるであろうから採用せぬ、

と言うのです。この時、若き皇太子が御手ずから射場でM七一を操作なさり、これを制式化するよう御命じになったのであります。彼の御方の御聖断無くば、我がモーゼル社は未だに中折れ式の訓練用拳銃を細々と製造する、田舎の小工場に過ぎぬものであったと思われます」

モーゼルはマントルピースの上に掲げられているドイツ皇帝と皇太子の肖像に深々と頭を下げた。

勇右衛門は、ネッカー河の岸辺に建つホテルでしばし疲れを癒し、ベルリンに戻った。

「これで、ようやく故国に帰ることができるな、村田君」

公使青木周蔵がその労を謝してなぐさめたが、勇右衛門は首を振った。

「否、イギリスに見学し残した場所があり申す。そこを数ヶ所巡って後、パリに至り、パリ近郊の民間工場も視察いたし申す。帰国の日ぎりぎりまでヨーロッパの技術を学び取って帰らねば、貴重な官費留学の費用が無駄になり申すで」

「熱心な事だ。君は本当に銃器が好きなのだね」

青木は呆れながらも、公使館の電報でパリでの通訳を手配してくれた。

全ての日程を終えた頃、フランスではすでに初秋の風が吹き始めている。勇右衛門

は、彼の留学期間中、各地で世話になった若い通訳官や学生らに礼状をしたため、マルセイユ行きの汽車に乗った。

帰国の船はイギリス籍の貨客船である。スエズ経由であるため、途中の暑さに備え、マルセイユの日本領事が彼にパナマ帽を贈ってくれた。その折り、

「村田少佐に、当マルセイユ射撃協会より、公式招待が来ているが、いかが取り計らおうか？」

と領事が言う。勇右衛門としてはすでに欧州各地で数々の射撃場を体験し、

「もう、腹いっぺ（一杯）ごわす。それに、仏式の優雅な宴会と申すものは、芋がら侍出の小生には、少々辛かでごわしてのう。まあ、辞退しておきまっしょう」

流石の彼も、銃を持つのに少々飽いていた。

だが、マルセイユの在郷軍人らは黙っていない。英、仏、独、スイスの各国で「銃豪」と謳われた勇右衛門の妙技を見ずして帰国させるべからず、と連日地元の新聞が書き立てる。領事館にも重ねて招待状が届く。とうとう彼はマルセイユ出発の前日、射撃大会へ参加せざるを得なくなった。

射撃場は市街地後方の丘陵地帯にある。抜けるように青い地中海を背景に、五人のフランス人選抜射手が勇右衛門と競技をしたが、むろん勝てるわけもない。

軽々と最高得点を得た彼に、マルセイユ射撃協会は賞状を手渡した。その表には、

「村田少佐をして、世界第一等の射撃家の地位に置くものとする」

と書かれ、これは最後に良い土産ができたと勇右衛門も満足気であった。

かくして、彼は他の欧州留学生らと船上の人となり、何事もなく初冬の日本に戻って来た。

出発は明治八年（一八七五）一月十八日。彼が下船して留学日記を閉じたのは同年の十一月十六日。一年足らずの欧州滞在ではあったが、その影響は大きかった。『村田銃発明談』の末尾には、こう記されている。

「その得るところは少なからず。（中略）殊に射的術にいたりては、氏が独得の技量を以て各国知名の射的家と競射を行ない大勝利を得て、先進国の欧州人を瞠若たらしむるにいたりては、ひとり氏の名誉のみならず、また我が国の名誉と言うべし」

田原坂（たばるざか）の雨

1

帰朝した勇右衛門は、戸山陸軍学校に復帰し、砲兵工廠（こうしょう）の技官を兼務した。

文明開化の政策は内外において進行し、西欧に対する崇拝思想は度を越したものになりつつあった。「洋行帰り」の肩書きを持つ彼は陸軍の中でもエリート中のエリートとして、一部からは羨望（せんぼう）の目で見られたが、常に恐れるがごとく恥じるがごとく、目立たぬように研究室の中で一日の大半を過した。

「ヨーロッパでの体験をもそっとお話しになれば」

と勧める者もあったが、勇右衛門はこれも固く辞退し続けた。いわゆる帰朝報告会というもので、こうした講演を何度か積（かさ）ねると知名度も増し、軍部内での出世も早まるという。

「村田少佐は欧州射撃界で、誰一人為（な）し得なかった世界第一等の称号を得た、貴重な御

仁ではないか。この名誉を世間に公表するは、欧州一辺倒の風潮を是正する事にもつながる」

ぜひとも講演を、と迫る新聞社や出版関係者に対し、勇右衛門は首を横に振り続けた。理由は、

「我が国の軍備を、一日も早く欧州に追いつくようにいたすが急務である。世上の事は二の次にて、一向かまうことはない」

ついには人々を怒鳴りつけて退散させた。

彼としては、欧州での視察の記憶が衰えぬうちに一日でも早く最新式の小銃を開発することが大事、と考えていたのだろう。

欧州留学以前そうであったように、研究室での勇右衛門はろくに食事もとらず、厠に立つ以外は設計台にへばり付いた。このため衰弱し、医師を呼ぶこともたびたびであった。

（最良の小銃は、モーゼルM七一なれども我が国では、工作技術が追いつかぬ。旧幕の頃から手慣れている仏式シャスポーの流れをくんだグラー銃と、オランダのボーモン銃などを範とするのが理にかなっておるのう）

勇右衛門は悩んだ。国力の劣る日本国が国産銃を手にするには、多少の妥協は必要であった。特に陸軍の全般的装備が旧幕以来の仏式という伝統をひいている以上、これを

無視するわけにはいかない。

「徳川家は存外にようやっておった」

事、西欧の技術導入の事業に関しては、旧幕政府の功績は大きく、初期明治政府はその尻馬に乗る形で事業の拡充を図ってきた。皮肉なことに「維新」の一番の功労者は徳川家なのである。

「じゃっどん、いつまでも旧幕の影響下で軍備の近代化を図るというのも、せからしか。おいも、もひとつ発憤せねばならんのう」

勇右衛門の焦りは、明治に生きる官民の一致するところでもあった。

西欧列強の植民地主義はますます先鋭化し、富国強兵策を早急に具体化できぬアジアの小国は、否応も無く大国に呑み込まれていく。日本の外は弱肉強食の世界なのである。

勇右衛門が、グラーとボーモン銃の分解組み立てを繰り返している頃、国内にも少しずつ不穏な空気が漂い始めていた。

彼が留学中に朝鮮江華島近海で起きた日朝交戦事件は、くすぶり続けていた征韓論を再燃させた。一方、士族の失業救済は遅々として進まず、逆に政府は明治九年（一八七六）三月の廃刀令や、同八月の長期年賦の金禄公債発行などによって彼らの特権を奪う策に出た。圧迫されていると感じた地方士族は暴発する。

十月二十四日、熊本で狂信的な武家集団神風連が甲冑に身を固めて蜂起し、同二十七日には秋月、次の日には萩の士族が政府の諸施設を襲撃した。

しかし、いずれも数日の内に鎮圧されている。

その間、不平士族の一大中心地たる鹿児島は不気味に沈黙を守り続けていた。

西郷隆盛を陰の盟主とする私学校党や、士官教育のための賞典学校、桐野利秋の出身地吉野に創設された吉野開墾社（これは実質的には下士官養成校であった）などの生徒たちが県下に跋扈し、県令の大山綱良もこれらと密着している。

また、私学校生は重要な公職を多く押さえ、中でも元陸軍少将桐野と篠原国幹、元文官の村田新八らは県内で徴収された租税まで私学校のために流用していた。

では、「首領」たる西郷は何をしていたかと言えば、こちらは完全に韜晦し、薩摩の山中を歩きまわっている。目的は温泉と狩猟であった。ちょうど、現在の東京上野公園にある西郷像と同じような姿で彼は愛犬を連れ、ウサギやイノシシを追いまわしている。

明治九年の末頃には、政府もこのような鹿児島の半独立政権を見逃しておくことができなくなった。維新三功臣の一人と称された長州閥の木戸孝允は「西郷嫌い」で知られていたが、彼が政府内の薩摩閥大久保利通を糾弾したため、ついに東京警視庁が重い腰を上げた。

まず、大警視川路利良が同じ薩摩出身の密偵二十三人を現地に潜入させ、西郷らの動きを探らせる策に出た。

同時に、鹿児島の各地に集積されていた陸海軍の銃器弾薬を、大阪に移送することとした。

明治十年（一八七七）一月、三菱汽船所有の赤竜丸が鹿児島に向い、政府火薬庫を開いて弾薬の積み込みを開始した。

これを知った私学校党の者数十人が、激高する。

「こいは東京政府ン挑発じゃなかかい。見逃せるもンでなか」

一月二十九日、同地草牟田にあった火薬庫を襲撃し、小銃弾六万発を略奪した。

これを聞いた私学校の上層部は驚いて会議を開いた。が、彼らとて政府には不満がある。この事件をもとに、対決姿勢を明確に打ち出していくべきである、という意見が大勢を占めた。

次の日の三十日も、翌三十一日も火薬庫襲撃は続き、小銃や大砲弾までが私学校生徒によって奪取された。

同時に、東京から派遣されている警視庁の密偵狩りが始まった。彼らの行動は、その初期の段階から西郷党の人々に嗅ぎつけられている。東京で活動する海老原穆を中心とする「評論新聞」の記者たちは、密偵の動静を同志に伝え、鹿児島では二月から一斉に

彼らの捕縛が開始された。

密偵たちは「東京獅子」と呼ばれた。二十三人のうち二十一人までが捕えられ、他に彼らへ内通する者五十余名。その内の一人が、

「西郷ひとり暗殺いたせば、私学校は瓦解に至るべし」

と語った事を重視した桐野、篠原らは、大隅半島で狩猟中の西郷に使者を送った。

西郷は、自分の暗殺計画を耳にしてもさほどに驚かなかったが、話が火薬庫襲撃に及ぶと、

「ちょっしもたあ（しまった）」

と膝頭を叩き、

「ないごて（なぜ）、弾薬など追盗せえ（盗んだか）」

眼を剝いて怒ったという。

西郷は、積極的に東京の政府と対決していこうなどとは、この時まで考えてもいなかったのである。

しかし、私学校上層部の意見が武装蜂起で一致していると知り、二月五日、鹿児島の私学校本校に姿を現わした。

この時の西郷の服装は、日頃の短衣白帯という質素なものではなく、黒の紋服に帯刀であった。

西郷が上座に座ると二百余名の私学校幹部は、一斉に発言した。元近衛少佐別府晋介が、

「率兵上京いたすべし」

と唱えれば、同じ元近衛の中佐永山弥一郎が反対し、

「西郷どんを中心に私学校幹部数人が上京、堂々と天下に政府の非を問うべきである」

と言った。出兵慎重を説く者も多く議論は白熱したが、永山の案に賛成する元近衛少佐村田三介に対し、幹部篠原国幹が、

「おはんな、死ンが恐ろしゅうて、議を言うとな」

と言葉を放った。

議（言い訳）を言うな、というのが薩摩人が幼少の頃から教えられている徳目のひとつであり、また大いなる欠点のひとつであった。

永山ら反対派はここに沈黙し、幹部桐野利秋が、

「もはや、僅かな名分にこだわるべきではない。率兵上京をもって政府の非を満天下に唱え、糺すべきであろう。ただ断の一言あるのみである。さあ、西郷先生の決断を仰ごうではないか」

議場の中は歓声と怒号が渦巻く。

西郷は脚をくずし、目を閉じた。彼はこの時、風土病によって睾丸が肥大し、長く正

座し続けることができなかった。
「何も、もう言うことはなか」
深々と嘆息した彼は、ここで有名な言葉を口にした。
「おいの身体を、おはんらに上げ申そ」

2

この時、勇右衛門は、東京小石川にでき上がったばかりの小銃鍛造所にいた。御傭い外国人であるベルギー人やドイツ人の職工とともに、銃身と薬莢の試作を行なっていたのである。また、フランス人ジョルジュ・ルボン大尉の周旋により、銃身用の用材鋼を輸入する計画も立て、国産小銃実用化への道は着々と進行しつつあった。
「西郷挙兵」
の報が東京に届けられたのは、二月十五日頃のことであったろう。すでに鹿児島の政府火薬庫襲撃事件は、電報によって伝えられていた。
当初、大久保利通も、
「我、自ら鹿児島に赴き、西郷を説いて諸人（私学校党）を鎮撫すべし」
と発言したりしていたが、事態はそれほど甘いものではなかった。私学校本校では看

板が外され、「薩摩本営」という文字が黒々と書き出されている。鹿児島の県下では「上京軍」の募兵が行なわれ、一万三千余の部隊が編成されていた。

二月十二日に政府は防衛策を協議し、征討軍の編成について、陸軍中将山県有朋は太政大臣三条実美に上奏した。

その間、二月十四日。私学校党を中心とする薩軍は、鹿児島を出陣している。

当日は、南国に珍しい大雪であった。薩摩藩以来の訓練地である伊敷村玉江練兵場に集合した兵士たちは、五大隊（各二千名）、三独立大隊（各千名）。他に二個砲兵隊、荷駄の隊。砲の数は四斤山砲二十八門。十二斤野砲二門。臼砲に至っては三十門装備という強力なものであった。

五ツ半、西洋時で午前九時ちょうどに、イギリス式のラッパが嘹々と鳴り渡り、陸軍大将の第一種軍装に身を固めた西郷隆盛が現われた。

乗馬姿の彼は、練兵場の北から南に向けて無言のうちに各隊を閲兵した。

「出陣」

実質的な総司令官である桐野が笞の代りにした青竹を打ち振ると、兵士たちの間から低く、

「うおお」

という声が湧き起こり、進軍ラッパと歓声が不気味に混ざりあって粉雪の舞う空に轟

いたという。

彼らの最初の目標は熊本であった。東京の政府首脳は、西郷自らが熊本城攻めの軍勢に交じっているとは初め信じようともしなかった。

しかし、十五日付けの薩軍発行上京趣意書にはこうあった。

「拙者儀、今般政府へ尋問の廉有之。明後十七日、県下発程。陸軍少将桐野利秋、篠原国幹、及び旧兵隊の者随行致候間、其台下通行の節は、兵隊整列指揮を可被受、此段及御照会候也」

差し出し名は陸軍大将西郷隆盛である。

この趣意書は、二月十九日に熊本の鎮台司令谷干城に手渡された。

「なんという無礼極まりない手紙であるか。政府の官兵に対し、賊徒の整列指揮を受けよとは」

激怒した谷は、ただちに鎮台兵の熊本城籠城を決意する。

彼の部下たちは城下に引き込んで打撃を与える案、あるいは鹿児島県境いの山岳地帯に出撃して各個に討つ案などを唱えたが、谷は籠城に固執した。

「神風連の乱では、当地鎮台兵は僅か二百人の旧士族に追いまわされた。その士気の低さは目にあまるものがある。この疵も癒えぬうちに再度の合戦である」

賊軍は万余の兵力、しかも名にしおう薩摩人で士気も神風連の比ではない。また、熊

本城下の士族には西郷に心を寄せる者も多く、出撃は良策ではないと谷は説明した。

「鹿児島県暴徒は、擅に兵器を携え、熊本県へ乱入。国憲を憚らず叛跡顕然に付、征討被仰候條、此旨相達候事。明治十年二月十九日、太政大臣三条実美」

という征討令が発せられた時、官軍は近衛兵、東京鎮台、大阪鎮台、名古屋鎮台、それに鎮台予備工兵や砲兵からなる混成旅団を編成して征討軍とした。

長州閥の山県有朋は、各地の官軍指揮官、下士官等に薩摩出身者が多く、そのまま使用すれば戦地で西郷側に寝返る者が出る、と予想していたのである。

勇右衛門たち、東京に残った薩摩人は初め息を殺して事態の推移を見守っていた。彼は欧州留学の前後から九州の家を引き払い、家族を東京小石川の官舎に住まわせていたのであまり問題も起きなかった。しかし、同僚の多くは親族を薩摩に残し、中にはその去就を疑われて政府から密偵を付けられる者もいた。

「欧米で言うところの市民戦争とは、かように陰惨なものであったのじゃのう」

維新戦争より、このたびの戦いは彼にとって暗く苦しいものに感じられた。

彼は連日、小石川に届けられる戦況報告に目を通した。

薩軍による熊本城包囲戦は、二月の二十二日未明から始まった。砲撃戦から白兵戦に移行し、神風連の乱で名をあげた第十三連隊長与倉知実中佐が薩摩兵の狙撃によって腹

部を射ち抜かれ、翌日死亡したという。

「狙撃……」

勇右衛門は悪い予感がした。薩摩人の中には、彼が教育した西欧式狙撃術の名人が多くいる。さらに報告書を見ると、初日から二日目にかけて鎮台側の高級将校が、軒並み狙撃で死傷しているのである。

「困ったことになった」

彼は悩みを打ち明ける者も無く、終日馬で小石川関口の屋敷町をさまよった。

その背後を法被姿に頬っかむりをした男がつけてくる。

（ふん、警視庁の密偵か）

初め大久保利通に見い出され、次に西郷の伝手で銃器開発の道を開き、ついで新政府の留学組に推挙された彼の立場は、微妙であった。

翌日、小銃鍛造所に出仕した彼を待っていたのは、

「熊本にあった樺山資紀参謀長が、胸部狙撃を受けた」

という報告である。

「何と、樺山どんが！」

樺山も鹿児島の出で、これも西郷の引きで軍人の道を歩んだ一人だ。

「これは内々の話でありますが」

と軍部の内情に詳しい報告者がささやいた。
「暗号情報によれば、樺山どんは熊本城外藤崎神社付近で指揮をとっておられ申した」
二十二日の早朝、城下に乱入した薩軍は県庁と藤崎神社に進出し、俄然射撃戦となった。
「第十三連隊長与倉中佐を、この時に樺山どんが背後から射ったと話が出ちょり申す」
「何な？」
与倉知実も同じ薩摩出身であった。
「与倉どんは、西郷さぁに内応するちゅう噂がごわした。そこで樺山どんが背中から射たせ、これを見た与倉どんの部下に弾かれたいう話でごわす」
報告者である薩摩人の下士官は顔をしかめた。

3

西南戦争における政府軍の優位は、一に海上勢力、二に通信、三に火力による圧倒であった。
薩摩方も、当初は海上攻撃を重視するという案を持っていた。西郷隆盛の弟小兵衛などは私学校蜂起の折りに、

「艦船の集結する長崎を襲い、軍艦を奪って海路大阪と東京を衝くべし」

と唱えている。また、薩軍第四大隊三番小隊長の野村忍助は、三道分進案を提唱した。

「一隊をもって長崎を衝き、軍艦を奪って政府の兵站基地たる大阪を攻める。次の一隊をもって日向・豊後を経て豊後水道を渡り土佐上陸。現地の強力な反政府勢力と協同し、大阪へ進む。第三隊はそのまま九州を北上し、熊本、佐賀、福岡を占領し、前の二隊の後を追う」

というものであった。彼は熊本包囲の直後も、

「薩兵一大隊のみを包囲攻撃に当てるべし。他は全力をもって小倉を急襲。関門海峡を挟んで、西下する政府軍と対峙するが最上の策と思い申す」

と言い続けた。このような大胆な戦略が、もしも用いられていれば、凡そ西南戦役の推移は我々が今日考えているものと違った形になっていただろう。

しかし、こうした作戦案は、血気盛んな私学校の高級士官らによって封殺された。

「百姓を徴募し、ただ洋式の戎服をまとわせたばかりのクソ鎮（熊本鎮台兵）など恐るるに足りんど」

「方略など定めんで良か。諸事にかまわず東上せよ。熊本鎮台、我が進路を遮らば、ただ一蹴して過ぎんのみじゃ」

小細工を弄するは薩摩人として恥なり、とまで極論する者もあった。

鹿児島から東上する途中にある熊本城は、古来、薩摩への押さえとして機能してきた。彼らは幼少の頃から、寝物語にもこの城を敵視するよう教え込まれてきた。そのうえ先年の士族反乱（神風連の乱）においては、僅か数百名の甲冑武者に熊本鎮台兵は追い散らされ、小銃の力により辛うじて勝ったという風評であった。

実質的な総司令官桐野利秋が、雪の鹿児島を出陣する時、薩摩の国境いで手にした青竹を振って、

「熊本ン城は、こンいさらン棒（笹の棒）でひと叩きごわす」

と皆に放言したのは有名な話である。

さらに熊本城を陥れることは、全国の反政府勢力に蹶起を促す切っ掛けになるという読みもあった。明治四年以来、秩禄処分や廃刀令によって生活もプライドもズタズタにされてきた士族階級の不満は、その頂点に達していた。また一部自由民権運動の志士たちも、西郷のもとに集まって現政権の打倒を企んでいる。

政府軍の象徴たる熊本城の落城は、彼らを勇気づけ、各所に反乱の火種を撒きちらすという効果も期待されていたのである。

こうした薩摩側の動きは、政府側も早々に読み取っていた。陸軍中将山県有朋は、至急大阪の防衛に着手し、各地の鎮台に注意を促した。また、第二の対策として、兵力を

集中し九州及び四国辺での迎撃戦か、優位に立つ海軍との呼応による本拠鹿児島上陸を計画した。これが西郷を賊徒とする征討令が発せられる七日前のことである。

政府側の迅速な動きは、主に通信網の整備によって可能となった。欧州では電信による兵力の展開や火砲の集中使用はすでに常識である。プロシア流の軍事国家を理想とする明治政府にとって、電信の採用は近代戦の象徴を手中にしたものとさえ考えられていた。

明治十年一月末の私学校党による政府の火薬庫襲撃から、二月初めの薩軍本営設置まで、間髪を入れず通報し、各鎮台に出動を命じるなど、明治政府の通信隊はこの乱で大活躍をしている。

対して薩摩側は電信にあまり関心を払わず、狼火（のろし）や手旗、飛脚といった従来の方法に頼りきっていた。幕末の動乱で、当時一流の最新軍事知識をもって戦ったこれが同じ薩摩人とはとても思えない。私学校党の近代戦理解能力は蜂起の時すでに、西郷を擁するだけの「宗教団体」レベルまで低下していたのであろう。

熊本城は彼らの猛攻に耐え続けた。強力な火力を集中させて薩摩兵たちを阻止し、敵に一塁も奪われることが無い。

薩軍の損害は初日のうちに死者数百をかぞえ、堅固な城壁を前にして日没後仕寄（しよ）せの

塁壁を構え攻撃中止となった。

西郷は篠原国幹や桐野、西郷の弟小兵衛、別府晋介、野村忍助らを郊外白川を望む本荘村に集め、善後策を協議した。彼らは、「百姓の徴募兵」たる鎮台歩兵らの思いもかけぬ抵抗力を見て、作戦の変更を口々に語った。強硬派の桐野でさえも一時は熊本城を捨て置きにして、主力を小倉方面に北上させる案へ傾いた。

これに反対したのは一番大隊長の篠原であった。

「熊本城は、全軍をもって屠るべきである。昼は砲撃、夜に入って強襲いたさば我らに利あり」

あくまでも城の奪取を主張した。この篠原案は、今日の戦史において愚策という評価を受けている。しかし、一旦開始された攻撃は反復されなければならない、というセオリー通りのものであり、強力な白兵による総突撃をこの時点で敢行しておけば、城は奪取されていたかもしれなかった。

桐野は悩み、西郷に選択を求めた。

「きつか城攻めは、止めにし申そ」

西郷は長い沈黙の末に、重々しく口を開いた。たとえ攻略に成功しても、全軍の半数近い損害を受けると聞いて、なにより兵士の命を優先させる西郷は、こう答えるより他なかった。

しかし、結果として作戦は、一部を熊本城攻撃に残し、他を熊本城救援に向う政府軍の迎撃へ振り当てる安易な折衷案に落ち着いてしまった。

薩軍の小隊が、山鹿街道を南下する政府軍第十四連隊と遭遇戦を展開したのは、同じ頃であった。熊本城の北二里の交差路植木に進出した連隊長心得の乃木希典少佐が、乱戦の中、薩軍に連隊旗を奪われた有名な事件はここで発生した。

乃木少佐の第十四連隊は孤軍だった。乱の勃発直前、熊本にあった彼の部隊は一度福岡に進み、そこで再び熊本城入城の命令を受けて帰途につくところ、二十二日の夕刻に至って薩軍と衝突したのである。

乃木隊は二百余、対する薩軍は村田三介と伊東直二率いる四百余であった。兵力の勝る薩軍は一部を迂回させ、包囲を恐れた乃木少佐は後方に撤退することを命じた。この時のことである。

「(乃木は陣地を)到底持久す可からざるを察し、河原林少尉に軍旗を捲かせて之を負わしむ。(中略)残余の兵十余名少尉に与え、率て之を本道に増加せしめ」(『乃木少佐日記』)

即ち、連隊旗手の少尉をして、本道沿いに退却を行なわせたのである。

折りからの月明りで、肉迫する薩軍の白刃が路上に充満している。第十四連隊の兵は混乱の中、後方の集結地点へ逃げ始めた。

薩摩人らもこれに気づいたが弾薬も体力も尽き果てて、数分後に追撃を停止した。薩軍村田隊は引き揚げを始め、伊東隊の押伍（現場指揮者）岩切正九郎という者が、闇の中で同志と行き違いになった。

岩切は抜刀した刀を右肩に担い、植木の茶畑をゆっくり進んだ。と、突如、

「押伍どん」

傍らから呼ぶ声がする。月明りにすかして見ると利八という味方の軍夫だった。

「押伍どん、見なはい。敵があゝ所におる。士官のごつ見えるばい」

と言う。畑の少し低くなったあたりに軍帽を被った人影。よか獲物、と岩切は茶畑を駆け降り、負傷しているらしいその政府軍士官に背中から斬りつけた。これが第十四連隊旗手河原林少尉であるという。

岩切は死骸を改めて懐中時計を奪い、身体に巻いていた布切れのようなものを外した。どうしようかと思っていると軍夫の利八が、

「それをおいに下され」

と手を出した。

「何にすると？」

「いやあ、褌の替えが無うて困っておったところで」

岩切は利八にその布を手渡した後、同志の後を追って行った。

利八はすぐにこれが軍旗であると悟ったらしい。急いで薩軍の本営に届けると、

「奇特なること。追って（褒美の）沙汰致す」

と言われた。利八は狂喜したが、結局うやむやになり、何も貰えなかった。一方、岩切も、

「何じゃち、あゝ汚れた布切れが軍旗じゃっどな。まっこて、粗忽とはこゝ事じゃ」

あわてて伊東隊の隊長伊東直二に申告したが、軍旗はすでに村田三介の手に入り、岩切にも何の手柄沙汰はなかったという。

その後、この軍旗は熊本城包囲の正面に立てられ、城内の人目に曝されている。

4

こうした乱戦の最中、政府軍主力は二十四日になって久留米を発ち、二十五日に前線へ先着部隊が展開した。菊池川の右岸、高瀬の集落を中心として彼我の兵が続々と集中し、二十七日までこの地で激突が繰り返された。

薩軍は、政府軍第二旅団の本営後方にある標高八十メートル足らずの稲荷山を奪おうとした。桐野利秋の兵六百名が山の裾に取りついたが、ひと足先に政府軍の中隊が駆け上がり、下に向って掃射した。しかし、桐野の隊は戦いを止めない。この間に政府軍の

左翼に進出した村田新八率いる千名は、菊池川を渡って政府軍第八連隊に迫る。高瀬に最も近い戦線正面にいる篠原国幹指揮下の千二百名も何度か渡河を試みるが、これは猛烈な政府軍の火力によって阻止されていた。

薩軍の三将が力を合わせての「三面合撃」である。このまま行けば政府軍は崩壊していたかもしれない。

ところが、ここに思いもかけぬことが起きた。

二十七日の午後二時頃に至って、菊池川の正面で射撃戦を行なっていた篠原の部隊が何の前触れも無く、突然撤退をし始めたのである。

「何ごて、兵を退くか！」

「篠原隊は、味方を見捨てるか！」

左右の薩軍は血を吐くように叫ぶが、篠原国幹の一番大隊旗は東南の木葉に向って静々と退いて行く。

篠原隊無断撤退の理由は単純なものであった。

「午前六時よりの絶え間無い戦で、我が方の弾丸が尽き申した」

と言う。薩摩兵は猪突猛進に攻めるが、不利と悟れば「跳ぶがごとく」に逃げる。うまうまと逃げて有利になるとまた戻る、というのも薩摩人の戦上手のひとつに数えられる。が、近代戦には協力体制が欠かせぬものだ。雑で無邪気な個人戦闘は、味方の足を

引っ張るだけでしかない。かつての陸軍少将篠原の精神もこの時点で「退化」し始めていたのだろうか。

篠原の本隊から離れて別働となり、村田隊と歩調を合わせて菊池川を渡河した西郷隆盛の末弟小兵衛は、高瀬街道で兵を指揮していたが、この時に川の堤防上で戦死した。左胸を狙撃(そげき)されて息を引き取る直前、小兵衛は傍らの兵に、

「兄さぁ、先立つ不孝を許しやった申(も)んせ」

と遺言を残した。二十も歳の違う弟の死を聞いて、西郷は眼を閉じることもなくただ押し黙っていたという。

篠原隊の撤退によって余力の生じた政府軍は村田新八の隊を攻め上げた。二時間後、村田隊も後方へ退却し、桐野隊も三方から砲撃を受けた。彼らは味方の死骸(しがい)を収容することもなく夕刻、菊池川を渡って辛くも逃げのびている。

薩軍の将が揃(そろ)って参加した高瀬の合戦はこうして終了した。その後、彼らは三月から熊本の北の要衝数ヶ所に防衛点を設置。洋式の胸壁を築いて、熊本救援の政府軍を阻止する作戦に出た。

政府軍の第三旅団は二月二十五日博多へ上陸し、翌日は征討総督有栖川宮熾仁親王(ありすがわのみやたるひと)も九州に到着した。

軍の通信部隊も、ただちに戦線の各所に電柱を立て、電信線を架設していく。旅団の本営と完全占拠したばかりの高瀬方面は密接につながり、部隊はこれによって効果的に移動することが可能となったのである。

こうした中、陸軍少将大山巌の率いる別働第一旅団が、博多に遅れて着いた。四大隊を基幹とするこの部隊に、村田勇右衛門も編入されている。

彼の肩書きは前年の三月、陸軍省に設置された「新軍用銃制定委員会」の調査委員。征討軍団付きの研究将校であった。

「実戦における各種小銃のデータをとる」

という目的を持ち、東京の工廠から研究者数名を引率している。

（実戦将校として、前線に配備されぬことは、これ我が守護神、祖先霊の御配慮ではないか）

と彼はこの時思っていた。

当然であろう。敵将西郷には今日の地位にまで高めてくれた恩誼がある。また、その配下たる桐野、篠原以下とも同郷の誼を保ち、さらには村田家の縁者も、多く敵軍の中に身を投じている。

陸軍の薩摩出身者は多かれ少なかれ、この戦いで骨肉の争いを強いられていた。

（大山どんは、おいの何倍も悩んじょる）

旅団司令官大山巌は、高瀬に設営したテントの中で、一日中冗談を飛ばしては一部の将校から白眼視されていた。

「少将は、時に戦に戯れる癖がある。司令官らしからぬ軽佻さであろう」

と陰口を叩く輩さえあった。

(呆けたことを申すものじゃ。かようにせねば苦しさを忘れられんとじゃろうに)

作戦地図を前にして、熊のようにせわしなく歩きまわる大山少将を遠目に見た勇右衛門は、その心境を推し量っている。

西郷の従弟に当る大山は、かつて彼の懐刀とも称されていた。十四の歳に父を亡くした大山を、西郷は実弟同然に接し、時に父親の代りともなった。また西郷が島津斉彬のもとで国事に奔走する頃は、西郷従道と二人して彼を補佐し続けている。

従道は後に倒幕の頃を人に問われて、

「戊辰の戦いの実計は、皆、僕と大山が輔翼し、兄は何もしませんでした」

とまで言い、大山の働きを称賛している。

政府が、征韓論に敗れて帰郷した西郷を中央に引き戻そうと企んだ際、大山はフランスに留学していた。

「大山ならば、西郷も言うことを聞くだろう」

と彼を説得役にするべく遠路呼び戻したが、これは失敗した。そうこうするうちに、

この戦争である。大山は恩人西郷を討つ役を酷くも命ぜられ、今、作戦指揮所にいる。その大山が、テントの前を通りかかった勇右衛門を目ざとく見つけ出した。

「村田少佐」

床机から腰を浮かせて手招きする。

「ちっと、見せたいものがある」

作戦地図を示した。

「ここじゃ」

地図の中央に大きく朱の線が入っている。

「この高瀬から植木にかけて、中央を区切る小丘陵がある。敵は田原から吉次峠にかけて陣を築いちょる。くちなわ（蛇）ンごとうねうねと続き、一番高い地点でも百メートルばかりじゃが……」

薩軍は逐次兵力を増強させており、すでに未明から陣地の取り合いも起こっているという。

「田原には切り通しの道が一筋ある。一名を腹切り坂と申しての。尾根に沿って二キロ程深く切られちょる。坂の先は十四キロの道が続き、終着点が熊本城じゃ」

大山は饒舌だった。極秘の作戦案を誰かに語り、己が心を引きしめたかったのかもしれない。直接に兵の指揮をせぬ研究将校で、しかも同郷の勇右衛門などはこの点適任者

であった。

「田原坂は、見た目さして堅くも思えぬ。一番切り通しの深かところは三百メートルも無か」

「主力はここを攻めるのでごわすな」

「左様、我らは砲兵を押し出さねばならん。丘陵地帯で砲車が抜けられるだけの道幅は、ここ田原坂の他に数ヶ所とは無い。よって、主力の兵はここを打通する」

「されば助攻（側面掩護攻撃）は、いずれでごわンそか？」

「南方の吉次峠じゃ」

長々と伸びた薩軍の防衛塹壕は、南方三ノ岳で途切れる。その山麓に近い半高山を越える吉次峠も、田原坂に負けず劣らずの重要拠点だった。

「ここは第一旅団の支隊を充てる算段じゃが、どうかの？」

「支隊長は誰ごわす？」

「野津少将の弟どん（野津道貫大佐）じゃ」

野津兄弟は薩摩人で、鳥羽伏見以前から勇右衛門とも交流があった。兄の鎮雄は佐賀の乱でも活躍した猛将である。

「良策と思い申す」

勇右衛門は手帳を取り出し、自ら記したデータを読み返した後で、

「自分は、この吉次峠攻めに従軍いたしとうごわす」
「田原坂の主攻に関心は無かか？」
「野津大佐のもとには、装備の良か近衛の兵が揃うてごわす。銃器の諸元（データ）をとるには、一番ごわす」
「左様か」
大山は即座に吉次越えの許可を与えた。

5

政府軍の一斉攻撃開始は、三月四日の払暁であった。
降り始めた雨の中、突撃支援の砲撃が薩軍の堡塁に向けて行なわれ、政府軍本隊は豊岡の石橋から田原坂に向って着剣突撃を敢行した。しかし、薩軍の抵抗は激しかった。猛烈な銃撃を受けて、
「支援砲撃の効果無し！」
「砲兵は何を射っちょるか！」
坂の途中で足止めされたずぶ濡れの政府軍兵士たちは、後方に罵声を浴びせた。
薩摩の兵は砲撃を巧みに避ける術を心得ていた。切り通し道の左右に横穴を掘って身

を隠し、土手の上方には、

「五十歩にして一堡塁。百歩にして一胸壁」

という手堅い洋式陣地を築いて砲弾を逃れていたのである。

元々、田原坂と熊本城に通じる道は、数百年前、領主加藤清正が開いた。城の北方を強固に守るため、道を左右より一段低く掘り下げ、曲りくねらせ、前方の視界を遮る。これによって、高所からの射撃と迂回攻撃が可能となった。左右の土手は人の背丈を越え、時に二階家ほどの高さを持つ。ここに南国特有の深い藪や灌木が生じ、昼なお暗い「殺人迷路」とも言うべき要害が完成されたのである。

政府軍の兵士らは繰り返し力押しに攻め立てるが、坂の曲り角で暗がりから一斉射撃を受け、折り重なるように倒れた。後退しようとすると左右の堡塁から敵が得意の白刃突撃を仕掛けてくる。

雨はますます強くなり、辛うじて生き残った兵士は装備を捨て、泥まみれになって豊岡の石橋へ転がり逃れた。これが名高い「田原坂の戦い」の緒戦であった。

一方、吉次峠でも状況は変らない。

未明、粥のような濃い霧の中を北西から忍び寄った野津支隊は、半高山を駆け上がる。

一気に山頂まで進むと見えたが、薩軍に行動を察知された。篠原国幹と村田新八の率いる部隊は川尻から押し出し、吉次峠を守る自軍の砲隊や熊本義勇軍（党薩隊）を掩護した。

篠原は三ノ岳の中腹から政府軍の右翼を攻め、村田は半高山の高所から左翼を衝く。突然両脇からの攻撃を受けて、吉次峠周辺まで進んだ近衛兵たちは混乱した。

「行け、チェストー」

篠原は、吉次峠から木葉方面を見渡す山頂の草むらに仁王立ちして、配下の兵を叱咤し続けた。

足元には、薩兵に肉迫されて逃げ惑う政府軍の兵が、右往左往している。この日、篠原はフランス式の陸軍少将制服に白い兵児帯を締め、銀の帯金具を付けた太刀を差す。軍装の上には黒羅紗、裏は猩々緋のマントを羽織り、遠方から見てもひどく目立っていた。

薩摩兵の誰もがこの姿に惚れ惚れと見とれ、勇気百倍した。

「少将は気張っちょる。おいどんらも負けずにひっ飛べ」

と口々に語り合って政府軍に攻め寄せた。

篠原は、その日、自ら期するところがあった。即ち、熊本戦の勝機を逃した原因が自分にあると感じ、この地で死すことを覚悟していたのである。

篠原は、熊本城一蹴論の急先鋒であった。緒戦の敗退によって城の長期包囲策が採用され、続く高瀬の合戦でも敗れた。ことに自らの稚拙な行動によって、西郷の弟小兵衛まで討死にさせたことが重荷になっている。

「もはや、熊本城陥落は難しくなった。おいの生きる道は、死して薩摩人の心に残り、その勇猛さを鼓舞する他は無か」

薩軍劣勢の責任をとる気分で、ことさら目立つ装束を身につけて前線に立っていた。しかも、その銃の操作は立ち射ちである。後装式のウェストリー・リチャーズ小銃を軽々と動かし、一発放っては十歩進む。従兵の差し出す弾薬を填めては再び放ち前進する、といった具合だった。

政府軍の兵士は筒先を向けるが、勇者には弾雨も避けるの諺通り、一発も身を掠ることが無い。薩軍兵士の中にも、流石にこれを危ぶむ者がいて、

「篠原シェンシェイ（先生）、危うか。せめて膝射ちをしてくいやい」

と叫んでマントの裾を引っ張った。

「せからしかあ」

と振り払って見返すと、薩摩蒲生出身、自分とほぼ同じ歳の石橋清八であった。この男は洋服の上に籠手脛当、小具足の体で軍帽を被る、という異様な姿をしていた。

「シェンシェイは、我らにとって旗印ごわす。旗印が先鋒と一緒に進み、鉄砲を放っ

ては軍制に合い申はん。後方で指揮棒を振ってくれんと、おいどま（我ら）立場が有り申はん。ここはちっと退いてくんなはい。お頼みし申す」

石橋は懇願し続けた。この言い合いを遠方から見ていたのが、敵の近衛第一連隊江田少佐である。この人も、同じ薩摩人で篠原をよく知っている。

「敵将があそこにいる」

目ざとく見つけ出して、あたりの兵を集めさせた。

「紅裏の外套は篠原元少将じゃ。あれを射て。射ち倒さねば我らは全滅ぞ」

江田少佐自ら兵の小銃を取って狙いを定めるが、距離五十メートル程の目標になかなか当らない。

篠原は足元に立つ土煙をものともせず、立ち射ちを続けている。

「これはいかん」

江田の背後で低くつぶやく声が聞こえた。

「誰か？」

「新軍用銃制定委員会付属、村田少佐」

茂みの中から、ぬっと現われたのは勇右衛門である。

「篠原少将であることは、小生も最前よりしかと認めている。今、これを射たずば、味方の被害はさらに増えるであろう。江田どん、おいに銃をたもっせえ（下さい）」

江田少佐は従兵の持つウェストリー・リチャーズを彼に手渡した。

「扱いが悪か。錆が浮いちょるではなかか。これでも近衛の装備か」

遊底の後部を指で押し上げ、弾丸の装填部を覗き込んだ。懐かしい小銃である。戊辰戦役の頃、「人斬り半次郎」こと桐野利秋がやみくもに持ち歩いていたこのイギリス製品に、勇右衛門が手ずから射ち方を教授して以来、桐野は戦場で剣を捨て「銃士」となった。

弾丸を込めて、勇右衛門は中腰になる。斜面に片足をつき、狙いを定めた。

五十メートルなどという距離は、彼にとって何事もない。照星の向うに猩々緋のマントが小さく浮び上がった。

(篠原どん)

この時、勇右衛門の脳裏に去来するのは何事であったろう。征韓論勃発した頃、彼は一日、東京の篠原宅を訪ねた。その自慢の外套が壁に掛かっているのを記憶している。

(あれを射つことになるとは)

旧友をいたずらに苦しませることなく、一発で射殺することが今の彼の役割であった。

月夜に霜の降るごとく、勇右衛門はそっと引金をしぼった。

と同時に、傍らの兵士らも一斉射を行なう。

篠原の足元に再び高々と泥が跳ね上がった。石橋清八があわてて飛び出し、篠原の前に立って人楯になろうとした。

しかし、一瞬遅い。勇右衛門の放った一弾が篠原の胸を射ち抜く。

「シェンシェイ」

石橋は、どっと崩れ落ちた指揮官の身体を抱き起した。

「おいを……おいを……」

篠原は薄れいく意識の中で、つぶやくように口走った。

「おいを狙うた奴を……必ず射っ殺せえ」

それが篠原の遺言のようになった。

石橋は遺骸を他の兵士にまかせ、自分の配下を集めて反撃に出る。旧式銃装備だったが、皆腕は良い。五人ずつ三段の銃陣を作り、近衛兵を次々に射ち倒した。

勇右衛門は腰のバックルに被弾し、危うく難を逃れたものの、傍らに立つ江田少佐は数発の命中弾を受けて即死した。

「篠原どんの仇じゃあ。皆殺しにせィ」

薩軍は雨の中、突貫を開始した。野津支隊は押されに押されて夕刻、後方の原倉まで退却した。

吉次峠を守り抜いた党薩隊の熊本義勇軍一番小隊長佐々友房は、誇らし気に、

君みずや、吉次の険は城よりも険なり
突兀空を摩して、路崢嶸

という詩を作った。この吉次越えに失敗した政府軍は以後、田原坂に攻撃を集中させることになる。

篠原の死骸は戸板に乗せられて、後方木留の薩軍本営に運び込まれた。西郷はこれをひと目見るや、どっと涙をこぼし、

「冬っどん、おはんなもへ、け死んだとやぁ」

短く声をあげて嘆いたという。

片や、敗走した野津支隊の一部は、同じ頃に木葉の政府軍本営に帰還した。

全員衣服は泥にまみれ、満足に装備を付けている者も少ない。

「まるで、ドブに落ちた猫のようだ」

「近衛第一連隊の名が泣こうというものよ」

と敗残の兵に対し、聞こえよがしにこう言い放つ者もあったが、それらの多くは同郷同士の殺し合いに同情心を持たぬ長州系の将校連だった。

さらに、連隊の江田少佐狙撃死と、村田少佐による篠原射殺を聞いた彼らは、敵将の

死を喜びつつも、

「村田少佐は、良い心掛けだ。維新以来の旧友を一発で仕止めたか」

「我らにはとても真似できぬ。鬼の心を持っている」

「なに、旅団付きの技術将校が手柄欲しさに友を撃ったのだ。味方ながらその裏切り心には反吐が出る」

憎々し気に語り合った。

勇右衛門は、黙って自分が泊っている農家の土間に入るとブーツを脱ぎ、灯もつけず数刻の間、瞑目し続けた。

その後、何事も無かったかのように白灯油のランプを灯し、従兵を呼んだ。

「吉次峠で捕獲した薩軍の装備を、ここに運んでくれんか」

銃器弾薬を捨てて部隊が敗走する中、なんと彼は敵の銃器を逆に拾い集めていたのである。

兵士らが土間に捕獲品を並べ終えると、彼は一挺ずつ汚れを取ることを命じた。

「ひどかもんじゃ。私学校党の武器は老朽化が進んでいると聞いていたが、本当じゃったのう」

新型のシャスポー銃は、緒戦で政府軍から奪ったものだろう。これが二挺。薩摩エンピールという鹿児島製の改造エンフィールドが五挺、アメリカ製のスペンセル（スペン

サー騎銃）一挺。後は幕末に東国で捕獲したとおぼしきオランダ製ゲベール銃、銃身に九曜紋を打った火縄銃、生産国不明の先込め銃数種といった具合だった。

「エンピールを除けば、いずれも人持ち（個人所有品）じゃな」

明治政府は廃刀令の前後、全国規模で民間銃器の摘発を行ない、調査済みのものには壬辛という刻印を銃身に彫りつけた。鹿児島は西郷の帰郷後に半独立国の体をなし、こうした規制をあまり受けなかったものであろう。古い銃器にはどこにも刻印が見当らなかった。

「胴乱（弾入れ）も見せよ」

郵便車夫の使う書類入れを改造した胴乱を兵士が差し出した。

開けて逆さにすると、泥水とともに湿った紙製薬莢が数発、足元に転がった。

「やはり、これよ。銃器の種類が統一されておらず、しかも湿気に弱か先込め銃が多い。これでは精強薩摩兵も、遠からず火力の不足に直面するじゃろう」

雑多な洋式銃を用いている点は、政府軍も同じだった。各地の鎮台兵は、それぞれが独自の武装をし、小銃はスナイドルやエンフィールドを中心に拳銃を含めて約十三種という。

「僅かな救いは、こちらには後込め式の金属薬莢使用銃が多いことじゃ」

後に、勇右衛門は薩摩人の捕虜から、自軍の装備不統一を嘆く言葉を聞いた。

「おいどま、二月十七日の出陣には、自弁が決まりじゃった。衣服は特にこれと定められておらず、銃器と刀を所持する者だけが従軍を許された。弾薬も同然。腰の胴乱が空ンなれば、敵兵を斬って装備弾薬を整えいと命じられた」

火力の充実には後方の輜重隊が重要だが、薩軍は、これにも気を払った様子はない。西郷の友人で、旧主島津一門の桂久武が中心になって、馬匹による荷駄隊を各部隊に付属させたのみであった。智将野村忍介はこの情況を危ぶみ、熊本の周辺に仮設の弾薬工場まで造ったが、充分な補給はついにかなわなかったのである。

6

田原坂に攻撃を集中させた政府軍だが、三月六日の正面攻撃に再び失敗した。

「流石は清正公の掘った道だ」

政府軍は、くやし気につぶやく。この日が雨の中休みと知って、砲兵は朝から坂の上に弾幕を張った。さらに右翼と左翼からも攻撃を加えた。が、坂の側面は足場が悪く、藪の上にようやく這い上がれば、竹を組んで土を盛った堡塁があり、後方には太い塹壕が待ち構えていた。

珍しく火力を充実させている敵は、上方から瞰射を繰り返し、政府軍兵士が退却に移

ると、銃を捨てて抜刀突撃をした。

次の日、政府軍は正面の攻撃に合わせて、坂の西側二俣の台地沿いに兵を動かす。正面を攻め上がった一部の部隊は二ノ坂の田原神社薩軍堡塁を奪い、神社に放火した。また、二俣口を翌日占領。砲兵を引き揚げて坂の西側を圧倒する策に出た。

二俣から西側の薩軍堡塁を夕刻まで砲撃し続けると、彼らは斜面の下にある堡塁を捨て、田原坂の尾根に連なる長大な塹壕に逃げ込む。

「ようやく、物成った（成功した）か」

本営がほっとしたのもつかの間、夕刻になると塹壕から忍び出た薩軍兵士が、得意の抜刀で夜襲を行なった。

闇の中から無反りの馬ン摩羅をトンボに構えた薩兵が、次々に現われては堡塁を奪い返す。

白兵戦に弱い政府軍兵士は、斬り込みの声を聞くや銃を捨てて我先に逃げた。

かくて、朝となれば、前日奪った敵の陣地には再び赤白の薩軍旗がひるがえっている。

「積んでは崩し、崩しては積む。まるで賽の河原じゃな」

勇右衛門は、双眼鏡で眺めながら舌打ちした。薩軍は二俣に敵の進んだことで危機感を抱いたらしく、同台地の南方に位置する小丘陵、鉢割や五郎山、横平山からも潜入し

て抜刀突撃を行なった。

これではせっかく築いた砲兵陣地も危うくなる。本営では横平山を中心に三月九日から攻勢に出た。

しかし、ここも執拗な薩軍の攻撃にさらされる。さらに豪雨が乱戦に拍車をかけた。陣地の奪い合いは日常化し、横平山の戦闘は膠着状態に入ってしまった。

「ともかく敵の抜刀突撃を阻止せねばならぬ」

参軍山県有朋は、熟慮の末に敵と同じ抜刀隊を編成することにした。

後方の南関に駐屯していた旧士族の警視庁巡査隊三百名から、腕に覚えのある者百名を選抜し、斬り込みを命じた。その多くが維新の際に賊軍と呼ばれ、長く不遇をかこつ生活を強いられていた人々であった。

「戊辰の恨みを晴らす絶好の機会」

と巡査たちは奮起した、というからこのあたり、山県の悪意を感じさせる。

「復讐心をあおって我らの親族を討たせるか。嫌な事をさせるものだ」

と薩摩系の政府軍士官の中には、抜刀隊を公然と罵る輩も出た。

「六尺棒を構えて町巡りする卒族まがいの者らが、どこまでできるか見てやろうではないか」

抜刀隊は、後世伝えられているように、初めから単独で用いられたものではない。第

三旅団に属する大阪鎮台の砲兵や、工兵の内から選抜された三十五名の狙撃兵を掩護する目的を持っていた。

三月十四日、久しぶりに降り止んだ空をあおぎ薩軍の兵が陣地内でうとうとしていると、フランス式のラッパが霧中で鳴り響き、堡塁の上に抜刀した人影が立った。砲撃が始まり、薩摩人らが驚くところを一斉に斬り込みが開始された。

狙撃兵も正確に目標を射ち抜いていく。油断していた横平山の河野、橋口、酒匂各薩軍小隊守備の堡塁はたちまち陥落した。

（これは強か）

勇右衛門は二俣の砲兵陣地から、旭日旗が打ち振られるのを遠望した。

抜刀隊の勢いもさることながら、鎮台狙撃兵の、教本通りに行動する真面目さにも注目した。彼らは斜面での遮蔽物の活用、敵の火線が途切れるのを待っての接近射撃など、ほとんど自分が欧州の射撃学校で学んだ通りの動きを見せた。

「短期間に、よう覚えた」

勇右衛門は膝を打つ。狙撃兵らの教本は、彼がこの乱の直前に翻訳し、配布したものであった。

「しかし、勝ちに乗じて進み過ぎる。これはいかん」

抜刀隊の巡査たちは三個の堡塁を落とした後、勢いづき、狙撃隊を置き捨てにして前

進する。勇右衛門が危惧した通り、数百メートル進んだところで、イギリス式の突撃ラッパが轟いた。

薩軍の反撃が開始され、味方抜刀隊はたちまち四方から出現した敵の抜刀隊に包囲される。

「チェーイ」

「こン和郎が」

「死ねえ」

示現流の構えで肉迫する薩軍兵士に押し戻され、警視庁抜刀隊はせっかく奪った堡塁を放棄して、元来た道を退却する。

逆に勢いの増した薩軍は彼らを追尾して、二俣地区の砲兵陣地近くまで接近した。

「いかんぞ、火力を集中して敵の力押しを阻止せよ」

電信担当の兵が、すぐに砲兵指揮所に通信を送る。砲兵陣地前面の塹壕から白煙が上がり、接近した敵は散弾砲撃を受けて、折り重なって倒れた。

退却のラッパが鳴り、薩軍は潮が引くように退いて行った。

「済んだか」

勇右衛門が、ほっとして双眼鏡を取り直した時、

「少佐殿、あれを」

と一人の兵士が前方を指差す。薩軍の一部が後退を中止して、窪(くぼ)みの中に固まり、発砲していた。政府軍もここを集中的に狙い始めるが、その弾幕をものともせず一人の兵が飛び出して来た。

（何をするか）

と見れば、二俣台地に張り巡らせた砲兵連絡用の電信柱にするするとよじ登り出したではないか。

口に刃物を食わえているあたり、電線の切断を意図していることは疑いようもなかった。

「切られてはならぬ。皆、あれを一斉に射て」

政府軍兵士は、これに乱射を加える。が、一発も当らない。

敵兵はよほど度胸が座っているのか、柱の中央に足を置き、電線に刃をかけようとする。

勇右衛門は、脇に立つ兵士からウェストリー・リチャーズ小銃を取り上げ、一歩進み出た。

「おお、村田少佐が狙うぞ」

政府軍の兵士は、射撃を中止した。何事か、と薩軍も発砲を止める。

一瞬の静寂が台地の周辺に訪れた。勇右衛門は銃の負革(スリング)を左腕に掛け、引金をしぼ

る。

ドン、と銃声が轟き、電信柱に取りついた敵は落下した。

敵味方の陣地から、称賛と落胆の声が同時に湧き上がった。すると、その声に合わせるかのように、弾に当ったはずの敵兵がむっくりと起き上がり、足を引きずりながら味方の陣地へ駆け込んで行った。

今度は薩軍の兵士らが、彼を迎えて喜びの声をあげた。

「少佐、残念です」

勇右衛門に銃を貸した兵士が言った。

「うんにゃ（いいえ）、あれで良か」

無表情に勇右衛門は、敵陣から目を外らした。

「飛び来る弾雨の中、悠々と電信線を切ろうと企むのは、よほどの胆力の持ち主だろう。敵ながらあっぱれ。ゆえに腕へ当て、下へ落とすにとどめた」

この話は、一日のうちに全軍へ伝わった。

「銃豪、二俣台に有り」

村田少佐ある限り、田原坂右翼の攻勢は保持されるであろうと、将兵らは語り合った。

これと同じくして抜刀隊の評判も上がった。薩軍の抜刀隊と初めて対等に白兵戦を展

開した彼らは、戦線突破の強力な部隊として認識された。以後、斬り込み戦法は日本陸軍の「真骨頂」と称され、日清、日露戦の後も精神偏重主義の指導者らによって美化され続けた。太平洋戦争に至る兵士の無謀な肉迫攻撃、その嚆矢となったのである。

しかし、三月十四日の抜刀隊初陣の損害は、総兵力百名のうち、戦死十二名、重軽傷者は三十六名。反復攻撃遂行不可能なまでのダメージを受けていた。

三月十五日、横平山の堡塁から薩軍の姿が激減した。山の左側面、田原坂塹壕の切れ目に近い七本地区にも戦線を突破した政府軍兵士が出没し、押し返そうとする薩軍との間で肉弾戦が始まった。

三月十七日、新たに選抜者を入れて増強された抜刀隊が、七本に築かれた堡塁を襲う。ここを抜けば僅か数十歩の距離で植木街道。熊本へはひと駆けである。

薩軍と熊本の党薩隊は、必死で防ぐが、補給線の弱体な彼らには弾薬が不足していた。

「賊兵、火線を持続することなし。弾丸の代りに木片飛礫を持って反撃す」

という報告がこの日、勇右衛門のもとにも届けられている。

「敵は弾不足で、地元の百姓らに流れ弾を拾わせたり、鍋釜、寺の梵鐘を溶融しているという。それすらもなく石を用いるか」

ここに来て、ようやく薩軍は消耗戦に疲れ始めたのである。

7

田原坂は、人間の血と弾丸を無限に吸い込み続ける吸血ポンプであった。敵味方とも有りったけの人員物量を投入し、坂道の一メートルを巡って死力を尽した。路上は落下する砲弾と踏み荒した足跡で道の形を失い、そこに豪雨が降り注いで泥の河となった。

特に雨は薩軍兵士の側を苦しめた。彼らの多くが持つエンピール銃は戊辰以来の先込め式である。銃口から込める粉末状の黒色火薬は、湿気を含んで不発が続出した。衣服は濡れて動きが悪くなり、塹壕の中は膝まで覆うほどの池となる。三月十三日、田原本道の戦いで、双方が小休止に入った時、突如薩軍の堡塁から声があがった。

「おうい、寄手のもん」

「何か」

と政府軍兵士の一人が答える。

「おいどんら、薩摩人は何物も恐るるものは無か。じゃっどん、こン戦いで嫌なものはのう」

ひと息置いて薩軍兵士は叫んだ。

「一に雨、二に大砲、三に赤帽じゃあ」

赤帽というのはフランス式の赤い帽子を被った装備の良い近衛兵のことだ。この事は後に、二番目と三番目を入れ替えて唄にもなっている。

政府軍は、小銃弾だけで平均一日三十二万発を発砲した。田原坂方面の戦いは十七昼夜というから、これは大変な消費量ということになる。

ちなみに、当時の政府は、フル稼働で一日十二万発製造が限度だった。征討参軍山県有朋もこれには驚いた。

「いずれ当方には、一発の予備弾も無くなる。元亀天正以前の、刀槍肉弾による合戦に移行せざるを得なくなるだろう」

大急ぎで東京の大久保へ電報を送っている。その内容は、

「インド駐屯のイギリス陸軍は、内乱に備えて新型小銃と弾薬を大量に備蓄していると聞く。上海、香港のイギリス系商社に連絡を取り、インド駐屯軍の予備装備を早急に分けてもらえるよう交渉して欲しい」

というようなものであった。

これを聞いた勇右衛門はあわてた。

「イギリスの新型小銃とは、チェンバーボックス・ヘンリー・マルチニー銃だろう。あの小銃は後装式ながら弾丸は大口径で、重量も重く小柄な我が国の兵士には向かぬ。そ

のうえ、レバー・アクション式で操作も悪い。かような銃を我が国に導入すれば、ただでさえ雑銃の充満で混乱する我が軍の兵装はさらに乱れる」

急いで山県のもとに行き、インドからの装備買いつけを止めようとした。

幸い、この頃から主力火器のスナイドル小銃用十四・七ミリと、十一ミリシャスポー小銃弾の生産能力が各工場で一日三十万発と向上。三月中頃から部隊への補給も順調に進み始めたため、山県の要望は沙汰止みとなった。

その山県は、高瀬の本営で連日、副官と碁を打って暮していた。ここへある日、連絡将校のひとりが不思議なものを持って現われた。

「これを御覧下さい。田原坂三ノ坂あたりで味方が拾ったものです」

溝の刻まれた金属片だ。よく見ると口径の同じスナイドル弾が二発からみ合っている。

「当地の小銃戦甚だしく、時に彼我の兵士が放つ弾丸も衝突いたします」

「弾が宙でぶつかるのか？」

「はっ、兵士はこれを『行き合い弾』と称しております」

想像を絶する激烈な射撃戦であった。連絡将校は、さらに数発の弾丸を見せた。

「心なしか軽いとは思われませんか？」

薩軍の放った弾という。山県は首をひねった。

「金属ではありません。樫やユスの木を削って作った木弾であります」
「賊軍は材料の鍋釜さえ不足し始めたか」
山県はすぐにこれらの弾丸を、新銃研究将校団の本部へ送るよう命じた。
勇右衛門は、複雑な心境でこの銃弾を見た。
「薩摩人らの困窮ぶりは、我らも調べ上げている」
彼は軍とは別に独自の密偵団を傭い、敵の後方に潜入させていた。
「田崎、山鹿、木留の各所に、弾丸の製造工場を設営したことは確認済みじゃ」
同時に、敵は山鹿あたりの木地師を掻き集めている。これは轆轤をまわして木弾を作るためだろうと推理したが、彼の読みは当った。
「薩人は戦場において兵糧より武具を優先する。弾丸の補給がかほどに餓えておるとなれば、糧秣の不足はいかばかりであろうか」
「少佐殿、これとは別にお知らせしておきたいことがあります」
連絡将校はささやいた。
「これは賊軍の捕虜から得た話でありますが、三月四日の吉次峠において、敵将篠原少将を斃した狙撃者が村田少佐であることを、賊兵らは察知したようであります。ことに、少将の麾下、薩軍一番大隊員には復讐を誓う者数多く、少佐を狙撃するための選抜隊まで編成されたと聞き及びます。御用心下さい」

「何ね？　仇討ち部隊とな。おいは、吉良上野（こうずけ）か」
勇右衛門は苦笑した。
「せいぜい用心することにしよう」
と答えたが、彼に対する忠告はすぐに現実のものとなった。

三月十九日、政府軍は田原坂を、側面及び後方から攻略する作戦を開始した。
薩軍田原坂台上の陣地は、南方の舌状台地に幾つかの防御線を有している。その末端近くに七本柿木（かきのき）台場という大型の堡塁が存在し、ここを守るのは薩摩人と熊本党薩隊の混成部隊であった。
明治の写真師上野（うえの）彦馬（ひこま）撮影の戦場写真には、塚の上に二本の柿の木が茂り、その根元には兵多数が籠（こも）っていた塹壕の跡が見える。現在ここは、ＪＲ田原坂駅の東を上がった場所にあり、薩軍の墓地になっている。
政府軍は柿木台場の防備を緩めるため十九日、南西の吉次峠を攻める姿勢を見せた。
「敵が地獄越え（吉次峠）を再び攻めるぞ。それ、援護の兵を出せ」
はるかに上がる白煙を見て、柿木台場の熊本人部隊は、この陽動作戦に見事引っかかった。彼らは尾根伝いに援軍として出撃し、その穴は高鍋の士族隊と軍夫が埋めた。
高鍋隊は、旧宮崎高鍋藩二万七千石の不平士族二百余名で編成され、三月に熊本へ着

いたばかりの新参だ。柿木台場に投入されても、まるで場慣れしていない。悪いことにはその晩、六日ぶりに雨が強くなった。

二十日、早朝。

政府軍兵士は津田少佐の指揮下、二俣から谷を下り、隠密裏に台場へ近付いた。時計の針が午前六時を示した時、二俣の砲兵陣地が三発の砲弾を放つ。

「吶喊(とっかん)！」

フランス式ラッパが鳴り渡った。銃剣を構えた十九個中隊の兵が斜面を駆け上がり、七本柿木台場に突入した。

壕の中で油断していた高鍋の義勇兵は、何事、と叫ぶ間もなく殲滅(せんめつ)された。霧の中から続々と出現する政府軍兵士は、堡塁の中で眠りこけている敵を、無言のうちに刺殺していく。

三百名近くの若者が洋式銃剣の犠牲(にえ)となった。北の尾根に展開する薩兵も七本が陥落したと知るや、植木街道に向けて敗走を開始した。

「賊軍潰乱(かいらん)」

政府軍の野戦電信兵は、即座に後方へ勝利を伝えた。

田原坂正面の攻撃隊は、側面から這(は)い上がって来た友軍と協同して坂の胸壁を圧迫する。周囲から銃撃を受けた薩軍の諸隊は、ここでも潰乱した。

陣地を捨てて植木に逃げようとする敵に、政府軍兵士は、ここ十数日の恨みを晴らすべく追い討ちの銃撃を浴びせた。植木街道は背中を射ち抜かれた死骸で埋まり、樹木は砲弾でささらのようになった。

午前十時頃、政府軍は「越すに越されぬ」と謡われた田原坂三ノ坂を越え、戦勝ラッパを吹き鳴らした。

村田式小銃の完成

1

十七日間の激闘は何であったか、と思うほどの、あっけない勝利だった。坂の上に膝をついた政府軍将兵は、挽き肉のようになった敵の死骸に座り込み、声をあげて泣いた。

が、戦いは未だ終っていない。植木近くでは逃げる薩兵が追尾する政府軍と衝突し、再び乱戦が始まっていた。

午前十時半頃、植木の西寺にあった薩軍の弾薬集積所が、大爆発を起こした。何者が火を放ったものか、わからない。黒煙が天空高く昇り、これを目標に政府軍兵士は進撃した。

勇右衛門も、従卒とともに植木の町へ入った。

「ここか、緒戦で長州の乃木少佐が、軍旗を奪われたところは」

街道の両脇は瓦礫の山である。遠くに見える倉造りの屋敷も穴だらけで、そのあたりから時折り流れ弾が飛んで来る。

「少佐、危ない。もそっと、身をかがめて下さい」

従卒が絶えず軍服の裾を引くが、勇右衛門は気にも留めず、遺棄された小銃を観察し、地形をメモしていった。

「この先、向坂と申す場所に、敵が新たな堡塁を築き、敗残兵を収容しつつあるとの報告であります。御用心下さい」

伝令が勇右衛門に伝えて去った。

「どれ、そこまで観戦に出るか」

彼は念のため支給されたフランス製リボルバーの装弾を確かめて、走り出した。

敵の堡塁は、植木の町で拾い集めた建具や墓石を積み上げた即製のものだが、なかなかに強固な造りと見えた。ここには田原坂の正面を守っていた薩軍貴島清と、中島健彦の部隊がいる。中でも貴島は元近衛少佐。私学校党ではなかったが、熊本の戦況を聞いて鹿児島に義勇軍を組織した熱血漢である。彼の率いる兵は植木の町で予備の弾薬を得て、火力も充実していた。

「熊本は咫尺の間じゃ。ここを抜かれては城攻めの同志は全滅ぞ。死して幽鬼となるとも断固敵を通すな」

田原坂から逃れてきた味方を再編成し、堡塁の両側にも隠蔽式の銃座を作った。

政府軍の兵士は、それを知らない。勝ちに乗じて南下し、一気に熊本へ進む姿勢を見せた。

兵士らは街道沿いに放火しつつ向坂に達した。田原坂の強力な陣地を突破して満々たる自信を持つ彼らは、即製の胸壁を嘗めてかかった。掘り抜き道の中を集団で突き進んで行くと、突然後方の通路が荷車や木片で遮断された。

「罠だ！」

気付いた時は遅い。両側面の隠蔽銃座から弾丸が集中した。

「田原坂の仇じゃ」

と言う声が聞こえた。狭い路上には百名を超える兵士たちがひしめき合っている。身動きの取れぬ所に弾幕が被さり、目も当てられぬ情況となった。三メートルから五メートルの至近距離から発射される弾は、ひとつとして外れることがない。

ひとしきり銃撃を終えると、薩軍は得意の抜刀隊を進める。僅かに生き残った政府軍兵士も、彼らの刃でことごとく息の根を止められた。

後方に伏せていた第二陣の兵士らは、向坂の端で異様な歓声を耳にした。それは薩軍の抜刀兵が、敵の皆殺しを祝う勝利の雄叫びだった。

「まずい。これでは田原坂三ノ坂の二の舞じゃぞ」

中軍に位置していた勇右衛門は、坂の脇にある道祖神の石碑に身を隠した。前方にでき上がった遮蔽物からも、薩軍の兵士らがこちらに向って射撃を開始する。

この時、近衛の軍服をまとった一兵卒が、果敢にも立ち上がって銃を操作し始めた。彼が持っていたのは勇右衛門にも馴染み深い、大阪鎮台配備のシャスポー小銃だった。口に一発の予備弾を銜え、右手で手早くボルトを引く。弾を込めると正確にボルトを押し下げ、肘をきれいに上げて引金を引く。射ち終えると急いで排莢し、予備弾を込める。動きに無駄が無く、名人の勇右衛門が見ていても惚れ惚れするような銃士振りである。

薩軍の射手は、たちまち鳴りをひそめた。

「おはん、良か腕じゃな」

勇右衛門は見ていて我慢しきれず、石碑の間から這い出した。

「姓名階級を申せ」

兵卒は口早に答えた。残念ながら記録には、この若者の名前が残っていない。

「おいは村田じゃ。おはんの射撃術は我流のようじゃが実に理にかのうとる。今、おいが欧州流の射的を見せるゆえ、手本とせよ」

二人のまわりには敵弾が集中するが、勇右衛門は気にも留めなかった。

兵卒は相手が銃豪村田少佐と知って、頬を紅潮させた。

「お使い下さい」

自分のシャスポーと弾丸を差し出す。勇右衛門は満足そうに受け取り、ごく自然な動作で薬室を点検する。その時、不意に鳥羽伏見の思い出が鮮明に蘇ってきた。

（桐野どんに、桑名藩兵の堡塁前で、こうして新式小銃の射的伝授をした。あれから十年）

その十年の間に、二人は敵味方に分かれている。まことに新興国家日本の政治的流動は、人知をもってして推し量ることのできぬものであった。

そんな空ろな意識を心の隅に置いて弾を込め、勇右衛門は、ふっと立ち上がった。

「少佐殿、危ない」

傍らの兵卒が叫んだ。木槌で肉を強打したような音がして、胸元に熱気が感じられた。

（当ったか）

ゆっくりと路上に倒れ込む勇右衛門を庇おうと上に重なった兵卒も、背に数発の弾を受けた。

「冬っどん（篠原国幹）の仇ば討ったどー」

敵陣から声があがった。

「薩摩ン裏切り者、村田経芳を、薩軍選抜銃隊……が仕止めたり！」

（そうか、あ奴らは、おいを狙撃するため、この坂で待ち構えちょったのか）
敵ながら見事な射撃をする、と勇右衛門は遠退いていく意識の中でつぶやいた。

彼の右胸部に入った敵弾は背に抜けていた。重傷ではあったが、貫通銃創と聞いて部下たちは安堵する。当時の銃弾は口径の大きな鉛弾である。盲管銃創の場合、治療が遅れると鉛毒に蝕まれて悲惨なことになる。十九世紀初め、ワーテルローの戦いで兵士の死傷率が甚大であったのはこれがためであった。

勇右衛門は応急の手当てを受けた後、汽船で大阪の病院に後送された。

幸い予後も良好で、二ヶ月後には杖をついて病院の庭を散歩できるまでに回復した。

勇右衛門は病床で、熊本出張のレポートを書き続けた。各戦場での主な射程距離や使用された各国小銃の操作法とその難易度、損傷数から見た銃の老朽化など、その諸問題を実際に現場へ立った者の視点から論じている。彼の記録は貴重なものであり、後に陸軍参謀本部が編纂した『西南戦記稿』の中にも使用された。

この間も、西南の戦雲は吹き払われてはいない。薩軍は熊本の包囲を解いて肥後平野の東に逃れ、政府軍三万と対戦。一時は熊本を取り戻すほどの勇猛さを見せた。しかし、次々に増援を送り込む政府軍には抗しきれず、南方の人吉城下に逃れた。ここで軍の再編成を行なう。防御持久戦を企んで、それまでは一番二番などと呼んでいた大隊名

を、奇兵、振武、正義、雷撃……といった勇壮なものに変えた。桐野利秋は人吉割拠を自画自賛して、

「二年」

指を立てたという。

「二年間、この盆地を保持しおれば、天下の形勢は変る。土佐の反政府派が決起するじゃろう」

と語ったことまで、政府軍の間諜は摑んでいる。

だが、装備や補充兵の不足はどうしようもない。薩軍が新たに人吉で設立した弾丸工場は、婦女子を動員しても一日二千発作るのが限度であった。小銃の多くも田原坂で失われ、周辺の猟師たちから火縄銃を徴発して員数を合わせた。

兵員も諸郷の郷士らを強制徴募するが、戦意の低さは目を覆うばかりである。五月に人吉で発せられた薩軍本営の指令は、

ひとつ、戎器（銃器）を捨てて逃走する者。

ひとつ、戦場において兵士の分を誤る者。

ひとつ、道路在陣共、人民に対し乱暴狼藉する者。

右相犯すにおいては、ことごとく割腹に処すべし。

という手厳しいものであった。それ以前も実際に、上級指揮官たる逸見十郎太など

は、多数の逃亡兵を自分の手で斬り殺している。

こうした状況を西郷は苦々し気に見ていたらしい。味方が年端も行かぬ少年を徴募しているのを知って珍しく「怒声放言」した。

「幼若の男子、前途国家に尽くす有らんとするの人。何ぞ一戦争に命を損さしむるを為さんやと。悉くこれを放還帰国せしむと」（『征西従軍日誌・前集』）

その西郷は、人吉に入ると付近の寺院に潜在し、味方からも身を隠してしまった。桐野利秋の放埒な指導者振りに呆れてしまったのか、敗軍の将として人々に合わせる顔が無いと感じたのか。

2

西郷の実弟、陸軍卿代理西郷従道が大阪の病院へ傷病兵慰問に訪れたのは、人吉に対する政府軍総攻撃が始まった五月三十日のことである。

「電信によれば……」

従道は、すっかり葉だけに成り変った病院の藤棚下で語った。

「兄さぁ（隆盛）は、人吉の城下には居らんちゅうことじゃ。風土病の大ぎんたまになっても、がっつい動きの早か」

「左様ごわすか」

勇右衛門は、病床で書き綴った銃器報告書を従道に見せた。

「今回の戦いでは、官軍使用の小銃、ピストルの損耗数は信じられんごと多ごわす。維新以来十年を経て、いかに老朽化しておるか。また、激しか戦闘であるか。弾丸の口径違いで、補給を受けることもできず進撃が停止したり、せっかく後方の修理所に運び込んでも部品が足りず、貴重な元込め銃を放棄するなど、口惜しか事の多い戦いでごわした」

勇右衛門は、ヨーロッパで見聞した各国軍事技術の進歩の早さについても言及した。

「小生がヨーロッパにあった数ヶ月の間にも、各国では新機軸の小銃が開発されること数十種。現在、曲りなりにも軍用として残っておるものは、その中の数種に過ぎぬのでごわす。まっこて、軍事の進歩は性急ごわす。この進歩に追いつき、しかも将来の新型小銃の開発生産まで視野に入れての計画を立てねば、真の富国強兵策は、成らんと思うちょり申す」

勇右衛門は、未だに軍部内で勢力を持つ洋銃信奉主義者の非を鳴らした。

「その時々に応じて外国より適当に銃を買い揃えていては、国家の独立は有り得申はん。小銃は単に機械道具の類にあらず。その国の軍隊の顔を表わすものでごわす。こいは、おいがスイス国とドイツ帝国で一番に感じたことごわした」

勇右衛門はまた、陸軍卿山県有朋が、今回の戦いで弾薬の異常な消耗に仰天狼狽し、イギリスから大量の兵器を輸入しようとした事について怒りを含んだ言葉を吐く。

「我ら新軍用銃制定委員会が、欧州列強の軍事的影響から一日でも早く脱却せねばと思う志に冷水を浴びせる軽率な所業ごわした。彼の陸軍卿は、かつておいが和式に直したシャスポー小銃を大いに喧伝して下さった恩人じゃった。されどやはり、洋風をもって第一と考える御仁ごわした。洋式兵器の輸入には外国の商社が介在し、そこには必ず賄賂が横行いたし申す」

さらに勇右衛門が語ったのは、かつて山県が陸軍大輔時代に兵部省御用商人山城屋和助と起こした公金横領事件であった。これは陸軍内で薩摩・長州系の将校反目の原因となり、当時近衛士官の重鎮であった桐野利秋も、

「貪官汚吏、斬るべし」

と激高した。これを仲裁して収まらせたのが、西郷隆盛なのである。山県は、彼のおかげで人生最大の窮地を脱した。

「彼の陸軍卿は、巨眼さぁ（西郷隆盛）を恩人と思うべき。それを何ぞ、その大恩人を追いつめる役を得々としてこなすとは……」

「それ以上は言うな、村田どん」

西郷従道は、勇右衛門の遠慮無い言葉に辟易した様子で、首を左右に巡らせた。

「兄さぁは、天子様の兵に逆らって賊となった。賊を討つは大義じゃ。たとえ恩人じゃろうと、討つが大義。大義は親をも滅すと言う。山県どんは大義で兄さぁを討つ。この話はもうするな。じゃどん……」

従道は苦笑いした。

「村田どんは、良かなあ」

「何ごて、良かごわすか？」

「技術将官じゃち、手に職がごわす。技術者に徹し切っておるゆえ、政治に振りまわされることも無か。かように、好き勝手に物申すこともできる。羨ましかなあ」

従道は、手を振って藤棚の下を去って行った。

彼の心境は余人に推し量れぬものであった。一説には、この時、兄隆盛の救出を企んでいたという。密かにイギリス公使や御傭い外国人医師であったスコットランド人ウィリアム・ウィリスらに働きかけ、隆盛の外国脱出まで計画していた。

だが、彼とその配下の企みは全て水泡に帰した。長州閥軍人の妨害、そして何よりも薩摩の青年らと行を共にする隆盛の意志の強さが事を成就させなかったのである。

八月、人吉の戦いに敗れ、日向路に逃れた西郷とその一行三千余は、延岡の北方、標高三八二メートルの長尾山稜線に結集した。

月半ばの十五日。朝霧が吹き払われると、長尾山の端、和田越えの最前線に西郷が姿

を現わした。

「おお、賊の総大将、西郷どんじゃぞ」

政府軍の薩摩系兵士は、身震いした。西郷が敵味方の競り合う最前線まで出て軍を督戦するのは、西南の役始まって以来初めての出来事だった。

西郷隆盛、この日の行装は薩摩絣の筒袖に白の兵児帯、朱鞘の村正の脇差、太い竹の水筒。二頭の愛犬を連れて和田越え峠の正面に立ち尽していた。

周辺に敵の銃弾砲弾が落下するが、西郷は微動だにしない。まるで自ら弾に当るを望むが風であったという。

午後一時、西郷の軍は政府軍の人海戦術に抗しきれず、北方に撤退。薩軍の組織的戦闘は、この地で終了した。

西郷は和田越えで死ぬつもりであったようだが、桐野や村田新八が無理矢理人を付けて後方に落とした。

翌日、西郷は生き残った兵たちに解散令を発した。

「諸隊にして降らんとする者は降り、死せんとする者は死し、士の卒となり卒の士となる。唯其欲するところに任ぜよ」

と自ら奉書紙に書いて示し、同時に大事にここまで持ち運んで来た陸軍大将の礼服や書類を焼いた。また、二頭の愛犬を野に放ち、負傷した長男の菊次郎へ投降するよう命

じたという。

薩摩人以外の西郷協力者、党薩諸隊、軍夫、手負い人、捕虜も政府軍のもとに降った。残兵は千人未満。

これらは西郷を擁して政府軍の包囲を突破した。途中で敵第一、第二旅団の本営を襲い、十八日には標高七二七メートルの急峻な可愛嶽を突破し、行方をくらました。

西郷が再びその姿を人前に現わしたのは、九月の一日。郷里の鹿児島である。

当地の警備に当っていた政府軍第二旅団の先鋒をかわし、初春に門出した懐かしい私学校に乱入した後、城山に籠った。

「西郷勢出現。その総数三百余」

ただちに電信が各所に打たれた。鹿児島には別働第一旅団が上陸し、数日の内に他の部隊も城山周辺で配置につく。総兵力八個旅団、予備も合わせると五万の大軍であった。西郷らは十重二十重に取り囲まれ、たちまち身動きひとつ取れなくなった。

「これで、大西郷も終いだろう」

征討軍の本営では、誰もがそう語り合った。勇右衛門はこの時、杖をつきながら大阪に設けられた小銃修理所に通っていた。

九州から送られてくる損傷銃器は驚くべき数量で、それは戦闘が終息しつつあるこの

時も、途切れる事はなかった。また、現地の将兵は支給された小銃の信頼性の無さと、弾薬の互換性の悪さを、意言具申という形で訴え続けていた。

勇右衛門は、黙々とこれらの処理を続けていった。山県ら長州閥軍人に対する不平も、もはや口にすることはない。配下の研究員らも彼の様変りを少々気味悪く思い、これを負傷後の気鬱と見た。

「少佐殿、どうでありましょう。一日は休息を取られて、住吉か四天王寺の見物などなされては？」

と勧めた。勇右衛門は沈鬱な表情で彼らを見やって言った。

「こうしている間も、九州の果てでは西郷どんと征討軍兵士が弾を放ち合っている。小銃の故障も出ちょる。弾が無うて死ぬ者も出るじゃろう。小銃が壊れて不覚をとる者もおるじゃろう。思えば、それらの者は我らが新型小銃を開発するための、貴重な犠牲になっておっとじゃ。のうのうと、物見遊山などでき申はん」

研究員らは恥じ入り、以後は皆データの収集に集中した。

城山における西郷軍の包囲が三週間近くなり、西郷助命嘆願の噂が政府内に巡り始めた頃、彼は、ようやく一日だけ休みを取って、大阪の郊外に出た。

北の梅田、茶屋のあたりに人力車を走らせていると午後、西の空に黒雲が湧き上がった。この日、彼は何やら期するところがあり、一軒の休息所に入ると、そこから従卒を

修理所に走らせた。

雨が降り始め、生ぬるい湿った空気が部屋に充満した。茶屋の者に勧められるまま一合徳利を傾けていると、従卒が駆け戻って来た。

「何な、傘も差さんと来たとか。ずぶ濡れでンなかかい」

「はっ」

従卒は廊下にペタリ、と腰をつけた。

「……」

そのまま、口を真一文字に結び、押し黙っている。

「わかっちょる」

勇右衛門は徳利を持ち上げた。

「西郷どんが、死んだとじゃな?」

「電信が先程、大阪鎮台に入ってごわす」

薩摩人の従卒は、力を振りしぼって語った。

「今日の午前九時のこつ。城山で被弾し、介錯を受けなはったと聞き申した。これは第一報にて、詳細は後に出るとのことでごわす」

「御苦労」

その日の未明あたり、現地では政府軍の総攻撃が行なわれるのではないか、と大阪鎮

台の幹部は語り合っていた。勇右衛門はそれを小耳に挟んでいたのである。

彼は何も言わず、従卒へ盃を渡して労をねぎらい、窓辺に歩み寄った。

開け放った障子の外は茅の原である。早や秋の気配立つその彼方には、雨に煙る土手が広がっていた。幌を立てた人力車や、傘を斜めに差した人々が左右に駆け抜けていく。それは、近代浮世絵の一幅にも似た光景であった。

勇右衛門は一刻ばかり、無言で人々の行き来を凝視し続けた。

その夕刻、西郷従道も東京で兄隆盛の死を知らされていた。彼は征討軍の慰問使として鹿児島に行き、兄の帰郷と入れ違いに東京へ戻っていたのである。

従道も勇右衛門と同じように長い間、自宅の庭から西の空をひとり眺め続けたという。

3

西南の役終結後、政府は巨額な戦費の補塡に苦しんだ。

戦役の前年、政府の歳出は五千九百三十一万円。それが翌年、乱の勃発から終息までにかかった費用だけ算出しても、約四千百五十七万円である。

明治政府は、維新の戦費四千八百万円を未だ負債として抱え込んでいた。また廃藩置

県による諸藩の借財、旧大名家や士族の公債支払い、近代化への投資等によって懐は火の車。それにプラスしての臨時戦費である。

政府は増税と財政引き締めを基本とする負債減少策を打ち出したが、その鉾先は当然軍事費の大幅削減につながっていった。

明治十一年（一八七八）、東京竹橋において近衛砲兵が反乱を起こした、いわゆる「竹橋事件」は、西南戦役における論功行賞が行なわれぬ事への不満と、食料衣服支給の切り詰めが原因とされている。こうした緊縮政策は、清国との有事に備えて軍の改編が行なわれる明治二十一年まで続くのである。

幸い、勇右衛門の新型小銃開発は、軍の最優先事業として継続が決定された。

東京小石川の小銃鍛造場に復帰した彼は、戦役の功により中佐に昇進し、小銃の試作にとりかかった。

明治十二年（一八七九）十月十日、小銃鍛造場は規模を拡大し、東京砲兵工廠となった。勇右衛門は大阪にあった洋式銃身用地金十万挺分と、イギリス製の製銃機械を東京に搬入する。

彼の研究開発はこれによって急速に進展し、年の末には数度の試射テストを終えた。

こうして翌明治十三年、純国産の近代的単発小銃が誕生した。

初期の試作品は「第一回式村田銃」と称され、即座に陸軍の正式な採用試験を受け

た。

結果は上々であり、ここに「大日本帝国十三年式単発村田銃」が制式化されたのである。

村田銃は、口径十一ミリ、金属薬莢を採用し、初速は四百十九メートル／秒、最大射程は約二千メートル（ただし銃身上の照尺は千五百メートルまで）。これは、西南の役で代表的な小銃とされたイギリス製のスナイドルやフランス製のシャスポーに比べ八百メートル以上も延長されている。

機構は後装式単発の槓桿方式（ボルト・アクション）。基本型式はフランスの一八七四年式グラー小銃。しかし、遊底内の撃針を動かすのは螺旋式バネではなく槓桿の握りに内蔵された松葉式のバネというのが変っている。これはオランダの一八七一年式ボーモン小銃に使われた方式であった。フランス・カンドシャロン射撃学校で両銃の操作を体験したことが、この設計に生かされているのだろう。松葉型のV字バネは、螺旋式に比べて幾分かは生産効率も良く、補充も容易である。

操作は、右手で機関部右側に突き出た槓桿を握り、一度立てて後方に引く。遊底が開放されると、ここに真鍮製の十一ミリ村田実包を装填し、前に押し戻して右に再び槓桿を倒し、閉鎖する。ごくごく簡易なボルト・アクション方式だが、単純な機構だけに一度暴発すると恐るべきことになる。そのため、勇右衛門は特別に十一ミリ口径の木製模

擬弾を兵士に配布し、これによって訓練を徹底させた。

さて、十三年式村田銃の分解・組立ては、勇右衛門が自ら書いた操典によれば、

「村田歩兵銃、名称をわけて五とす」

とあり、銃身、遊底、銃床、鉸錬（直接射撃に関係しない関連部品）、銃剣に大別されている。

銃剣、負革（スリング）、棚杖（ロッド）は銃を立ててこれを脱す。次に遊底の駐坐を脱す（十八年式改良型は遊底の駐栓）。続いて銃を平らな面に置き、銃身を上に向け、右手で槓桿を起こし、後方に引き、左手で引金を圧し、両時に右手で遊底後部を握る。抽筒子（空薬莢を弾き出すエキストラクター）に指を添えて引き脱す。

次は銃を立て、螺子（ネジ）を脱し、用心鉄を外し、続いて銃尾の両駐螺子を脱す。最後に銃身と木銃床をつないでいる金属ベルトのネジを全て外し上、下の順に脱す。銃身は左の脇の下に銃を挟んで抱える。銃身を下に向け左手で照尺の下を持ち、右手で坐鉄の前部を叩き脱す。後は坐鉄と逆鉤発条の分解だが、これは「士官の命令あるに有らざれば、分解するを得ず」とされていた。

遊底それ自体の分解も通常は、「左手にて撃鉄を保持し、右手にて撃茎を旋回しつつ後方に引き出す」、「遊底を平面に置き、槓桿を上に向け、左手にて持ちし転螺器（ドライバー）の小先端を以て槓桿の上部より発条を押してこれを脱す」。これ以外の部分は

細い部品の紛失を防ぐため士官の命令無しには行なわぬこととされていた。

鉸鍊、抽筒子、螺子、転螺器など、小難しい専門用語ばかりが並んだ取り扱い教本である。

読んでいて頭の痛くなるようなこうした新制の軍事用語を、当時の農民出身徴募兵は、生真面目に学んでいった。明治の近代化は、上は大将から下はこうした銃を用いる一兵卒の端々に至るまで、気の遠くなるような努力を強いたのである。

村田銃の制式化は、統一小銃装備という初期の目的以外に、幾つかの波及効果を軍隊内にもたらした。

そのひとつは、識字率の比較的低い徴募兵に、合理的な西欧型思考法を急速に導入。効率的な軍隊機構に変化させる好材料になった、ということである。

明治二十二年（一八八九）一月の徴兵令大改正に至るまで、陸軍は士族の志願兵「壮兵」と徴募兵の混在をうまくコントロールできなかった。西南の役で農民出身の徴兵出身者は、士族軍とほぼ対等に戦い、その力を人々に認めさせたが、有事に即応する壮兵への期待は戦後も依然として高かったのである。

勇右衛門は、海外留学によって実地に学んだ欧州の、「国民軍」の真の導入を国産銃器によって企んだ。村田銃の操作、分解、結合、拭浄、そして保存を「取り扱い法」によって徴募兵らに徹底させ、もって彼らを近代的社会人に育て上げようとしていたの

である。いわば、村田銃は小銃の形をした科学教材であった。

現在も専門家や銃器マニアの中には、

「村田銃なんてものは、フランスのシャスポー銃のコピーに過ぎない」

とか、

「銃器に菊の紋章を最初に刻み、日本軍の悪しき宗教的伝統の先駆となった」

と書く者がいるが、それは単純な認識不足か、ためにする意言を吐く輩だろう。鎧兜を身にまとって戦った時代から僅か十数年。たとえコピーに近いものであっても、兵器を欧州並の品質管理で生産し続けることは驚異的なことである。

また、菊の紋章云々も、幕末以来、信頼性の乏しい中古洋銃との訣別を表わす印であり、それを表わすかのように、村田銃の機関部上面に刻まれた紋章は、後世の菊印と異なり、目を凝らさなければわからぬほどに遠慮がちで小さい。

最初の新制式銃にこの刻印を打った時、勇右衛門が思い浮べたのは、幕末戊辰の役で路上に散乱する遺棄兵器であった。支給された大事な小銃を荷物になると思えばためらうことなく投げ捨てる兵士のモラルの低さは、急速に是正されねばならなかった。

明治十五年（一八八二）、勇右衛門は再度欧州視察を命じられた。彼はこの時、数挺の十三年式を持って渡欧した。

例のごとく各所で射撃の腕を見せて悠々帰国したが、この旅の途中に村田銃の改良点も幾つか発見した。

欧州の人々がこの十三年式を操作する姿を傍らで観察していると、いかにも軽々と見えた。が、日本兵が扱う姿はどうにもぎごちない。初めはただ気分的なものと思っていた勇右衛門だが、やがてある事に気付いたのである。

「やはり、我が国の兵には、僅かながら銃が大きいのではないか」

十三年式村田銃は外観もグラー式小銃に酷似している。全長も百二十九・四センチもあり、重量は約四・二キログラム。これでは小柄な日本人は取りまわしに苦労し、長時間の従軍携帯にも耐えられぬ、と感じたのである。

「しかし、銃全長の短縮は命中率の低下につながり、白兵戦闘の折りは不利になります」

と、東京砲兵工廠の技術者らは反対した。たしかに、短軀（たんく）の日本人が長身の外国人と銃剣戦闘を行なう場合、槍のように長い銃は効果的である。

勇右衛門は熟慮の末に、銃口の近くを十七ミリ短くし、銃剣の着剣装置をそれとわからぬ程僅かに移動させた。当然、銃剣も改良され、握り部分も厚革から木製に変って生産しやすいものとなった。これで銃の着剣重量は十パーセントも軽くなったのである。

銃そのものの生産効率も、勇右衛門は向上させている。槓桿の前方に付いていたストッパーを省略し、工程を短縮（十三年式と改良型の一番簡単な見分け方は、この部分を見ることである）。分解も簡略化した。さらに使用弾薬も改良し、十三年式では初速四百十九メートル／秒であったものが、改良型は四百四十三メートル／秒となって若干威力を増加させた。また、この弾薬使用時の安全性も考え、薬室にガス抜きの穴を二ヶ所付けた。

この改良型村田銃は十八年式と制式名称が与えられ、同年から生産が開始された。記録によれば、十三年式の生産数は約六万挺、十八年式は歩兵銃八万挺、騎兵用の短小銃（カラビニエ）が約一万挺ほどであったという。

小石川の東京砲兵工廠は順調に十八年式を生産し続け、初年度で三万挺を突破。これを受けて陸軍省は、全国の部隊にある中古洋銃を次々に廃棄、あるいは海外に売却し始めた。各地の鎮台兵から優先的に村田銃は配備され、明治二十一年（一八八八）の鎮台制廃止、師団司令部設置の頃には、北海道の屯田兵（とんでんへい）や二線級の輜重兵（しちょう）にまで十八年式は行き渡った。

幕末以来、勇右衛門が抱き続けてきた、国産小銃による近代軍隊の創設という壮大な夢は、ついに実現したのである。

だが、勇右衛門には休息というものが無かった。

十八年式村田銃の生産が開始される一年前、フランスのヴェイエイユが無煙火薬を実用化し、諸外国の軍事関係者は一斉に近代的連発銃の設計を開始したのである。

それまでも連発式小銃は各国で採用されていたが、これは全て黒色火薬を装薬として用いていた。連射すると発砲煙でたちまち視界不良となり、煤の量も手に負えぬ程出る。連射機構が考案された後も各国が単発小銃に重きをなしていたのは、このためであった。

無煙火薬の基剤ニトロセルロースは燃焼効率が良く、従来の黒色火薬に比べて高い初速が得られ、小型の弾頭による殺傷力の増加が可能となった。しかも発砲煙は桁違いに少ない。弾薬の小型化は兵士個人の携帯数量もアップさせるという、良いことずくめである。

フランスは明治十九年（一八八六）、ルベル式連発銃を採用。これに対抗すべくドイツがマンリッヒャー式を、イギリスがリー・メッドフォード式を、スイスがシュミット・ルビン式を、といった具合で、翌年の一八八七年から八九年にかけて欧州各国は連発小銃の採用ラッシュとなった。

勇右衛門も明治十九年から砲兵工廠の連発銃開発主任に着任し、数々の実験を行なった結果、明治二十二年に二十二年式連発村田銃を完成させた。

「我が国にも独自の連発銃ができた」

軍部は大いに喜んだが、しかし、この二十二年式は今日あまり評価されていない。その最大の欠点は、弾倉にあった。銃身の下へ平行にチューブ状に取り付けられたそれは、装塡に手間がかかり、生産効率も悪い。また弾倉そのものが全重量を増加させていた。使用弾薬は八ミリ村田実包と称し、鉛の露出弾頭から初めて銅（カワバリ）の被甲弾となったが、当然のこと、従来の十三年式、十八年式との弾薬互換性は無い。

外国の銃器雑誌には、この二十二年式を、「当時、オーストリア・ハンガリー帝国で開発された、クロパシェックM一八七八小銃のポルトガル輸出版をコピーした小銃」と評しているものがある。たしかに多くの構造が酷似しており、欠点もそっくり受け継いでしまっていた。勇右衛門は、欧州でこのチューブ式の欠点を何度も目にしてきたはずであった。それなのにこれを丸々受け入れてしまったのである。連発銃の早急な開発に焦っていたのだろうか。

ただ勇右衛門も、そのあたりは気になったと見え、二十二年式小銃の量産開始後も改良の努力を続けていた。しかし、明治二十七年（一八九四）の日清戦争には間に合わなかった。

日本兵は、十三年式、十八年式の単発銃に少量の二十二年式を混じえた装備で清国軍と戦ったのである。

さて、この長い物語も、そろそろ筆を収めなければならない。

最後は村田勇右衛門個人の話で締め括ろう。明治二十三年（一八九〇）。日清戦争の約四年前に彼は長年の功を認められ、陸軍少将に任ぜられて現役を退いた。さらに日清講和後の明治二十九年、彼は男爵位を授けられ華族に列せられた。

その頃のことであろう。勇右衛門は、かつての同僚と会うために人力車で銀座の街を走っていた。

町は戦勝ムードも一段落し、代って三国干渉反対のビラが張られて幾分刺々しい雰囲気であった。

それでも新橋に近付いて行くと、料亭のあたりから賑やかな歌声と三味線の音が流れてくる。

「おや？」

勇右衛門は、車上で身を乗り出した。

〽日清談判破裂して……

という良く知られた唄が道沿いの二階家から聞こえてくる。

（何じゃ？　今、おいの名を言ったようじゃが）

勇右衛門が首をかしげているのを察した初老の車夫が、歩みをゆるめた。

「新橋の芸妓はよい声でござんしょう」

車夫は、自分の車に乗っている男が、名高い村田少将とはわかっていない。曲に合わせて自分も唄い出した。

〽日清談判破裂して、品川乗り出す吾妻艦
次いで金剛、浪花艦
西郷死するも清国がため、大久保殺すも
清国がため……

勇右衛門はその歌詞に、突如衝撃を受けて、人力車の座席に座り込んだ。
（西郷どんも、大久保どんも、近代化ちゅう化物のために死んだのじゃなあ）
その明治近代化、国家膨張策の急先鋒の化物こそ、勇右衛門自身であった。車夫は唄を続けた。

〽恨み重なる清国政府
日本男子の村田銃、筒の切っ先剣付けて
前へ前へと進軍じゃ
一里半行きゃ紫禁城

擊柝一声夢さめて……

（ああ、おいの名はここに出るか）

すでに村田銃そのものが、明治日本の国威の象徴となっていた。彼は深々と息を吐き、車夫の背中を見つめ続けた。

晩年の勇右衛門は、一種の発明趣味人と化した。

鎌倉と大磯に別荘を持ち、そこで予備役ながら陸軍の装備改良にアイディアをしぼった。ある時、軍の研究者が、

（村田男爵が開発した我が国の歩兵個人装備は一体どれくらいあるのだろう）

と思い、試しに完全武装の兵一人を立たせた。勇右衛門の手を経た兵装をひとつずつ外していくと、その兵士は記章と褌一丁だけになってしまったという。

また、白兵戦闘の重視に伴い、国内の日本刀が消耗することを憂いた彼は、実用的な軍刀を独自に研究している。

東京麹町の屋敷には、応接間に巨大なビリヤード台があったが、その下には実験のために切断した刀の刃が大量に詰まっていたという。

そう言えば、ビリヤードもこの人の趣味のひとつである。

大正八年（一九一九）一月、人を集めて「玉友倶楽部」というものを設立し、その趣意書に、

「友と語らい、友と交わるに唯信義あるのみ」

という文字を入れて撞球場に掲げた。フェアプレイの精神を養うための倶楽部であったらしい。

さらには東京大森に、小口径の狭塞弾を用いる小型射撃場を設置。続いて屋敷にも室内射撃場を設けて、息子綱太郎（東京造兵工廠技師）や孫経麿と射的会を楽しんだ。

彼の発明は、こうした軍事や射撃に関する事物に止まらず、最晩年には生活空間の改良にまで至っている。

現在、鎌倉の由比ヶ浜にあるホテル「かいひん荘」は勇右衛門の別荘であった。旧華族屋敷として保存対象にもなっているが、ここにはかつて彼が奇妙な家を建てたという口碑が残っている。

十五坪ばかりの小さなもので、中央に丈夫な軸が内蔵されている。クランクを動かすことによって家全体が回転し、居間が常に太陽の方向を向く自然暖気の構造であったという。

何事にも創意工夫を第一とする、彼の住まいらしいエピソードだ。

こうして大正十年（一九二一）二月九日。彼は病いによって逝った。行年八十二歳。

多くの友人が山河に屍をさらす中、彼は悠々と畳の上で大往生を遂げたのである。

若い頃から戦場を往来して苛酷な環境の中で暮し、しかも身に数度も被弾していながら、ここまで長命を保った理由を、ある人は、

「射撃による集中力と正しい腹式呼吸法、趣味を多く持つことでの有効なストレス発散法をマスターしていたから」

と書いた。しかし、筆者は、彼が若い頃から「もの作り」人としての生き方を貫いていたおかげ、と考えている。もしも勇右衛門が他の薩摩人のごとく政治改革に惑溺する人物であったなら、幕末京洛の巷で闘死するか、西南の役で戦死していただろう。現に彼の実弟で縁者川畑家に養子となった新兵衛（篤雄、幼名十次郎）は、西郷側について生死の境をさまよっている。

勇右衛門は子供の頃胃弱で苦しんだ。銃の操作を習うことで病気を克服し、長じては銃器製作にのみ興味を傾けることで危ない人々と距離を保ち続けた。技術者に徹し切っていたために、誰からも不用な非難を受けることが無かったのである。

勇右衛門の退場後、日本の兵器「近代化」は次の段階に入った。

彼の下にいた有坂成章大佐や日清戦争の実戦体験者南部麒次郎少佐が登場すると、三八式歩兵銃を中心とする日本独自の兵器システムは一応の完成を迎えた。そして関東大震災による小石川砲兵工廠の崩壊は、勇右衛門の収集した貴重なデータを全て灰燼に

帰してしまった。以後、日本は海外戦争への坂道を急速に転がっていくことになるのである。

（完）

あとがき

この小説は一九九五年二月、『週刊小説』に書き始め、途中数年間のブランクを経て、二〇〇三年七月『ジェイ・ノベル』誌でようやく終了した。

近代「もの作り」（さして粋な言葉とも思えず、こう書くのは個人的にあまり好きではないのだが）、その元祖とも言うべき村田経芳の生涯を、かくも長々と書き継いできて、さて、今になって筆を置いてみると未だ舌足らずなところが散見され、我ながら不明を恥じるばかりである。

たとえば現在、人名辞典の項にこの人は村田「経芳（つねよし）」と表示されている。しかし、村田家で戦後、明治時代の封蠟（ふうろう）スタンプが発見され、そこにはローマ字で「ツネフサ」とあったという。元よりこの名なのか後年の改称か子孫の人々にもわからず、私も仕方無しに「つねよし」と書いた。が、今でもこの部分は疑問を禁じ得ず、本書では多くの場合、幕末維新期の名前「勇右衛門」で書き通した。それらは四代目の御子孫に当られる学習院大学教授（現在は退官）村田経和（つねかず）氏に、御教えを受けた。村田先生のドイツ語研究室を初めて訪ねた時の事は、今も鮮明に覚えている。銃器雑誌によく載っている総髪に洋装の経芳像と、目と鼻筋の辺が酷似していて、

「やはり、人間にはＤＮＡというものがあるんだ」

と初対面で埒もない事を考えたりもした。

「（経芳は）技術者に徹した人ですから、それほど飛び抜けた勇ましいエピソードは無いですよ」

と村田先生は笑い、それでも明治期の『名家談叢』には無い逸話。経芳の弟十次郎（篤雄）が十六で他家に養子へ入り、西南の役では薩軍に付いたこと。村田家は十二代前から嫡男に「経」の字を用いたこと。村田銃（もちろん猟用許可として）を撃つ会がある、という事などを教えて下さった。

「村田銃を放つ会」の話は偶然、数年前にハワイでも耳にした。もっともこちらは日系人や旧日本軍マニアのアメリカ人が中心であった。ロスやテキサスのガン・ショーでは、村田銃も産業考古学的な付加価値を付けられており、その実包は信じられぬほど高額であった。射撃を好む人々は、オランダのグラー小銃の薬莢に装薬を手詰めして楽しんでいるとも聞いた。

村田銃は今でこそ明治近代化の過渡期に出現した外国模倣の単発銃、老人の猟師が熊射ちに用いる古式銃という不当に低い評価を受けている。

しかし、明治十六年（一八八三）ドイツのベルムート将軍が来日した際に大山巌がこれを贈り、

「欧州においても最優秀の軍用小銃と認む」

と将軍が認定書を出したために、同年ギリシャとブラジルから大量の購入依頼まで来た評判の名銃であった。

東洋の片隅でこうした小銃を独学で開発し、さらには欧州で狙撃名手としての名をあげた経芳の晩年は本文にも書いた通りだが、村田先生によれば、老いて後この人は弓術にも興味を抱いたという。しかも、ただ矢を的に当てるだけではなく、工具の入った合切袋を安土の前に持ち出し、

「これでは当らぬ、これではどうか」

矢を一筋ずつ、矢羽根から鏃の重さまで調整し、正確に矢が飛行するまで何度でも射た。

「ビリヤードを好んだことと言い、弓の話と言い、どうも村田男爵には遠方から物を正確に当てたい、という無邪気な欲求が人一倍強かったみたいですね」

と私が言うと、

「そうなんですよ」

まったくの技術者で、と村田先生は小声でおっしゃったものである。

平成十五年八月

著　者

解説

縄田一男
（文芸評論家）

本書『狙うて候　銃豪　村田経芳の生涯』は、「週刊小説」一九九五年三月三日号から九月二十九日号にかけて第一部を、そして「月刊ジェイ・ノベル」二〇〇二年五月号から二〇〇三年八月号にかけて第二部を連載、二〇〇三年九月、実業之日本社から刊行された大作である。さらに嬉しいことに、この著者渾身の傑作は、見事、第二十三回新田次郎文学賞を受賞という快挙を成し遂げた。東郷隆さんの代表作といってもいい出来ばえを示している。

その東郷さんの作品には、ある意味、日本人の銃火器受容史をとらえた一連の秀作がある。

そうした系譜の中で、まず第一に指を折るのが、一九九四年、吉川英治文学新人賞を射止めた『大砲松』であろう。

この長編は、湯屋でひょんなことから「彰義隊に入らないか」と幕臣・衣田信五郎に槍屋「槍丹」の息子・松三が声をかけられるのが発端である。彰義隊には「砲兵隊」が

存在するものの、火薬を恐れて誰も大砲に近づく者がいない。それを聞いた松三は、江戸っ子気質を揺さぶられる。一方、信五郎は、彼を詰問した官兵を斬り捨てるが、この殺された男の親族が、アームストロング砲を操る官軍側の砲兵であった――。

かの上野戦争で、四斤砲を巧みに操作し、官軍側に圧倒的な打撃を与えた松三の痛快行状記がここからはじまる。

そしてこの作品で作者が腐心を重ねているのが、戦争のもう一つの主役、大砲である。そのことは初刊本あとがきにある「飛び道具とは卑怯なり」という言葉に示されるように、「ことほど左様に、時代劇の分野で銃器・火器の扱いは継子扱いである」という状況の中から、これらを一つの文化として見直そうとしていることからも充分察せられる。

作品は、何故、大雨の降っていた上野の山で大砲が撃てたのかという疑問の解明にはじまり、その大砲をめぐってのシンボル論、ひいては軍事技術を通じての人間の理想論まで発展するテーマ性をはらんでいる。また作者は、編集者時代に取材でアフガニスタン内戦を体験。ノンフィクション『戦場は僕らのオモチャ箱』を刊行して作家生活に入った経歴の持ち主。『大砲松』は、ノンフィクションから創作へと転じた作者が、作家生活の原点に戻りつつ、銃器をめぐる文化論という自己の鉱脈を掘り当てたという感が強い。

東郷さんは、先祖は薩摩人で、自身は横浜(ハマ)っ子、おまけに武器考証の専門家である。

そこから、佐幕派を〝情〟でとらえず、乾いたセンチメンタリズムの中に、独特の哀感と爽快味によってとらえる小説作法が成功したのだといえよう。

この一巻に続いて刊行されたのが、作品集『本朝銃士伝』（文庫化に際し『銃士伝』に改題）。剣士ならぬ銃士の登場というわけで、前述の「飛び道具とは卑怯なり」ではないが、鞍馬天狗（大佛次郎）以外は、使うときに、白眼視されてきた銃器にようやく新しい光が当てられてきたという感が強い。

全八話のうち、巻頭の「退き口」で、関ヶ原における島津軍と馬上筒のエピソードが語られる他は、すべて幕末以降に物語が設定してある。しかも後半の四話は、「電信鉄砲」が神風連の乱を、「香水」が中村半次郎、すなわち、桐野利秋とマルチーニ・ヘンリーを、「蓬壺」が馬賊とコルトを、「木の上」がペリリュー島の敗戦における三八式小銃を扱うというように、最後は第二次世界大戦に至る、近・現代史の領域にまで踏み込んで、銃器と日本人とのかかわりを扱っている。

このような構成を持った作品集は、これまでにも類例がなく、高く評価されて然るべきであろう。

また、そうしたテーマを抜きにしても、前述の「香水」をはじめ、二本松少年隊と蘭式ゲベールを扱った「銃剣」など、短編小説としても優れた結構を持ち、語り口の妙も、抜群の効果を発揮している。さらに東郷さんは同時期に、『にっかり――名刀奇談』（文

庫化に際し『戦国名刀伝』に改題）を刊行しており、こちらは刀がテーマで本作とは正反対――併読することで、日本人の刀と銃についての思想を相対化して考えることができる。

そして、いよいよ『狙うて候　銃豪 村田経芳の生涯』である。

東郷さんは「受賞の言葉」の中で、

丸々七年間もかかった小説、それも明治時代の銃器研究家という極めて地味な立場の人物伝をこういう形で評価していただき、大変うれしく思っています。近頃ともすれば鬱々と暮していた私にとって、それはもう暗夜の暁光とも言うべき出来事でありました。

拙著の主人公は、薩摩人として幕末のかなり早い時期から洋式兵器の導入に苦労し、維新後は欧州に技術留学して日本の軽工業発展に尽しました。こう書くと、よく有りがちな初期の殖産功労者的人物を連想させますが、彼村田経芳の場合は、決してそのような枠にあてはまりません。南九州の土俗的なおおらかさと、一部には現代の青少年にも通じる濃いマニア性を合わせ持った「好事家」とも言うべき人でした。私は、その快活なキャラクターに助けられて、なんとか千数百枚の物語を終えることが出来たのだ、と彼には感謝しております。

残念ながら、経芳の生涯を賭けた研究やその成果の大部分は、関東大震災や東京空襲によって灰燼に帰してしまいました。筆を置いて今さらながら資料の不足と、

「あれもこれももっと書き足すべきであったか」

という自責の念にかられております。

といっている。

現代のスペインはマドリッドからはじまるこの物語を、或いは奇異に思われる方がいるかもしれないが、これには歴とした理由があり、未読の方のために敢えてここで詳細を語ることは避けようと思う。

もし解説を先に読んでいる方がおられるなら、ここからは是非とも小説の方に移っていただきたいのだが、本書はまず第一に、薩摩藩士である経芳が、銃器と出会ったがために送る波瀾の生涯を活写した大河小説である。

選評の中に「村田銃は日本人が誇りうる銃である。銃の歴史の中で異彩を放つその銃の発明者である村田経芳の生涯は、幕末の島津家中の者が遭遇したお由羅騒動や倒幕騒動とそれにともなう陰謀など、ある陰気さをもったうるささに深く害されずにすみ、潔い明朗さをつらぬいた」（宮城谷昌光）とあるのは、東郷さんが、経芳のことを「もの作り」の人という向日性の中にとらえているからではないか。

選評にあったように内には薩摩藩の御家騒動として知られ、直木三十五や海音寺潮五郎も作品化したことのある〝お由羅騒動〟や、あるいは薩英戦争をはじめとして、鳥羽伏見の戦い、戊辰戦争から西南の役までが、〝銃器〟をキーワードとして詳細に描かれていく。

作者の筆は、緊密極まりない構成の裡に、人と時代と技術との相関関係を間断なくとらえ、読者を釘づけにして離さない。

この幕末維新の動乱を経て、大正十年二月九日、八十二歳の生涯を全うしたのは、「彼が若い頃から『もの作り』人としての生き方を貫いていたおかげ、と考えている。もしも勇右衛門（経芳）が他の薩摩人のごとく政治改革に惑溺する人物であったなら、幕末京洛の巷で闘死するか、西南の役で戦死していただろう」とは作者の言だが、その修羅場、修羅場を技術者であることを優先して生き抜いた経芳の面貌にも複雑な陰翳が刻まれるようになっていく。

それは本書のラスト近く、人力車で銀座の街をゆく経芳が、新橋の芸妓の「へ日清談判破裂して……」とうたう声を耳にして「日本男子の村田銃、筒の切っ先剣付けて」のくだりで、「（ああ、おいの名はここに出るか）」と深々と息を吐くくだりである。

自分のつくった銃が明治国家の権威の象徴となり、経芳の表舞台からの退場後、技術は殺戮（さつりく）の目的に転じてひとり歩きし、「彼の下にいた有坂成章大佐や日清戦争の実戦体

験者南部麒次郎少佐が登場すると、三八式歩兵銃を中心とする日本独自の兵器システムは一応の完成を迎えた。そして関東大震災による小石川砲兵工廠の崩壊は、勇右衛門の収集した貴重なデータを全て灰燼に帰してしまった。以後、日本は海外戦争への坂道を急速に転がっていくことになる」とあり、つくづく歴史は非情であるといわねばなるまい。

とまれ、これまでの時代小説において、本書ほど詳細かつ正確な銃器の描写が行なわれたことはなく、作品は、〝銃器〟を通じた幕末維新史から近代史にまで及んでいる。本書がひとり東郷さんばかりでなく、平成を代表する時代小説の一つであることは言をまたない、と私は確信している。

初出
週刊小説一九九五年三月三日号から
九月二五日号まで第一部連載
月刊ジェイ・ノベル二〇〇二年五月号から
〇三年八月号まで第二部連載

二〇〇三年九月　実業之日本社刊

文庫 日本社 実業之 と32

狙うて候（下） 銃豪 村田経芳の生涯

2010年11月15日　初版第一刷発行

著　者　東郷 隆

発行者　増田義和
発行所　株式会社実業之日本社
〒104-8233　東京都中央区銀座 1-3-9
電話 [編集]03(3562)2051 [販売]03(3535)4441
ホームページ　http://www.j-n.co.jp/
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社ブックアート

フォーマットデザイン　鈴木正道（Suzuki Design）

＊本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害になります。
＊落丁・乱丁（ページ順序の間違いや抜け落ち）の場合は、ご面倒でも購入された書店名を明記して、小社販売部あてにお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。ただし、古書店等で購入したものについてはお取り替えできません。
＊定価はカバーに表示してあります。
＊小社のプライバシーポリシー（個人情報の取り扱い）は上記ホームページをご覧ください。

©Ryu Togo 2010 Printed in Japan
ISBN978-4-408-55011-4（文芸）

9784408550114

1920193006865

ISBN978-4-408-55011-4
C0193 ¥686E

定価(本体686円+税)

実業之日本社

幕末・明治の戦乱を駆け抜けた男の生涯!

江戸でイギリス式の操銃法を学んだ村田勇右衛門は薩摩藩砲術師範役として「村田流」を名乗る。しかし、倒幕に動いた薩摩藩は兵を挙げ、勇右衛門も外城士一番隊を率い、鳥羽・伏見から長岡、会津へと転戦する。維新後、薩摩領内の若者に射撃術を広めていた勇右衛門だが、西郷隆盛とともに上京、日本独自の新銃開発に挑む。近代「もの作り」の元祖を描ききった著者渾身の巨編!

解説／縄田一男

3 2

東郷 隆

狙うて候(下)

実業之日本社 文庫